

第3節 出土遺物

(1) 土器・土製品

掘立柱建物1出土土器(第158図、PL.107)

3145ピットから48、3147ピットから40・44、3148ピットから36・39・41、3149ピットから37・38・42・43、3151ピットから35が出土した。

35～38は須恵器蓋である。35・36の天井部調整は回転糸切りである。37・38の口縁部端部は屈曲し、内外面ナデにより下方へ短く収める。39～43は須恵器坏である。39・42・43は高台がない坏で、体部は直線的に外傾する。40・41は高台の有無が不明だが、体部の立ち上がり角度が先のものに比べ急である。

須恵器は8世紀末～9世紀前半のものが主体だが、40や41は形態、法量が八頭町山田12号窯出土資料に近く、9世紀後半～10世紀初め頃まで下る可能性をもつ。

44～46は頸部から緩やかに外反する口縁部をもつ土師器甕で、頸部に調整時の指頭圧痕が連続して残る。47・48は焼塙土器で、口縁部を肥厚させる。

雨落ち溝と考えられる3162溝からは須恵器高台付坏49と土師器坏50が出土した。49は底部周縁に断面逆台形の低い高台が付き、外傾して直線的に立ち上がる深い体部をもつ。9世紀前半のものである。外面に溶融した鉄滓の飛沫が付着しており⁽²⁰⁾、同溝から出土した製錬滓（流出溝滓M17・18）とともに近傍で鉄生産が行われたことを示唆する。

掘立柱建物2出土土器(第159図、PL.108)

3007ピットで57・58・65、3008ピットで55・56・59・60・64、3139ピットで54・62、3140ピットで51、3143ピットで53・61、3144ピットで52・63・66が出土した。須恵器蓋及び坏には9世紀前半から10世紀前半の様相を示すものが含まれる。

51～54は須恵器蓋で、いずれも口縁端部が短く「へ」字に屈曲する。51・52は天井部回転糸切り後周縁部をナデ調整して仕上げる。ナデ調整は51が粗く、52が丁寧である。51はつまみを欠失している。

55～62は須恵器坏である。いずれも内外面回転ナデによって調整されており、56が口縁端部を薄く引き延ばすように仕上げるに対し、55・57は端部を丸く収める。57は深底のタイプで、高台をもつ可能性がある。59～62は高台をもたないタイプで、62は底部ナデ、それ以外は底部回転糸切りである。59は底部から内湾して立ち上がる体部をもち、60も底部からいたんくびれ内湾しながら立ち上がる。57や60は出土した坏類の中でも新相を示す。

63は壺口縁部、64は甕胴部の破片で、64内面には車輪状の当具痕が認められる。

65は高台の付く土師器甕で外面と体部内面を赤彩する。66は土師器坏である。

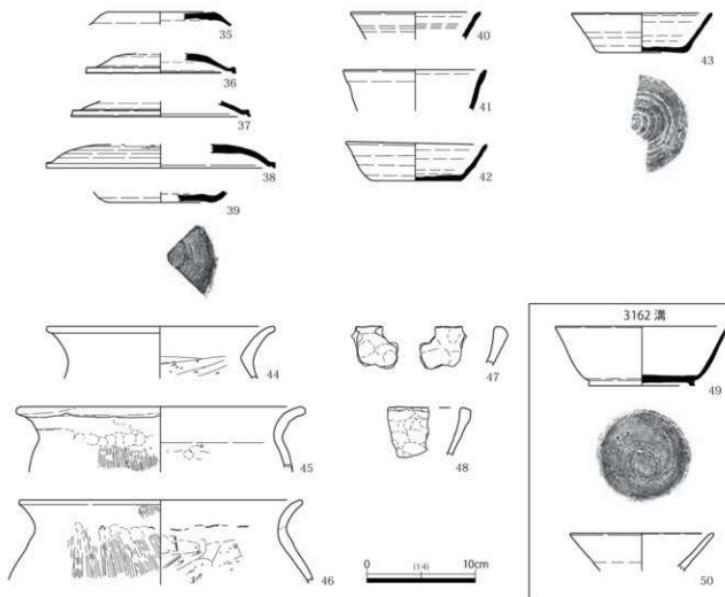
掘立柱建物3出土土器(第160図、PL.109)

3106ピットから68、3113ピットで69、3135ピットで67・70が出土した。

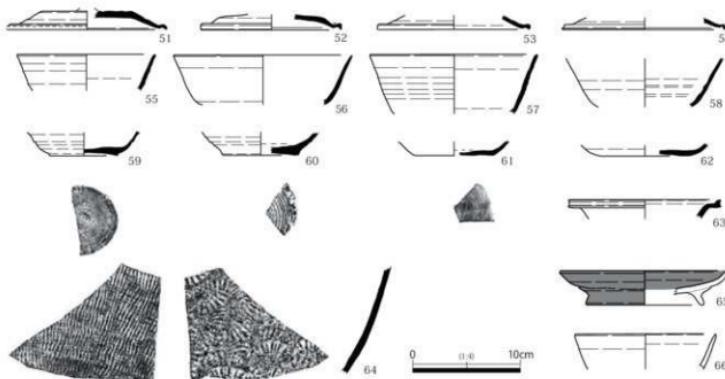
67・68は高台の付かない須恵器坏で、67は底部回転糸切り、68は回転糸切り後ナデを施している。

69・70は土師器坏で、69はナデ、70は回転ナデにより仕上げる。70の底部周縁はナデ調整で糸切り痕が認められない。

須恵器、土師器とも10世紀前半段階の様相を示している。



第158図 掘立柱建物1出土土器



第159図 掘立柱建物2出土土器

第VI章 3区・4区の調査成果

掘立柱建物4出土土器（第160図、PL.108）

3300ピットから74・77、3361ピット及び3362ピットから71・72・73、3365ピットから75・76が出土した。

71・72は須恵器蓋である。71の天井部は回転糸切り後周縁部をナデ調整する。

73～75は須恵器坏である。73は口縁端部で短く外反するが、74は口縁端部を先細りとなるよう收める。75は底部回転糸切りで、体部は残っていないが内湾気味に立ち上がるようである。

76は土師器皿、77は土師器坏である。76は口縁端部が残っていないが、端部付近で短く外反する。77は内外面ともナデ調整で、外面に横方向のナデの痕跡が明瞭に残る。

8世紀末～9世紀前半の須恵器を主体とするが、77は10世紀段階のものである。

掘立柱建物5出土土器（第161図、PL.108）

3202ピットから78、3285ピットから79、3517ピットから80が出土した。

78は土師器坏である。内外面ともナデ調整し、底部は回転糸切りで、10世紀段階のものと考える。79は輪高台をもつ縦釉陶器の皿で、灰オリーブ色の釉薬がかかり、露胎部は灰色を呈す。特徴からすれば畿内産で、9世紀後半段階のものであろう。80は古墳時代の土師器高坏で、内外面赤彩し、内面に放射状のミガキが認められる。第5層からの混入である。

掘立柱建物6出土土器（第161図、PL.108）

3306ピットから須恵器蓋81、土師器壺82が出土した。81は口縁端部が短く屈曲し、内外面からナデで收める。9世紀前半のものである。

掘立柱建物8出土土器（第161図、PL.108）

3051ピットから83、3054ピットから84が出土した。どちらも須恵器蓋である。83は丸みをもつ体部から続く口縁端部に下方へ湾曲するかえりをもち、つまみを欠失している。84は口縁端部を外面からナデ押し、わずかに面をもって肥厚する。83は7世紀後半、84は7世紀末～8世紀前半のものである。

掘立柱建物9出土土器（第162図、PL.109）

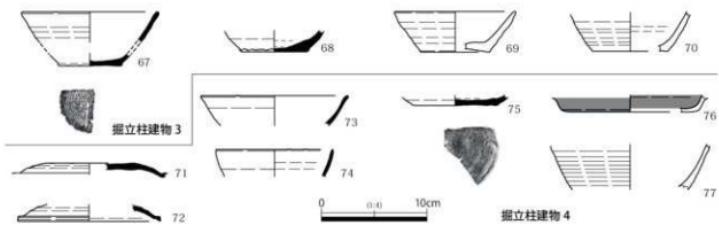
3105ピットから90、3375ピットから86・91、3383ピットから85・87、3450ピットから88・89が出土した。

85・86は須恵器蓋で、85は天井部回転糸切り後ナデ、86は天井部ナデである。87・88は須恵器坏で、どちらも外傾して立ち上がり、口縁端部をわずかに外方へつまみ出す。89は須恵器坏底部で、回転糸切り後周縁部をナデ調整する。90は土師器坏で、体部が大きく外傾し口縁部を外方へつまみ出す。91は焼塙土器である。須恵器、土師器とも9世紀前半のものを主体とするが、88・89は9世紀後半頃に下る可能性がある。

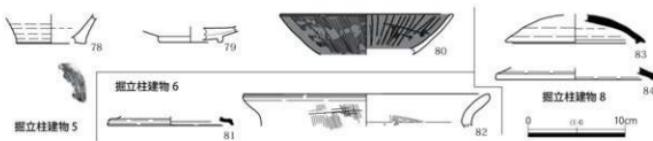
掘立柱建物10出土土器（第163図、PL.109）

3281ピットから96、3301ピットから95、3303ピットから93・97、3372ピットから92、3420ピットから94がそれぞれ出土した。

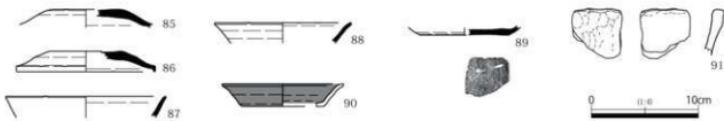
92～96は須恵器坏である。92・93は口縁部をつまむようにナデ調整し、端部がわずかに外反し先細りとなる。それに対し、94は口縁端部を丸く收める。95は高台の付く坏である。底部は回転糸切りで、高台が底部周縁に近い位置に貼り付けられている。96は高台の付かない坏で、底部は回転糸切りである。



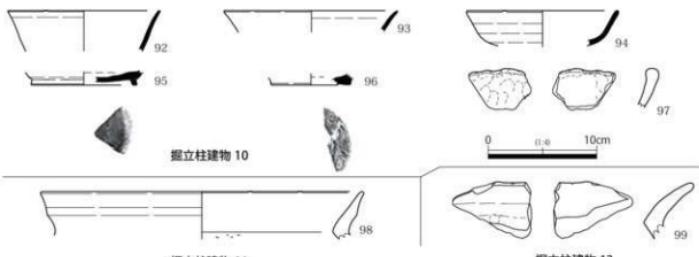
第160図 掘立柱建物3・4出土土器



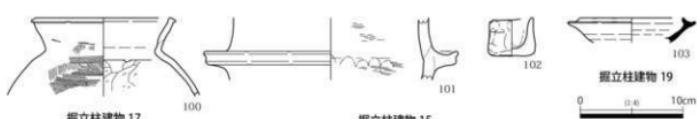
第161図 掘立柱建物5～8出土土器



第162図 掘立柱建物9出土土器



第163図 掘立柱建物10～12出土土器



第164図 掘立柱建物15・17・19出土土器

第VI章 3区・4区の調査成果

97は焼塙土器で、内外面とも指頭圧痕が確認できるが、外面は焼塙時と見られる被熱痕跡〔神野2012〕が顕著に認められる。

95は8世紀の特徴を持つが、その他はいずれも8世紀末～9世紀前半のものと考える。

掘立柱建物 11・12 出出土器（第163図、PL.109）

98は掘立柱建物11の3355ピットから、99は掘立柱建物12の3373ピットからそれぞれ出土した。どちらも土師器甕で、98は口縁外面を強くナデて仕上げる。

掘立柱建物 15 出出土器（第164図、PL.109）

4211ピットから甕101、4212ピットからミニチュア土器102が出土した。いずれも古墳時代のもので、第4層からの混入であろう。

掘立柱建物 17 出出土器（第164図、PL.109）

4273ピットから土師器甕100が出土した。くの字を呈する口縁端部を外方へつまみ出して肥厚させ、面をもつ。古墳時代中期のものと考える。

掘立柱建物 19 出出土器（第164図、PL.109）

4263ピットから須恵器壺103が出土した。7世紀後葉のものである。

3003溝出出土器（第165～171図、PL.110～114）

3003溝埋土上層（第165～168図、PL.110～112）

調査時に3003溝検出範囲で「第2-2層」「第2-3層」として取り上げを行った遺物を埋土上層出土遺物として評価し、第165～168図に掲載した。

第165図104～121は「第2-2層」出土須恵器。104～107は蓋で、7世紀末～9世紀前半のものが見られる。104は輪状つまみを有し、口縁端部が屈曲して下方へ折れる。105は天井部をヘラケズリし、口縁端部を下方へ短く折り曲げて収める。106は天井部を回転糸切りした後ナデて仕上げる。107は天井部周縁ナデである。

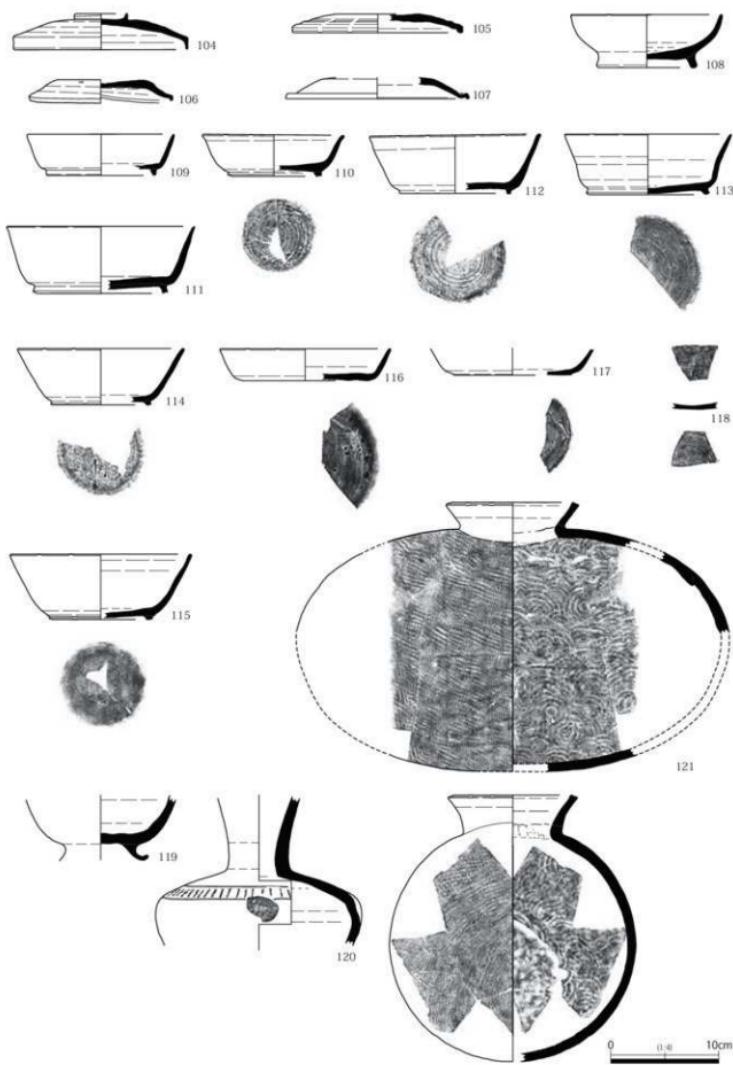
108～115は高台付坏である。109・110は平底から続く体部が外傾しながら直線的に立ち上がるもので、109は底部に回転糸切り後のナデが認められ、110は口縁部をわずかに外反させる。8世紀前半のものである。111はより深い体部をもつもので、口縁部を引き延ばすように仕上げており端部がやや先細りとなる。高台は底部周縁よりわずかに内側へ貼り付けられ、端部を面取りする。8世紀後半のものである。112は底部回転糸切りで、底部周縁よりわずかに内側へ低く直立する高台が付く。113は中心にかけて深くなる底部から外反して立ち上がる体部をもち、端部に面をもつ低い高台がハの字に付く。土師器高台付坏と形態的に類似するタイプである。114・115は底部周縁に短く低い高台が貼り付くもので、111と比しても体部がより外傾している。115は底部から体部への立ち上がりが内湾気味となる。これらは8世紀末～9世紀前半の様相を示している。

116・117は皿で、体部が低く直線的に立ち上がる116は8世紀前半、薄手でやや内湾しながら立ち上がる117は8世紀末～9世紀前半のものである。

118は小片だが高台付坏底部片の可能性があり、内面側にヘラ記号「×」が認められる。

119は壺底部で、内面に自然釉の付着が見られる。高台端部は上方へ反るが窯変と考えられる。

120は長頸壺で、肩部に2条の沈線と椭円状工具による連続刺突文を施す。また成形時のものか、肩の一部が凹み、布目圧痕が認められる。8世紀前半のものであろう。121は横瓶で、体部はタタキ後粗いカキ目を施す。



第165図 3003溝埋土上層出土土器(1)

第VI章 3区・4区の調査成果

第166図122～140は「第2-2層」「第2-3層」出土の土師器及び製塙土器。

122は壺で、底部回転糸切り、部ナデ調整し10世紀のものである。123は壺、124は鉢で、底部外面はケズリ調整し、一部ナデ、指頭圧痕が認められる。

125～129は皿で、125は底部回転糸切り、126～129は底部ケズリ後ミガキあるいは丁寧なナデにより仕上げる。いずれも8世紀のものである。

130～138は甕である。体部からくの字に外傾して短く立ち上がる口縁をもつ130～133・135、寸胴な体部からくの字に大きく立ち上がる口縁をもつ134、体部から緩やかに外反しながら立ち上がる口縁をもつ136～138が見られる。

139・140は焼塙土器で、どちらも口縁端部を面取りし、内面に布目痕が確認できる。

第167図141～162・第168図163～168は「第2-3層」出土須恵器。

141～146は蓋である。141・142は輪状つまみをもつ蓋で、141は天井部から体部上半を回転ヘラケズリするが、142は天井部ヘラケズリ後ナデ調整し、扁平な形状を呈すなどやや新相を示す。7世紀末～8世紀前半のものである。143～145はつまみを有す蓋で、143はボタン状、144は宝珠状、145は頂部中央の周囲をナデ押さえて突出させる算盤玉状のつまみである。144・146は天井部に回転ヘラケズリが認められ、145は天井部を丁寧にナデ調整して糸切り痕が見られず、143は天井部回転糸切り後周縁部のみナデ調整を施す。146はつまみの有無が不明だが、天井部の調整は回転糸切り後ナデである。これらは8世紀後半～9世紀前半のものと考える。

147～156は高台付壺で、概ね8世紀後半に比定されるものである。147は底部に板目痕がわずかに認められるが、丁寧なナデによって消されている。ヘラ記号「〇」が見られる。高台は底部周縁からわずかに内側に付くものがほとんどで、端部が丸みをおびるもの（149）、端部をつまむようにナデるもの（150）以外は端面をもち、短くハの字を呈すように貼り付けられている。なお、156には部分的だが底面にヘラ記号が認められる。

157～161は壺である。157は内湾する体部をもち口縁部のみ短く外方へ屈曲する。158も体部の立ち上がりは内湾気味である。これらは7世紀末～8世紀前半のものである。159・161は外傾して直線的に立ち上がる体部をもち、160も体部の大部分を欠失するが立ち上がりの角度は同様に見える。8世紀末～9世紀前半頃に比定される。

162・165は皿である。162は外傾する体部をもつが立ち上がりはやや内湾し、8世紀後半の皿と考える。底部外面周縁には一部ケズリが見られ、その後全体を丁寧にナデ調整している。一方、165は口縁端部をわずかに外反させ、9世紀前半のものであろう。

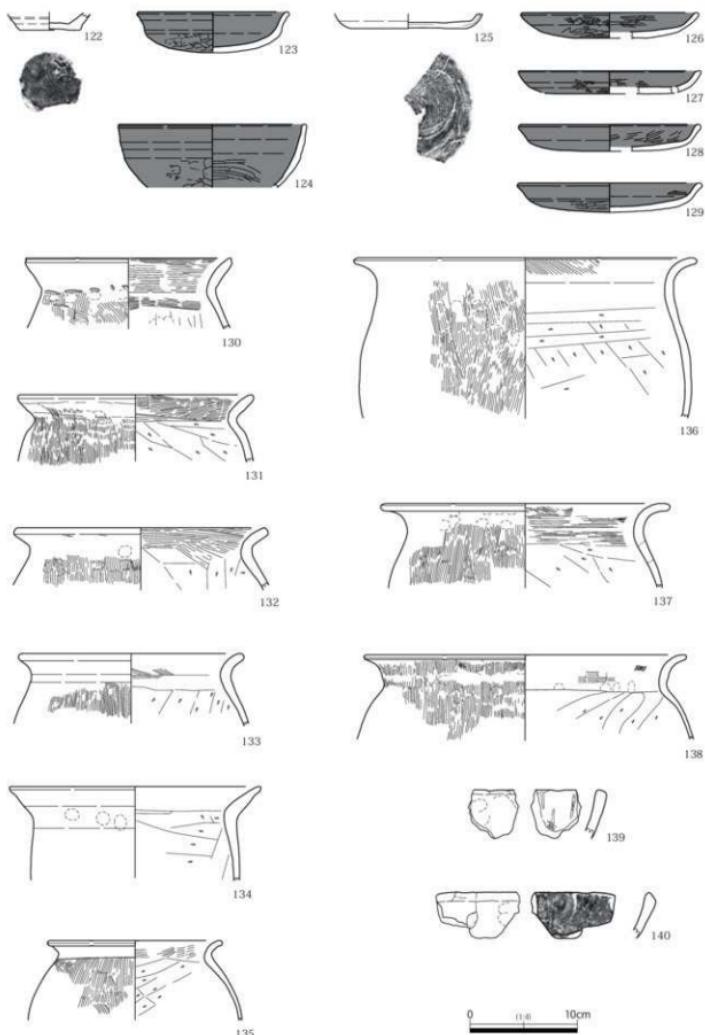
163は長頸壺で、頸部から肩部にかけて自然釉がかかる。8世紀前半のものである。164は薬壺形を呈す壺で、底部に回転糸切りの痕跡が明瞭に残る。166は壺の頸部と考えられ、口縁部で外反し広口となる。167は甕で、体部下半にケズリの工具痕が連続して残る。7世紀後半頃のものである。168は甕の底部片で、焼台とみられる別の甕体部片が溶着している。

なお、165～168は出土位置から見て3006溝に伴う可能性もある。

3003溝埋土下層出土土器（第169図、PL.113）

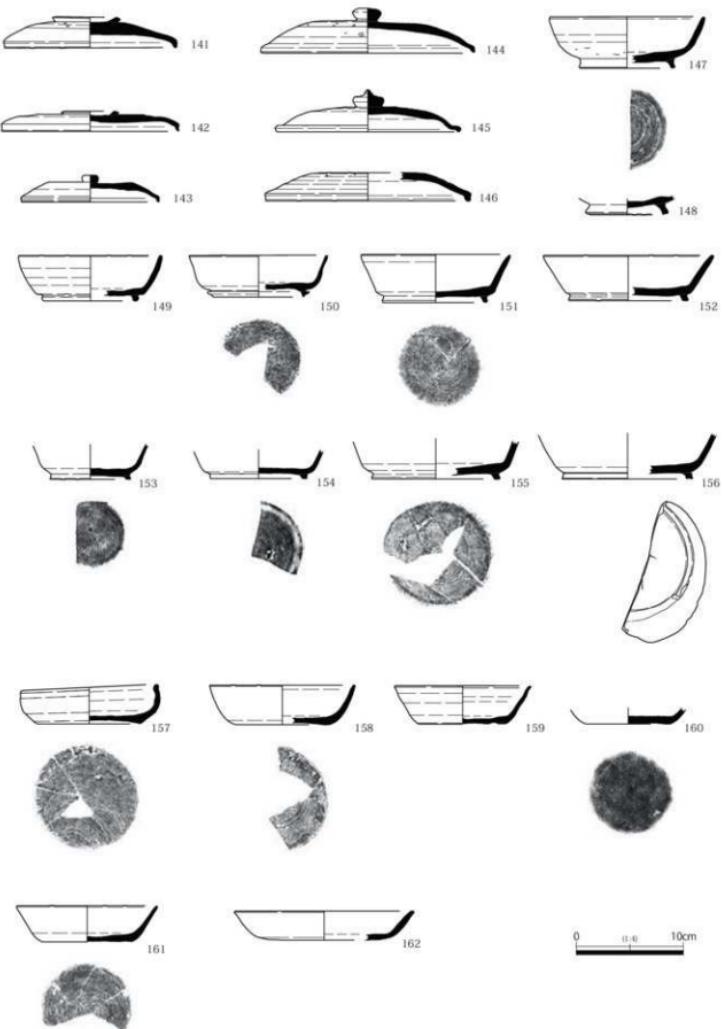
169・170は須恵器の高台付壺で、169は底部ヘラ切り、170は底部回転糸切りである。169は8世紀前半、170は8世紀後半のものである。

171は須恵器甕で、焼き歪みの影響もあってか肩が大きく張る。

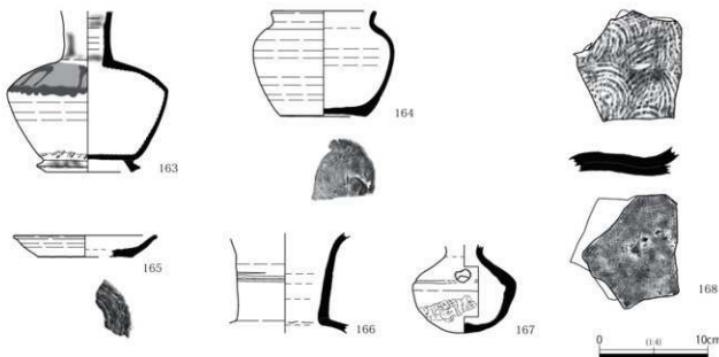


第166図 3003溝埋土上層出土土器 (2)

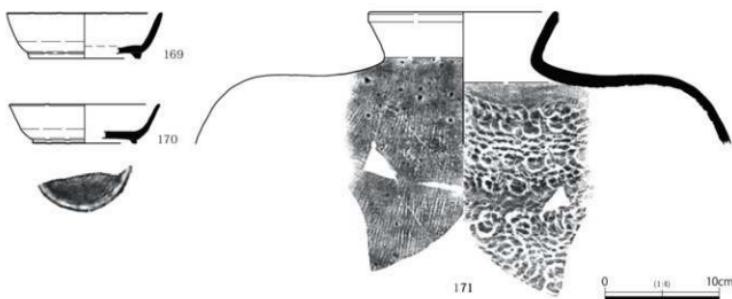
第VI章 3区・4区の調査成果



第167図 3003溝埋土上層出土土器(3)



第168図 3003溝埋土上層出土土器(4)



第169図 3003溝埋土下層出土土器

3003溝埋土最下層出土土器(第170・171図、PL.113・114)

埋土最下層では7世紀末～8世紀前半の遺物がまとまって出土している。

172は坏蓋で、天井部はヘラ切り後一部ナデ調整する。陶邑編年TK209併行期のものである。173は宝珠状のつまみを有し、口縁部に下方へ湾曲するかえりをもつ蓋で、7世紀後半に比定される。174～176は輪状つまみを有す蓋で、175・176の天井部内面にそれぞれヘラ記号「＊」「×」が認められる。7世紀末～8世紀前半のものである。

177～181は高台付坏で、坏部の器形や高台の形態から7世紀後葉～8世紀前半に比定されるものである。高台が高く、ハの字状を呈し、端部を面取りする178、高台がハの字状で内側を強くナデる177、高台が高くハの字状を呈し端部の面が弱い181、高台が高く直立気味で端部を面取りするか、面が弱い179・180が見られる。179・180は底部静止糸切り、181は丁寧なナデ調整で糸切り痕跡を消した後に漆記号「×」を記している。

第VI章 3区・4区の調査成果

182・183・184は壺、185は皿である。182・183は内湾して立ち上がる体部をもち、底部は回転糸切り未調整である。184は銅挽を模倣した壺で、底部は静止糸切り後周縁部をヘラケズリする。185は底部ヘラ切り後ナデで、口縁端部がわずかに外方へ屈曲する。いずれも7世紀末～8世紀前半のものである。

186は高環脚で外面にヘラ記号が認められる。187・188は長頸壺で、大型品の188には内面に粘土紐の接合痕が明瞭に観察できる。8世紀前半のものである。

189は平瓶で、扁球形の体部をもつ。190～192は甕である。191は外面に沈線と波状文を2段に施す大型品の口縁部で、接合部で剥離している。

193は弥生時代後期後葉の壺で、口縁部にハケ状工具による14条以上の平行沈線文を施す。

194は土師器の高台付壺、195は壺、196は皿、197は鉢である。194は外面をナデ調整するが、内面は細かいミガキが入る。195も底部外面に細かいミガキが認められる。196は底部外面ケズリ後丁寧なナデ調整で仕上げ、体部内面下半は上方向、上半は横方向の細かなミガキを施す。197は外傾して立ち上がる体部から口縁部をつまむようにナデ、内傾させる。いずれも伯耆国庁跡編年第1段階、西方官衙地区包含層出土土師器に形態等が近似し、8世紀のものと考えられる。

3006溝出土土器（第172～175図、PL.115～119）

3006溝埋土出土土器（第172～174図、PL.115～117）

第172図198～200は埋土下層で出土した。198は壺で、底部は静止糸切りされている。壺Gの底部か。199・200は甕で、199は外反する口縁をもち、200はくの字に立ち上がる口縁の端部をつまむように内傾させる。

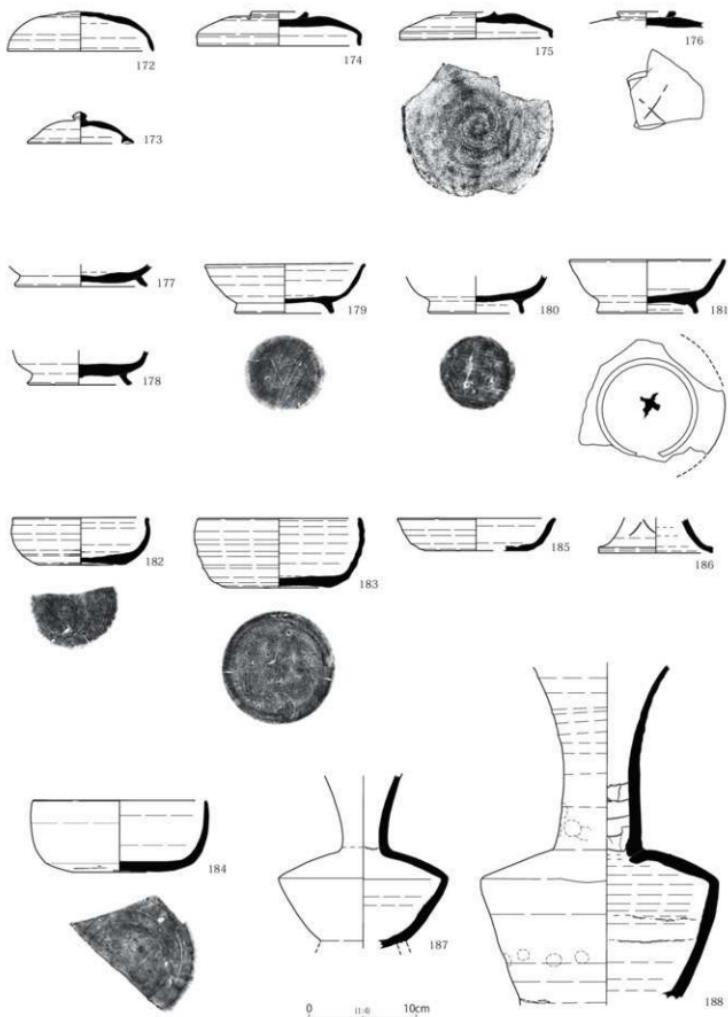
201～206は蓋である。7世紀後葉に比定される壺蓋201、天井部に回転ヘラケズリ痕を残す203を除けば、口縁端部を短く屈曲させるタイプの蓋であり、概ね9世紀前半のものと考えられる。

207～217は高台付壺である。207は底部外面に板目痕が残り、ヘラ記号「○」とその内側に漆記号（種別不明）が認められる。208は丸みをもつ底部から内湾して立ち上がる浅い壺部をもち、高台は焼き歪みにより変形している。209は平底から外傾して直線的に立ち上がる浅い体部をもち、口縁端部はやや先細りとなる。これらは7世紀末～8世紀前半のものである。210～217は底部周縁より内側に短い高台が付くもので、ハの字に開き端部に面をもつ212・216、低く直立気味な210・211・213・215、低く端部が先細る214・217が見られる。214・216・217などは器形等の特徴が新相を示すので、全体としては9世紀後半～10世紀前半のものを含むと考える。

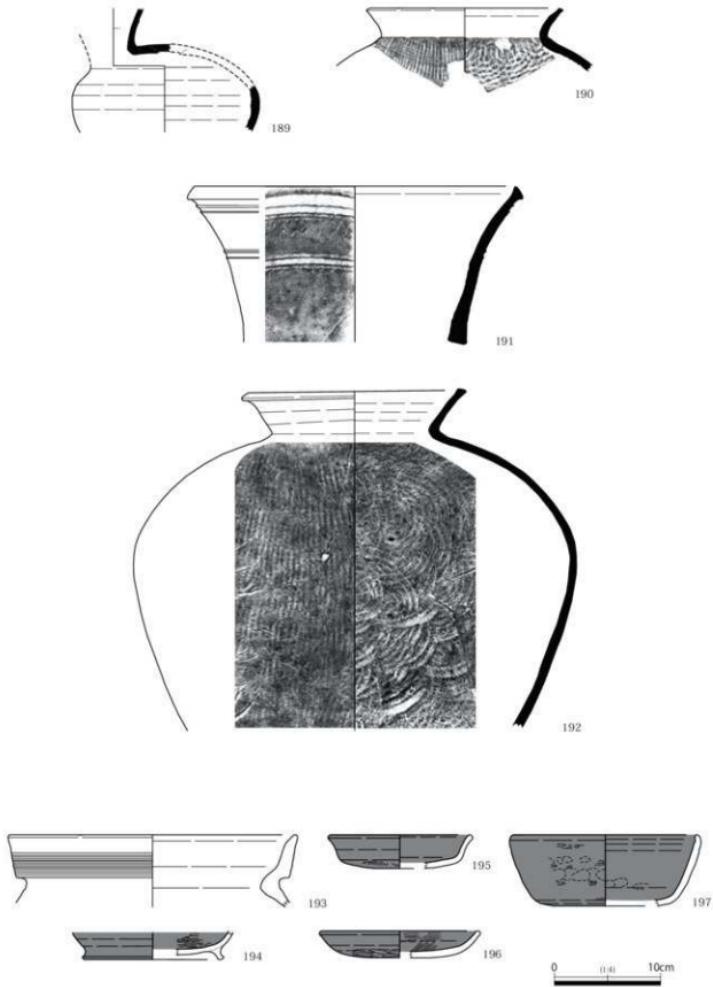
第173図218～227は壺である。218・219は体部の立ち上がりから浅い壺となろうか。219の底部はヘラ切り後ナデ調整で、ヘラ記号「×」が認められる。8世紀のものであろう。220は底部から体部への立ち上がりが緩やかで、体部は大きく外傾する。221・222は底部から体部への立ち上がりは内湾気味で、口縁部がわずかに外反する。これらは9世紀前半頃のものと考えられる。223～226は全体的に薄手なつくりとなっており、底部は回転糸切り後ナデを施す。224・225は口縁端部をつまみ出すようにナデで外反させ、226は口縁部を引き出すようにナデる。227は厚手で径の形態的な特徴からみて9世紀後半～10世紀前半頃のものである。

228・229は皿である。228は底部回転ヘラケズリで8世紀前半のもの、229は底径に対して口径が大きく開き口縁部を外側へ折るもので10世紀前半頃に比定される。

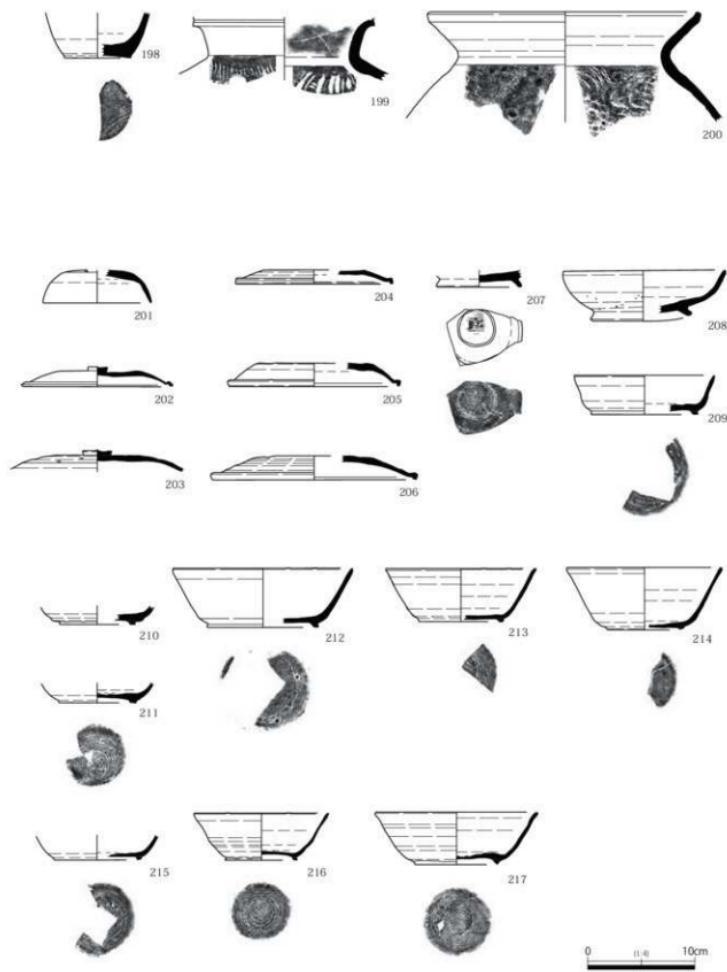
230・231は小型の壺である。230は平底で扁球形の体部をもつ。



第170図 3003溝埋土最下層出土土器(1)

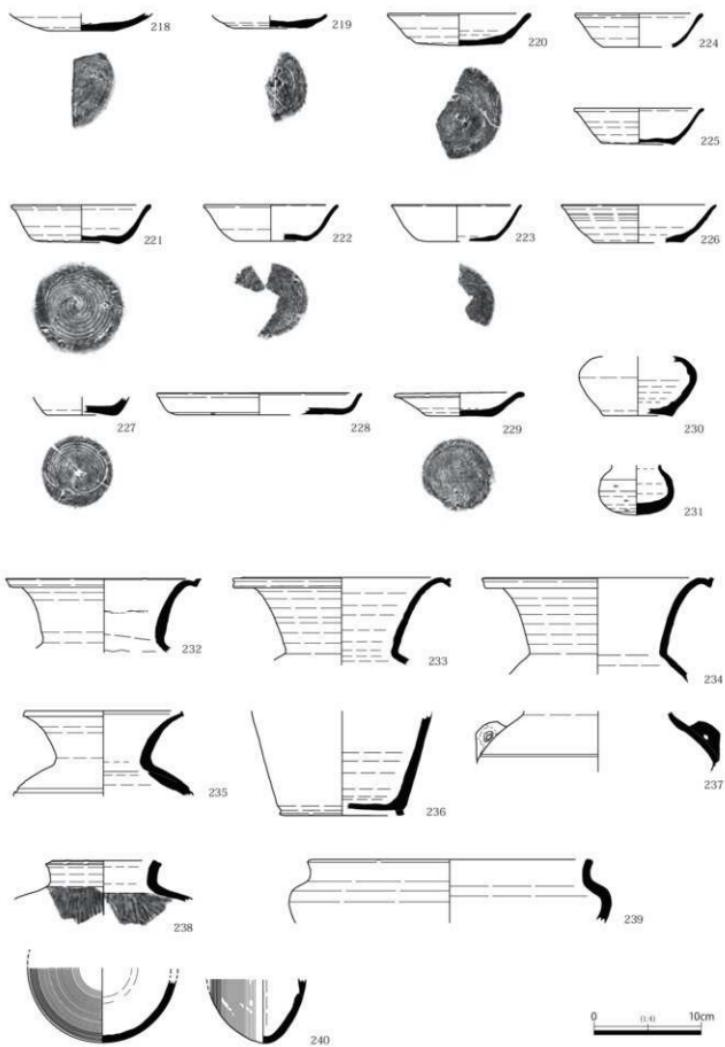


第171図 3003溝埋土最下層出土土器 (2)



第172図 3006溝埋土下層・埋土出土土器(1)

第VI章 3区・4区の調査成果



第173図 3006溝埋土出土土器(2)

232～235は広口壺で、外反する口縁部を上方へ折り曲げ端部をつまむようにナデで面をもたせる232～234と、口縁端部を外側からナデで面をもたせる235がある。8世紀後半～9世紀のものであろう。236は直立気味に立ち上がる体部に短い高台が付く。237は肩部に耳状のつまみを貼り付けている。9世紀のものか。238は短頭で肩の張る体部をもつ。239は鉢、240は提瓶の体部である。

第174図241は平瓶、242は小型の甕または壺である。243・244は甕口縁部、245・246は体部片である。245の内面には格子目状の当具痕が認められる。鳥取市山ヶ鼻遺跡でも同様の当具痕をもつ甕が出土しており、10世紀代のものか。247は甕底部に焼台と見られる別の体部片が溶着している。焼台となっている体部片の破面は摩耗が顕著である。

248～253は土器器坏である。赤彩しないものが多く、249や250は須恵器と同形のものである。248は9世紀前半、249～252は9世紀後半～10世紀初、253は10世紀前半に比定されると考える。

254～258は甕で、くの字に外反する口縁の端部を面取りする254、体部が張らず直立気味となる257・258が見られる。

3006溝埋土最下層（第175図、PL.118・119）

埋土最下層の出土遺物は9世紀のものを主体とし、7世紀末～8世紀前半のものが少量混じる。9世紀の資料の多くは前半段階に比定される。これは、東から続く4038溝下層の堆積を再掘削しながら溝の機能維持を図ったことを示唆していると考える。

259・260は蓋で、259は輪状つまみをもち外面に漆記号〔×〕かがあり7世紀末～8世紀前半のもの、ボタン状のつまみを有す260は8世紀後半のものである。

261～267は高台付坏である。7世紀末～8世紀前半に比定される261も含まれるが、多くが264～267のように底部周縁から内側に短い高台が付き深い体部をもつ9世紀のものを主体とする。264や266は口縁部で外反し9世紀前半段階に比定され、つぶれたハの字を呈す高台が付く265や深底で体部がわずかに内湾気味に立ち上がる267はやや新相を示す。

268～274は坏で、体部の外傾角度にやや差があるが全体として9世紀のものと考えられる。272は大型品である。

275は甕、276・277は壺である。276は大きく張り稜をもつ肩から外反して立ち上がる口縁部をもつ広口壺で、9世紀に位置付けられる。277は丸みをもつ底部に高台が付き、7世紀末～8世紀前半の長頸壺であろう。

278～281は土器器坏で、外面を黒色塗彩する278は8世紀前半、他は9世紀前半のものと考える。278は底部ケズリ後丁寧にナデ調整し、他は底部ヘラ切り後ナデ調整している。

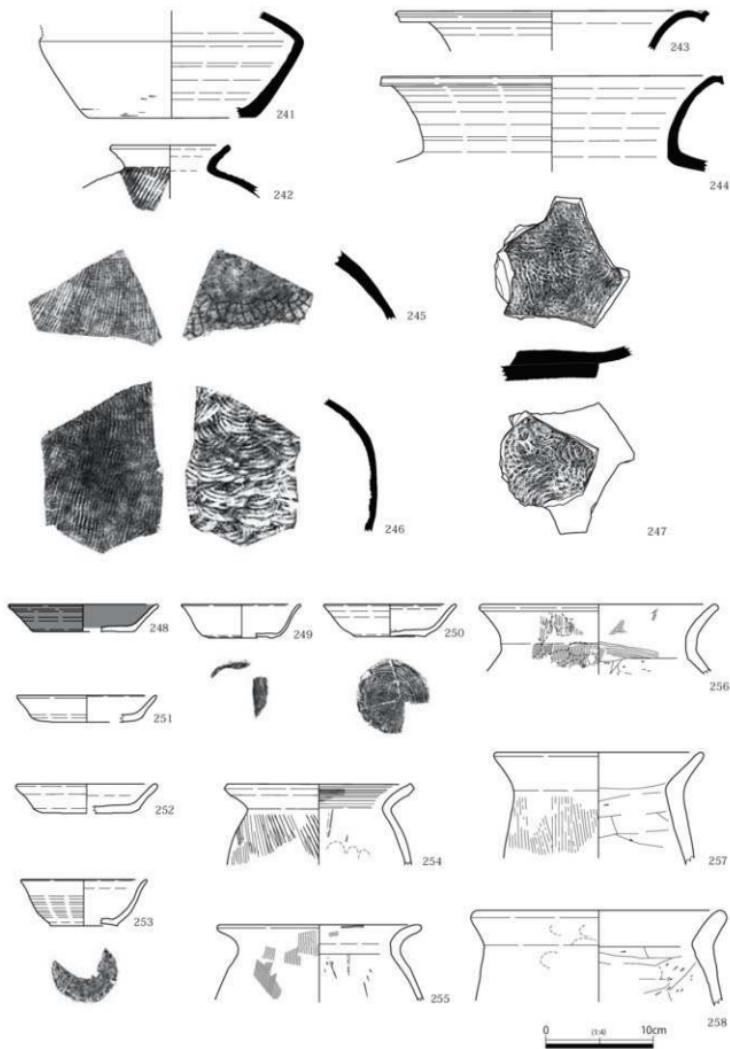
282～284は甕で、283は頸部以下がケズリ等により薄く仕上げられているが外面のハケは絶じて粗く雑である。

4038溝出土土器（第176～181図、PL.119～124）

4038溝埋土出土土器（第176～178図、PL.119～122）

第176図285～295は蓋である。7世紀前半の坏蓋285や286も見られるが、8世紀のものを主体とする。287もつまみ上げ丁寧に成形する宝珠つまみを有し、短いかえりをもち7世紀前半のものである。頂部中央の周縁をナデ押さえする算盤玉状のつまみをもつ288・289、同じくつまみ剥離痕のある290は口縁端部の形態などから8世紀後半に比定される。つまみの有無が不明な291・292もその頃のものと考える。輪状つまみをもつ293～295は7世紀末～8世紀前半に比定され、293は外面

第VI章 3区・4区の調査成果



第174図 3006溝埋土出土土器 (3)

にヘラ記号「×」が認められる。

297～302は高くハの字に開く高台が付く坏で、底部が丸みをもつ297以外は平底となる。299の底部は静止糸切りされている。300は底部ケズリ後ナデ、301・302は底部ヘラ切り未調整で、いずれも漆記号「升」を描いている。

303～313は短い高台が付く坏である。ハの字に開き端部に面をもつ高台が付き、体部が外傾して直線的に立ち上がる303～308は8世紀のものである。309及び310は楕形を指向する体部下半から底部を回転ヘラケズリあるいは静止糸切りし、底部にヘラ記号「〇」が認められる。8世紀前半のものか。311～313は高台、体部形態、そして底部調整が上記のものとは異なり、8世紀末～9世紀前に比定されよう。

314～317は坏である。形態的特徴や焼成から9世紀後半～10世紀初めのものと見られる317を除けば、7世紀末～8世紀前半に比定される。317は4038溝北側の再掘削が想定される範囲(2D-7aグリッド)で出土しており、その時期を示唆するものである。

第177図318・319は7世紀前半の高坏で、口縁部が内湾する浅い坏部をもつ318、長脚の319とも線状の透かしを入れている。318は未貫通の透かしを5方向、319は貫通する透かしを2段2方向に施す。

320～322は横瓶である。320は扁球形の体部をもつ。321・322は口縁部～頸部の破片だが、体部に取りつく角度がほぼ水平となる。320より俵形の器形が想定される。

323は外傾して直線的に立ち上がる深い体部をもち、鉢か。324～326は壺である。325は大きく張る肩部から頸部が窄まり、そこから口縁に向かって大きく開く広口壺で、頸部にカキ目が見られる。8世紀後半頃のものか。327～329は壺である。

第178図330～333は土師器坏、334～339は皿である。坏330・332は底部をヘラケズリ後ナデ調整する。体部調整はヘラミガキまたはナデである。皿には、口縁部と底部が明瞭に区別でき、口縁端部をつまむようにナデで先細りになる334・335、口縁端部を外方へ折り曲げるまたはつまみ出す336・337・338、内湾気味に外傾する口縁部をもつ339がある。これらはいずれも底部外面をヘラケズリするか、ヘラケズリ後丁寧なナデ調整が施されている。また体部外面はヘラミガキ、または丁寧なナデによって仕上げられる。こうした形態及び調整手法の特徴は、倉吉市福田寺1号土塼の土師器I群に見られるものであり〔倉吉市教育委員会1998〕、上記資料も8世紀前半に位置づけられる。451は高台が付く深い坏である。高台付坏451は深い体部をもち、口縁は外反する。底部外縁にハの字に開く高台が付く。坏内面はミガキ、ナデにより丁寧に仕上げられる。底部外面はケズリ後ナデである。

340～346は壺である。口縁部がくの字に屈曲して立ち上がる340・343、口縁部が外反して立ち上がる341・342・344・345、口縁がほとんど屈曲せず直立気味に立ち上がる346がある。体部はほとんど張らない。

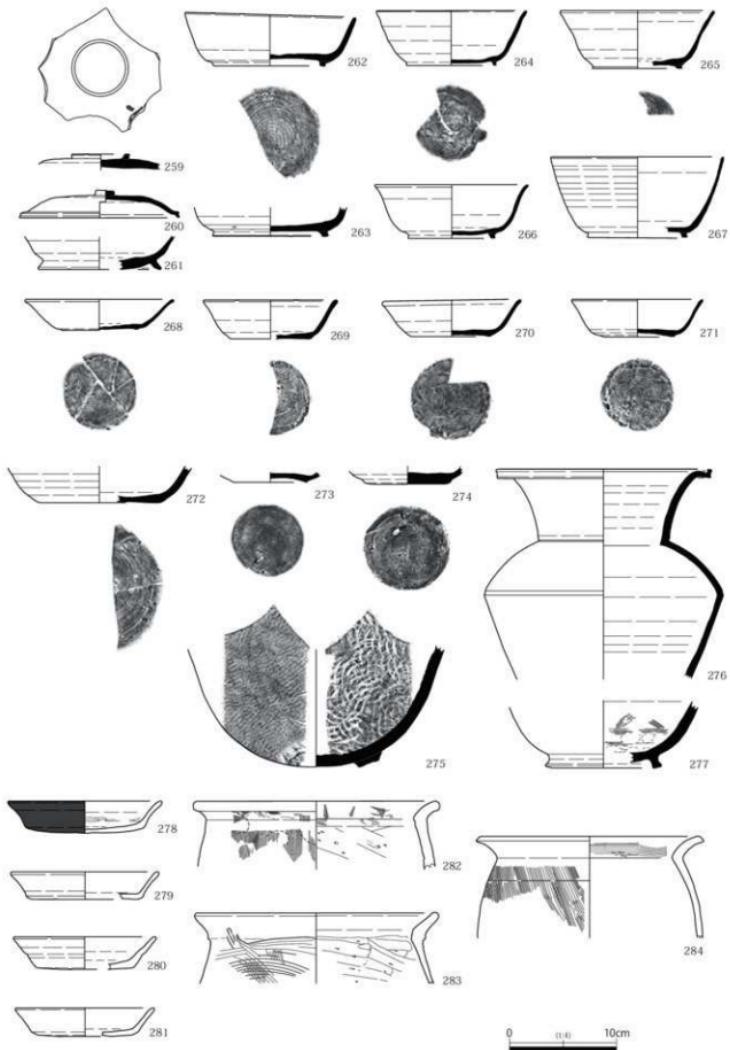
347は古墳時代中期後葉の高坏脚部、348は壺底部である。

349～352は焼塩土器で、口縁端部が肥厚し面をもつものが多い。351は焼塩時と見られる被熱が顕著で調整不明である。352は内面にわずかに布目痕が確認できる。

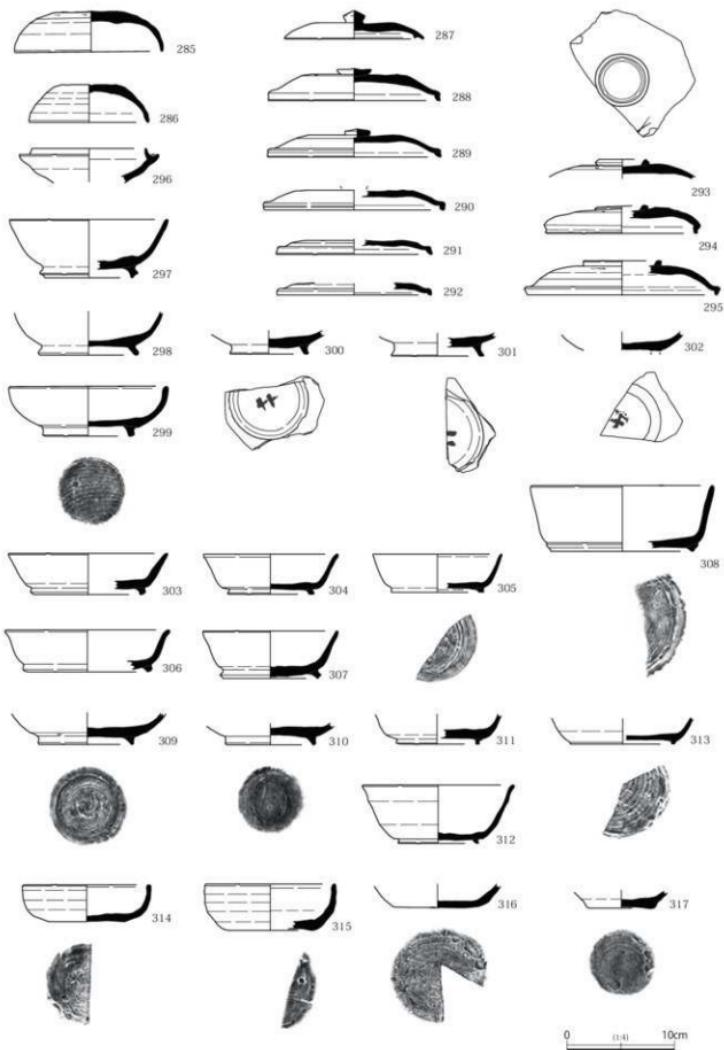
4038溝埋土中層出土土器(第179図、PL.122)

埋土中層で出土した土器のうち、須恵器蓋353・354、坏355・356、長頸壺357、土師器壺358、壺

第VI章 3区・4区の調査成果

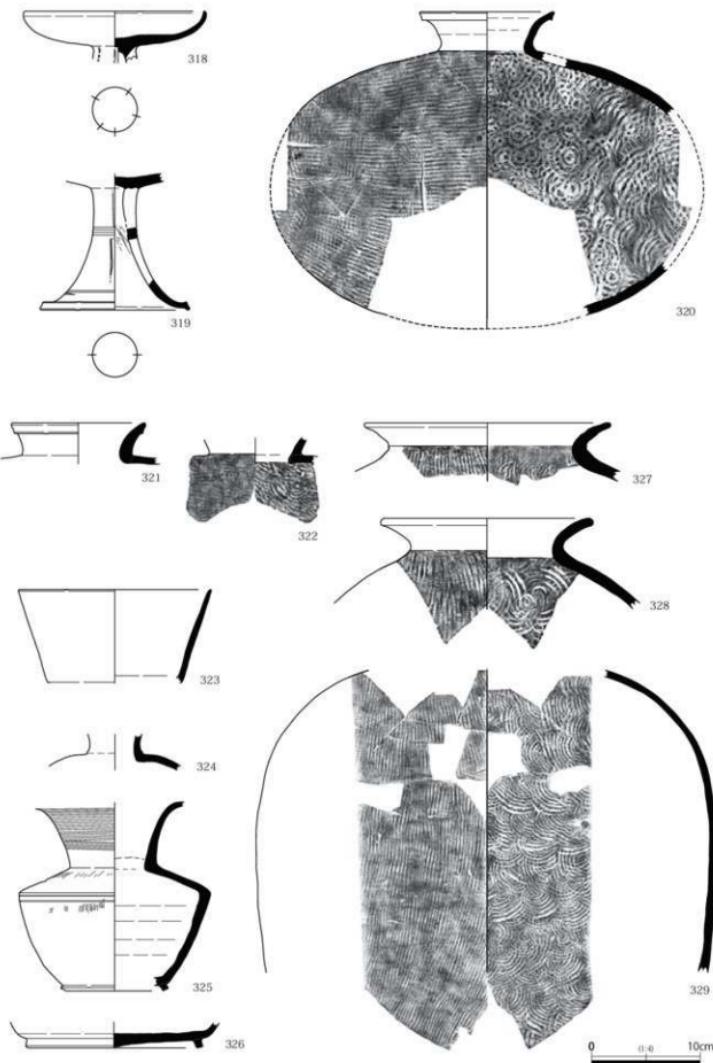


第175図 3006溝埋土最下層出土土器

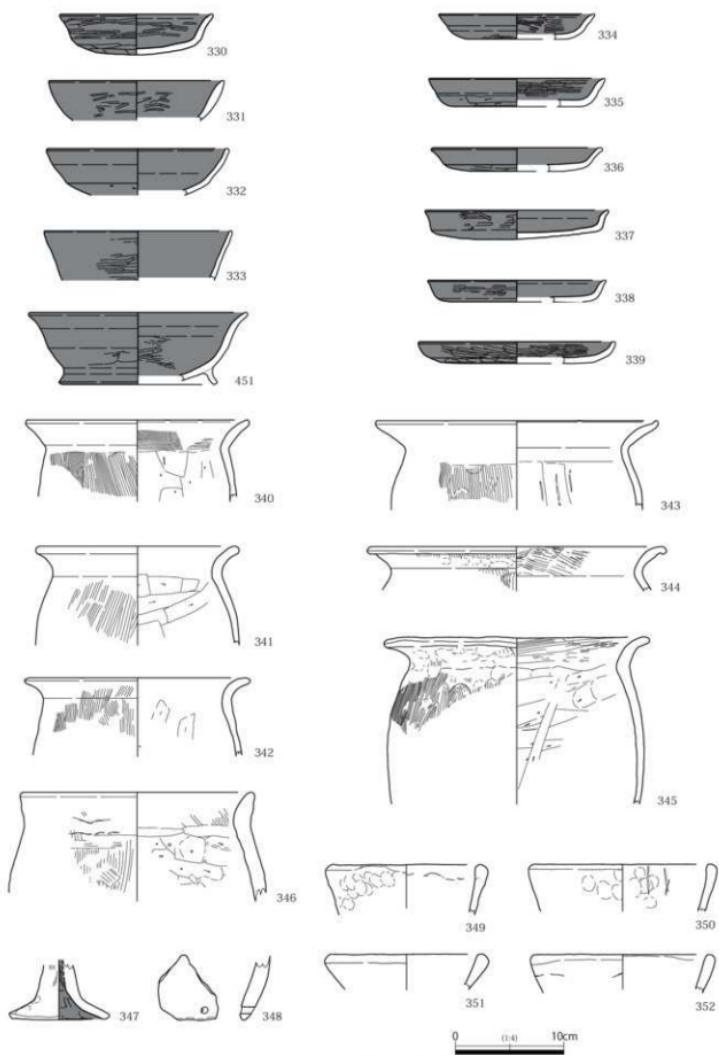


第176図 4038溝埋土出土土器(1)

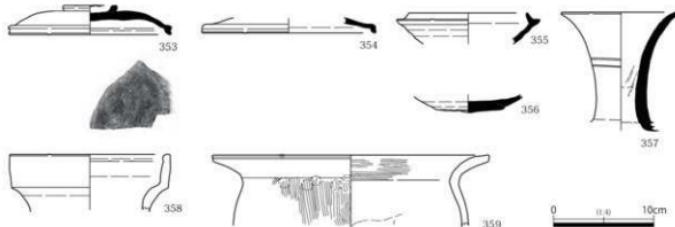
第VI章 3区・4区の調査成果



第177図 4038溝埋土出土土器 (2)



第178図 4038溝埋土出土土器(3)



第179図 4038溝埋土中層出土土器

359を図化、掲載した。358や355のように古いものも混じるが、概ね7世紀末～8世紀前半のものである。353は天井部内面にヘラ記号「×」を記す。

4038溝埋土下層出土土器 (第180～181図、PL.123・124)

埋土下層の出土遺物は、ほぼ7世紀末～8世紀前葉に比定されるもので占められる。

360～370は蓋で、7世紀後半の360・361を除けば、輪状つまみを有すもの、口縁端部を下方へ折り曲げるものなど上記時期の特徴をよく表している。363は輪状つまみの内側に漆記号、366はヘラ記号「×」が認められ、364には内外面に漆が二次的に付着している。

371～376は高台付坏、377は坏である。体部が内湾する371～373、体部が直線的に立ち上がる374～377がある。

378は長頸壺の底部、381は長頸壺の肩から体部下半、379・380は高坏脚部、382・第181図383・384は壺である。高坏はどうやら短脚で透かしは入らない。381は算盤玉形の体部となる。

385はやや丸みをもつ平底から外傾して立ち上がる体部をもつ土師器坏で、端部は面をもち、底部はヘラケズリを施す。386は内湾する深い体部をもつ鉢で、口縁端部は内側へわずかに屈曲させる。内外面の調整は丁寧なナダ及び細かなヘラミガキである。

387は壺、388・389は高坏脚、390は直立気味の体部となる壺または瓶となろうか。高坏脚は古墳時代後期頃のものである。391はミニチュア土器である。

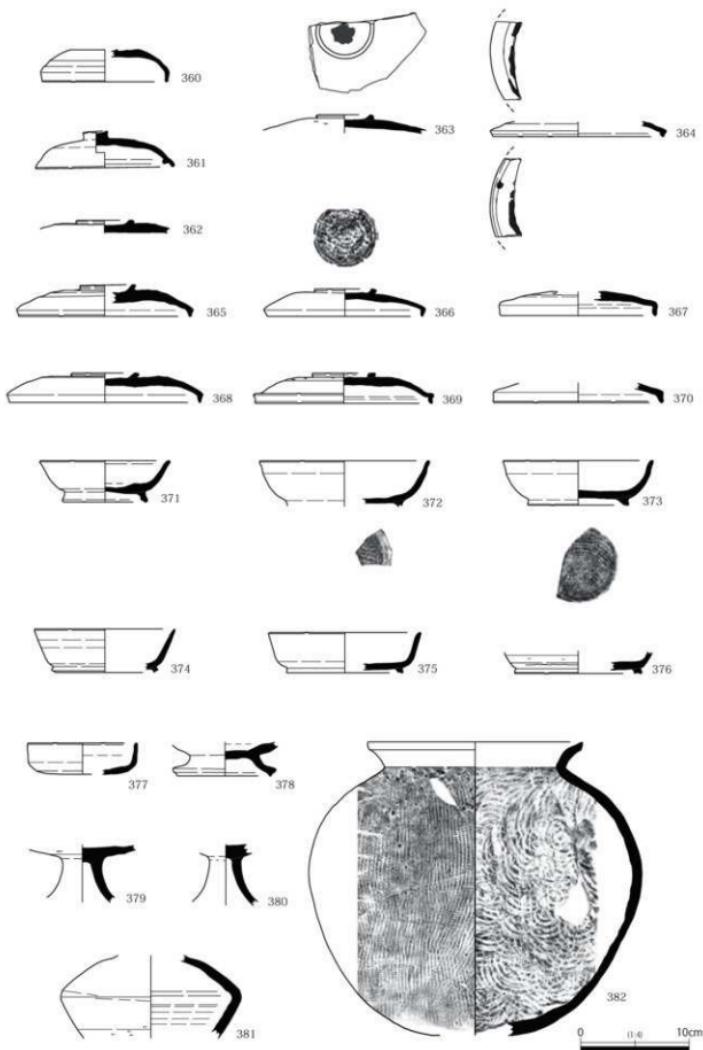
392～397は焼塩土器である。口縁部と肥厚させ端部に面をもつ392・396、厚みが一定で口縁端部が丸みをおびる394・395・397、薄手で内湾する体部をもつ393が見られる。392・395・397には内面に布目痕が認められる。

3006溝南肩及び4038溝南肩 (第4層) 出土土器 (第182～185図、PL.124～127)

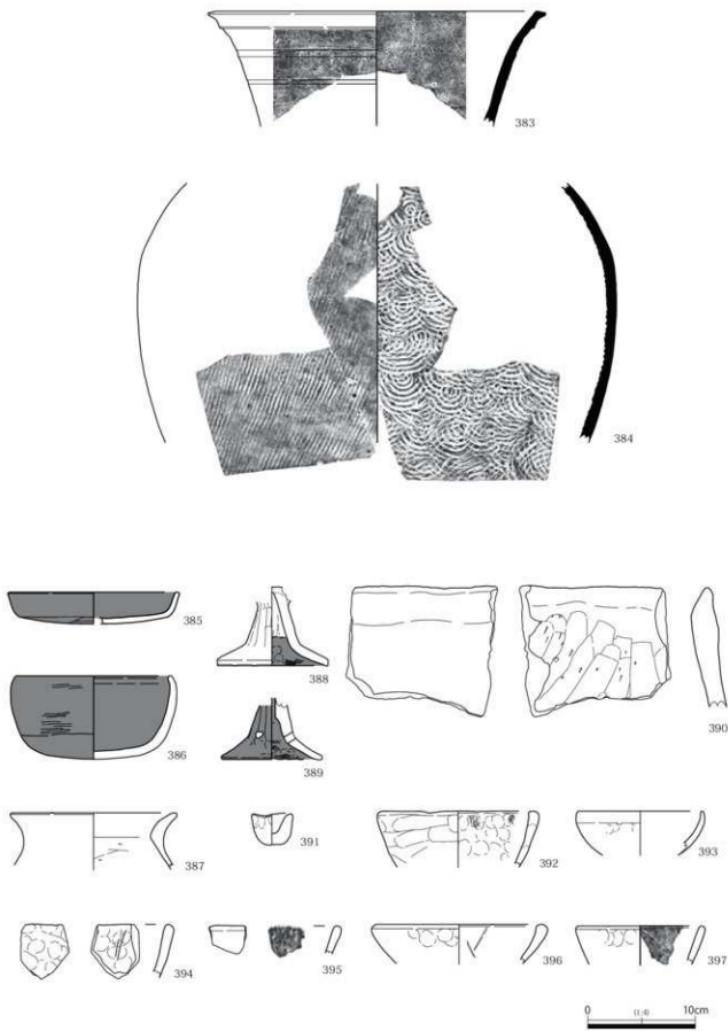
3006溝および4038溝の南肩部分は、旧流路(溝)が砂礫で埋積した後に直線的に走る水路の造成を意図して盛土成形されたもので、盛土(第4層)の中には奈良時代の土器を中心に多量の遺物を含んでいた。

3006溝南肩出土土器 (第182図、PL.124・125)

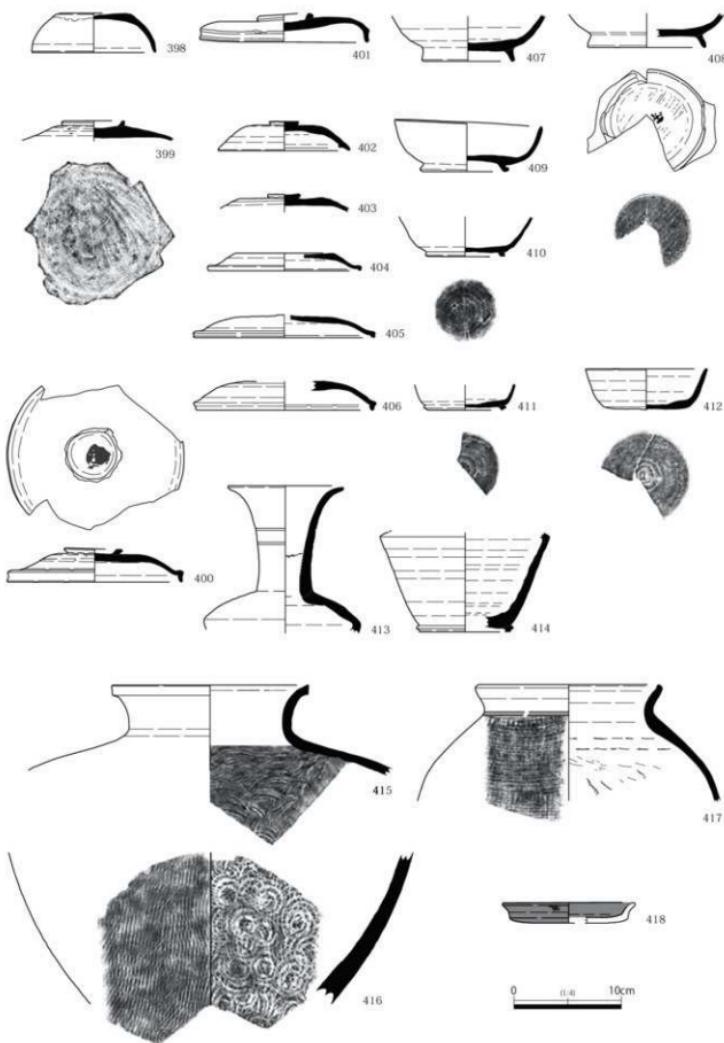
第182図398～406は蓋である。これらには、つまみの有無や口縁部の形状などから見て7世紀後半～9世紀前半のものを含んでいる。399は天井部内面にヘラ記号「×」、400には輪状つまみ内側に漆記号が認められる。



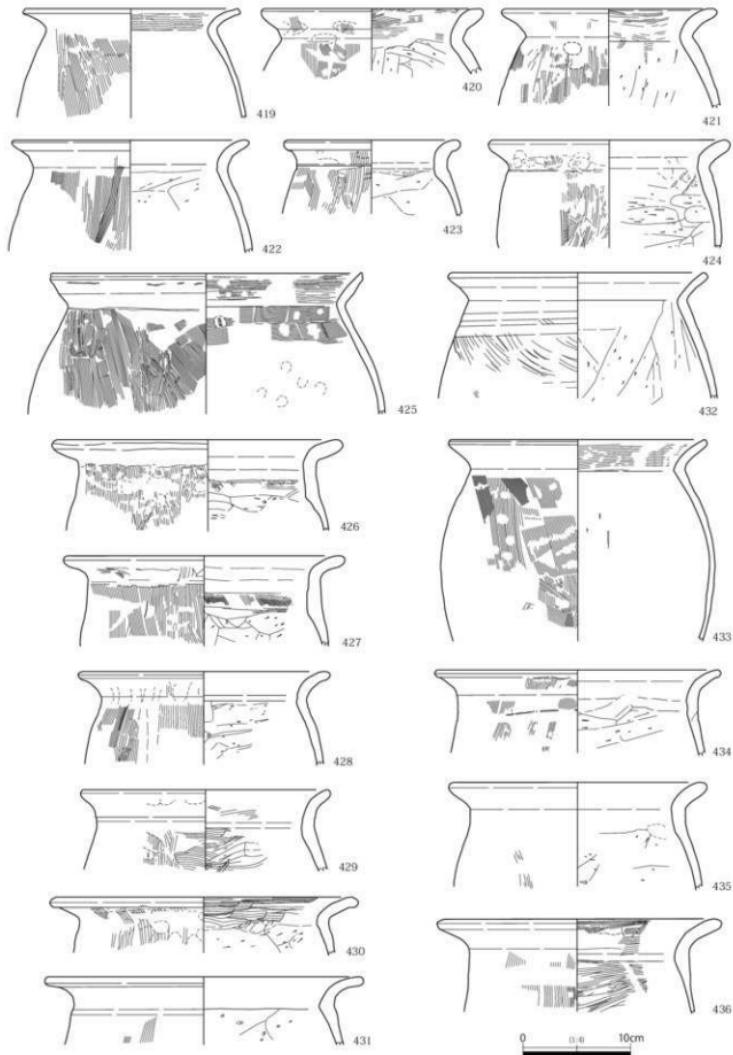
第180図 4038溝埋土下層出土土器(1)



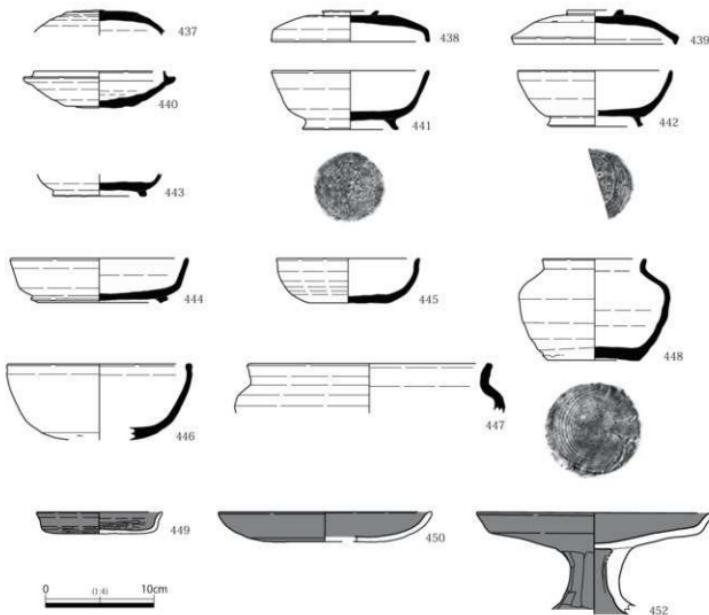
第181図 4038溝埋土下層出土土器 (2)



第182図 3006溝南肩（第4層）出土土器（1）



第183図 3006満南肩(第4層)出土土器(2)



第184図 4038溝南肩（第4層）出土土器（1）

407～411は高台付壺で、体部が内湾しハの字に開く高い高台を有す407～408と、外傾して直線的に立ち上がる体部に低い高台を付す410・411がある。前者及び底部調整がヘラ切りの411は7世紀末～8世紀前半、後者は8世紀末～9世紀前半に比定されよう。412も底部ヘラ切りであり、7世紀末～8世紀前半のものである。

413は長頸壺、414は壺で、いずれも8世紀のものであろう。415～417は壺で、口縁部が外反しながら立ち上がり肩の張る415、くの字に立ち上がる短頸の417がある。

418は土師器皿、419～436は壺である。皿は平底から外反して立ち上がる体部をもち、底部はヘラケズリ後ナデ調整を施す。8世紀前半のものである。壺は多量に出土したが、底部まで復元できたものはない。薄手でくの字に立ち上がる口縁部をもつもの（419・425・432など）、全体的に厚手なもの（420・421など）、口縁～頸部は肥厚するが体部以下はケズリ調整によって薄く仕上げられるもの（426・427など）が見られる。後者には口縁部の立ち上がりで差異があり、くの字に屈曲するもの、外反するものがある。

4038溝南肩出土土器（第184図、PL.126・127）

437・440は7世紀前半の須恵器蓋、壺である。438・439は蓋、441～444は高台付壺で7世紀後

第VI章 3区・4区の調査成果



第185図 4038溝南肩(第4層)出土土器(2)

半～8世紀前半に比定される。441・442は底部外面静止系切り後ナデ調整する。445は坏で、底部をヘラ切りし、口縁端部を外方へわずかに屈曲させる。446は口縁端部が肥厚しわずかに内湾する鉢、447は上位で肩が張る体部に外反する短頸の口縁がつく鉢、448は短く外傾して立ち上がる口縁をもつ壺である。これらは7世紀末～8世紀前半のものと考えられる。

449・450は土師器皿、452は高坏である。皿はどちらも底部ヘラケズリ後ナデで形態的に古相を示し、8世紀前半のものであろう。高坏452は面取りされた短い脚に、口縁が外上方へ屈曲して立ち上がる浅い坏部が付く。やや古相を示す須恵器類に対し、土師器類は8世紀後半頃のものと考える。

453～466は甕で、3006溝南肩と同様に数多く出土した割には底部まで復元できた個体はない。3006溝南肩部分よりも、体部から口縁部を引き延ばすように大きく屈曲、外反させる寸胴なもの(455・461・462・465など)が目立つ。466は体部中位に最大径をもち、口縁部が短く外方へ屈曲するものである。

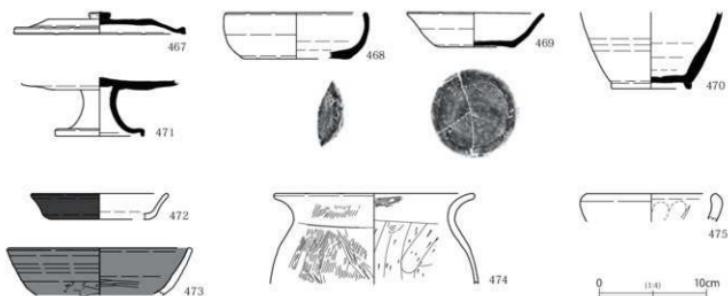
3438 流路出土土器 (第186図、PL.127)

467はボタン状のつまみを有す蓋で、口縁端部が短くへの字に屈曲する。8世紀末～9世紀前半のものである。468は体部が内湾する7世紀末～8世紀前半の坏、469は体部が外傾して大きく開く8世紀末～9世紀前半の坏である。470は高台の付く壺底部、471は裾部で大きく開く短い脚が付く高坏である。

472は外面に黒漆が塗布された坏で、底部調整は風化により不明瞭ながらヘラ切り後ナデと見られる。深い体部をもつ坏473は体部外面をナデ、ミガキ調整し、底部はケズリ後ナデである。472は9世紀前半、473は8世紀に比定される。474は甕、475は焼塙土器で口縁部が肥厚し内湾する。

3014・3432・3433溝 (第187～190図、PL.128～130)

3014溝と3432・3433溝は重複する位置で検出している。走行方向や堆積状況を勘案すると、これらは本来的には同一の溝で、埋積過程で上部を再掘削したものが3014溝ではないかと考える。3014溝出土土器と3432・3433溝出土土器には層の上下を問わず接合する資料が多く、ここでは一括して掲載する。出土土器は一部古い資料も混在するが、全体的には9世紀後半から10世紀前半に比定されるもので、特に土師器の坏皿類が量的に目立つ。



第186図 3438 流路出土土器

第VI章 3区・4区の調査成果

第187図476～480は須恵器蓋で、算盤玉状あるいはボタン状のつまみを有すものが主体となる。口縁部形態などからみて7世紀後半～9世紀前半のものである。480には天井部外面に赤色彫彩痕が認められる。二次的に付着したものか。

481～488は高台付坏である。短く端面をもつ高台が付き体部が直線的に立ち上がる481・482や大型の486などは8世紀後半のものであろうが、深い体部をもち底部周縁からやや内側に短い高台が付く483や487はそれぞれ9世紀後半、9世紀前半に位置づけられよう。また、低い高台が底部最外周に接合し、強く外傾して直線的に立ち上がる体部をもつ488は西伯耆～出雲地域でよく見られるタイプで、9世紀後半のものである。

489～500は坏で、体部が直線的に外傾して開くもの（489～492）、底径が小さく外傾して直線的に立ち上がる、または口縁付近で外反する深い体部をもつもの（493～500）に大別される。前者は概ね9世紀前半、後者は八頭町山田12号窯に形態・法量が近似し概ね9世紀末～10世紀前半のものと考えられる。

第188図501～507は皿で、薄く体部が外傾して立ち上がる501、径が小さい平底から体部が外傾して立ち上がり口縁で外反する502～504、全体的に厚手の506・507があり、前者は9世紀前半、後二者は9世紀後半～10世紀前半のものと考えられる。

508・509は鉢、510・511・513～515は壺、512は高坏、516～518は甕である。512は外面にヘラ記号「×」が認められる。513は体部最大径の位置に突帶を有す壺で、9世紀後半頃に位置づけられる。515は肩が大きく張る長頸壺で、8世紀のものであろう。甕体部片は内面に車輪状あるいは格子目状の当具痕が残る。

519は縁釉陶器の皿で、口縁端部内面に沈線が巡る高橋分類のD類にあたり〔高橋1995〕、畿内産で9世紀後半に比定される。

第189図520・521は土師器の高台付坏、522～第190図541は坏である。

520は底部を回転糸切りしており9世紀後半、521は内外面ナデ調整で底部押圧技法は認められず9世紀前半のものであろう。

坏は浅くて体部が外傾する522・539～541も見られるが、主体となるのは深底で体部が直線的あるいは内湾気味に立ち上がる一群である。後者は基本的に体部外面に回転ナデの痕跡を強く残し、体部内面はナデ調整、底部外面は回転糸切り後未調整である。口縁部が直線的に立ち上がるものと外反するものがある。これらは9世紀末～10世紀前半のものと考える。

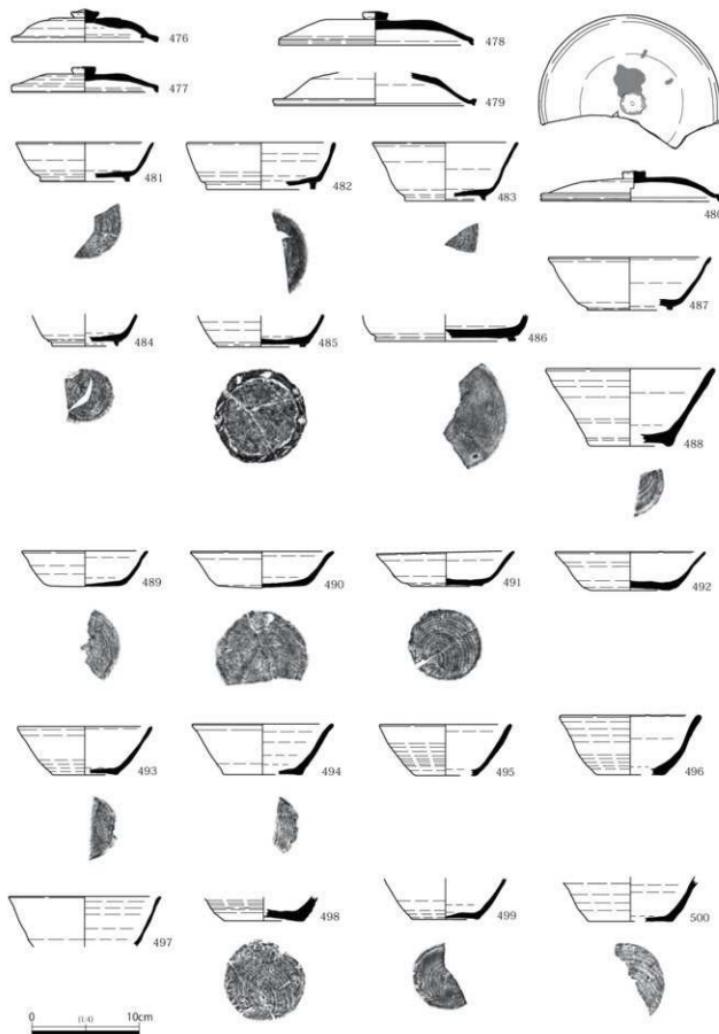
542～549は皿である。内外赤彩しナデ調整で仕上げる542は8世紀末～9世紀前半、径が小さい平底から大きく聞く口縁～体部をもち回転台成形によって仕上げられる543～547は9世紀後半～10世紀前半のものである。

550は複合口縁を呈す壺で、古墳時代前期末頃のものか。551～555は甕で全体的に薄いものと厚いものがある。

556～560は焼塙土器である。浅い楕形で口縁端部が面をもつ556・557、口縁端部を丸くおさめる559・560、厚く円筒形を呈す558が見られる。556は型当てによる成形後内面未調整、560は内面に布目が認められる。561は手づくりの土器である。

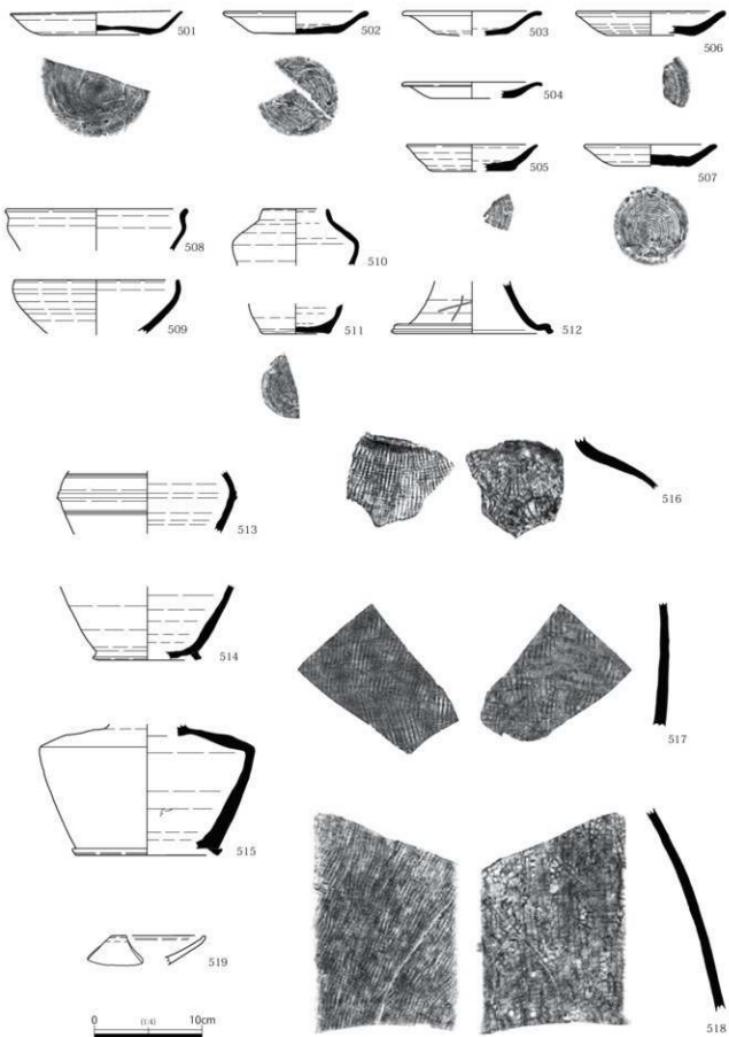
3004 溝出土土器（第191図、PL.131）

562は須恵器長頸壺、563は円盤状の底部から斜め上に聞く体部をもつ鉢である。8世紀のもので



第187図 3014・3432・3433満出土土器 (1)

第VI章 3区・4区の調査成果

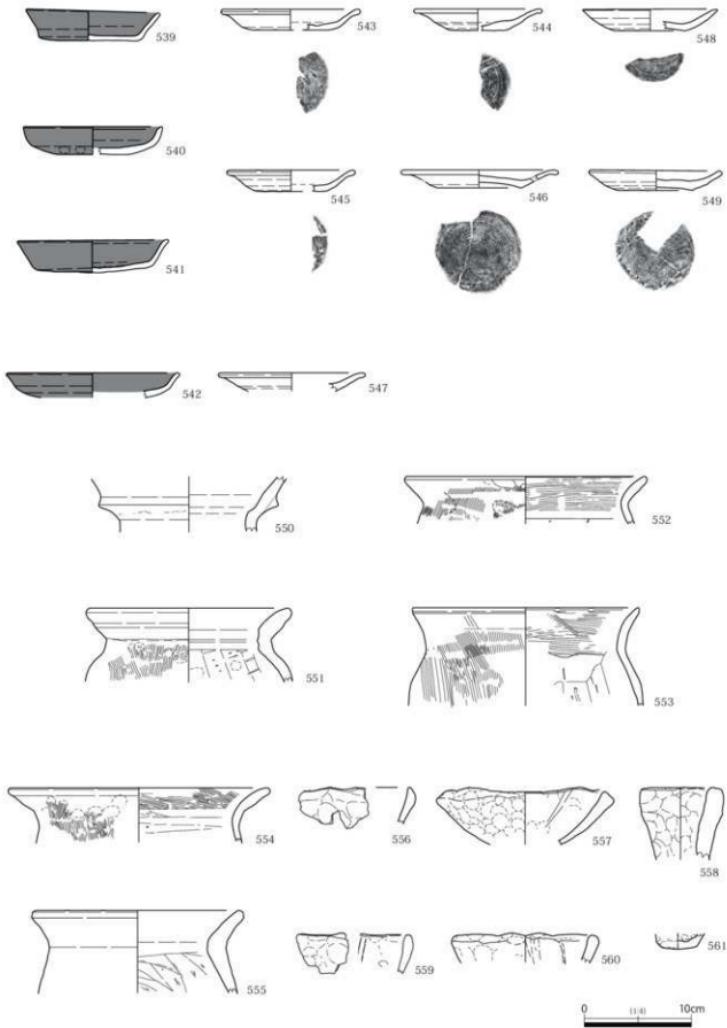


第188図 3014・3432・3433溝出土土器 (2)



第189図 3014・3432・3433溝出土土器(3)

第VI章 3区・4区の調査成果



第190図 3014・3432・3433溝出土土器 (4)

あろう。

3086 溝出土土器（第 191 図）

564 は底部周縁からやや内側にハの字に短い高台が付く須恵器の高台付坏で、8世紀後半頃のものか。

3090 溝出土土器（第 191 図、PL.131）

565・566 は口縁部がくの字に外反する土師器壺、567 は高坏である。567 は古墳時代中期のもので、混入品である。

3093 溝出土土器（第 191 図、PL.131）

568 は内湾する体部の須恵器壺、569 は体部が内湾気味に立ち上がる土師器皿で内面に粗いミガキが暗文状に入る。570 は口縁がくの字に大きく外反する土師器壺である。これらは8世紀前半のものと考える。

3200 溝出土土器（第 191 図、PL.131）

571 は須恵器皿、572 は壺である。須恵器皿は8世紀末～9世紀前半のものであろう。

3287 溝出土土器（第 191 図、PL.131）

573 は須恵器蓋、574～577 は壺、578 は土師器壺である。575 は底部周縁が丸みをもつ。576・577 とともに9世紀のものか。

3444 溝出土土器（第 191 図、PL.131）

579 は古墳時代の土師器の小型壺である。

3474 溝出土土器（第 191 図、PL.131）

580 は須恵器蓋、581 は長頸壺、582 は壺である。580・581 は7世紀末～8世紀前半に比定される。

3500 溝出土土器（第 191 図）

583～585 は土師器壺である。585 は底部付近まで遺存しており全体形が把握でき、広口の口縁から続く体部は短く、鍋に近い形状である。

4029 溝出土土器（第 192 図、PL.131）

586 は須恵器蓋で、口縁部の小片であるが8世紀後半のものと考える。

4044 土坑出土土器（第 192 図、PL.131）

587 は高台付坏、588 は体部が大きく開く皿である。587 は口縁付近で外反し始めており、9世紀前半のものであろう。皿は形態的にみて9世紀後半のものか。

4099 溝出土土器（第 192 図、PL.131）

589 は土師器高台付坏、590 は坏である。589 の高台は端部が丸く短いもので、底部周縁から内側に付く。590 は底部回転糸切りである。9世紀後半～10世紀前半のものであろう。

4108 溝出土土器（第 192 図、PL.131）

591 は須恵器坏である。底部には回転糸切り痕が残る。形態的に9世紀のものか。

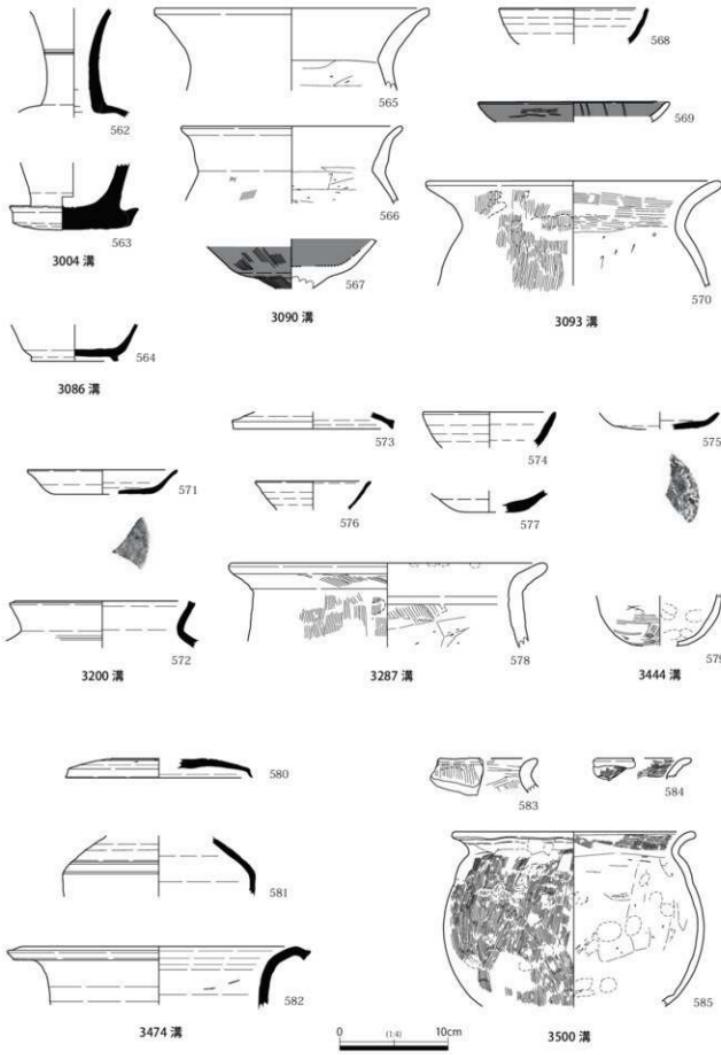
4123 溝出土土器（第 192 図、PL.131）

593 は須恵器坏である。底部は回転糸切りで、これも9世紀のものか。

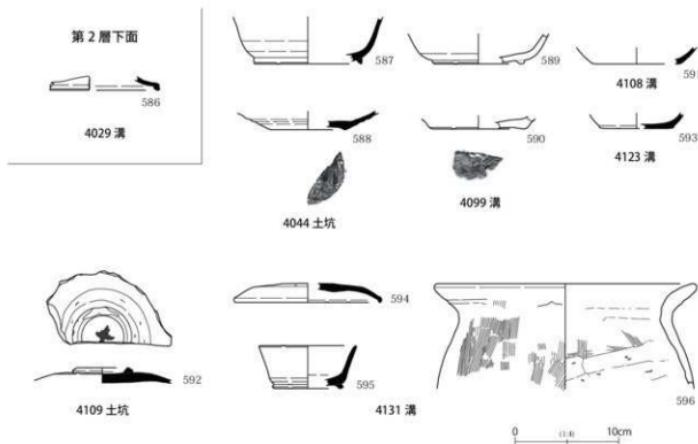
4109 土坑出土土器（第 192 図、PL.131）

592 は7世紀末～8世紀前半の須恵器蓋で、輪状つまみ内側に漆記号「×」が認められる。

第VI章 3区・4区の調査成果



第 191 図 3004・3086・3090・3093・3200・3287・3444・3474・3500 溝出土土器



第192図 4044土坑・4029溝・4099溝・4108溝・4109土坑・4123溝・4131溝出土土器

4131溝出土土器（第192図、PL.131）

594は7世紀末～8世紀前半の須恵器蓋、595は小型の高台付坏で体部及び高台の形態から見て8世紀前半のものと考える。

4191溝出土土器（第193図、PL.133）

597は須恵器蓋で7世紀前半のものである。598は壺、599は高坏、600は甕で概ね8世紀前半段階までのものであろう。601・602は土師器壺で、602は寸胴形の体部をもつ。

4221溝出土土器（第193図、PL.132・133）

603～606は高台付坏で、いずれの高台も高く、体部は内湾して立ち上がるものが多い。7世紀末～8世紀前半に比定できる。603の底部外面には漆記号、605の見込部にヘラ記号「×」、606は底部外面に漆記号「×」が認められる。606は底部静止糸切り後未調整だが、他は回転糸切り後ナデ、またはナデである。607は平底の坏で、粘土紐巻き上げの痕跡が凹凸となって残る。底部調整はナデである。608は長頸壺である。どちらも7世紀末～8世紀前半に比定されよう。609・610は土師器壺で、609は大型品となる。

4194溝出土土器（第193図、PL.132・133）

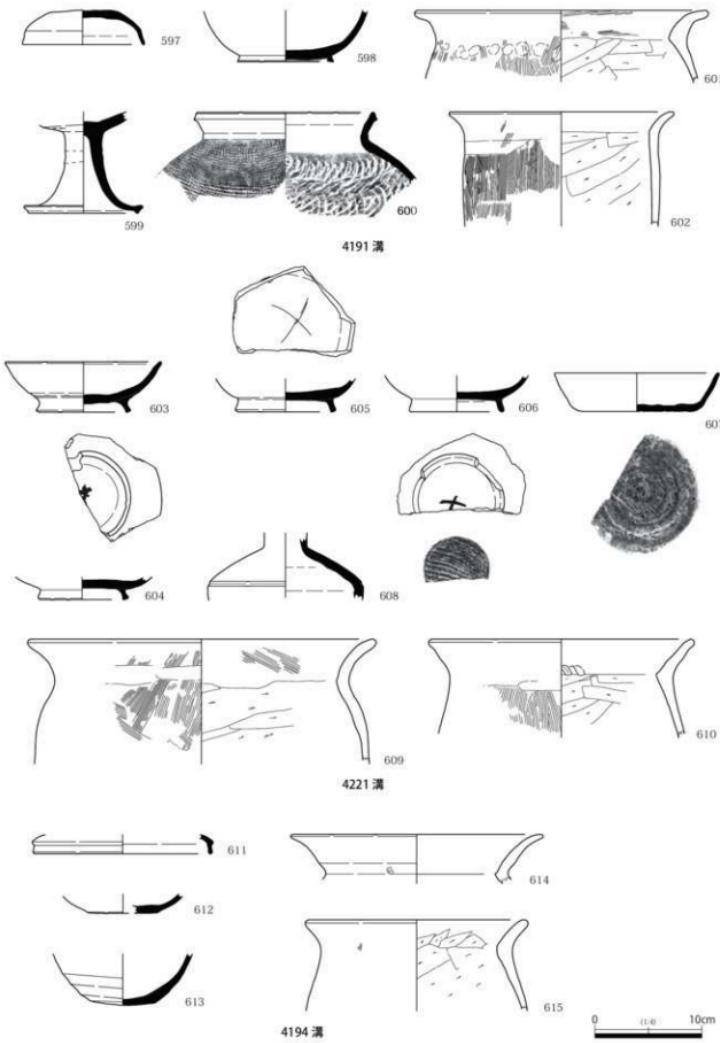
611は須恵器蓋、612は坏で、7世紀末～8世紀前半のものである。613は壺であろうか。体部外面を削り調整し、内面には炭素吸着が認められる。614・615は土師器甕である。

4192溝出土土器（第194図、PL.132・133）

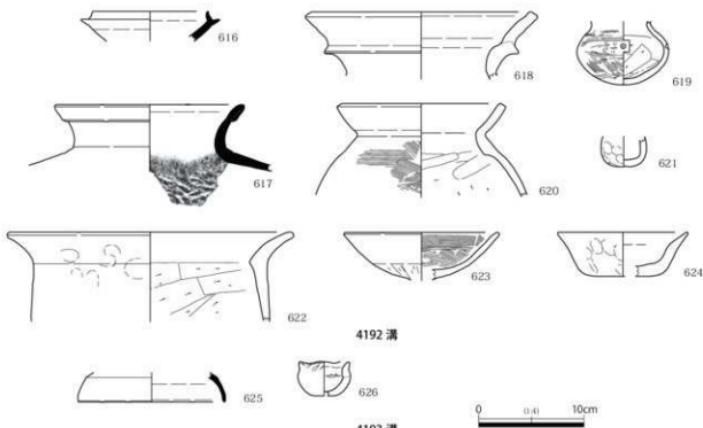
616はTK217併行期の須恵器坏で、7世紀前半に比定される。617は横瓶の口縁部と考える。口縁端部は折り返して肥厚させる。

618は土師器壺、619は小型丸底壺、620は甕、621は手づくね土器、623は浅い椀状の高坏で、いずれも古墳時代中期のものと考える。622は甕、624は手づくねの鉢であろうか。

第VI章 3区・4区の調査成果



第193図 4191溝・4221溝・4194溝出土土器



第194図 4192溝・4193溝出土土器



第195図 4286流路・4290溝出土土器

4193溝出土土器（第194図、PL.132）

625はTK43併行期の須恵器蓋で、古墳時代後期のものである。626は手づくねの壺である。

4286流路・4290溝出土土器（第195図）

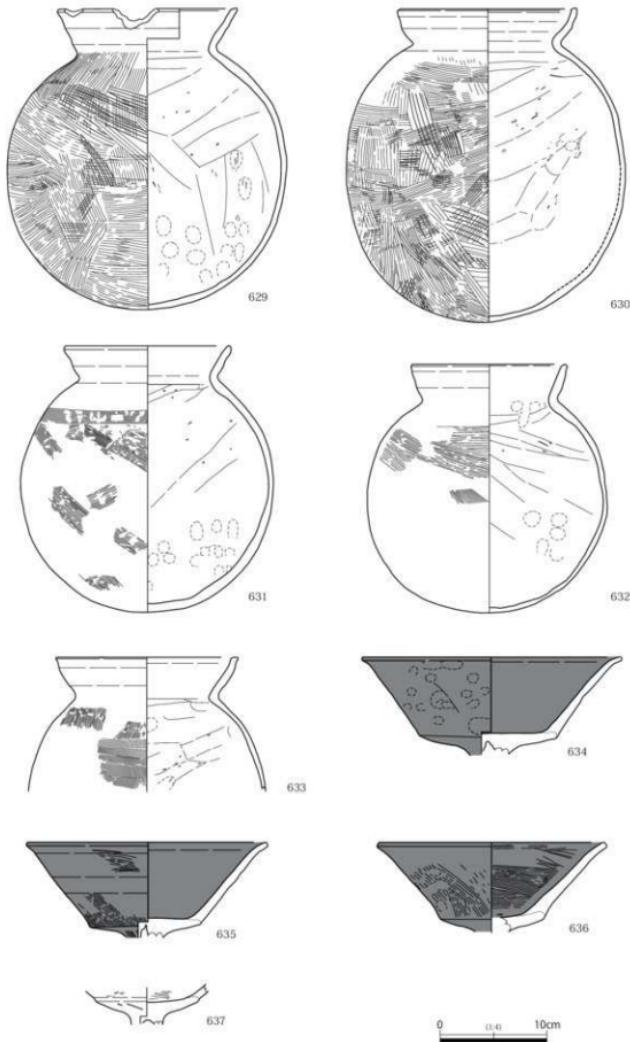
4286流路から出土した627は7世紀末～8世紀前半の長頸壺、4290流路から出土した628は土師壺で外反して大きく外方へ引き出された口縁をもつ。

3473流路・3437流路出土土器（第196・197図、PL.134）

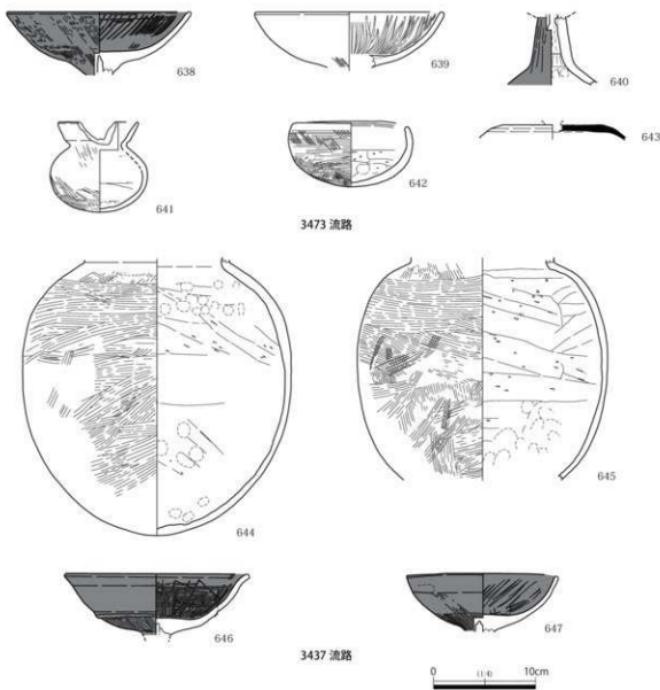
629～643は3473流路出土土器である。

629～633は土師器壺、634～第197図640は高坏、641は小型丸底壺、642は椀である。壺はすべて胸部球形を呈し、外面は粗いハケ調整を施す。口縁部は端部に面をもつ629・633、端部内側にアクセントをもつ630、端部を丸く収める631・632がある。高坏634～636は深い有段高坏で、口縁部がわずかに外方へ屈曲する。638は浅い皿状の坏部をもつ。小型丸底壺は扁球形の体部をもつ。椀642の体部は口縁にかけて内湾する。これらの土器は概ね古墳時代中期後半に比定される特徴を持っている。

3473流路出土土器は口縁部を内側から打ち欠いたもの（629・641）があり、高坏も坏部が完形でありながら接合可能な脚部がないなど、祭祀行為後に廃棄された可能性が考えられる。



第196図 3473流路出土土器



第197図 3473流路・3437流路出土土器

なお、643は須恵器蓋で8世紀のものと考えられるが、須恵器で出土したのは本資料のみであり、埋土上層の埋め戻し土に掘り込まれた別遺構からの混入品であろう。

644～647は3437流路出土土器である。

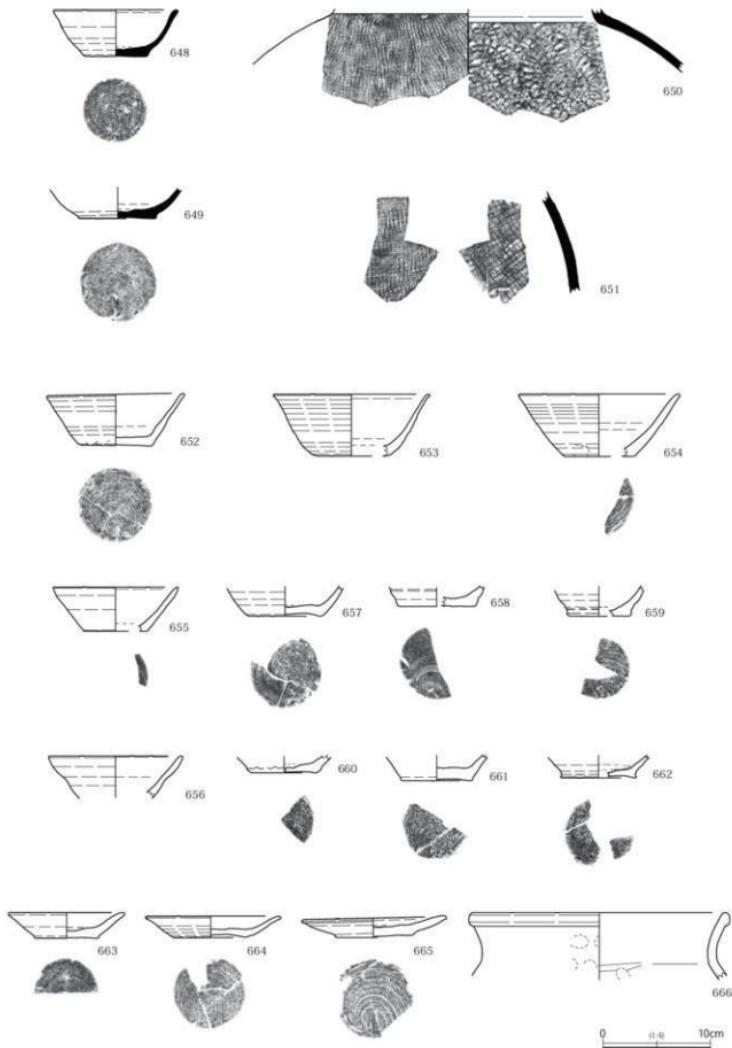
644・645は壺で、口縁部を欠くがやや長胴を指向する球形の体部で、外面調整は粗い横または斜め方向のハケ、内面調整では肩部に指頭圧痕が見られる。646・647は高壺で、646は径の小さな皿状壺部をもつもの、647は椀状の壺部をもつものである。これらの土器は古墳時代中期後半に比定されるよう。

3005集石・3164土坑出土土器 (第198図、PL.135)

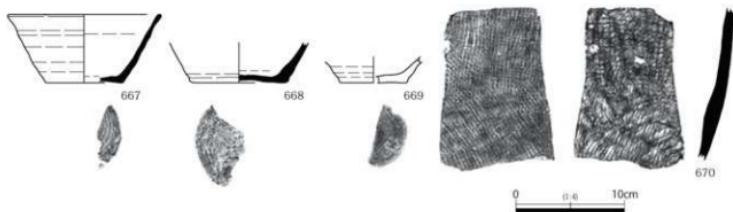
調査過程で集石の隙間及び付近で出土したものを3005集石に伴うものとして取り上げたが、その後、下位に3164土坑が存在することが明らかとなり、本来的には後者に伴うものと考える。

648・649は須恵器壺で、内湾気味に立ち上がる体部をもつ。10世紀前半のものと考える。650・651は壺体部片で、内面に格子状の当具痕が認められる。

第VI章 3区・4区の調査成果



第198図 3005集石・3164土坑出土土器



第199図 3009溝出土土器

652～662は土師器坏で、底部は回転糸切り、体部は回転ナデで仕上げられる。底径に対して口径が大きく、口縁に向かい大きく外傾して直線的に立ち上がる体部をもつ。663～665は皿で、底径と口径の差が小さい小型品663、口縁部が外反する664、口縁に向けて大きく開く665がある。これらの土師器坏・皿類は概ね10世紀前半に比定されると考える。666は甕で、外反する口縁の端部は肥厚して丸く取める。

3009 溝出土土器（第199図、PL.136）

667・668は須恵器坏で、大きく外傾して直線的に立ち上がる体部をもつ。669は土師器坏で、底部は回転糸切り、体部は回転ナデである。これらは10世紀前半に比定される。670は甕体部で、内面に格子状の当具痕が認められる。

3443 土坑出土土器（第200図、PL.136）

671は小型丸底壺、672は高坏で古墳時代前期末葉から中期前葉頃のものか。

3493 土坑出土土器（第200図、PL.136）

673は長頸壺、674は高坏で、8世紀前半のものであろう。

4316 土坑出土土器（第201図）

675・676とも土師器甕の口縁部で、675は口縁端部内面を肥厚させてアクセントをつける。口縁内面にはナデ調整前のハケが見られる。古墳時代中期後半頃のものと考える。

4317 井戸出土土器（第201図、PL.136）

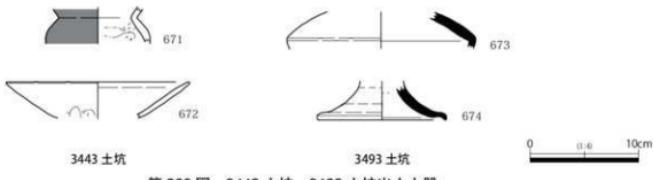
677は埋土下層で出土した完形の土師器甕である。体部は長胴形だが最大径を体部3分の1やや下方にもち球形に近くなっている。くの字を呈す口縁部の端部は内側につまみ出す。古墳時代前期後葉～末葉に比定される。また、677は口縁端部及び体部を1カ所ずつ外側から打ち欠いており、井戸祭祀に伴い投棄されたことが窺える。

678は高坏脚で、裾部で大きく外反する。甕677と同じ頃のものであろう。甕679は4192溝と切り合う埋土上部へ混入したものと考える。

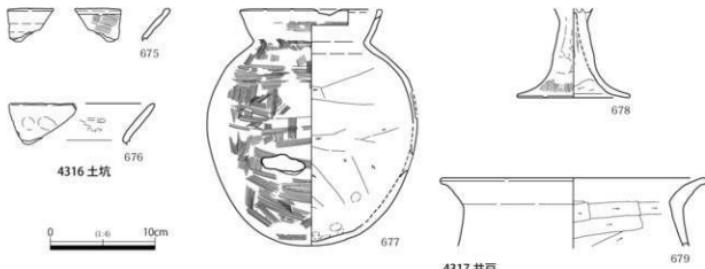
3区ピット出土土器（第202・203図、PL.137）

3区のピット内から出土した土器のうち、時期が把握できる主なものについて図化、掲載した。

7世紀末～9世紀後半に比定できる資料が多い。3117ピットの686、3232ピットの704といった古墳時代中期の甕は、3437流路及び3473流路埋土からの混入である。焼塙土器は浅い椀状の体部をもつもので、口縁端部に工具ナデによって面をもつ。内面に布目痕を確認できるものが多い。3472ピッ



第200図 3443土坑、3493土坑出土土器



第201図 4316土坑・4317井戸出土土器

トから出土した須恵器壺体部片は内面に車輪状の当具痕が認められる。

4区ピット出土土器（第204図）

4区のピット内から出土した土器のうち、時期が把握できる主なものについて図化、掲載した。すべて第4層下面検出ピットである。

4277ピットの土師器壺716は底部外面ケズリ後ナデ調整で、外面にわずかに赤彩痕が残る。8世紀前半のものである。須恵器壺717も同時期のものであろう。4287ピットの土師器壺718は正位でピット内に埋置されていた。古墳時代中期頃のものか。

3区第4層出土土器（第205図、PL.138）

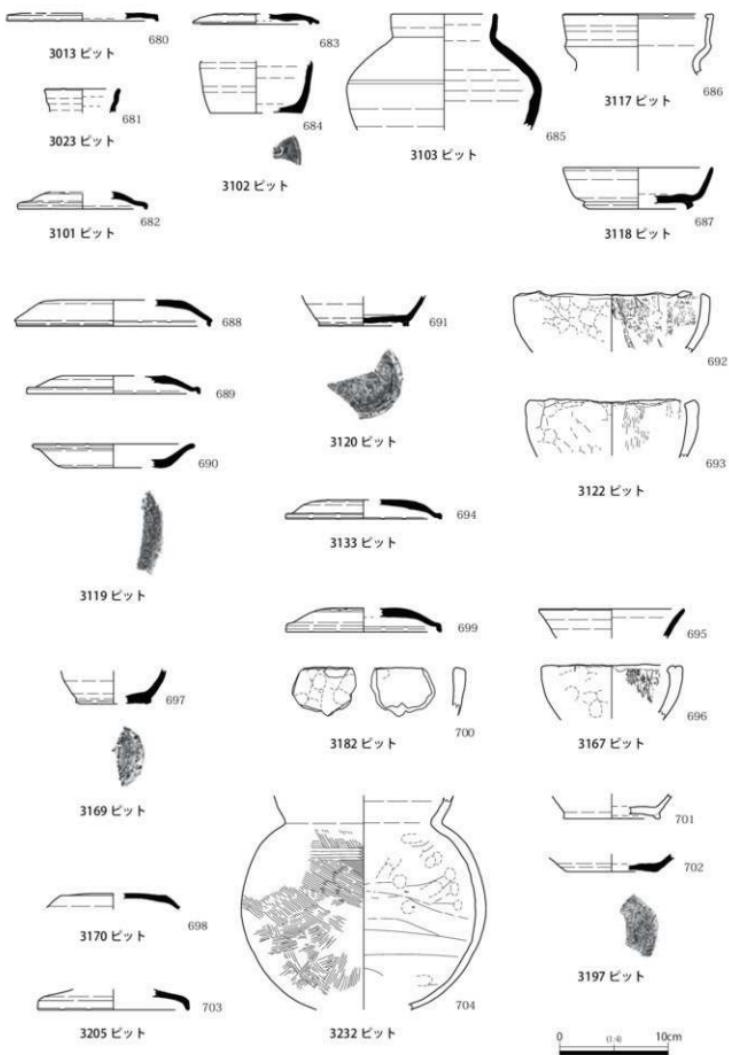
3区で確認した3006溝南肩を除く第4層（整地土）では、7世紀末～10世紀の土器が出土している。第4層を母材とする作土層・第2層との層界は不明瞭で、第2層に帰属する遺物を一部含んでいる可能性はあるが、整地は細かな単位が不明ながら長期間に渡って繰り返し行われたと推測される。

須恵器では壺719・720、高台付壺721、皿722、蓋723、甕724～729がある。7世紀末から10世紀初めまでのものが含まれている。壺体部片の内面には車輪状、格子状の当具痕が認められる。

土師器では壺730、高壺731、壺732・733、高台付壺734・735、皿736・737がある。壺と高壺は古墳時代中期頃のものか。壺はどちらも底部に回転糸切りがみられ9世紀のものと考えられるが、733は形態的に10世紀にまで下る可能性がある。高台付壺、皿は10世紀に比定されよう。

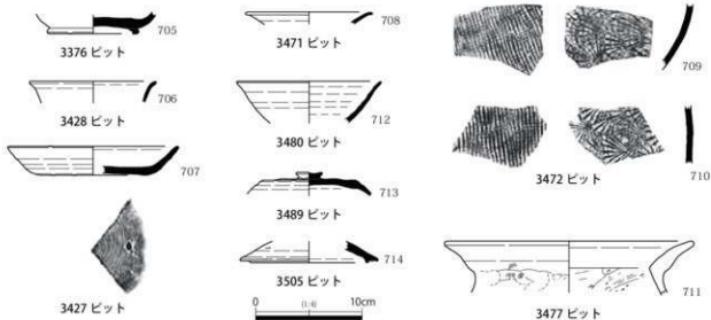
738は緑釉陶器の皿で、円盤状高台を有し、軟陶でやや色調の明るい緑色の釉薬がかかることで、9世紀前半のものと考える。

739は焼塙土器で、内面は型押し成形後未調整である。

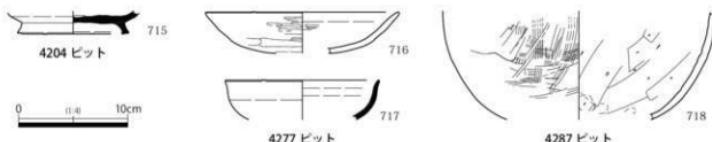


第202図 3区ピット(個別)出土土器(1)

第VI章 3区・4区の調査成果



第203図 3区ピット（個別）出土土器（2）



第204図 4区第4層下面ピット出土土器

3区第5層出土土器（第206図、PL.138）

第5層から出土した土器は少量である。土師器壺は大きく開く退化した複合口縁をもつ740とくの字状口縁の端部を内側につまみ出す741があり、古墳時代中期前半のものと考えられる。

4区第4-3層出土土器（第207図、PL.139）

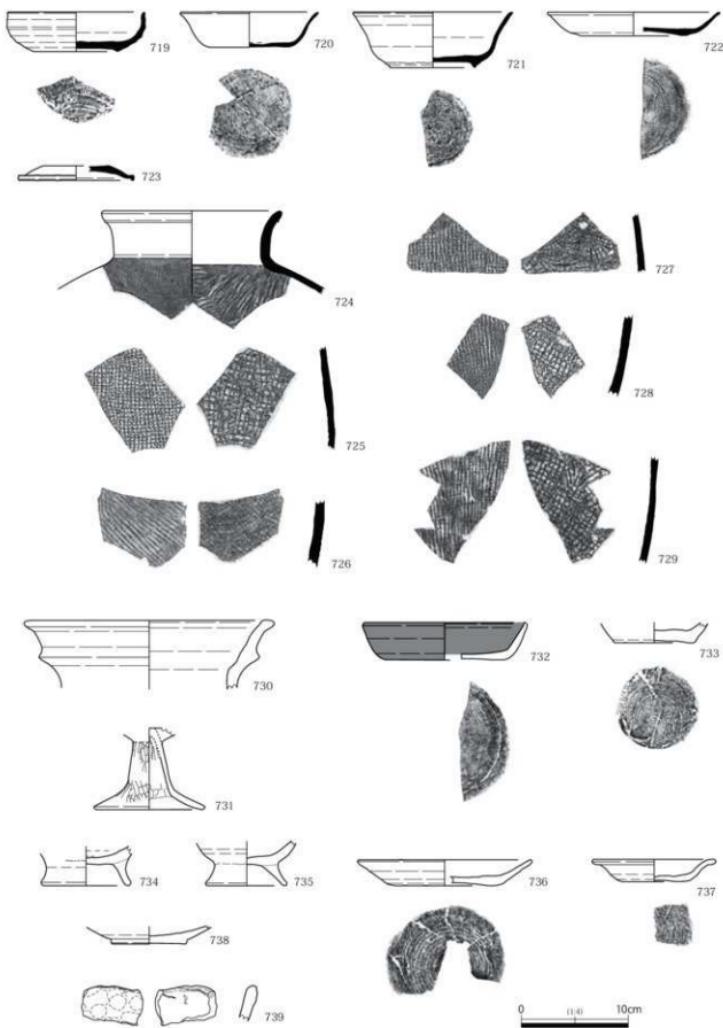
第4-3層には古墳時代前期末～中期前半頃の土師器が多く見られるが、7世紀後半～8世紀の須恵器を含む。須恵器は出雲地域に系譜をもつ内湾底部の壺744のほか、ハの字状で高い高台をもち体部が深い高台付壺、体部楕形の高台付壺などで構成される。これらは岡田編年出雲Ⅲ期の特徴を有する一群で、出雲Ⅳ期まで下ると考えられるものが含まれていない。よって、第4-3層の下限は8世紀前葉と考える。

土師器では古墳時代前期末～中期前半頃の小型丸底壺751、退化した複合口縁の壺752・753、高壺759～761があり、第4-3層下面で検出した掘立柱建物の時期とも合致する。

762は壺の把手である。

4区第4-4層出土土器（第208図、PL.139・140）

第4-4層では土師器の出土量が多い。須恵器は少量で、7世紀末～8世紀前葉の壺763、高台付壺764・765や壺766～768がある。769は弥生時代後期後葉の壺底部で、狹小な平底を呈す。土師器は古墳時代中期頃の壺770～773、くの字に大きく外反して立ち上がる口縁をもつ壺774～779がある。780は壺の頸部破片と考えられ、内面は黒漆と見られる付着物が残る。



第205図 3区第4層出土土器



第206図 3区第5層出土土器

4区第4-2層出土土器 (第209図、PL.140・141)

第4-2層で出土した土器は7世紀末～8世紀前半の須恵器、土師器が主体となる。

須恵器蓋781はTK217併行期、7世紀前半のものである。蓋782は輪状つまみ内側に漆記号「×」、高台付坏784・785は底部外面にヘラ記号が認められる。高台付坏786・787は平底から外傾して直線的に立ち上がる浅い体部をもつ。坏788も同様の体部形態である。789は高坏、790は椀であろうか。

土師器坏791～793はいずれも底部ナデ調整で仕上げる。791は内面に放射状の暗い、792は内面見込部に螺旋状の暗い痕跡が認められる。8世紀前半に収まるものであろう。

4区第4-1層出土土器 (第210図、PL.141・142)

第4-1層は、第4-2層上部が攪拌された作土部分または第6層上に堆積した土壤層であるため、出土土器は基本的に7世紀後葉～8世紀前半のものを主体とするが、後世の耕作時に混入したと見られる9世紀後半頃の土器も含まれる。

796～800は須恵器蓋で、796は体部内面にヘラ記号「×」、798は天井部外面に漆記号、799は体部外面に漆記号「×」が認められる。801はMT15併行期、6世紀前半の坏である。802～807は高台付坏である。803は体部外面に○印のスタンプ文が施されており、804には底部に静止糸切り痕とヘラ記号「×」が認められる。808は小片だが坏の口縁部と考えられ、外面にヘラ記号「×」が入る。810は鉢、811は高坏か。813は壺で、鳥越山2号窯出土資料に近似し、8世紀後半頃のものか。

814は土師器坏だが、内外面とも黒色塗彩される。形態的に9世紀後半のものか。816は底部回転糸切り、体部回転ナデで、9世紀後半以降のものであろう。

特筆すべきものとして、軒丸瓦821がある。当遺跡で出土した軒丸瓦は本資料1点のみである。単弁十二弁蓮華文の軒丸瓦で、花弁は肉薄で細長く、中肉の子葉を置く。間弁は三角形もしくは楔形を呈し、中房まで達していない。細い圈線を巡らせた中房には、1+6の蓮子を配す。周縁はやや高い素文の直立縁である。この瓦は鳥取市吉岡大海廢寺出土軒丸瓦、同鹿野町寺内廢寺軒丸瓦I C類と同范、同氣高町上原遺跡及び上原南遺跡出土軒丸瓦I A型式と同系〔石毛2003、岸本2003〕と考えられる。同范と考えられる吉岡大海廢寺資料の瓦当裏面調整が格子目叩きであるのに対し、当資料はナデ調整であるため寺内廢寺軒丸瓦I C類と共通する。7世紀末～8世紀初頭のものである。

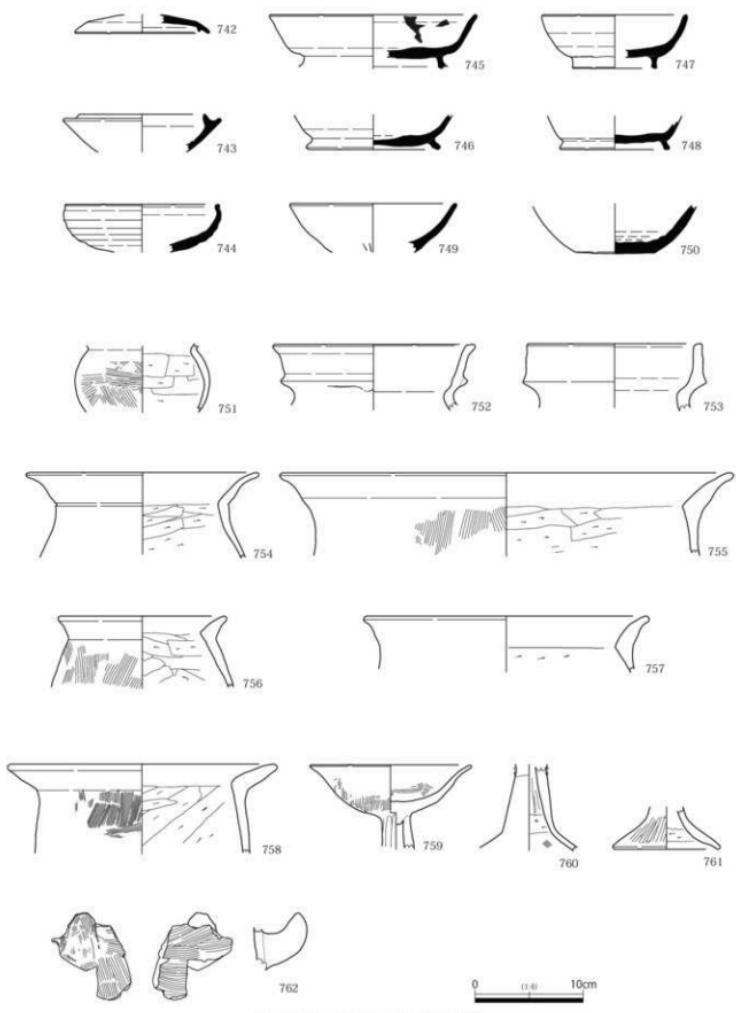
4区第4層出土土器 (第211・212図、PL.142～145)

4区第4層は主にY=16.290ライン以東及び2D-8aグリッドに広がる層で、概ね7世紀末～8世紀前半の土器を含む。

822は弥生時代後期後葉の壺で、口縁内外面ともヨコナデで仕上げる。

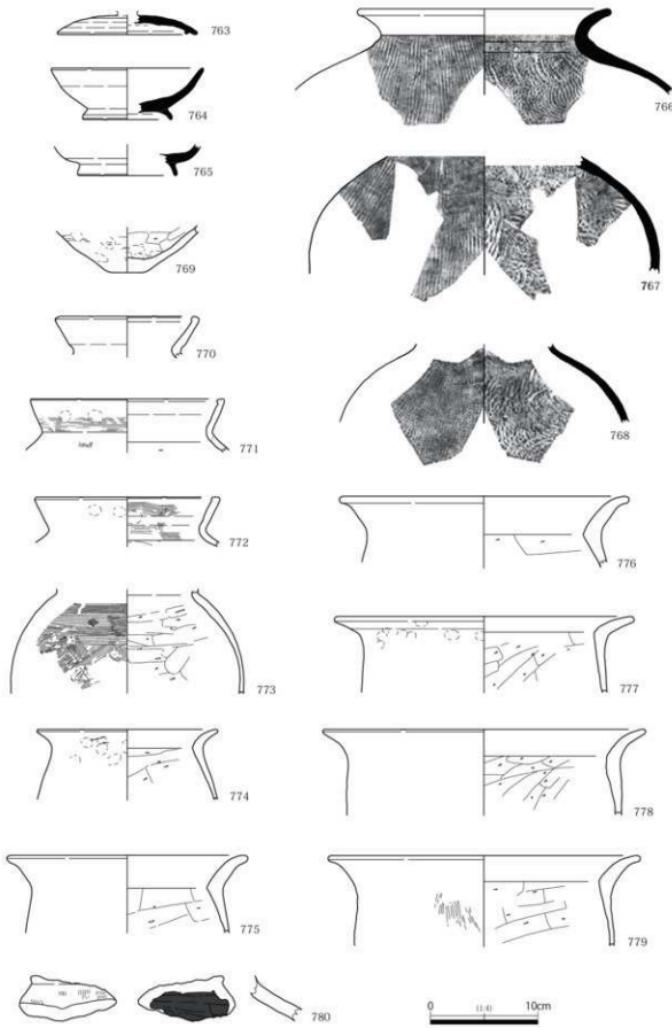
823～828は須恵器蓋で、7世紀後半～8世紀前半のものが見られる。827は天井部内面にヘラ記号「×」、828は体部外面にヘラ記号「×」が認められる。829～832は高台付坏で、829は底部外面に静止糸切り痕と○印のスタンプ文が認められる。832も底部外面にヘラ記号と高台に整形痕が認め

第VI章 3区・4区の調査成果

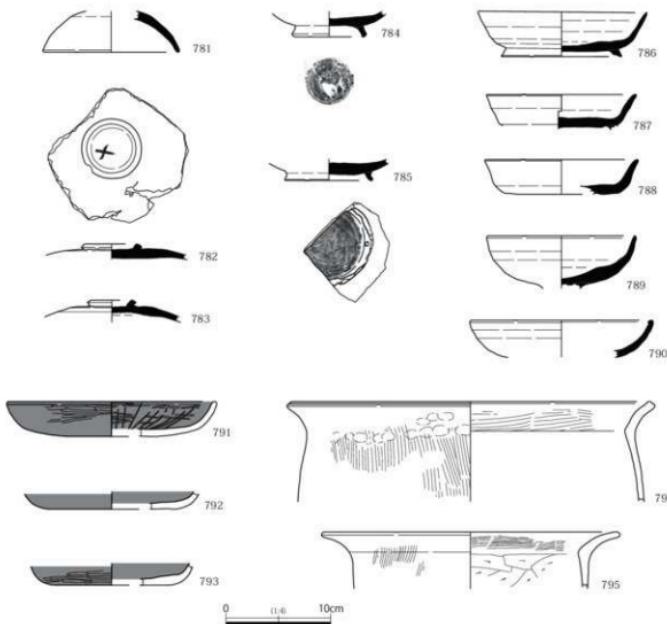


第207図 4区第4-3層出土土器

第VI章 3区・4区の調査成果



第208図 4区第4-4層出土土器



第209図 4区第4-2層出土土器

られる。坏833の底部外面にもヘラ記号「×」がある。

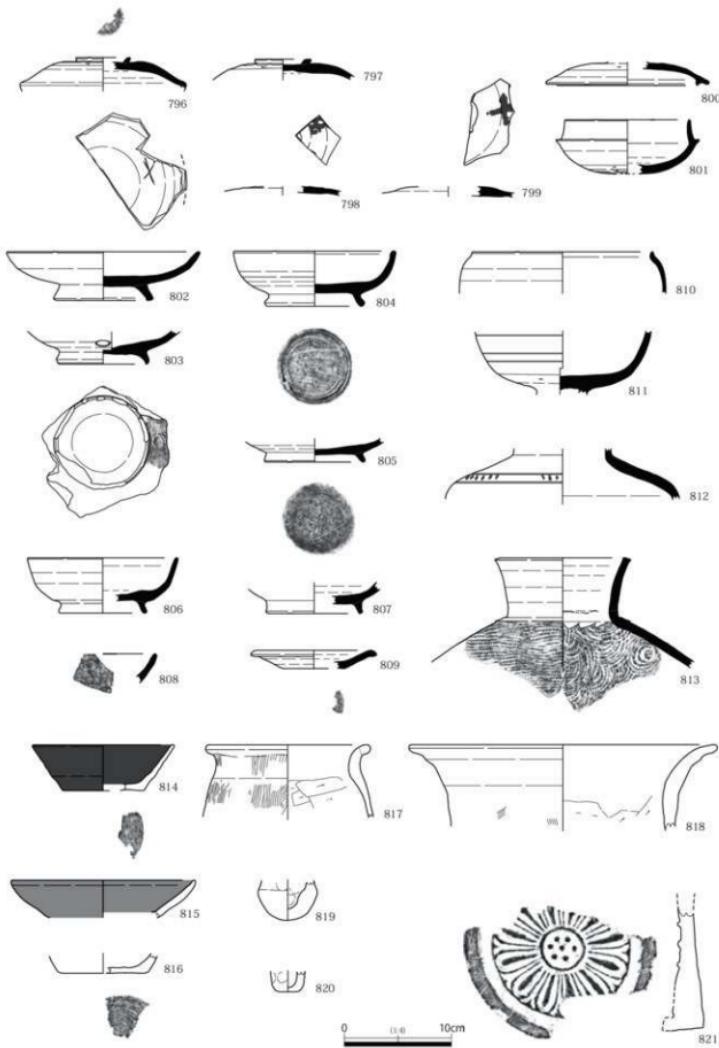
834は高台が付く寸胴の体部から口縁が外反して立ち上がる器形をしており、壺であろうか。高坏には浅い楕形の坏をもつ835と平底から外傾して直線的に立ち上がる坏をもつ836の2者が見られる。838は瓶である。

839～843は土師器壺で、くの字状の口縁端部を内側につまみ出す839は古墳時代中期前半のものである。844は胴部片で、外面にヘラ記号が認められる。846は瓶かと考えられたが、内外面に赤彩痕があり丁寧なナデで仕上げられている。847は内外面赤彩される坏、848は皿で、底部ケズリ後にナデ調整されており8世紀前半のものである。849は口縁端部を外方へわずかにつまみ出しており、9世紀頃のものか。退化してX字形となった鼓形器台850・851は接合しないが法量及び調整、胎土から見て同一個体と考えられ、古墳時代中期前半に比定される。

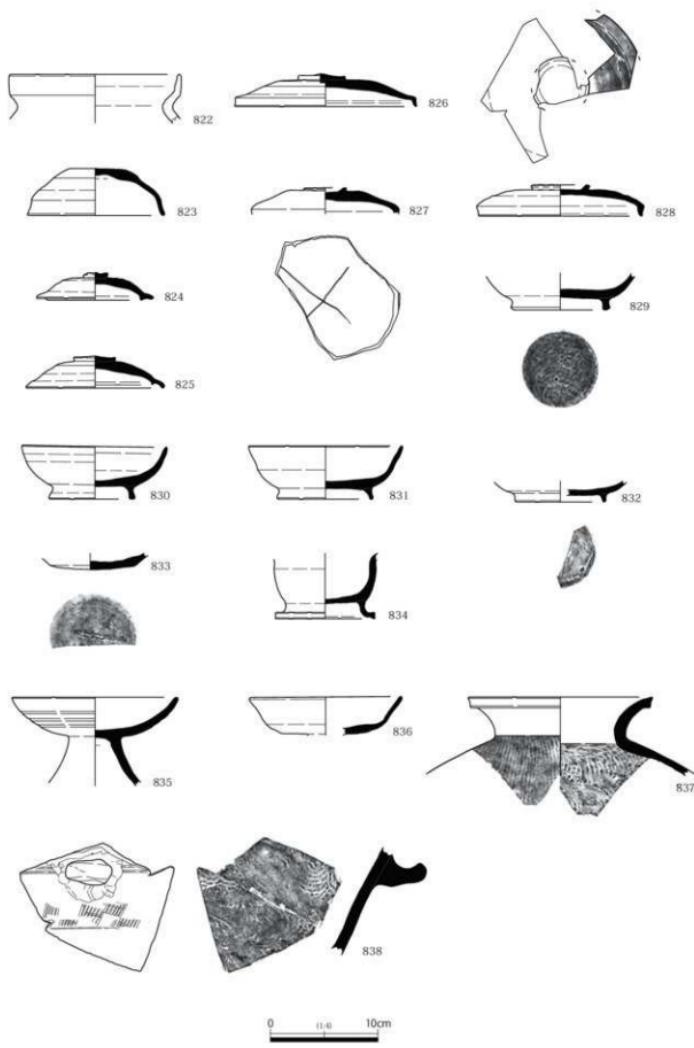
852は瓶、853は焼塙土器、854・855は丸瓦である。

3区第3層出土土器（第213図、PL.145）

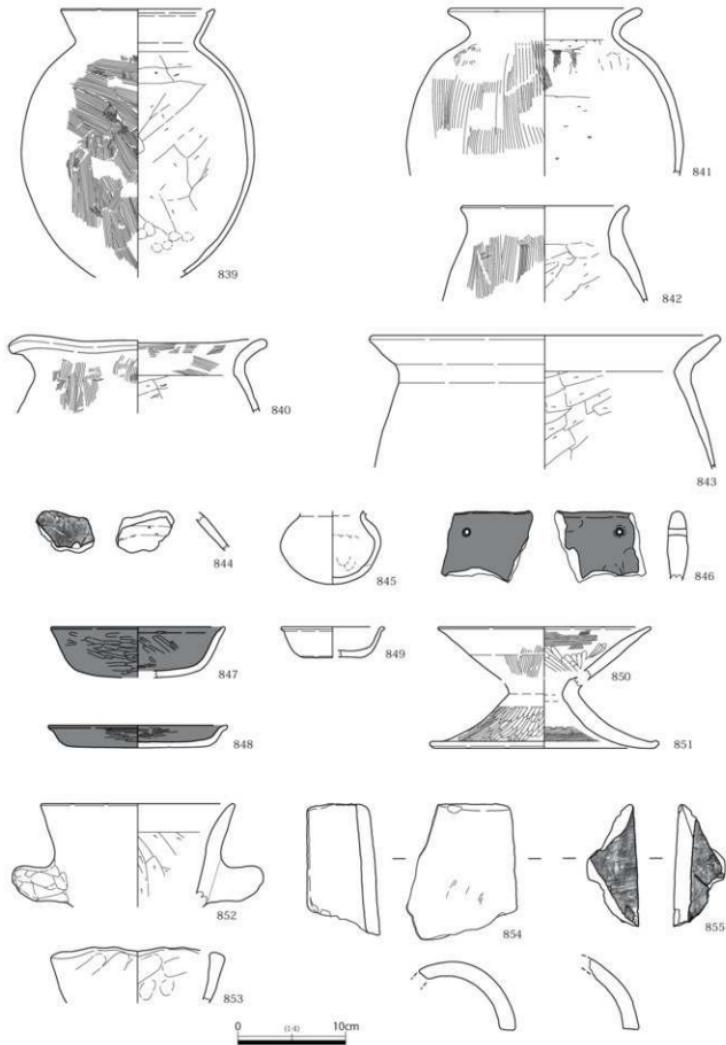
856は深底の須恵器坏で、10世紀前半のものである。858は口径41cm、残存高4.7cmの小型の平瓶で、8世紀後半頃のものか。壺860・861は内面に格子状の当具痕が残る。



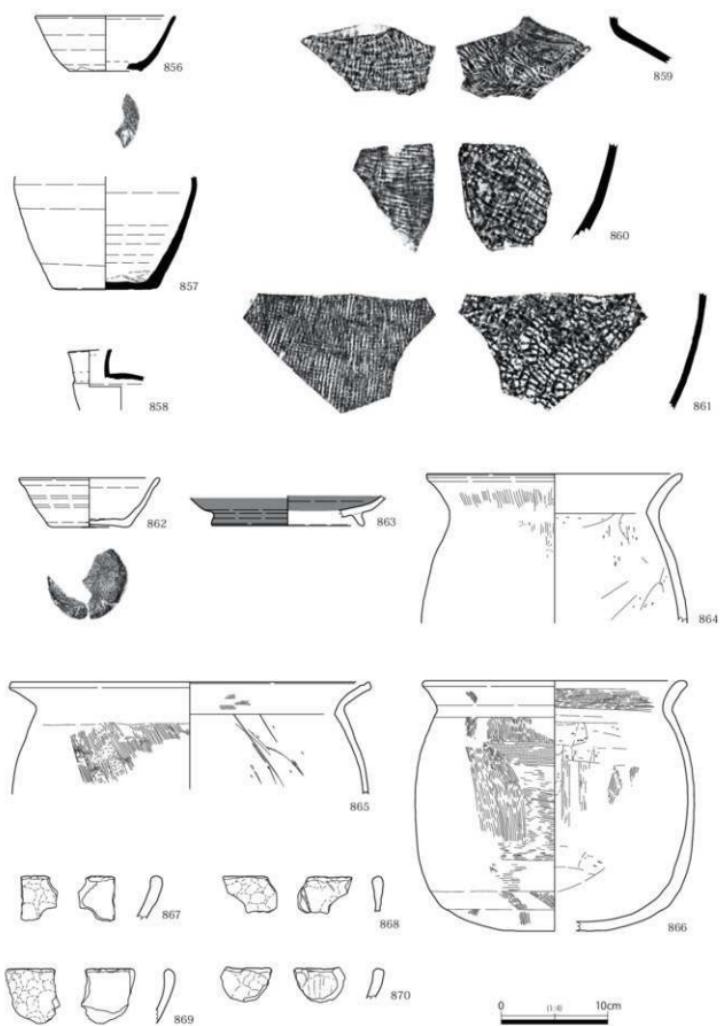
第210図 4区第4-1層出土土器



第211図 4区第4層出土土器(1)



第212図 4区第4層出土土器 (2)



第213図 3区第3層出土土器

第VI章 3区・4区の調査成果

土師器壺862は底部回転糸切り、体部回転ナデで10世紀前半、高台の付く皿863は9世紀のものであろう。壺866は寸胴の体部をもち鍋に近い形態となる。平底だが体部との境界は不明瞭で丸みをおびる。

焼塙土器867～870は口縁部を肥厚させるもので、内面はナデもしくは型押し未調整である。

4区第3層出土土器（第214・215図、PL.146・147）

871は風化が顕著だが弥生時代終末期の壺である。

872～880は7世紀末～8世紀前半の須恵器蓋、高台付坏で、ヘラ記号が体部、底部に入るものが目立つ。873・876には○印のスタンプが認められる。881は8世紀末～9世紀前半の高台付坏で、体部にヘラ記号とみられる線刻が確認できる。879は底部に漆記号が見られる。887は壺の蓋である。

土師器壺は回転台成形によるもの（890・891・892・893）が主体となる。10世紀に比定されよう。894は底部へラケズリで体部内外面とも細かいヘラミガキで仕上げる。8世紀前半のものである。皿895は底部回転糸切り後ナデ調整して高台を貼り付けている。9世紀のものと考える。898は盤で、体部下方に穿孔しており、外面上部には煤が付着している。899は内黒の黒色土器椀で、底部に断面三角形の低い高台を貼り付け、10世紀に比定される。

900は玉縁口縁をもつ白磁の碗で、灰黄色の釉がかかる。白磁碗IV類〔横田・森田1978〕に該当し、11世紀後半～12世紀前半のものである。901は丸瓦で、凹面の調整はハケか。

焼塙土器は内湾する口縁部を肥厚させる厚手の902、口縁端部を内側に大きく肥厚させる903、全体的に薄手で口縁端部に面をもつ904～907、口縁端部が内湾し先細りとなる908などバリエーションが見られる。902は焼塙時の被熱により器面が荒れています。

3区第2層出土土器（第216～218図、PL.147～149・151）

3区第2層では多量の土器が出土している。ただ、第2層が遺存する範囲は第4層が広がる範囲ともほぼ合致し、本章第1節でも述べたとおり第2層耕作時に第4層に帰属する遺物を巻き上げている可能性が高い。そのため、第2層自体は中世の作土層と考えられるが古代の遺物を多量に含む。

第216・217図は第2-2層で出土した土器である。須恵器蓋911の天井部には静止糸切り痕とヘラ記号、912には天井部内面にヘラ記号が認められる。高台付坏913見込部、914底部外面にもヘラ記号が入れられている。高台付坏は8世紀後半、9世紀後半のものが見られるが、坏は922～925など厚手で深底のものが主体で10世紀前半に比定される。皿は底部から体部が大きく開き、9世紀後半～10世紀前半のものと考えられる。931は壺肩部の把手、933は三角形把手が付く壺で土師器に見られるような薬壺形となるものか。932は外面にカキ目が入り鉢と考えられるが、横断面形は梢円形を呈す。壺935は外面に格子状のタタキ痕が見られる。

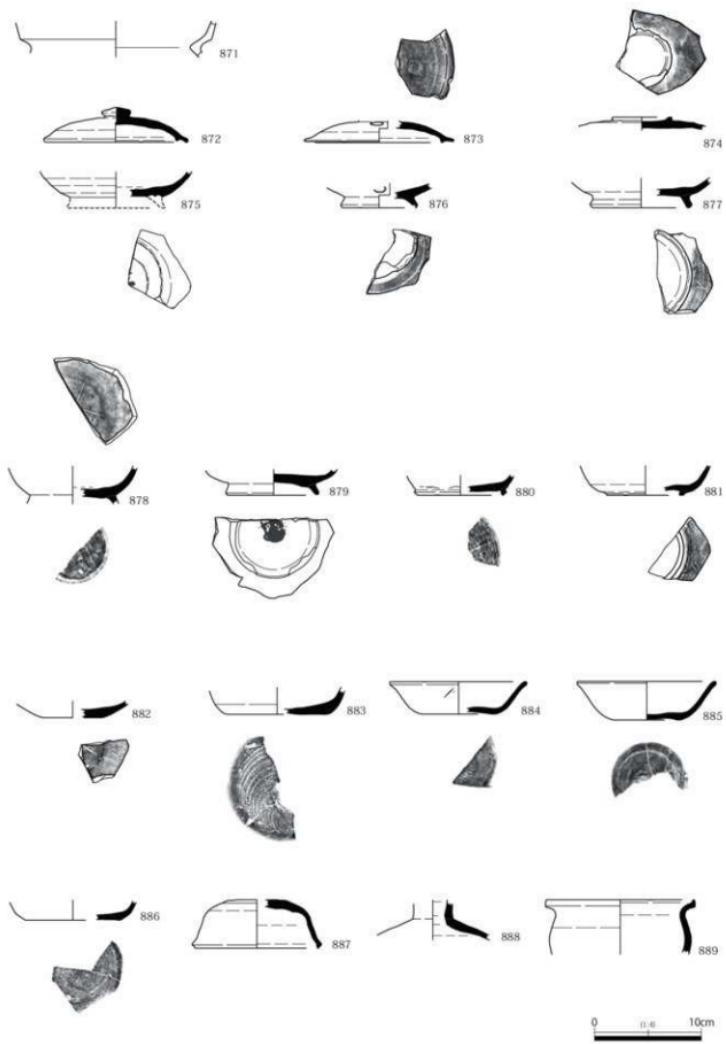
土師器壺・高台付坏・皿は回転台成形されたもので、概ね10世紀前半に比定されるだろう。948は内黒の黒色土器椀である。954は手づくね土器で鉢となろうか。

958は灰釉陶器の皿で、内外面とも施釉し、外面には回転ヘラケズリが確認できる。9世紀頃のものか。959は綠釉陶器の皿で、輪状高台をもち高台部は露胎となる。畿内産で9世紀後半のものである。

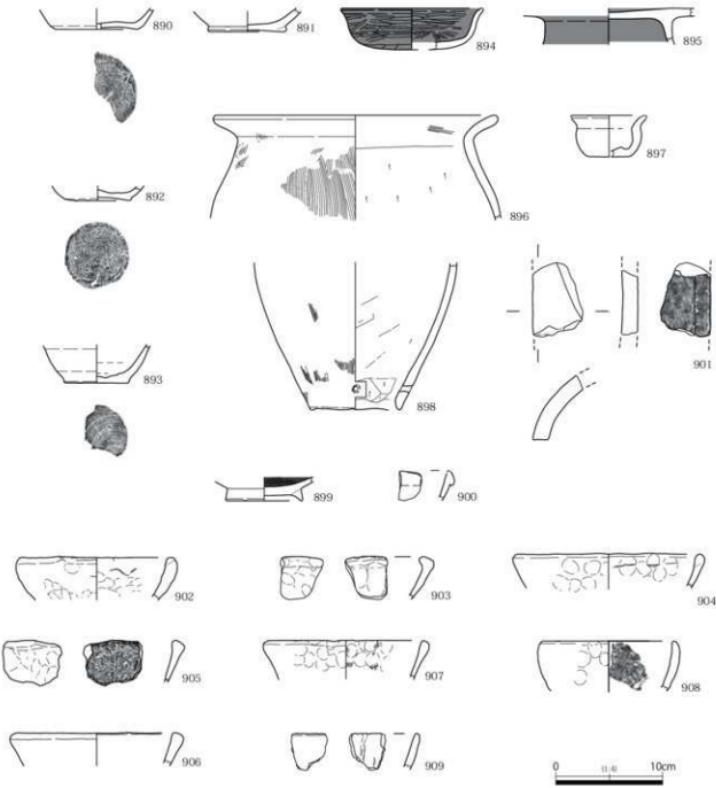
第218図は第2-1層で出土した土器である。須恵器蓋960、つまみ出したような細く低い高台をもつ坏961はヘラ記号が認められる。土師器壺は回転台成形され10世紀前半のものである。

4区第2層・第1層・客土出土土器（第219図、PL.148・150）

須恵器高台付坏964は底部外面に○印のスタンプ文が施される。966は焼成から見て瓦質土器の椀



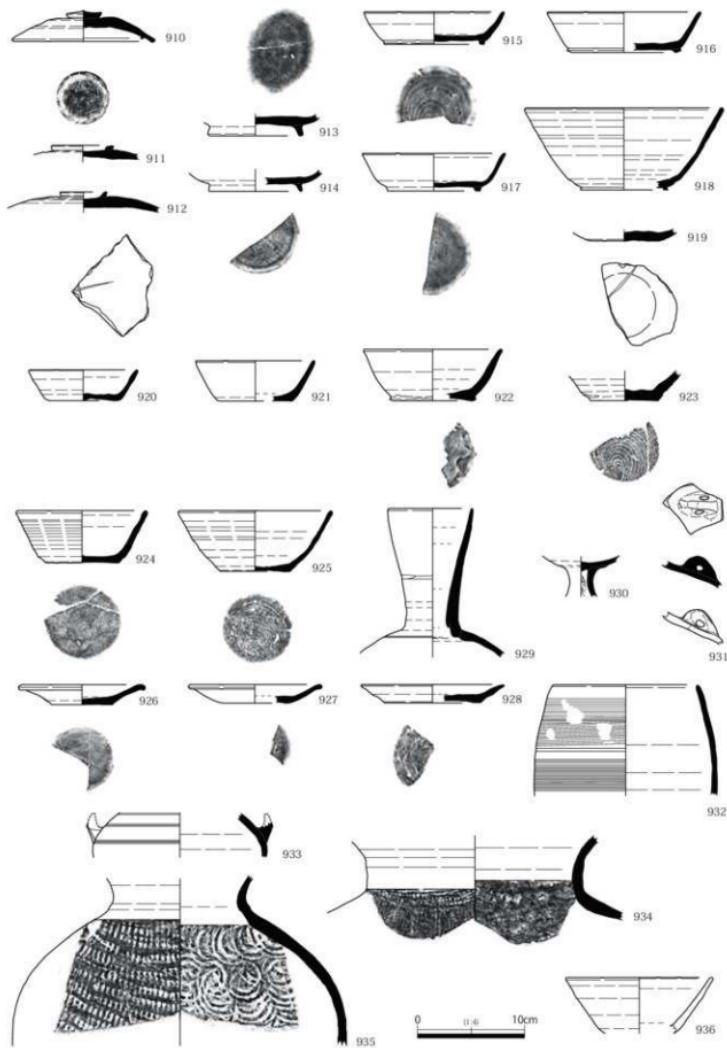
第214図 4区第3層出土土器(1)



第215図 4区第3層出土土器 (2)

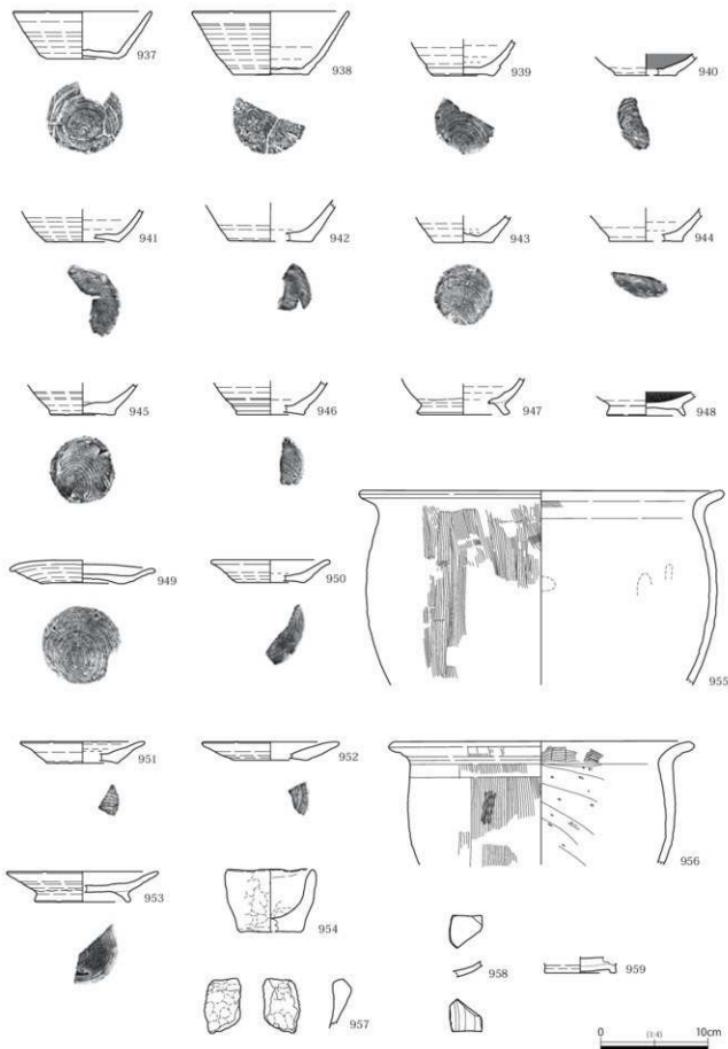
または鉢か。967・970は瓦質土器の釜、968・969は鍋で13～14世紀のものと考える〔八峰1998〕。965は土師器の坏で、底部に接合痕が認められる。内外面ともナデ調整である。

971～975は龍泉窯系青磁碗である。971は鎬運弁文碗で、口縁に平行線が複数認められるため雷文帶碗の可能性もある。15世紀代のものか。972は細い線描きの運弁文碗で、15世紀後葉～16世紀前半のものであろう。973は高台疊付の釉を施釉後搔きとっている。974は小碗の底部で、全面施釉され、施釉部と露胎部の境が橙色に発色している。975は肉厚な底部で全面施釉した後に高台内の釉を搔きとっている。いずれも14世紀代のものと考える。976は龍泉窯系青磁皿I類で、見込みに放射状の獅子の文様を描く。12世紀後半に比定される。977は古瀬戸の天目茶碗で、15世紀後半頃のも

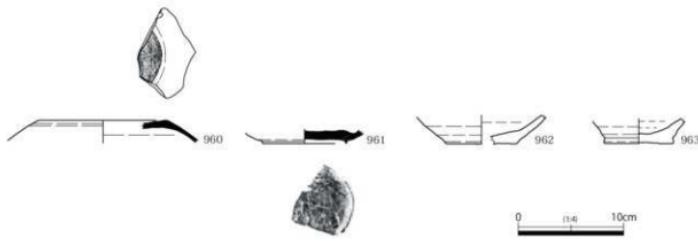


第216図 3区第2層出土土器(1)

第VI章 3区・4区の調査成果



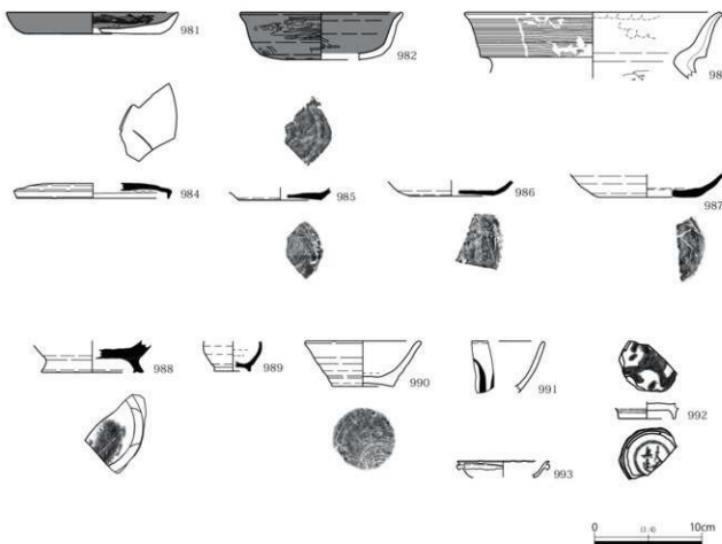
第217図 3区第2層出土土器 (2)



第218図 3区第2層出土土器(3)



第219図 4区第2層・第1層・客土出土土器



第220図 3区断割・客土等出土土器

のか。978は染付碗、979は唐津の皿、980は備前の摺鉢である。

3区断割・客土等出土土器 (第220図、PL.150)

981は土器盤皿、982は壺で、底部調整は不明ながら細かいミガキで丁寧に仕上げられており、8世紀のものと考える。983は弥生時代後期後葉の甕で、口縁部に櫛状工具による多条平行沈線文を施す。須恵器の蓋、壺、高台付壺にはヘラ記号を有するものが見られる。

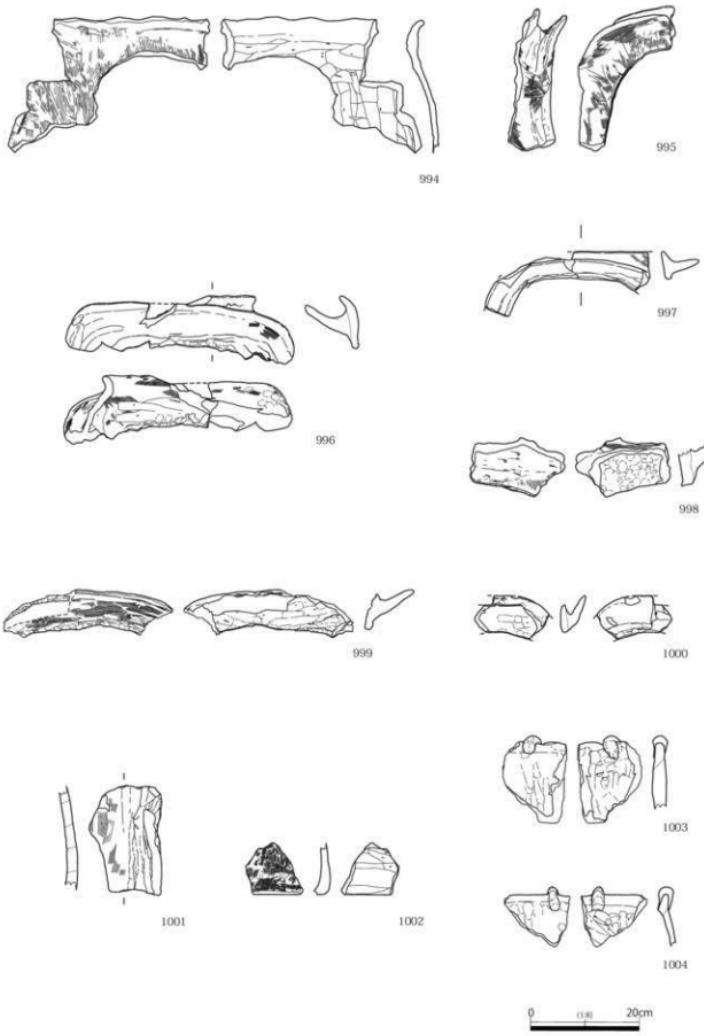
991は龍泉窯系青磁碗I類で、蓮弁文が施され14世紀後葉～15世紀前葉に比定される。992は染付碗で、見込に花文、高台内に「大明年造」の年款が描かれ16世紀後半のものである。993は雜釉陶器の皿で、重ね焼きによって別個体の口縁部片が溶着している。16世紀後葉のものと考えられる。

移動式甕 (第221図、PL.152)

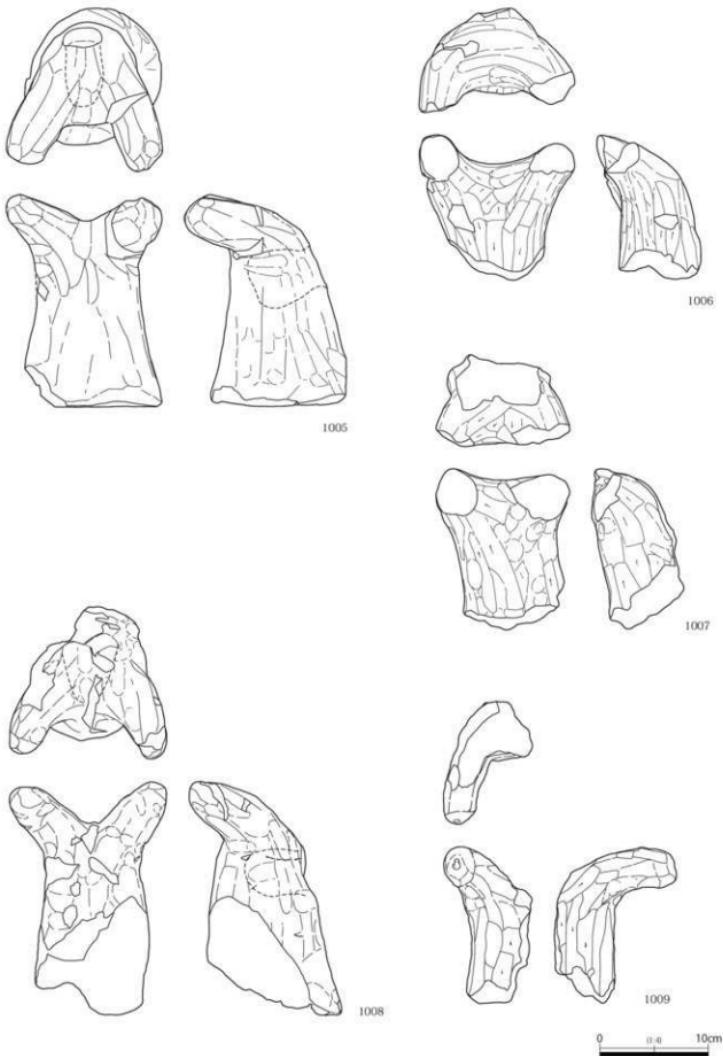
3区・4区では移動式甕と見られる破片が多量に出土したが、大部分が小片になっており、接合及び復元できた個体が少ない。部位が特定できる主要なものを図化、掲載した。

994は外反する掛け口をもち、体部は下方へやや張り出す。995～1000は掛け口～底部分の破片で、底の角度が大きく上方へ反る995・1000、斜め上方を向く996・998・999、ほぼ水平方向へ張り出す997がある。1001は焚口左側の底部分の破片で、断面に観察される粘土紐の幅は2～25cmである。1002は体部の破片で、裾は内側へ肥厚する。

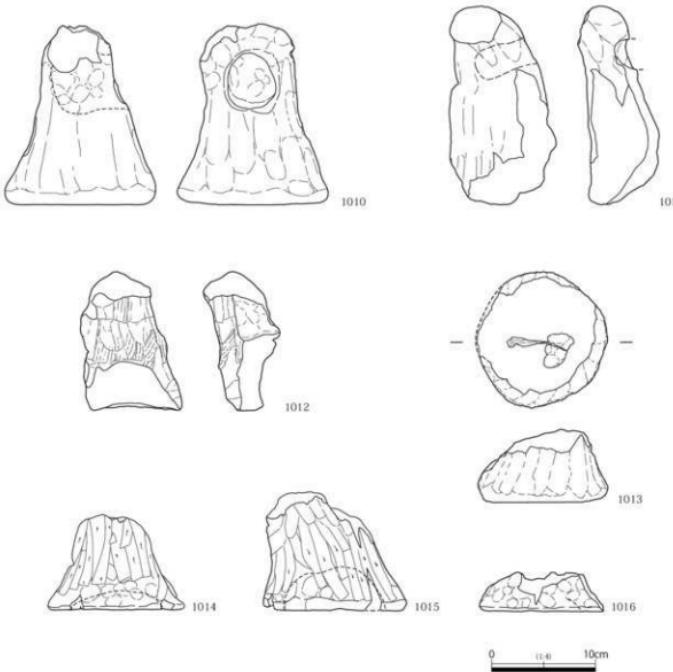
特筆されるのは1003と1004である。これらは鳥取市高住牛輪谷遺跡で出土した付属甕を有するタイプの移動式甕〔野口2014〕の破片で、付属甕の掛け口にあたる。その特徴として、コンロの五徳



第221図 移動式竈



第222図 土製支脚 (1)



第223図 土製支脚 (2)

を想起させるような粘土紐による爪が貼り付けられている。当遺跡と高住牛輪谷遺跡が位置する良田～高住地域は旧因幡国高草郡に属しており、同郡内で共通するタイプの特異な移動式竈が出土した点で興味深い。

土製支脚 (第222・223図、PL.153～155)

土製支脚も移動式竈と同様に小片となって多数出土しているが、厚みがあるため移動式竈よりも遺存状況は良い。接合、復元できた資料の中から、全体形状が推定できる主要なものを図化、掲載した。

形態が把握できるものはすべて、壺を受ける突起が二股状に延びるタイプである。さらに、胴部が壺に向かって太くなり、背面上部に径3～5cmの非貫通孔を有するもの（1005・1008・1010・1011・1012）と、側面方向にやや扁平な胴部をもち孔が無いものの（1006・1007・1009）の大きく二者に分けることができる。前者の非貫通孔の径は一定でなく、奥側で膨らみをもつ。突起の太さは後者がやや細く長い。また、外面調整も前者がナデ、ユビオサエ（指頭調整）を主とするのに対し、後者はヘラケズリを主体とし、違いが認められる。底部は平底（1005・1010・1013）と上げ底（1012・1014～

第VI章 3区・4区の調査成果

1016) がある。なお、1013は円柱形の粘土(塊)を折り曲げて円盤状の基底部を成形しており、その状況が破面から観察できた。

その他の土製品(第224・225図、PL.148・151・156・157)

土玉 計7点(1017~1023)出土し、概ね直径3~4cm、孔径7~8mmのものである。孔は基本的に両面穿孔される。

紡錘車 1024は断面隅丸長方形を呈し、古墳時代のものか。1025は断面形が膨らみをもつ台形を呈し、上面に格子状の文様が線刻されている。1026は断面形が台形を呈する小型品である。

不明土製品 1027は分銅形を呈す須恵質の土製品だが、底面は白色で柔らかな凹凸がある。別の製品の一部が剥落した可能性もある。重量36g。1028は頂部に面をもつ角錐状を呈し、上部に1カ所孔を穿つ。椎に似た形状である。重量30g。

土製勾玉 1029は最大長18cmの土製勾玉で、全体形はC字形を呈す。重量1g。

土錘 長さ2.4~3.4cm、幅1.4~1.8cmで側面形が隅丸長方形~棒形を呈すもの(1030~1040)、長さ4~5cm、幅1.4~2cmで長い棒形を呈すもの(1041~1044)、長さ3~4cm、幅1cm前後で細いもの(1045~1052)、幅2~2.4cmの円筒形を呈すもの(1053~1056)がある。大型品(1057~1059)も見られるが、1057・1058は法量・形態的に小鍛治に使用する轆羽口に似ており、性格は断定できない。

漆バレット・漆容器・漆付着土器(第226図、PL.156・157)

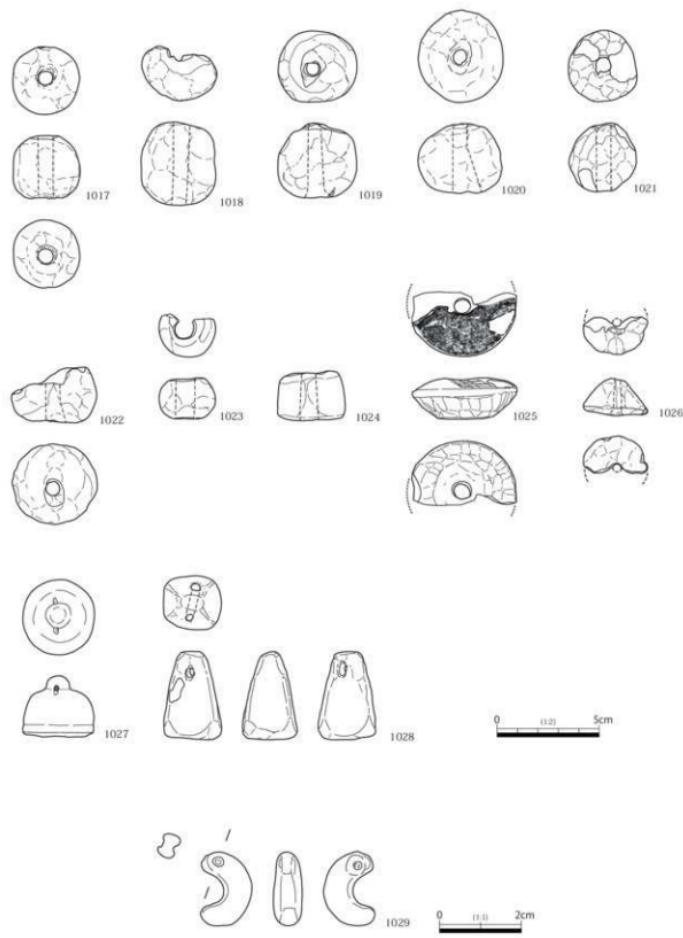
主に4区を中心として、漆が付着した土器が15点出土した。これらの中には漆が二次的に付着したと考えられるもの(1069~1072)も含まれるが、バレットや容器として使用されたものが存在する。漆付着土器の時期は諸特徴から見て概ね7世紀末~8世紀前半の範疇におさまる。

1060~1063は漆バレットと考えられる。1060は蓋内面をバレットとしており、ほぼ全面に漆が付着している。1061も同様だが、漆付着範囲は天井部に集中する。1062は壺内面、1063は高环环部内面をバレットとしており、1063は刷毛状の工具で拭き取ったような痕跡が残る。1060・1062・1063は黒漆だが、1061はぶい黄褐色~褐色を呈すため透漆の可能性がある。1068も少量だが見込に漆が付着しており、バレットであろう。

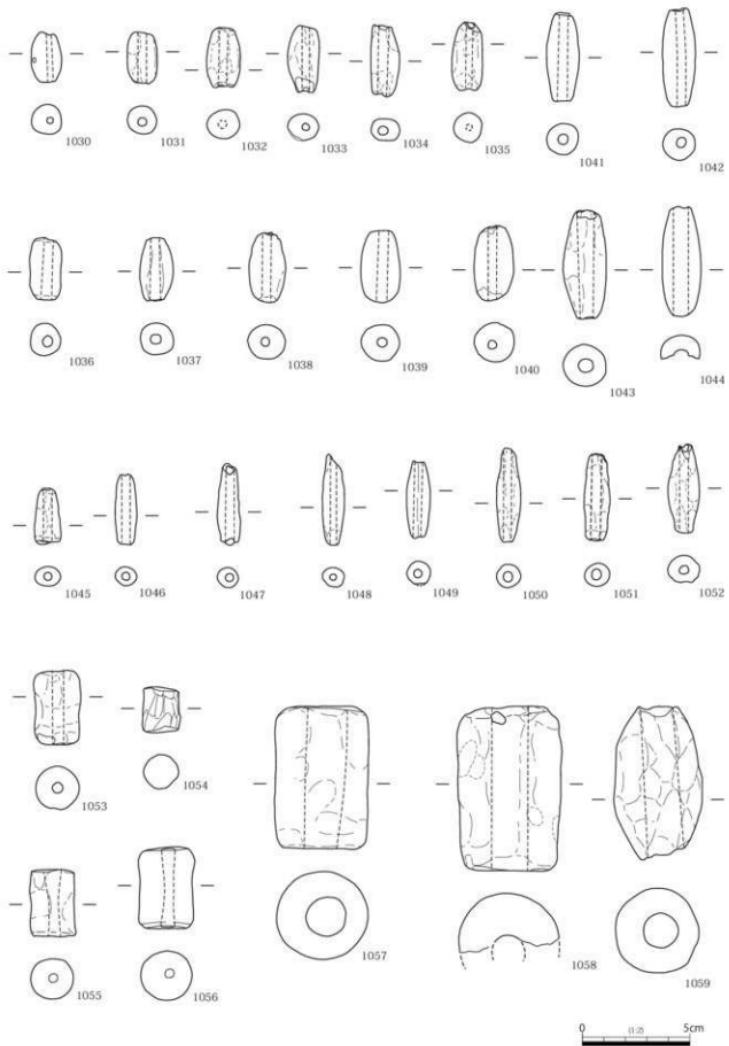
1064~1067は漆容器と考えられる。1064は小型の壺の体部破片で、内面に残る漆はわずかだが、本来漆が付着していた範囲が変色しており二次的に剥離したと想定する。破面から底部にかけても漆が付着しており、漆溶液を取り出すために容器を破碎して搔き出した際に付着したと考えられる。

1065は頭部が窄まらず、そのまま外反して立ち上がる形状をとるため、竈ではなく小型の壺と考える。1065も破面に漆が付着しており、漆容器を破碎して漆溶液を搔き出した際に付着したのであろう。漆は1061と同様の色調で、透漆または生漆の可能性がある。1066は鉢で、底部内面に黒漆が残る。1067は瓶類の頭部~体部片で、肩部、頭部~体部内面に漆が付着している。漆は特に肩部と頭部内面に顕著に残っており、漆溶液を注入する際に付着したと考えられる。1073も壺瓶類の頭部片で内面全体に漆が付着しているため、同様の状況が想定できる。

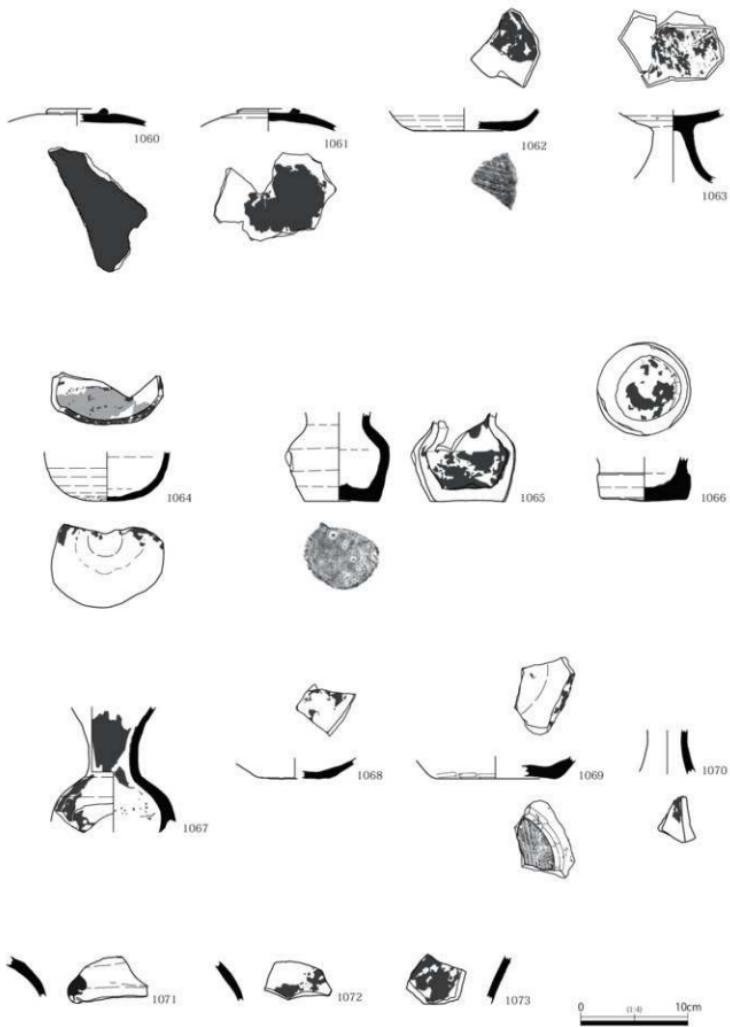
これらの漆容器はいずれも小型の壺・瓶・鉢を主体としており、大型の壺等は見られず、漆採取地から集積地への運搬具である可能性は低い。それよりも漆工工程での貯蔵具もしくは使用時的小分け容器と考える。



第224図 土玉・紡錘車・椎?・土製勾玉



第225図 土縦



第226図 漆パレット・漆容器・漆付着土器

第VI章 3区・4区の調査成果

円面鏡・転用鏡（第227～230図、PL.157～163）

円面鏡（1074）当遺跡で1点のみ出土した。小型の圓足円面鏡で、外堤径13.2cm、鏡面径9.2cm、器高5.2cmを測り、遺存状況からみて台脚部に12カ所以上の長方形透かし孔をもつ。陸と海の境界は明瞭で、陸の外縁は突状に隆起させる。陸のはば全体で磨り面が認められる。内外面とも回転ナデまたはナデ調整で、外側から穿つ透かし孔内面のみ未調整である。

7～10世紀代の多様な遺物が含まれる3006溝埋土上層で最も大きな破片が出土したが、4038溝埋土下層、同埋土中層、4区第4.2層でも同一個体の破片が出土して接合している。3006溝埋土上層出土破片は二次的な混入であろう。平城宮の資料においても奈良時代前半期には鏡面径が10cmに満たない小型の圓足円面鏡が存在することが知られており〔神野・川越2003〕、4038溝埋土中～下層等の共伴資料から見ても8世紀のものと考える。

転用鏡 当遺跡で出土した転用鏡は確認できたもので破片数48点を数える。破片数であるため、本來の個体数はこれより少ないと考えられる。

転用鏡として使用される器種は蓋が25点(52%)と最も多く、高台付坏14点(29%)、皿5点(11%)、高坏3点(7%)、坏1点(1%)である。蓋と高台付坏で全体の8割を占める。

使用部位は蓋・坏・皿・高坏いずれも内面が中心となるが、高台付坏については高台内側(底部外面)を鏡面あるいは墨汁溜めとするもの(1110)もあり、後者は墨痕が顯著でありながら磨り面は弱い。蓋にはつまみを打ち欠いて使用したと考えられるものの(1090・1096)が認められる。墨書土器を転用したものも3点見られる(第287図1129・第291図・1190・第292図1208)。

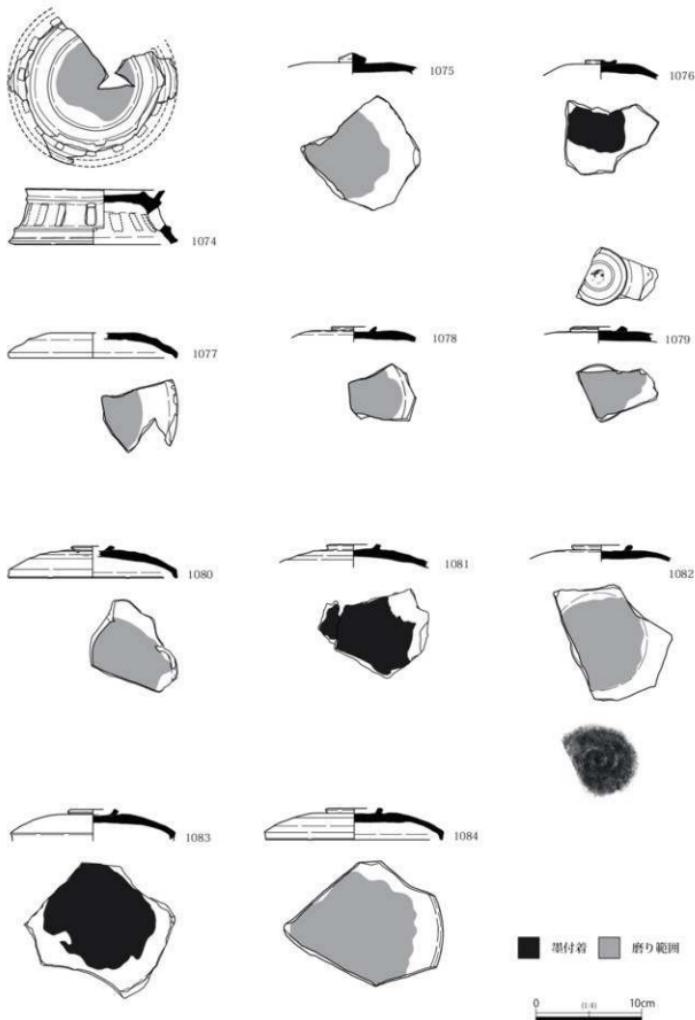
転用鏡として使用された土器の時期は7世紀末～9世紀後半で、古くは高坏も使用されているが、時期が下ると坏皿類が増えるという傾向が窺え、各器種の消長とも符合する。

註

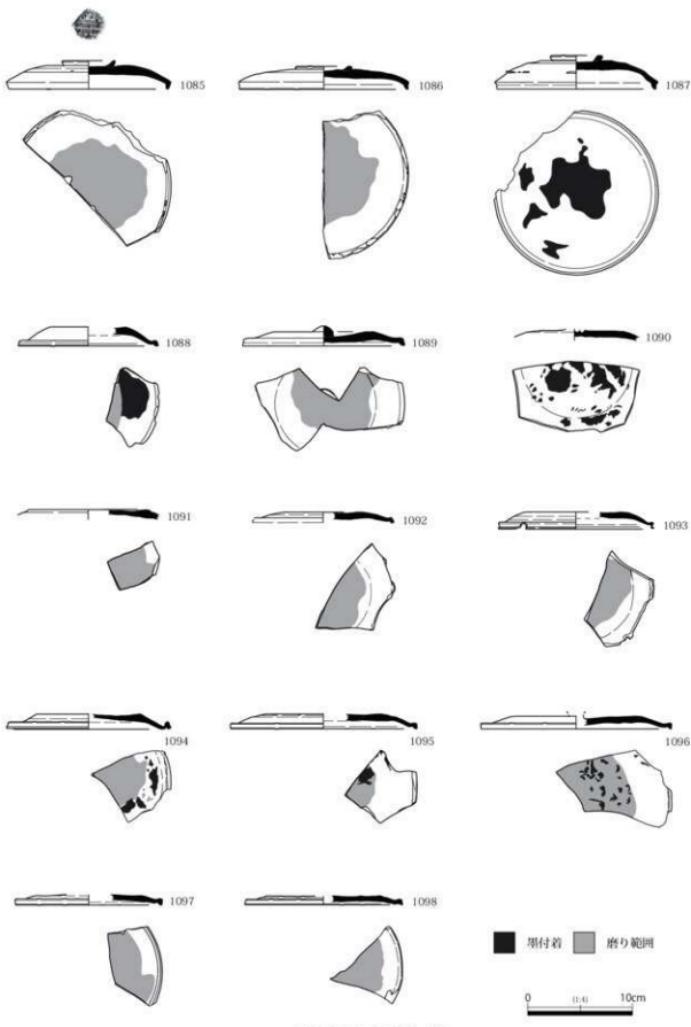
坏表面に付着した飛沫については、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の降幡順子氏に依頼し、同研究所において蛍光X線分析を行った結果、溶融した鉄滓であることが明らかとなった。記して感謝申し上げる。

<参考文献>

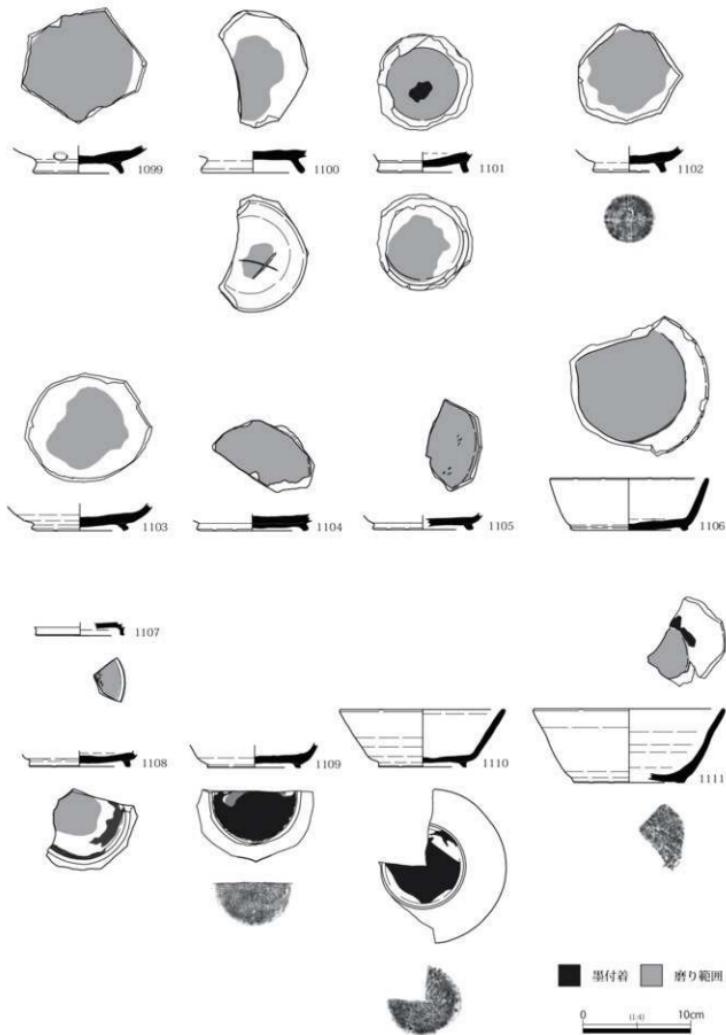
- 石毛彩子・志賀 崇 2003「(3)瓦類の分析と瓦葺建物の性格」山中敏史編『上原遺跡群発掘調査報告書－古代因幡国気多郡衙推定地－』鳥取県気高町教育委員会・独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所
岸本浩忠編 2003『鳥取県立博物館所蔵古代寺院関係資料集』鳥取県立博物館
倉吉市教育委員会 1998『福寺田遺跡発掘調査報告書(2次調査)』
神野 恵・川越俊一 2003「平城京出土の陶器」独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所編『古代の陶器をめぐる諸問題－地方における文書行政をめぐって－』
神野 恵 2012「都城の製塙土器」第16回古代官衙・集落研究会 塩の生産・流通と官衙・集落 研究報告資料
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
高橋照彦 1998「3.緑釉陶器」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』有限会社真陽社
野口良也編 2014「高住牛輪谷遺跡」鳥取県教育委員会
八峰 興 1998「山陰における中世土器の変遷について－供膳具・煮炊具を中心として－」中世土器研究会編『中近世土器の基礎研究XIII』
横田賛次郎・森田勉 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4



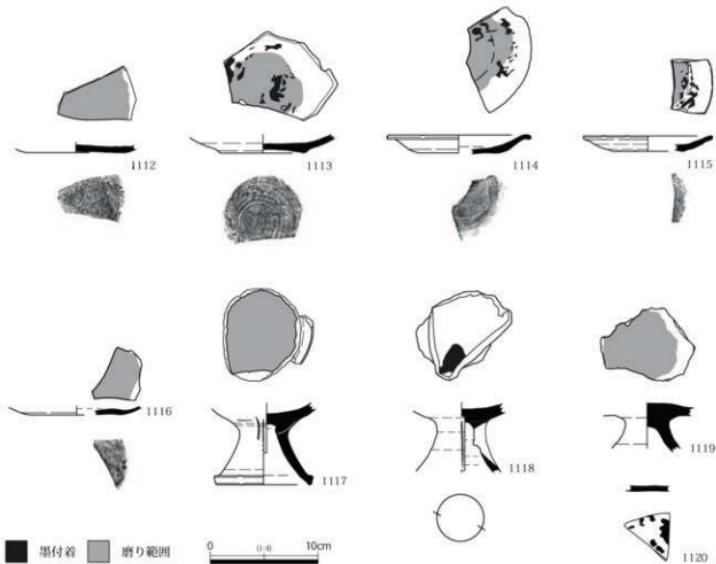
第227図 円一面観・転用視(1)



第228図 転用硯 (2)



第229図 転用視(3)



第230図 転用硯(4)

(2) 石器

打製石器 (第231図、PL.163)

S3・S4は打製石鎌である。S3は小型品で3085ピットから出土したが混入品であろう。S4は安山岩製と見られ、第4層で出土した。S5～S7は黒曜石の石核または剥片で、それぞれ3003溝、第2・2層、第3層から出土しており風化が顕著である。S8は石鍬で3473流路で出土した。

磨製石器 (第232・233図、PL.164)

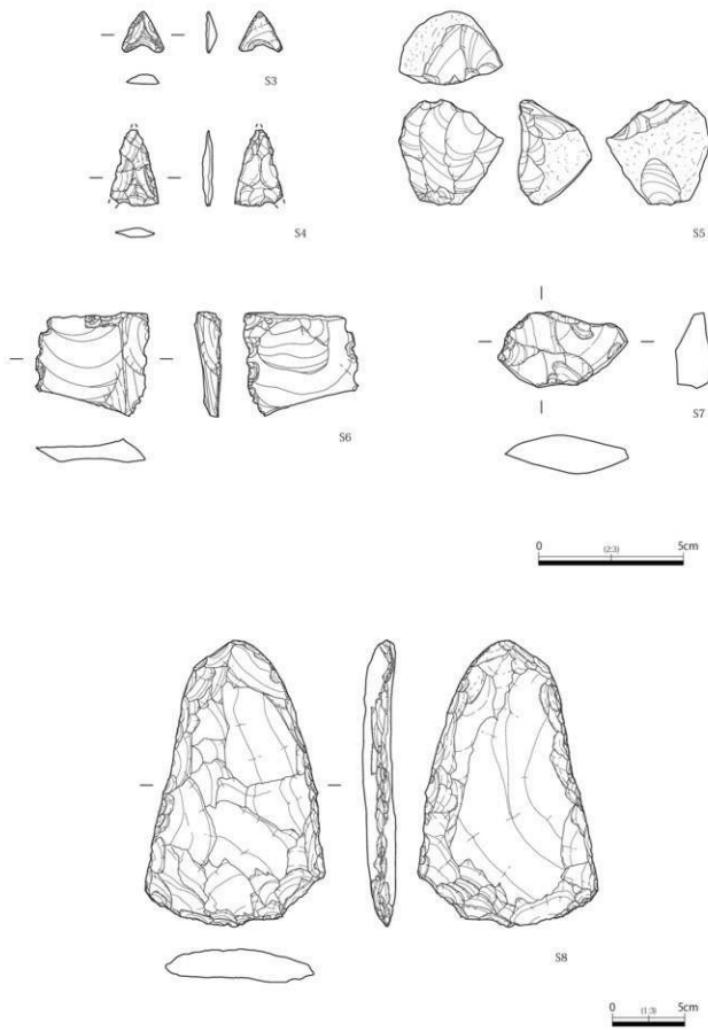
S9～S17は磨製石斧である。S9は刃部が撥形にひらき、後正面に鏽が見られ片刃となる。S10は刃部を欠失するが、横断面が略円形を呈し伐採斧の可能性がある。S11・S12・S15は両刃を呈すが幅狭で厚みがなく、加工斧となろうか。小型のS14も加工斧であろう。S13は身に厚みがあり伐採斧と考えられる。S16は扁平片刃石斧である。後正面に認められる鏽は明瞭で、刃部及び両側縁とも直線的で丁寧に仕上げられている。S17は盤状石斧で両刃を呈す。S9・S16は3006溝埋土最下層、S10は3006溝南肩(第4層)、S11は第1層、S12は第3層、S13・S14は第42層、S15は第43層、S17は3003溝埋土上層でそれぞれ出土した。

S18は磨石で、破面にも磨り面が認められる。第2・2層で出土した。

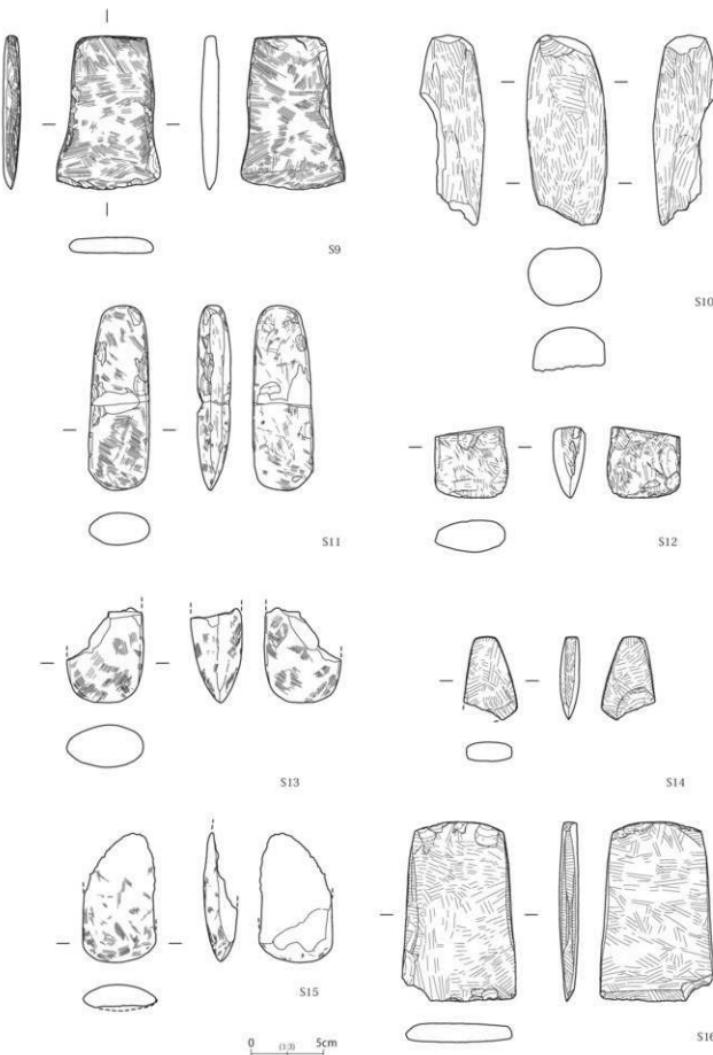
S19は石庖丁、S20は石庖丁未完成である。S19は第42層、S20は第2・2層で出土した。

敲石 (第233・234図、PL.164)

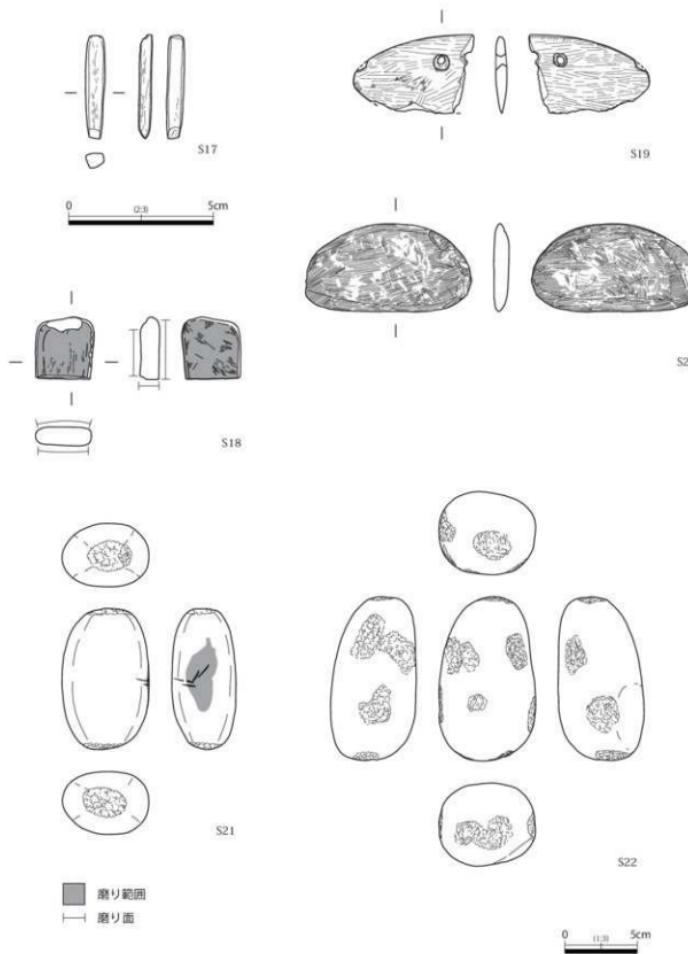
S21～S27は敲石である。S21は側面に磨り面が認められる。S23・S25は円盤状の礫の側縁を連続



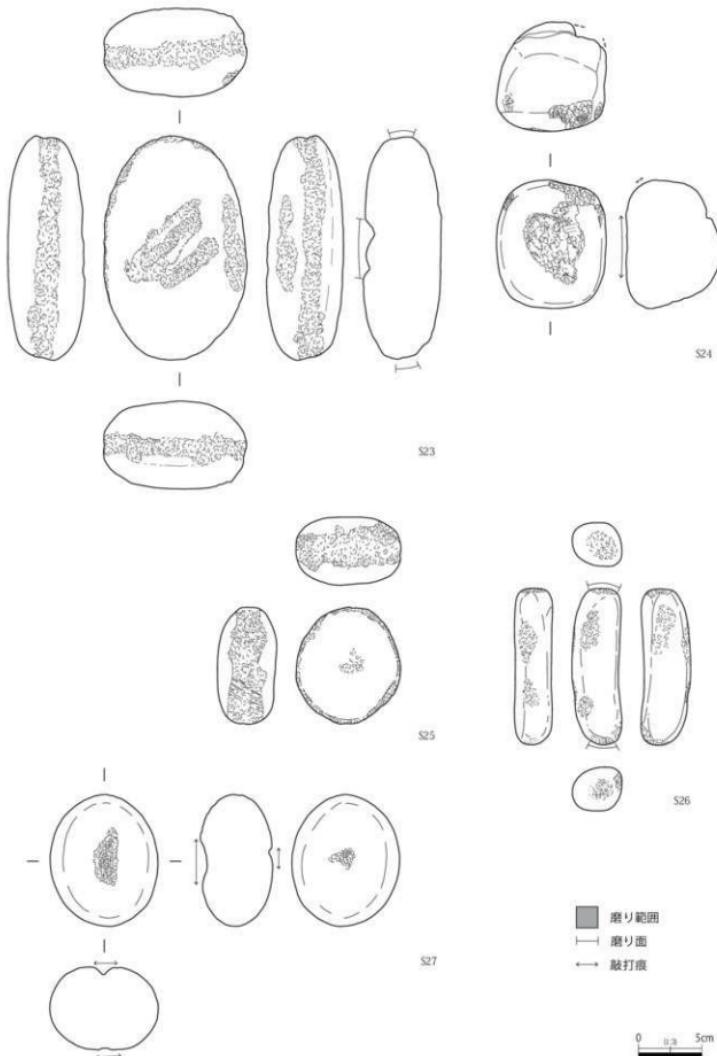
第231図 3・4区出土石器 (1)



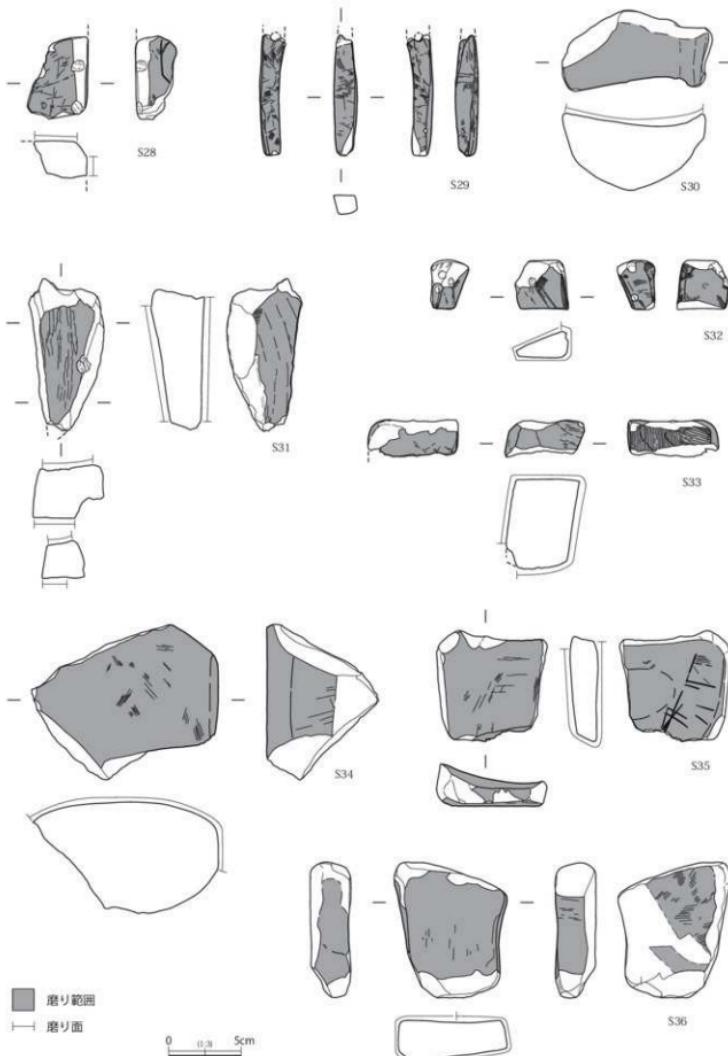
第232図 3・4区出土石器 (2)



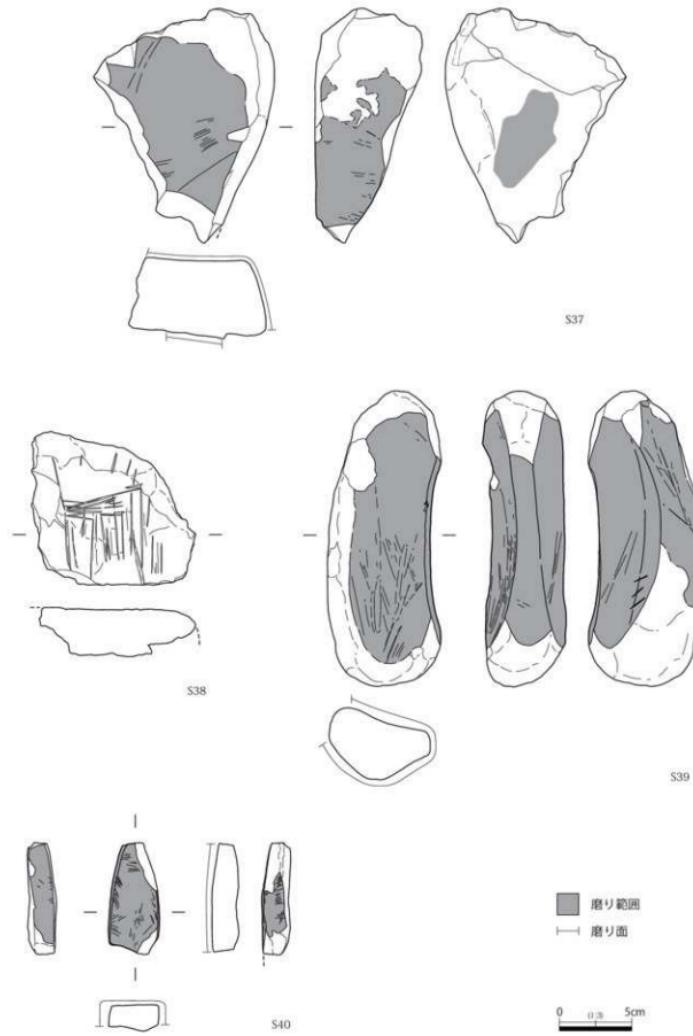
第233図 3・4区出土石器 (3)



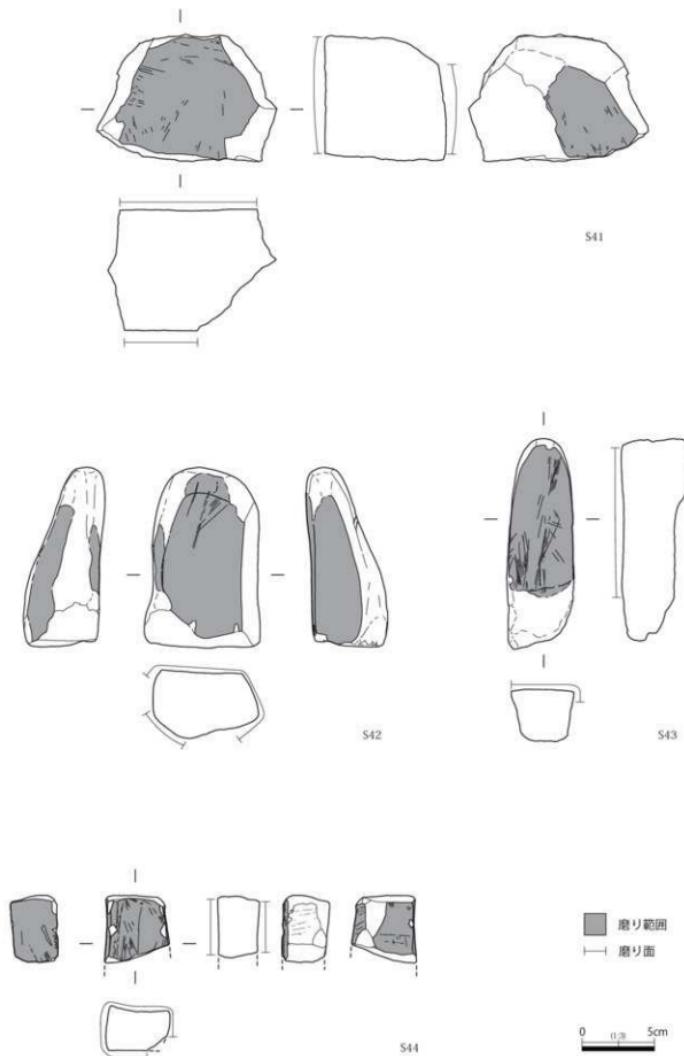
第234図 3・4区出土石器 (4)



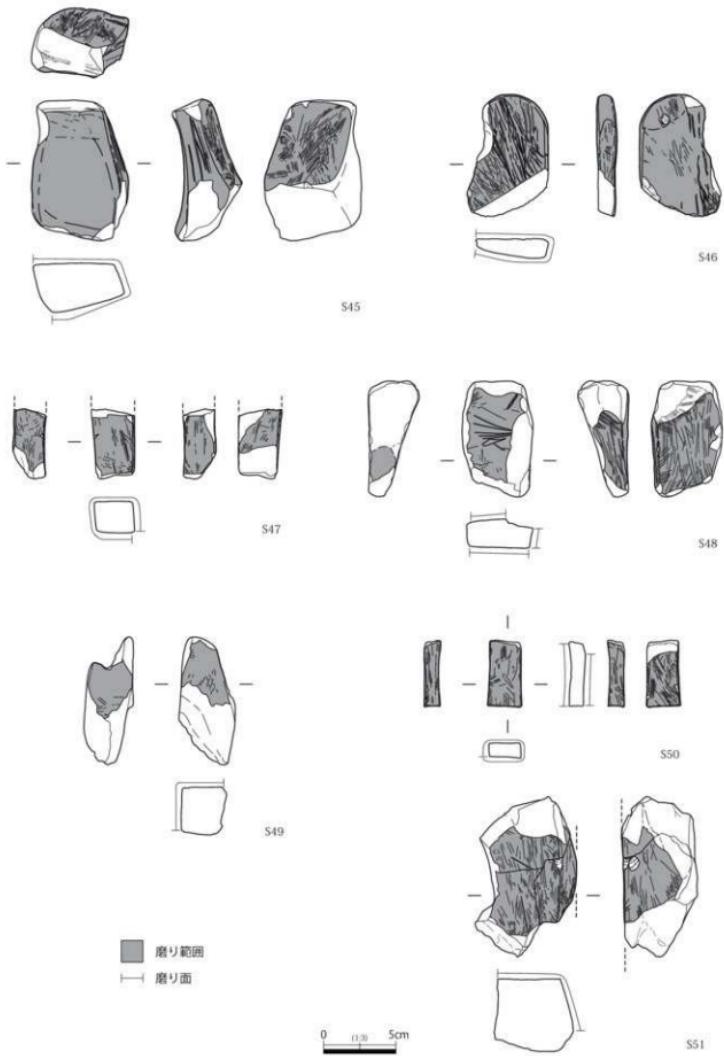
第235図 3・4区出土石器(5)



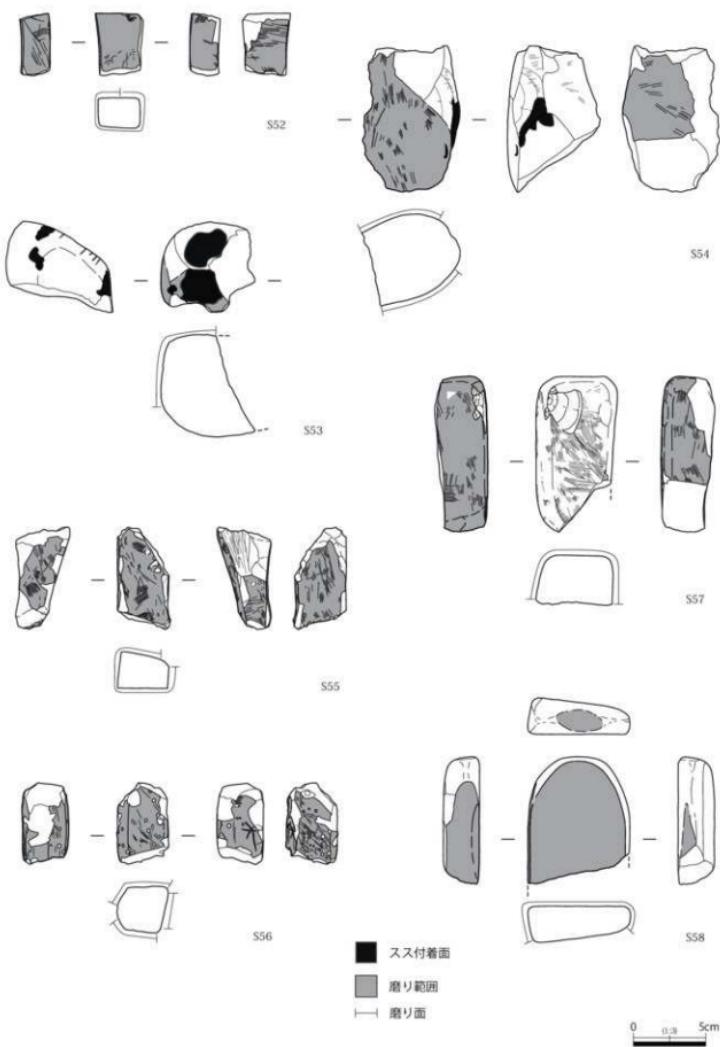
第236図 3・4区出土石器 (6)



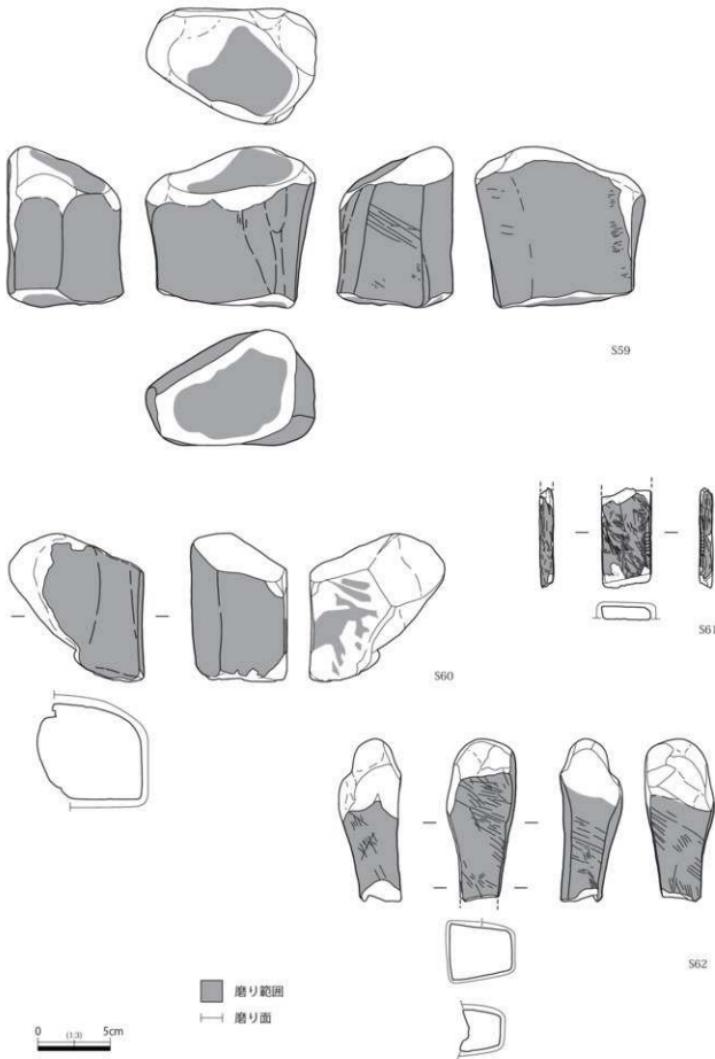
第237図 3・4区出土石器 (7)



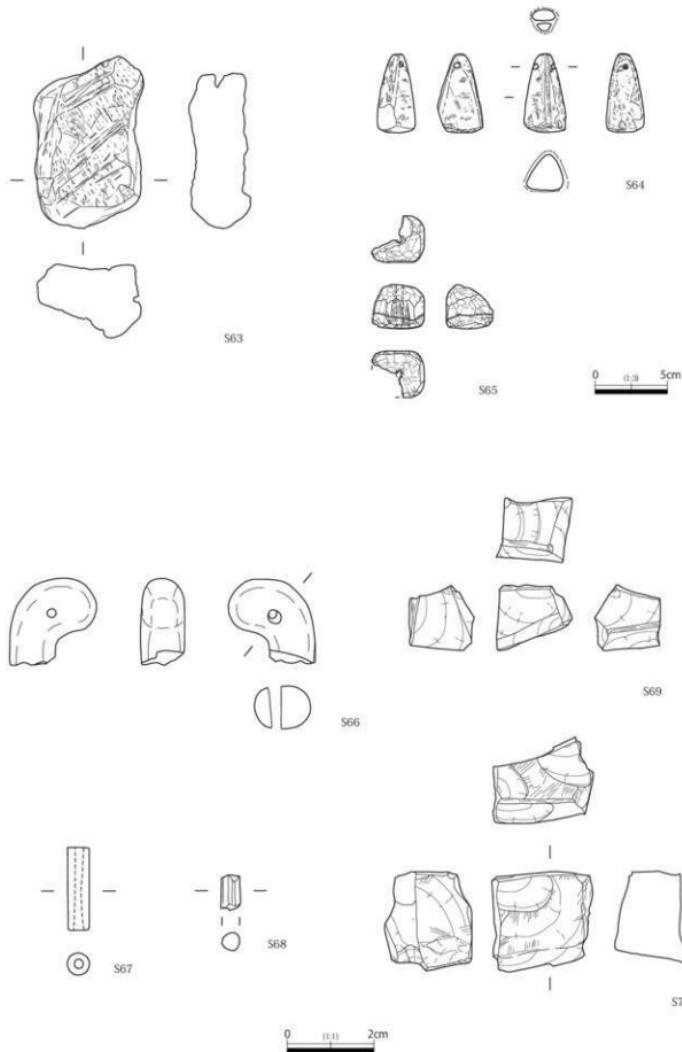
第238図 3・4区出土石器 (8)



第239図 3・4区出土石器 (9)



第240図 3・4区出土石器 (10)



第241図 3・4区出土石器 (11)

第VI章 3区・4区の調査成果

的に使用しており、敲打痕が全周で認められる。S21は第4層、S22は3006溝埋土下層、S23は3438流路、S24は4038溝、S25・S26は第3層、S27は第2-2層で出土した。

砥石（第235～240図、PL.165・166）

S28～S62は砥石である。S29は一端に穿孔されており、携帯用の砥石か。S34・S53・S54は被熱し、煤も付着している。いずれも砂岩と見られる同一の石材が用いられている。S35・S38・S39・S45・S46・S48・S51には刃物による線状痕が多数残る。S51は二次的な被熱により表面が赤変、剥離している箇所が認められる。S59は本来大型品で、破面も砥面として使用している。S28・S29は4038溝埋土下層、S30～S37は4038溝埋土、S38は4221溝、S39は第3層～第4層、S40・S41は3003溝埋土上層、S42は3003溝埋土下層、S43は3102ピット、S44は3125ピット、S46～S49は第4層、S50・S51は第4-1層、S52～S58は第3層、S59・S60・S62は第2-2層、S61は第2層でそれぞれ出土した。

その他（第241図、PL.165）

S63は軽石で、刃物による線状痕が多数残る。砥石として使用されたものか。4191溝で出土した。

S64は第2-2層で出土した不明製品で、丸みをもつ三角錐状を呈し、頂部から少し下に1カ所円孔を穿つ。形態的な特徴は権に似る。下端部をわずかに欠失しており、重量は374gを測る。

S65は紡錘車である。平面及び断面形は隅丸方形を呈し、前面に細かな加工・調整痕を残す。側面には刃物によってつけられた線条痕が全周する。中央の孔は片面穿孔されているが十分に貫通できおらず、穿孔過程で割れが生じた未成品の可能性がある。一側面に磨り面があり、砥石を転用したものと考えられる。第4-2層で出土した。

勾玉・管玉・玉作関連遺物（第241図、PL.163）

S66は勾玉で、孔は片面穿孔である。碧玉製で、形態的に古墳時代中期のものと考えられる。第3層で出土した。S67は管玉で、孔は両面穿孔である。素材は緑色凝灰岩か。3003溝埋土上層で出土した。S68は第3層で出土した碧玉製の管玉未成品で、横断面形は多角柱状で細かい面をもっており、未研磨の状態である。S69・S70は碧玉の素材剥片で、擦切溝が認められる。

（3）木器

工具（第242・263・264図、PL.166・178・180）

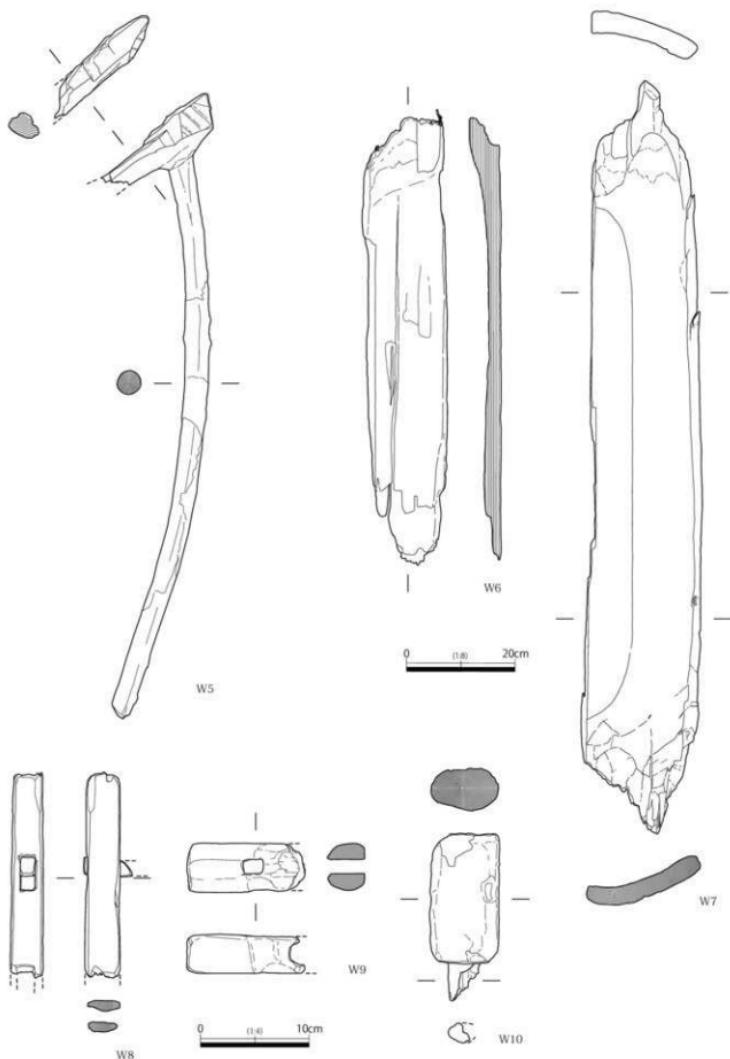
第242図W5は曲柄の斧柄で、法量的に手斧柄であろう。第4層で出土した。W10は横槌で、広葉樹の芯持材を用いる。第3層で出土した。

第263図W190～W195は発火具の火鑓臼である。W190は全体形が分かる資料で、最大長52.7cm、最大幅4.7cm、厚さ2.6cmを測る。いずれも針葉樹が用いられており、柾目材が多い。W193は樹種同定を行った結果、スギであった。W190は4191溝、W191・W193は第4-4層、W192は4192溝、W194は3003溝埋土下層、W195は3003溝埋土上層でそれぞれ出土した。

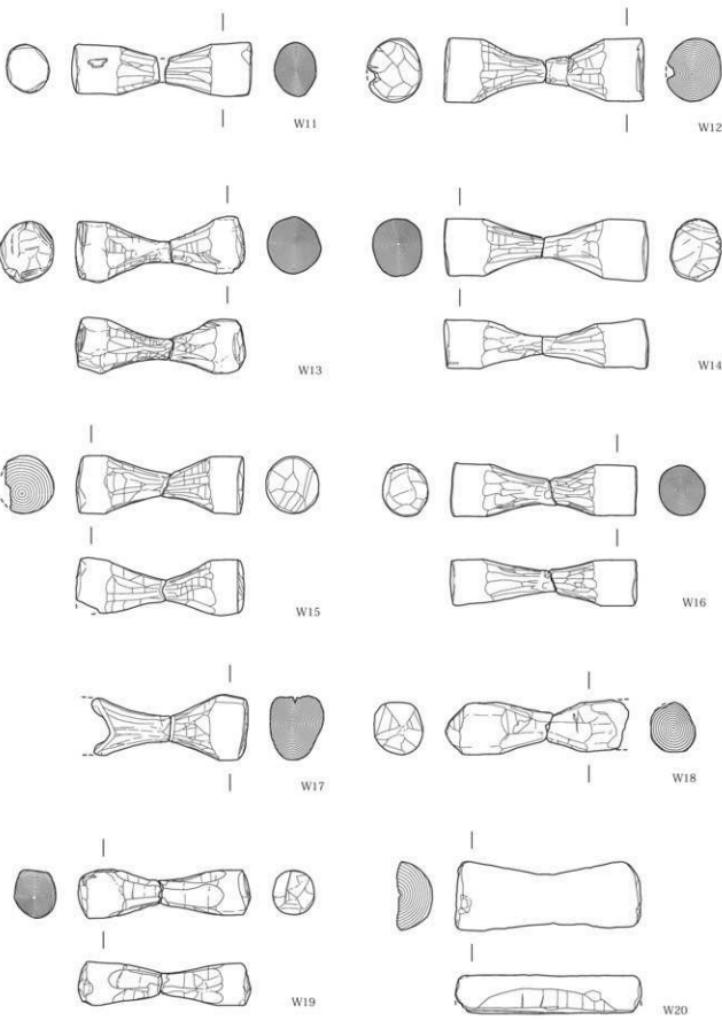
第264図W198は付け木で、粗く加工した枝の一端が焦げている。なお、炭化していないが端材や細枝を用いた付け木は3003溝・3006溝・4038溝を中心に大量に出土している。

農耕土木具（第242図、PL.167）

W6・W7は舟田である。どちらも針葉樹で、W7は樹種同定の結果スギであった。W6は3433溝で出土し、W7は3006溝木製構造物に転用されていた。W8は角枠型田下駄の枠及び棟、W9は馬鍬



第242図 木器 工具、農耕土木具



第243図 木器 編み具

の台と考えられる。どちらも第4層で出土した。

編み具・紡織具（第243・244図、PL.167・168）

第243図 W11～W20は木錘である。このうちW11～W17は4109土坑でまとめて出土した。それ以外のW18は4193溝、W19は4221溝、W20は4191溝で出土している。4109土坑で出土したW11～W17と4221溝で出土したW19はいずれも亜鉛形を呈し、円柱状の素材の中央を削り込んで仕上げる方法が想定できる。W18は端部を主頭状に加工している。いずれも広葉樹の芯持材が用いられているが、W20のみ広葉樹を半截した樹皮の残る芯去材を使用しており、平面形は紐を緊縛する箇所のみ粗く削り出された略X字形、横断面形は半月形を呈す。樹種同定を行った結果、W12・W19・W20にはヤブツバキ、W18にはコナラ節の材が使用されたことが分かった。

第244図 W24は布巻具、W25は舞羽（縦かけ）、W26は紡錘車である。いずれも針葉樹が用いられている。W24・W26は3003溝、W25は3006溝で出土した。

運搬具・漁労具（第244図、PL.168）

W21は3437流路で出土した樺で、表面に鉈による加工痕が認められる。樹種はサカキである。W22・W23はアカトリで、どちらも針葉樹と見られる。W22は3003溝埋土最下層、W23は第4層で出土した。

調理加工具・食事具・楽器（第245図、PL.168）

W27～W29は杓文字で、幅広でやや大型のもの（W27）と小型のもの（W28・W29）がある。W27は第3層、W28は第2-2層、W29は3003溝（3002集石）で出土した。いずれも材は針葉樹と見られ、W27は樹種同定の結果スギであった。

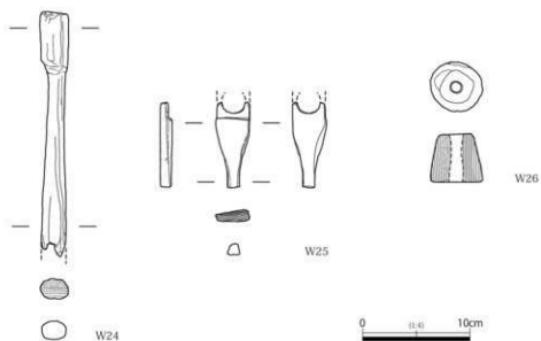
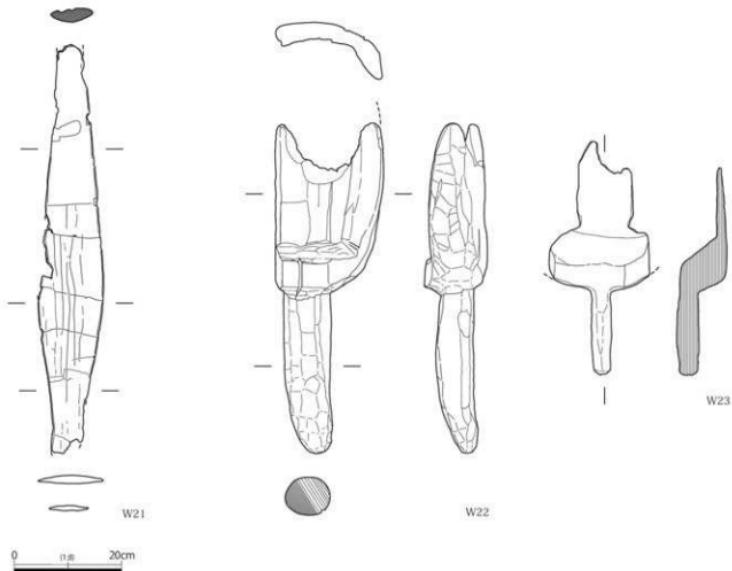
W30～W33は箸で、概ね径7mm前後に仕上げられている。材はどれも針葉樹であろう。W30は4038溝で出土したが、その他のは第2-2層及び第2層上面で出土しており中世以降のものである。

W34～W37は琴柱である。等脚台形を基本形にし、上底に弦受けの溝をつけ、下底中央に半円形あるいは三角形の切欠きを入れて双脚としている。W34・W35は両側刃が湾曲しながら下底に至るタイプで、W35がやや雑なつくりであるのに対しW34は精緻に仕上げられている。W34の切込みは小さく半円形を呈す。W36・W37は六角形の両端を断ち落とした形状に近く、特にW37は全体形がM字形となる。W36のみ柾目材で、それ以外は板目材である。樹種同定の結果、材はW34がヒノキ、W35・W36がスギであった。

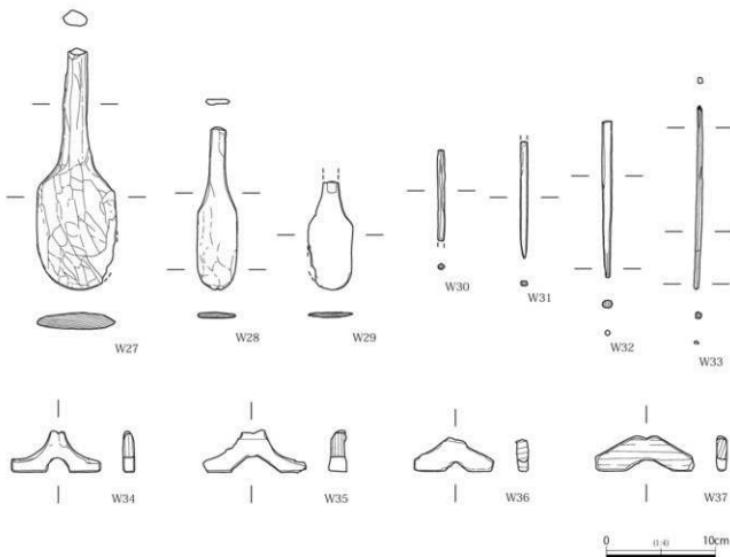
服飾具（第246図、PL.169）

W38・W39は一端を尖らせた断面円形の棒状品で、法量的に見て留め針の可能性がある。W38は4194溝、W39は3014溝で出土した。

W40～W43は連齒下駄である。鼻緒孔の前壺を左右いずれかに片寄せ、後壺を後歯の前にあけており、台と同じ幅で縦断面が（ほぼ）台形を呈す歯をもつ。『木器集成図録 近畿古代篇』〔町田・上原編 1984〕（以下、木器集成図録）の分類によればすべてB II類で、平面形が隅丸長方形となるW40・W41はB II a型式、前端に対して後端がやや丸みをおびるW42・W43はB II a型式もしくはB II b型式となろう。W40・W41は消耗によるものか歯がかなり短い。W40は前歯の中心に溝が掘られ、W41は独立する4歯をもつ特異な形状となる。W41は左足裏の磨滅痕が凹みとなって残っており、計測値は約23cmを測る。すべて針葉樹の縦木取りで、W40は樹種同定の結果スギであった。W40は4038溝、W41は4099溝、W42は第4層、W43は3006溝埋土最下層で出土している。



第244図 木器 漁具、紡織具



第245図 木器 調理加工具、食事具、楽器

容器（第247～253図、PL.170～173）

挽物椀・皿、刷物皿 第247図W44～W47・W49～W52は挽物の皿または椀で、W44～W47は白木作り、W49～W52は漆器である。W44・W46は円盤状の平高台を削り出す皿である。W45は皿もしくは杯となろうか。W47は皿で、薄く精巧に作られている。W44・W47は3006溝（W47は最下層）、W45は4038溝、W46は3014溝で出土した。

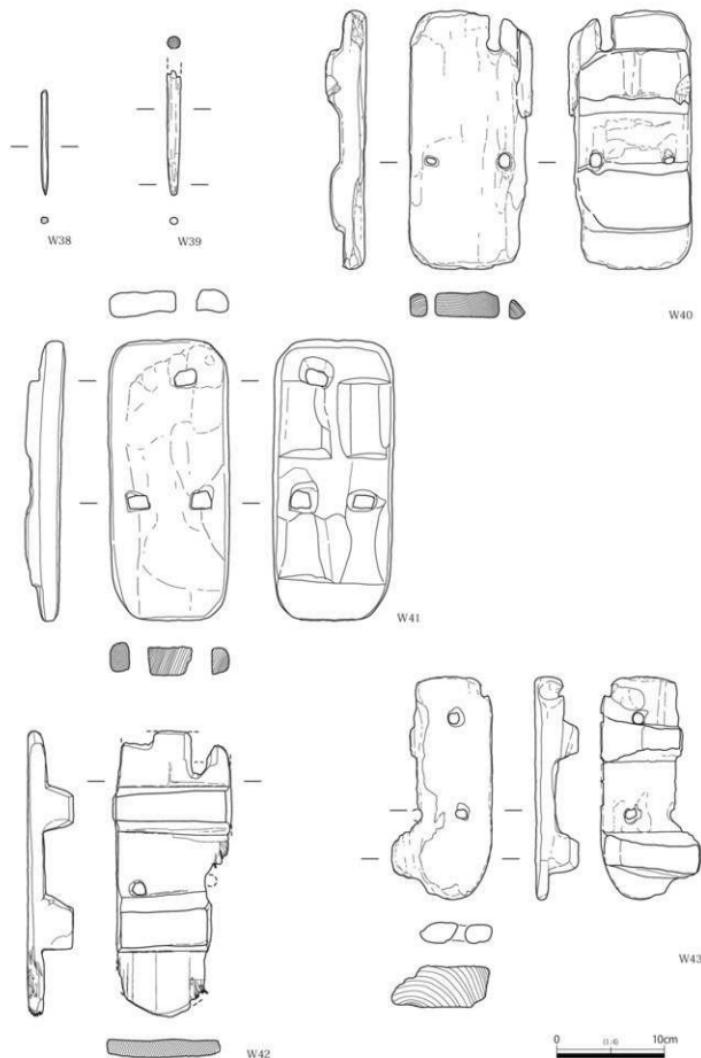
W49～W52は総黒色の漆器椀である。W49～W51は底部に中窪みとなる円盤状の擬高台を作出する。W49は口縁部の相対する2方の内外に朱漆の点描を施す。W50・W51も見込に朱漆で文様を描いている。W52は外反する口縁部をもち、底部に輪高台を作出する。W49は4008溝、W50は第2-1層、W51・W52は第1層で出土しており、すべて中世以降のものである。

W48は刷物の皿で、内面は黒彩されている。漆とは見られず柿渋か。第4層で出土した。

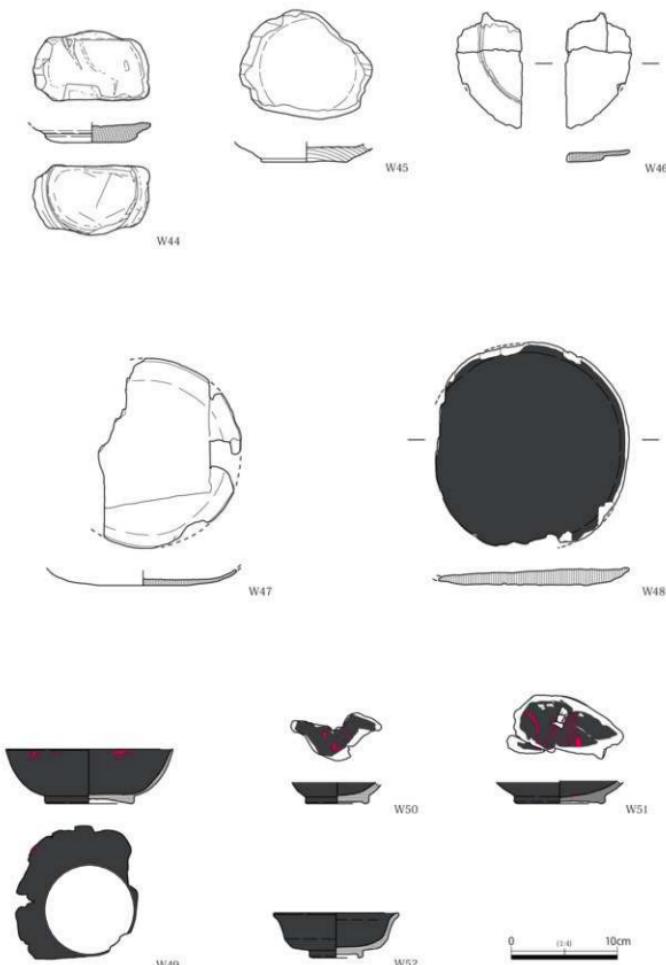
なお、古代に帰属するW44～W48の樹種を同定した結果、すべてケヤキが用いられていた。

その他 W53はケヤキ製の容器脚、W54は容器把手である。W55は桶の側板か。W53・W55は3003溝埋土上層、W54は第44層で出土した。

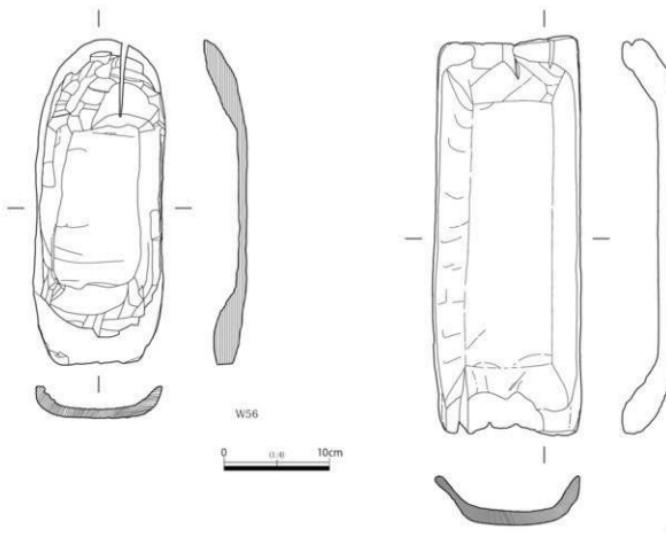
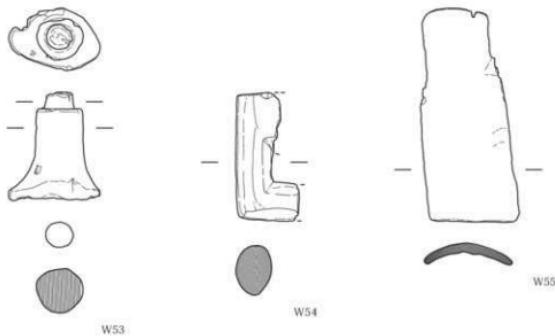
槽 W56・W57は刷物の槽である。W56は全長約30cmで舟形を呈す。粗い加工痕が顕著に認められる。W57は全長約75cmを測り平面長方形を呈す。材はどちらも針葉樹と見られる。W56は4192溝、W57は4038溝底面付近で出土した。



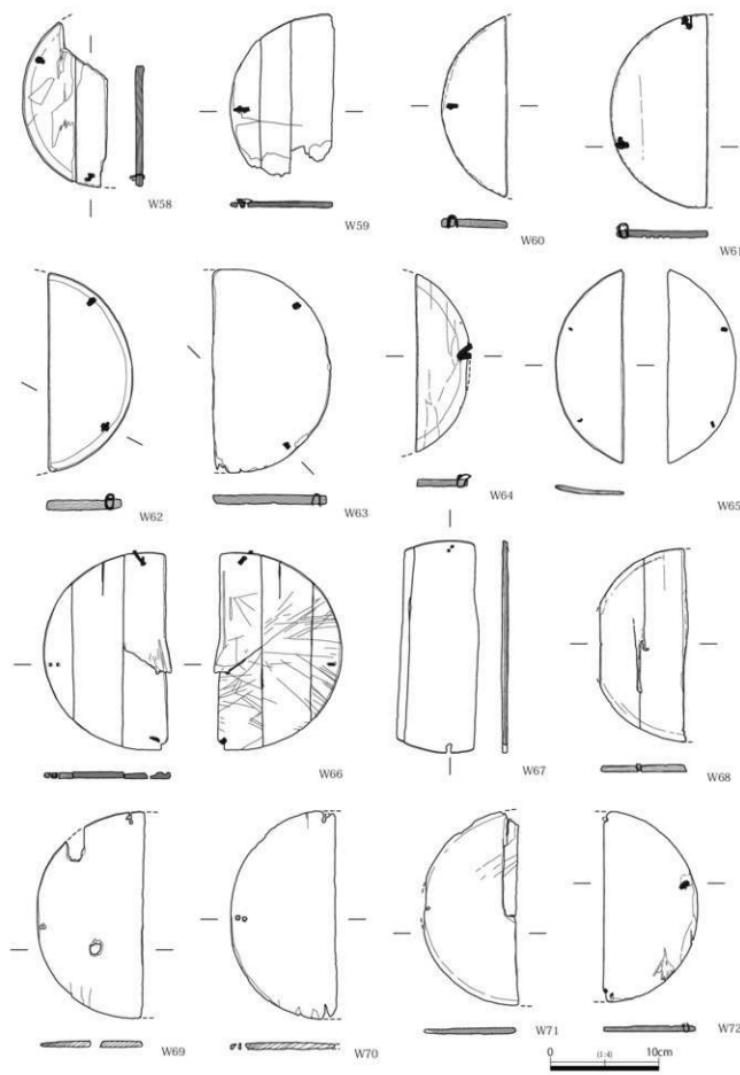
第246図 木器 服飾具



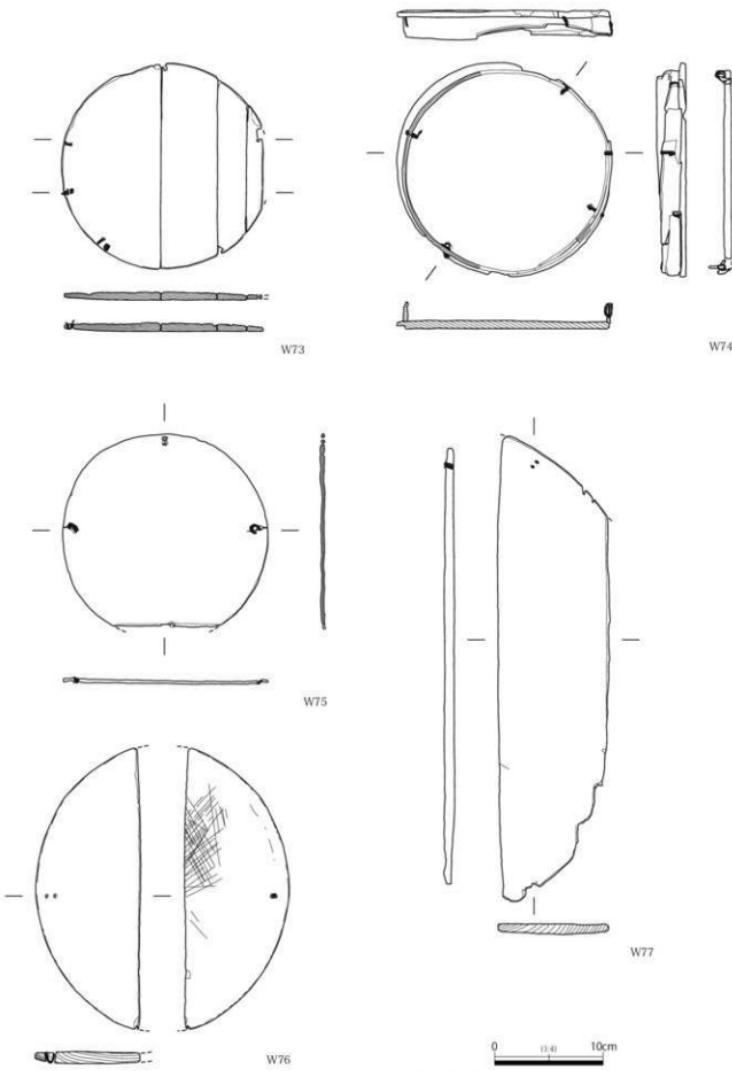
第247図 木器 容器（挽物・剣物）(1)



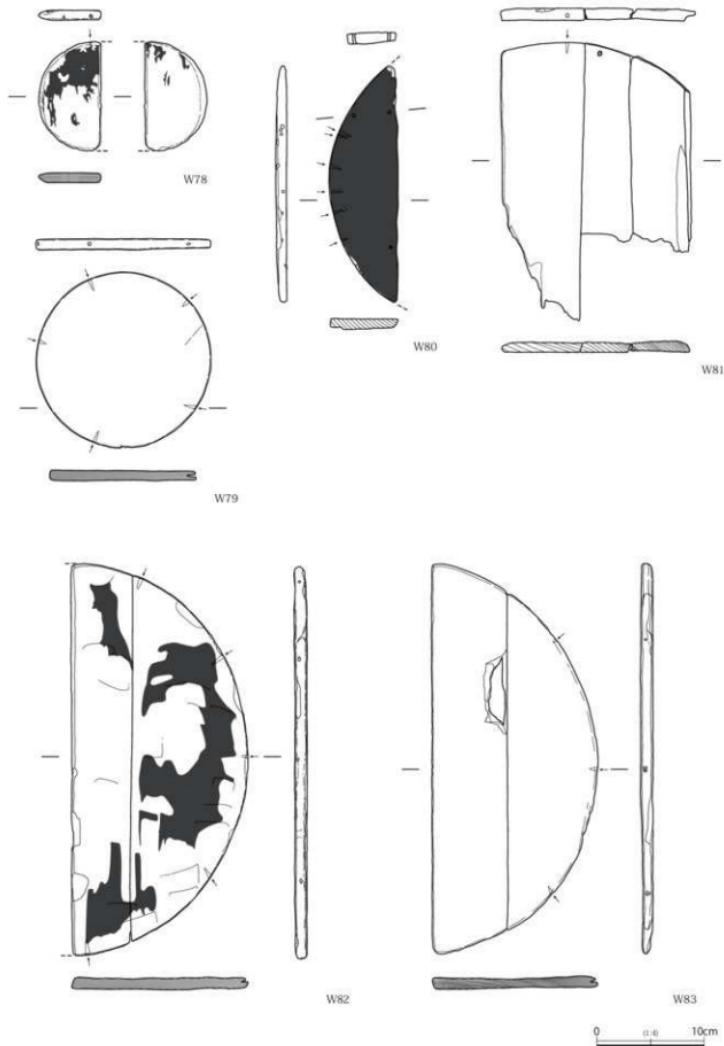
第248図 木器 容器(挽物・剣物)(2)



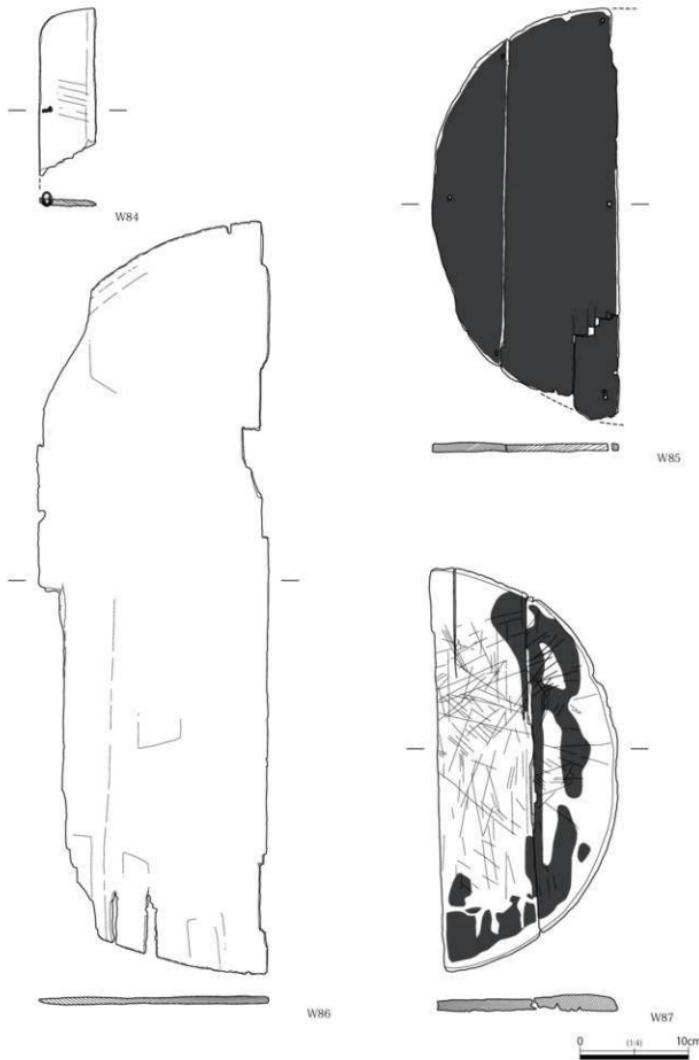
第249図 木器 容器(曲物)(1)



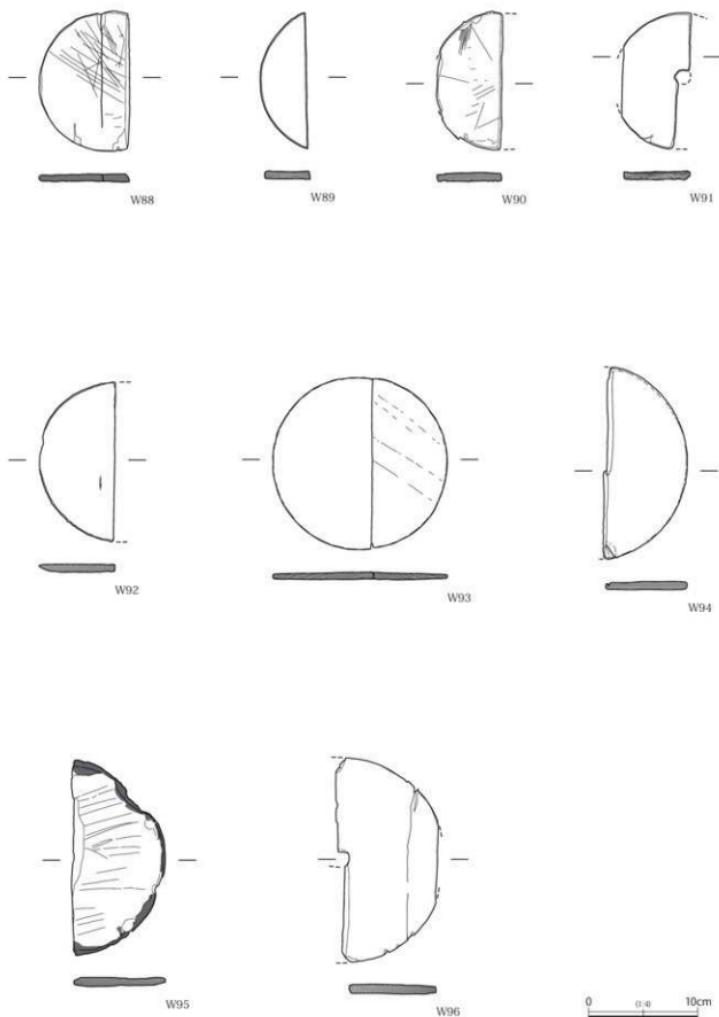
第250図 木器 容器（曲物）(2)



第251図 木器 容器（曲物）(3)



第252図 木器 容器（曲物）(4) ほか



第253図 木器 蓋板

第VI章 3区・4区の調査成果

曲物 当遺跡では多数の曲物が出土しており、遺存状況の良いもの、特徴的なものを選別して図化、掲載した。図化、掲載できたのはW74を除き蓋板あるいは底板である。側板の破片も一定量出土しているが、ケビキ線に沿って細片化しているため図化、掲載できなかった。

第249図W58～第250図W77は円形曲物で、「木器集成図録 近畿古代篇」の分類によれば櫛皮結合曲物Bに属する。全体形を窺い知ることのできる資料はW73～W75程度で少ないが、概ね2～4カ所で側板を櫛皮紐によって結合したようである。W58・W62・W64・W68・W72は内面に側板位置を決める針書き刻線が巡る。また、W66・W76には多数の刃物痕が認められる。W74は側板まで残っており全体構造が把握できる。側板は幅約2cm、厚さ3～4mmの薄板を針書き刻線に沿って周回させており、結合方法だけでなく側板幅から見ても蓋となる可能性が高い〔奈良文化財研究所1984〕。側板は重複部分を上方（側板+側板）、下方（側板+側板+蓋板）の2カ所で櫛皮紐によって綴じ合わせており、さらに側板は櫛皮紐により4カ所で蓋板と結合させる。径が復元できる資料からすればW58～W76のほとんどが径約17～20cmにおまり一つの規格として推定できるが、W77は径40cm以上となる大型品である。

第251図W78～W83は円形曲物のうち針結合曲物で、曲物の身（底板）となる可能性が高い。W78は側面に木釘孔が確認できるため上記に含めたが、内外面とも黒彩されており径も小さいため、曲物底板を蓋として転用したものとも考えられる。W79は全体が遺存しており、計5カ所の木釘孔が認められる。W80は全体の1/4程度しか遺存していないが、側面に6カ所の木釘孔があり、補修孔を含む可能性がある。内面と見られる側を黒彩する。W82・W83は径36cmの大型品で、遺存する木釘孔からすれば全体で2カ所4～5対の木釘で側板を固定したと推測される。W81も同規模の製品となろう。

第252図W84は形状から長方形曲物（折敷）の可能性がある。W85は周縁部に穿たれた孔が各1カ所ずつであるため通常の方法では側板と結合できず、蓋あるいは底板の中央にも孔があり、円形曲物の大型品と断定できない。W86は楕円形曲物（折敷）の可能性が高いが、針書き刻線は認められるものの櫛皮紐の結合孔が見られない。W87は片面に黒彩されるが櫛皮紐結合孔、木釘孔とともに見られないため、曲物もしくは桶底板であろうか。刃物痕が多数認められる。

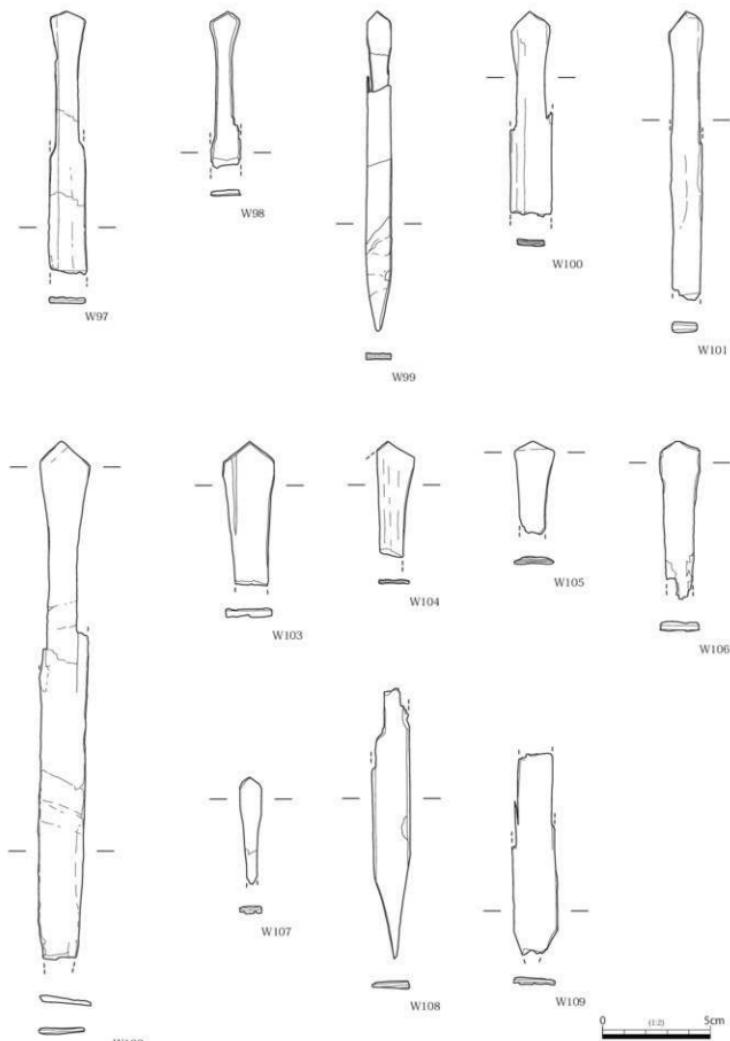
W58・W60～W63・W67・W68・W73・W77・W80・W82・W84・W86は4038溝、W59・W71・W74・W78・W79・W87は3003溝、W66・W69・W76・W83・W85は3006溝、W70は3164土坑、W75は3167ピット、W64・W65・W81は第4層、W72は第3層からそれぞれ出土した。

蓋板 第253図W88～W96は櫛皮紐結合用の孔または木釘孔が見られないため蓋板と判断した。直径が約13cmのW88～W91、15～16cmのW92・W93、18～19cmのW94～W96という規格が認められる。W91・W96は蓋板の中央に円孔をもつ。W88は刃物痕が多数残る。

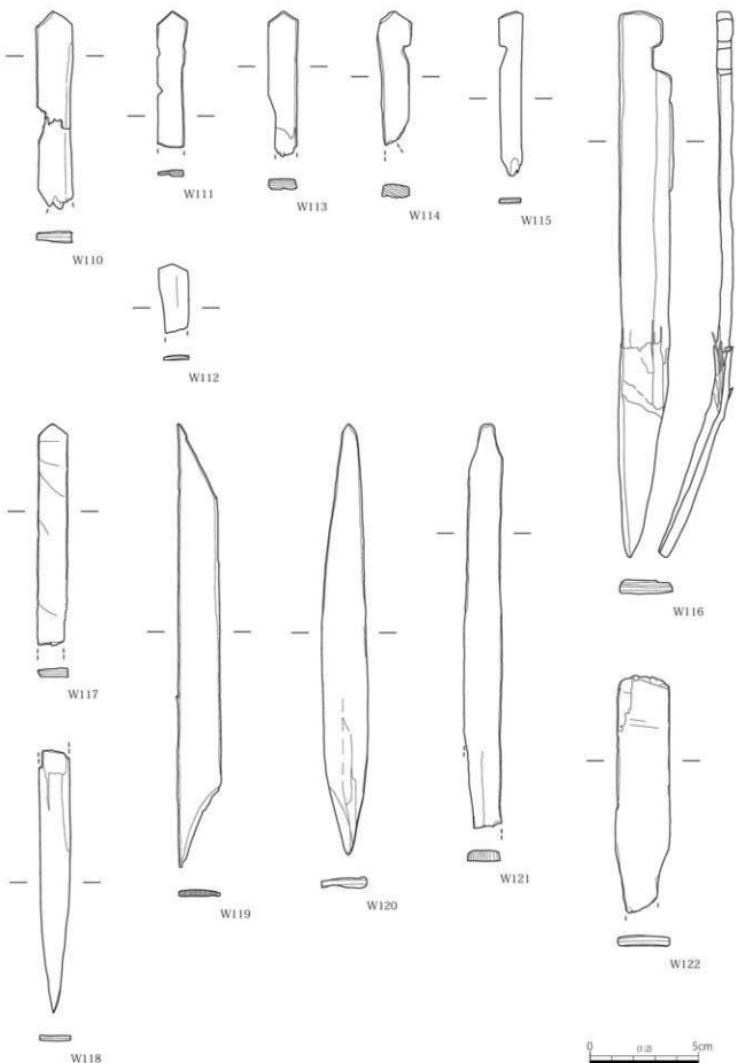
W93・W93・W94は4038溝、W90は4194溝、W91は3003溝、W88・W92は3006溝、W89は3014溝、W95・W96は3433溝から出土した。

祭祀具（第254～262図、PL.174～177）

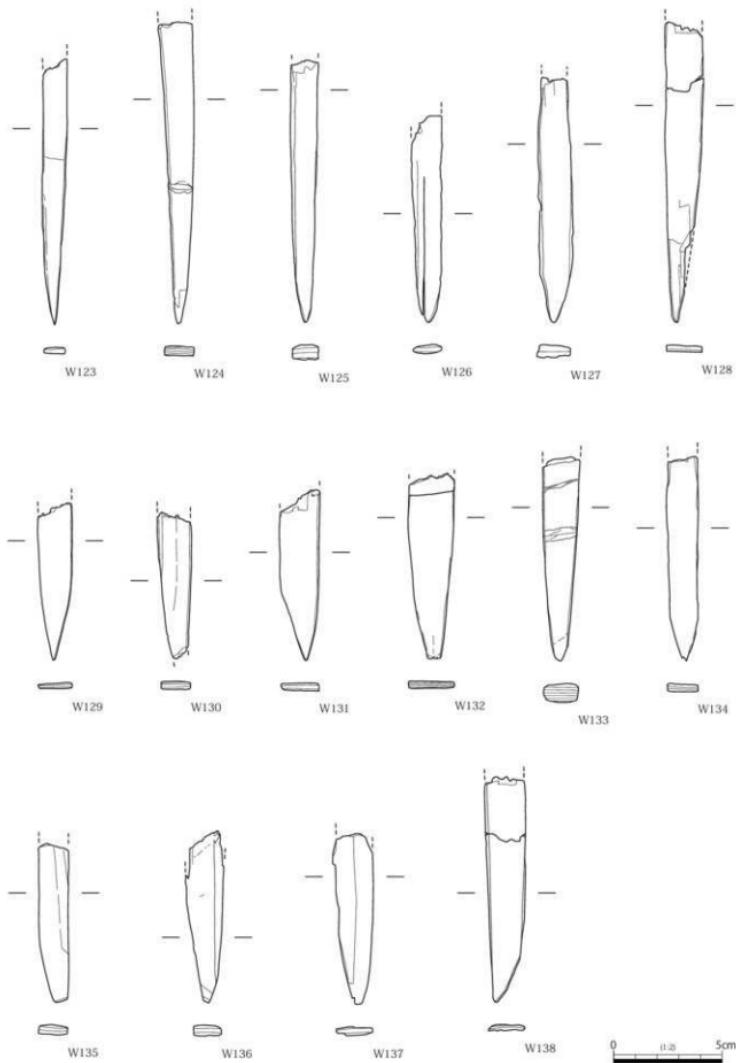
斎串 第254図W97～第257図W146は斎串である。W97～W107は細長い薄板の上端を主頭状に作出し、上端から少し下がった位置の左右両側に一对の切込みを行うタイプで、細身で小型品のW97～W101・W105～W107と幅広で大型品のW102～W104が見られる。W108・W109は上半部を欠失しているが、両側に切込みを窺わせる欠損面が認められるため、このタイプと判断した。全体



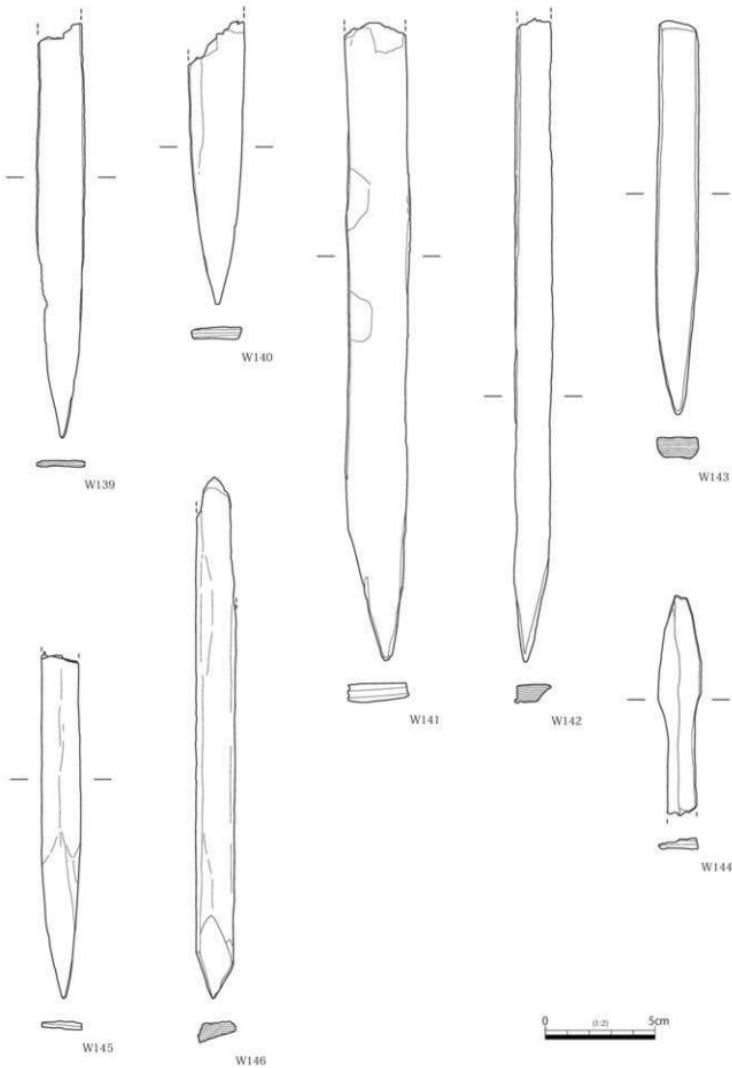
第254図 木器 斧串(1)



第255図 木器 斧串 (2)



第256図 木器 斎串(3)



第257図 木器 竹串 (4)

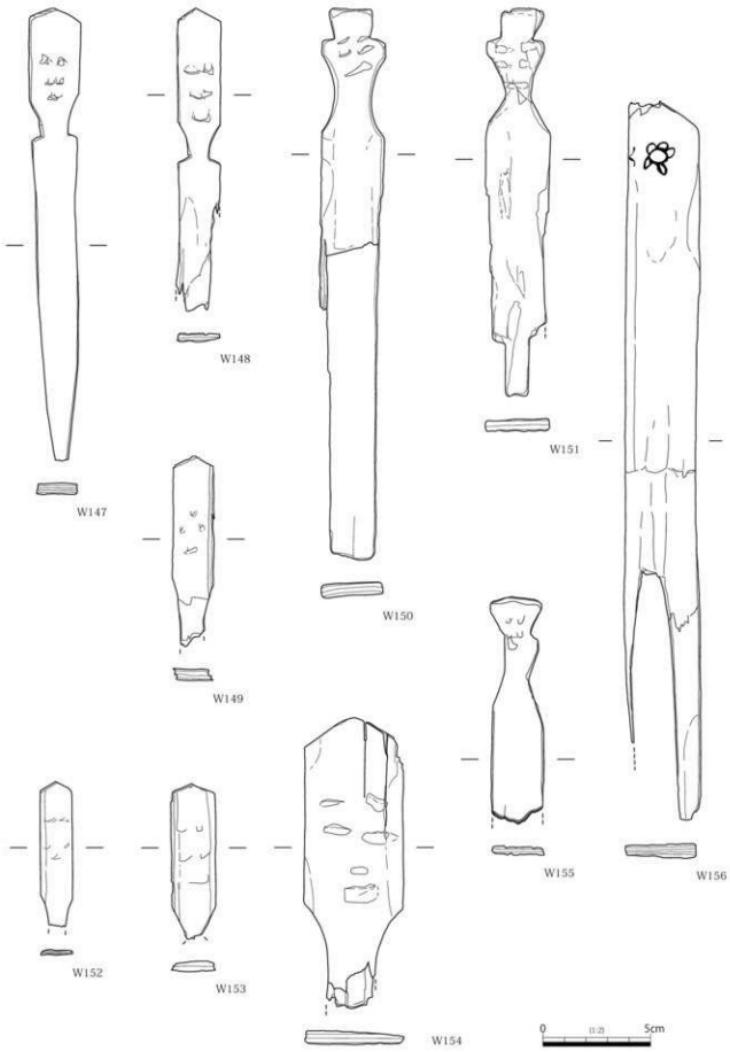
形が窺える W99・W102 は木器集成図録の分類によれば C III型式にあたる。

第255図 W110・W111・W114 は細長い薄板の上端を圭頭状に作出し、上端から少し下がった位置の片側面にV字状の切欠きを2カ所行うタイプである。切欠きが小さく間隔も狭い W111 と大きく間隔も広いもの W110・W114 が認められる。W112・W113 は細長い薄板の上端を圭頭状に作出し、上端から少し下がった位置に浅い台形状（皿状）の切欠きを行うタイプである。W115・W116 は上端を圭頭状に作出し、上端から少し下がった位置の片側面にフ字状またはコ字状の切欠きを行うタイプで、薄く小型の W115 と厚手で長さ 25 cm を測る大型の W116 が見られる。W117 は上端を圭頭状に作出し、側面に切欠きを施さないタイプ、W119 は細長い薄板の両端を斜めに切り落として平面形が台形状を呈すタイプで、W117 は木器集成図録分類の C I 型式、W119 は同 A I 型式にあたる。W120 は下端を両側から削って尖らせ、上端に向かって先細りとなるタイプ、W121 は上端を両側面から窄まるように削り出すタイプである。W118 は W117 と同じ遺構・層位から出土しており、幅や木取りが同じであるため、接合しないが同一個体の可能性がある。W122 は幅広の薄板の両側面が浅い切欠き状となっており、斎串と判断した。

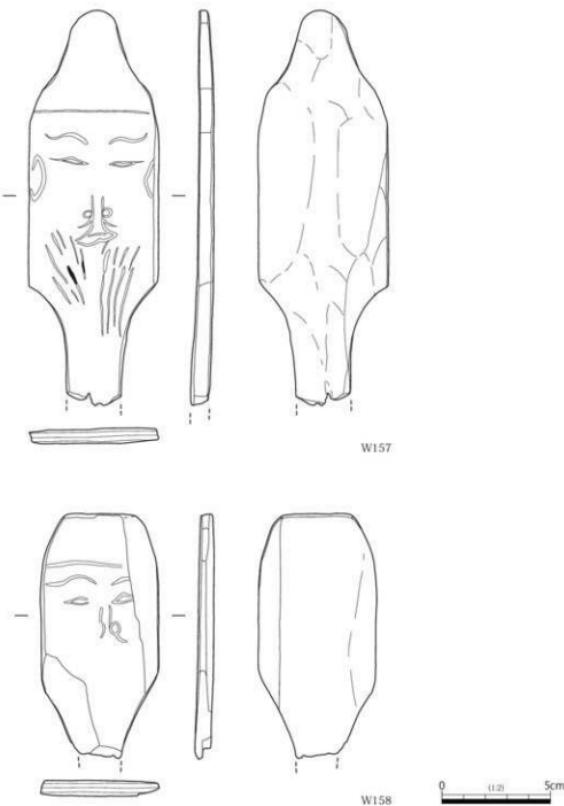
第256図 W123～第257図 W141・W145・W146 は上端を欠失しているが下端を両側あるいは片側から削り込んで尖らせており、形態的に斎串であろう。薄板状のもの（W123～W132・W134・W139・W145）以外に、厚みがあるものや大型のもの（W133・W140～W143・W146）がある。W144 は細長い薄板の上半が漫形を呈しており、斎串または形代と考えられる。

W98・W99・W101・W103・W110・W111・W113・W123～W125・W132 は 4038 溝、W119 は 4192 溝、W133 は 4193 溝、W143 は 4221 溝、W102・W118・W121・W126・W136・W139・W141 は 3003 溝、W115 は 3003 溝 内 3413 梁 群、W104・W106・W107・W109・W112・W134・W135・W137・W138・W142 は 3006 溝、W100 は第4-4 層、W116・W131 は第4 層相当層、W122 は第4-2 層、W140・W144 は第4-1 層、W127～W130・W146 は第4 層、W97・W108・W114・W145 は第3 層、W105・W120 は第2-2 層でそれぞれ出土した。

人形 第258図 W147～第259図 W158 は人形である。W147～W149・W152・W153 は細長い薄板の上端を圭頭状に作出し、頭部と肩部を画する V 字形を呈す切欠きを両側面から入れるタイプで、頭部中央に浅く切込みを入れて眉・目・鼻・口を表現する。両側面からの切欠きは肩よりも頸～頭のラインが長くなるように入れられており、上半身が残る W147・W148 からすればやや怒り肩になる。W154 はこのタイプの大形品で、人面は切込みを入れるのではなく浅く彫り窪めて表現している。W150・W151 は細長い薄板の上端及び両側面から切欠きを入れて被り物と頭部～肩部を作出するタイプである。頭部～肩部を作出するための切欠きは半月形または V 字形を呈す。頭部は頸の表現がなく頸と一体化しており、正面観はかなり扁平となる。人面の表現は浅く切り込むものと、彫り窪めるものの両者が認められる。W150 は正面左側に手の表現と見られる切込みがある。W155 は被り物が表現されていないが、これらと同タイプと考えられる。下半は欠失しており、破面が焦げている。W156 は頭部と左半身を欠く人形で、胸に太陽形の墨痕を入れている。墨痕からすれば左半身にも同様の文様が入っている可能性が高い。W157・W158 は被り物、頭部、頸を明確に作出し、墨線で人面を表現するタイプである。頭巾と顔面の境界、眉、切れ長の目、鼻に加え、W157 は耳、口髭、額縁が墨線で表現されており、墨はほとんど残っていないが墨痕が隆起した状態で確認できる。W157 と W158 は頭巾の形状が異なっており、模倣の対象となった人物の違いを表現したものか。



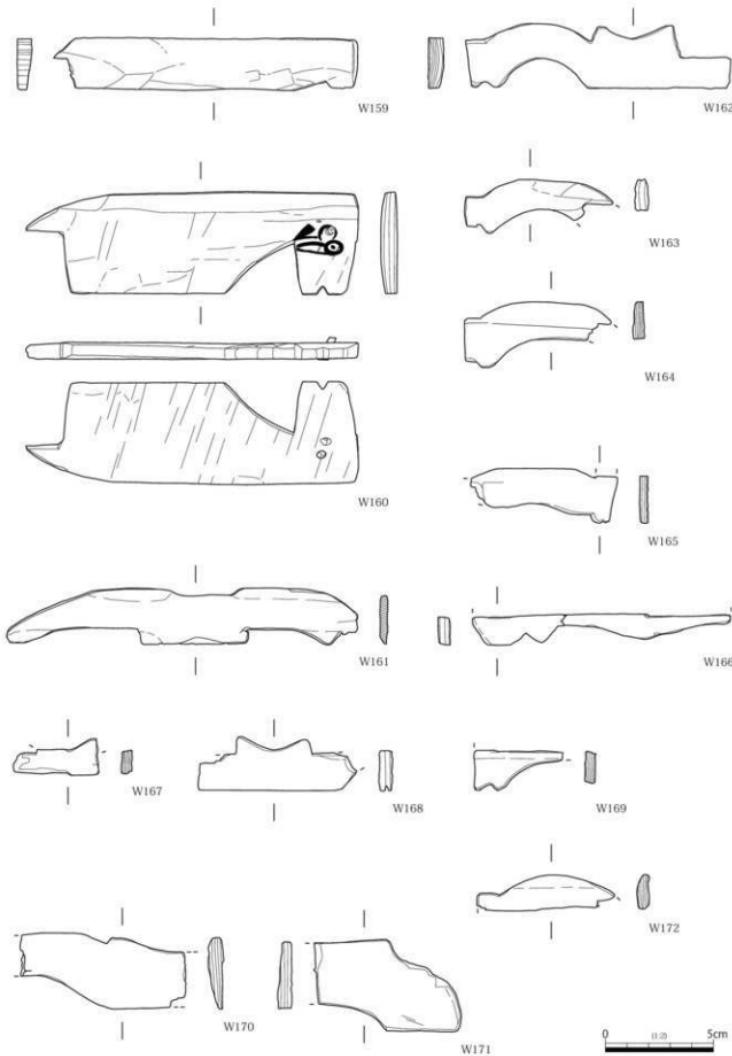
第258図 木器 人形 (1)



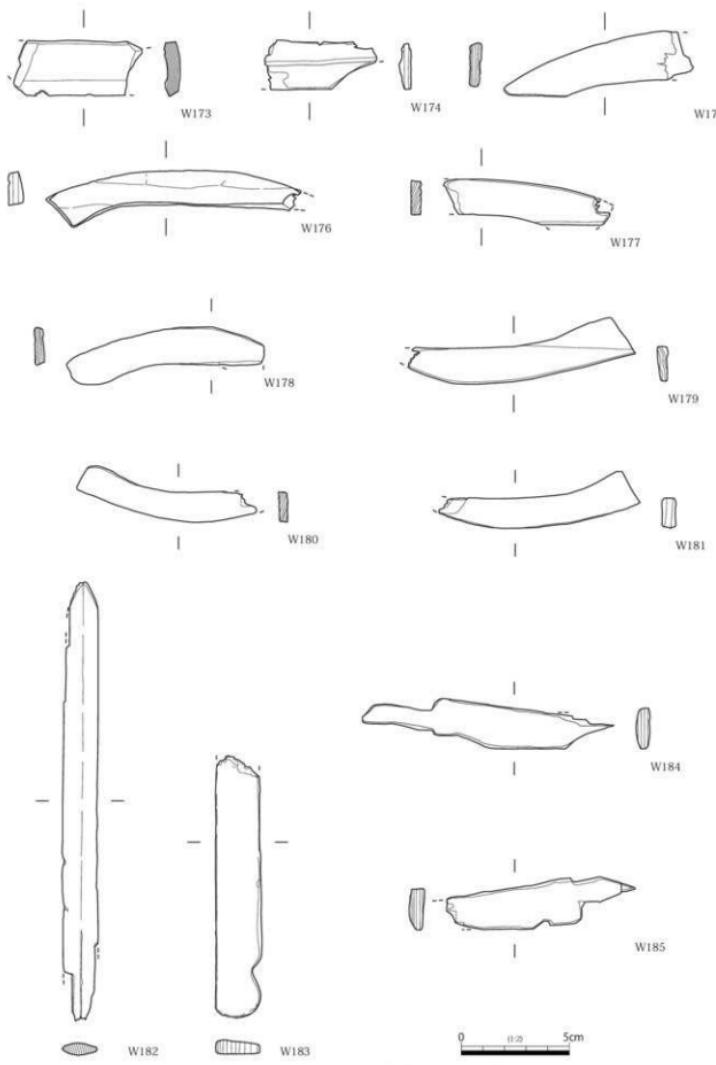
第259図 木器 人形(2)

W147・W148・W154・W155は4038溝、W156は3003溝、W152・W153・W157・W158は3006溝（W152・W153は埋土下層の馬形集中地点）、W150は第4層、W151は第4層以下、W149は第3層で出土した。なお、W147・W157・W158は樹種同定を行い、すべてスギであった。

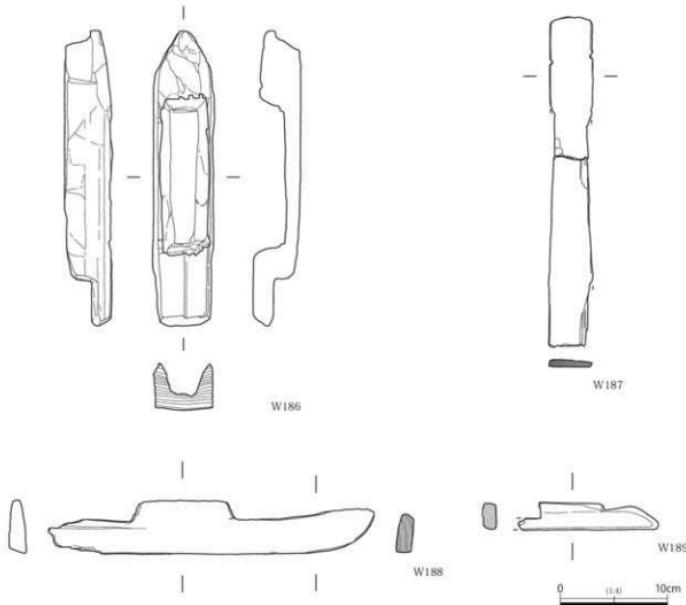
馬形 第260図 W159～W172は馬形である。鞍を作り出した「飾り馬」（W162・W167・W168・W170）と鞍のない「裸馬」（W159～W161）が見られるだけでなく、頭、頸、胴、尾の形状にバリエーションがある。W159は細長い板の長辺を切り欠いて頭と頸を、片側の短辺を切り欠いて尾を作出する簡略化した形状をとる。W160も同様の形状をとる幅広な大型品で、頭・頸を作出するための切欠きは大きくフ字状を呈し、さらに口を小さな切欠きで表現する点で差異がある。また、頭部に短い木



第260図 木器 馬形 (1)



第 261 図 木器 馬形 (2)、武器形、鳥形

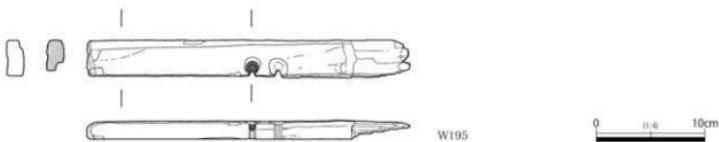
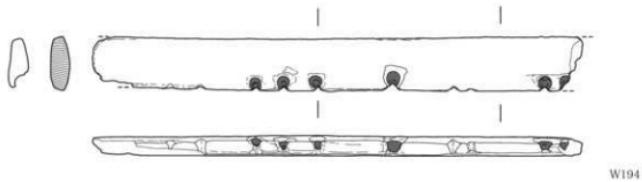
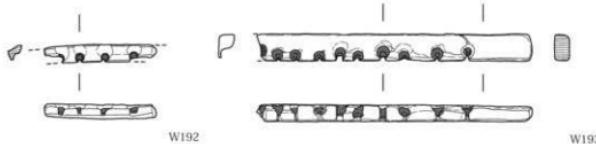
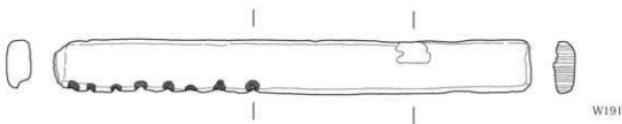
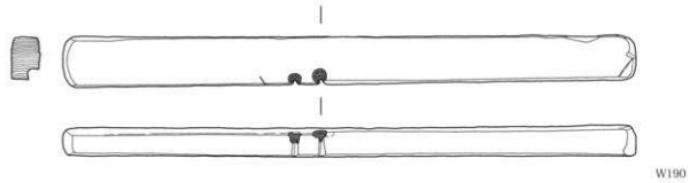


第262図 木器 舟形ほか

釘が1カ所貫通しており、目を表現したものか。その周辺から頭にかけて墨線が複数入れられているが、手綱にしては位置が不自然で意図は不明である。裏面に非貫通の孔が1カ所認められる。W161は中央の胴部から両側へ延びる頭と頸、尻と尾を一体的に作出しており、全体形が潰れたような略M字形を呈す。W162は胴から半円を描くように大きく湾曲して延びる頭をもつもので、その端に短く頭を作り出し、切欠きで口を表現している。一方、鞍を境として逆側の表現はかなり簡略化しており尾も作出されない。W163・W164は小片となっているが、W162と同じタイプと考えられる。W165は頭と口を切欠きで表現しており、残存部から推察される形状はW161に近い。W166は上半部を欠失している。W167・W168は鞍及び胴部の破片、W169は頭部の破片、W170は胴（鞍）～頸の破片、W171は胴～尻の破片、W172は頭～頸部上半の破片である。

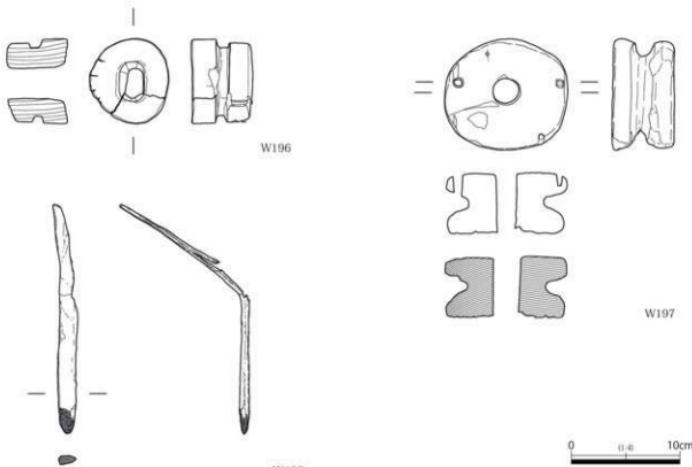
W159は4038溝、W166は4194溝、W171は4192溝、W160・W170は3003溝、W162～W164・W167～W169・W172は3006溝埋土下層の馬形集中地点、W165は第4層でそれぞれ出土した。W163・W164は樹種同定の結果スギが使われていた。

その他の形代 第261図W173・W174・W178～W181は3006溝埋土下層の馬形集中地点で人形、馬形とともに出土したもので、形代もしくは形代の一部と考えられる。W173・W174そして4221溝で出土したW175は馬形の破片であろうか。W178～W181はそれ自体で完結する形状の可能性もある。



0 10cm

第263図 木器 工具・発火具



第264図 木器 施設材・器具材、発火具

り、4221溝で出土したW176、4038溝で出土したW177も同様の製品と考える。

W182は4194溝で出土した剣形、W183は4038溝で出土した刀形である。W184・W185は側面形を表現した鳥形で、W184は4038溝、W185は第3層で出土した。

第262図W186は舟形で、角柱材を割り貫いて船槽を、両端を削り船首、船尾を作出する。樹種はスギである。W187は第2層で出土したもので、人形の可能性がある。3003溝で出土したW188、3006溝埋土下層の馬形集中地点で出土したW189は側面形を表した舟形と考えられる。

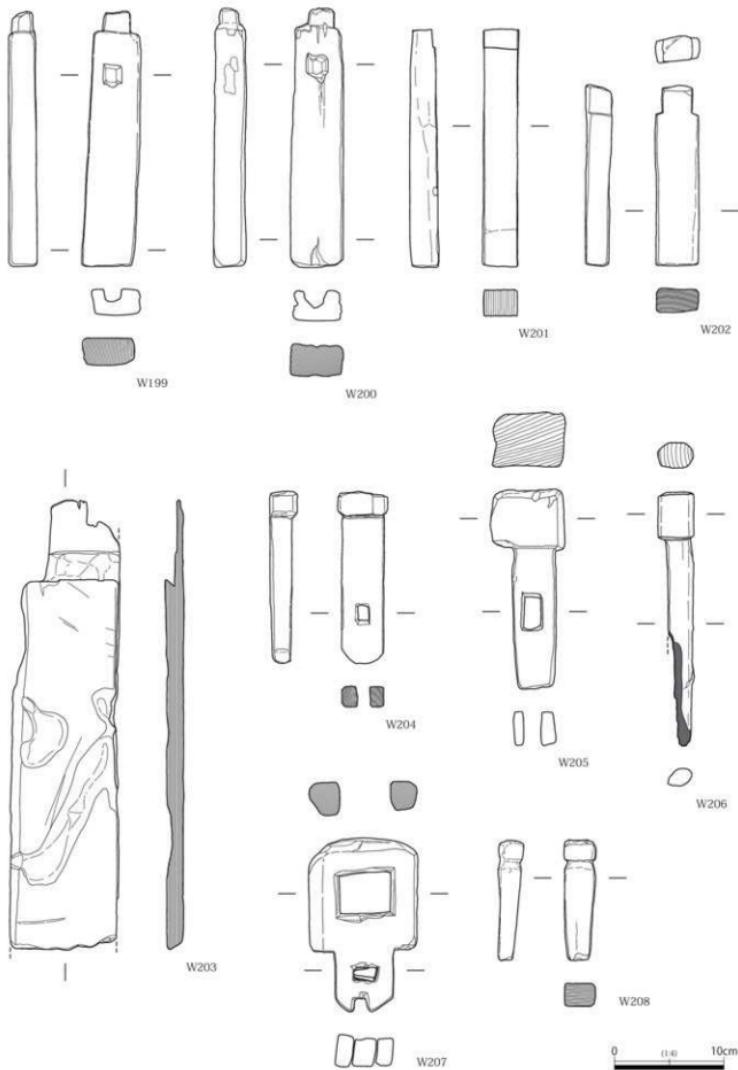
施設材・器具材（第264図、PL.180）

第264図W196・W197は滑車である。W196は長軸約8cm、W197は長軸約13cmと異なるが、紐をかける軸部分の径は約6~7cmで大差はない。W196は第4-4層、W197は3003溝で出土した。W197の樹種はスギである。

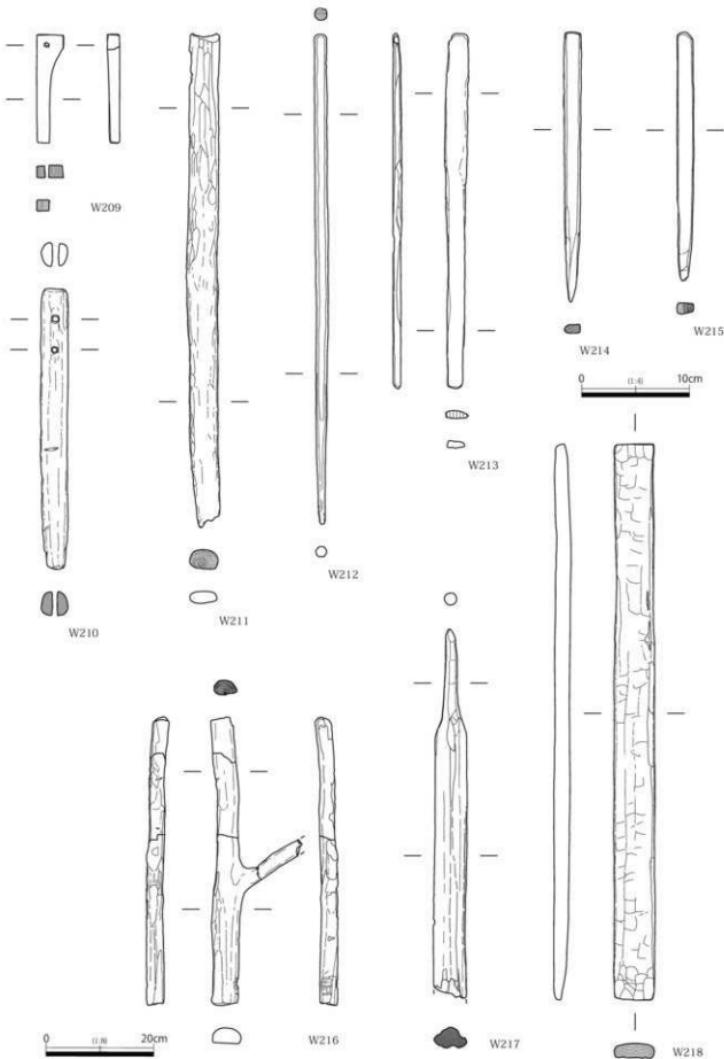
部材（第265図、PL.179・180）

第265図W199~W202は調度である机や案の脚と考えられる。W199~W202は角材の一木口に出柄を作り、W199とW200は柄の下に貫通しない方形の柄穴を1カ所あける。W199の樹種はスギである。いずれも第2-2層で出土した。4192溝から出土したW203は短辺方向に平行する断面逆台形の蟻溝をもち、遺存状況が悪いが案の天板破片の可能性がある。

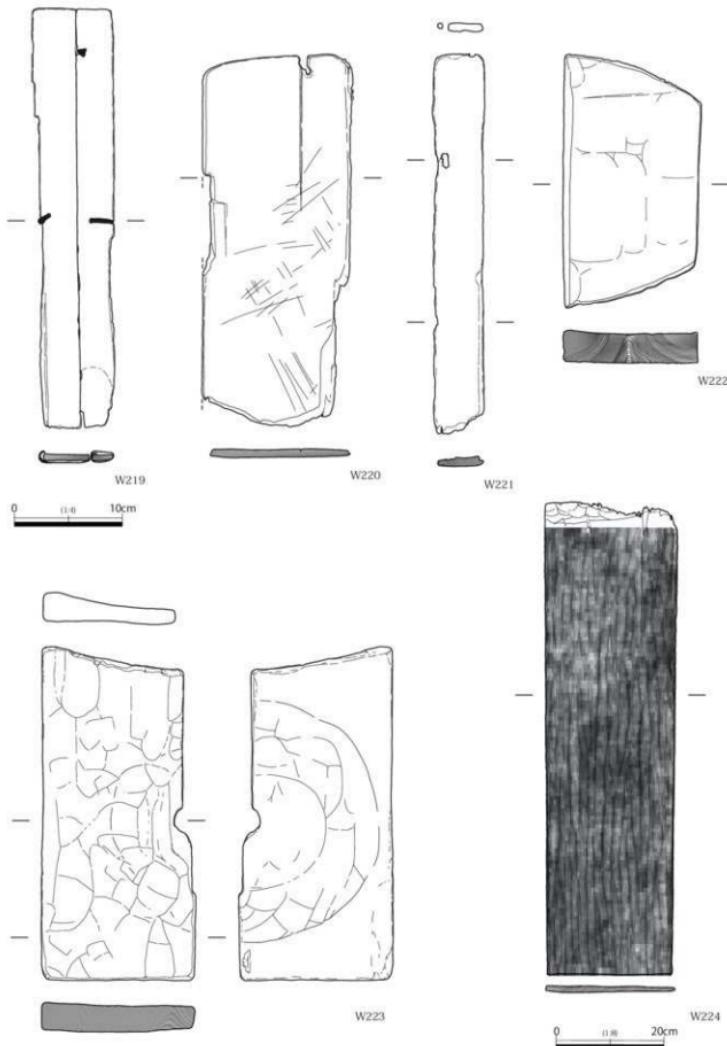
W204~W206は栓である。W204・W205は横断面が方形または長方形を呈し、頭部からやや下がった位置に柄穴をあける。W206は横断面が不整梢円形を呈し、先端が焦げている。W205はスギ製である。W207は把手である。板材の上半部中央を方形に割り貫き、下半を両端から割り出して出柄状にし、その中央に柄穴をあけて別部材を通してある。W208も栓と考えられるが、小型で留め用の



第265図 木器 部材 (1)



第266図 木器 部材 (2)



第267図 木器 部材 (3)

第VI章 3区・4区の調査成果

楔のようなものか。W204は第3層、W205は第4-4層、W206は3433溝、W207は4038溝、W208は3003溝からそれぞれ出土した。

第266図W209～第267図W223は部材の可能性があるものの、用途は不明である。

W209は丁寧な加工で、円孔を1カ所あけている。調度品につくものか。W210は断面略円形の棒状製品で、一端からほぼ等間隔で円孔を2カ所穿つ。W211は横断面楕円形で丁寧に仕上げられている。W212は細身の丸棒状製品で、火鑓杵の可能性もあろうか。W213は扁平な板状、W214・W215は角棒状を呈す。W216は広葉樹の二又に枝分かれした部分を用い、樹皮を剥いで表面を滑らかに加工している。端部に近い位置に欠き込みをもつ。W217は一方を断面円形に細く削り出しており、その先端を尖らせる。W218は最大長103cmを測る細長い板材で、両端付近が薄くなるように削り込んでいる。表面に手斧による加工痕が残る。建築材の可能性もある。W219は割れた薄板を棒皮で縦縛し補修している。W221も補修孔とみられる孔がある。W220は加工が粗く、全体が細長い長方形を呈することから曲物（折敷）の可能性は低い。W222は分厚い板材だが表面は平滑に仕上げられており、礎盤ではないと考えられる。W223は分厚い板材の一面を皿状に削り込むとともに、その裏面は相対するように半円形に削り出している。削り込まれた側の長辺中央に半円形の切欠きが認められる。W211・W216・W221は3003溝、W209・W213は3006溝、W217は3473溝、W214・W220・W223は4038溝、W210・W222は4191溝、W218は4192溝、W215は4194溝、W212は第4層、W219は第2-2層からそれぞれ出土した。

建築部材（第267～272図、PL.180～183）

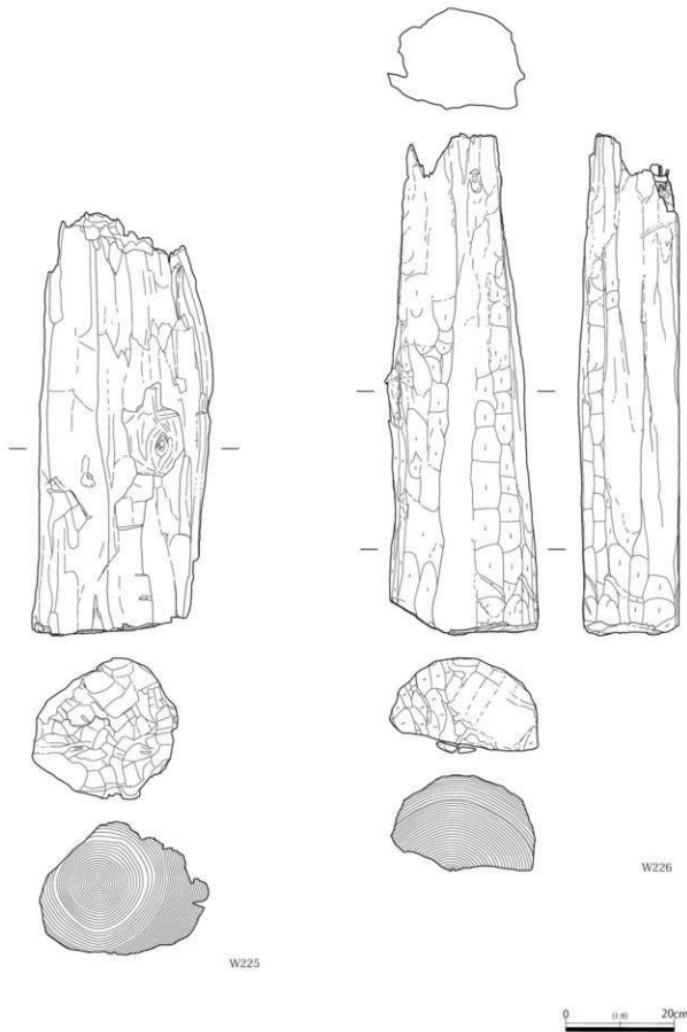
第267図W224は長方形の板材で、表面は鎚によって平滑に仕上げられており、その切削痕が明瞭に残る。床板であろう。3437流路で出土しており、古墳時代中期のものである。

第268図W225～第270図W231は柱で、W225～W228が掘立柱建物1、W229が掘立柱建物10に属する。W226・W231のみ芯去材だが、他はすべて芯持材である。樹種同定したW225・W227～W229はすべてスギであり、他も針葉樹である。4206ピットで出土したW230は底部から約6cm、3327ピットで出土したW231は底部から約20cm上にそれぞれ2カ所ずつ枘穴があけられている。

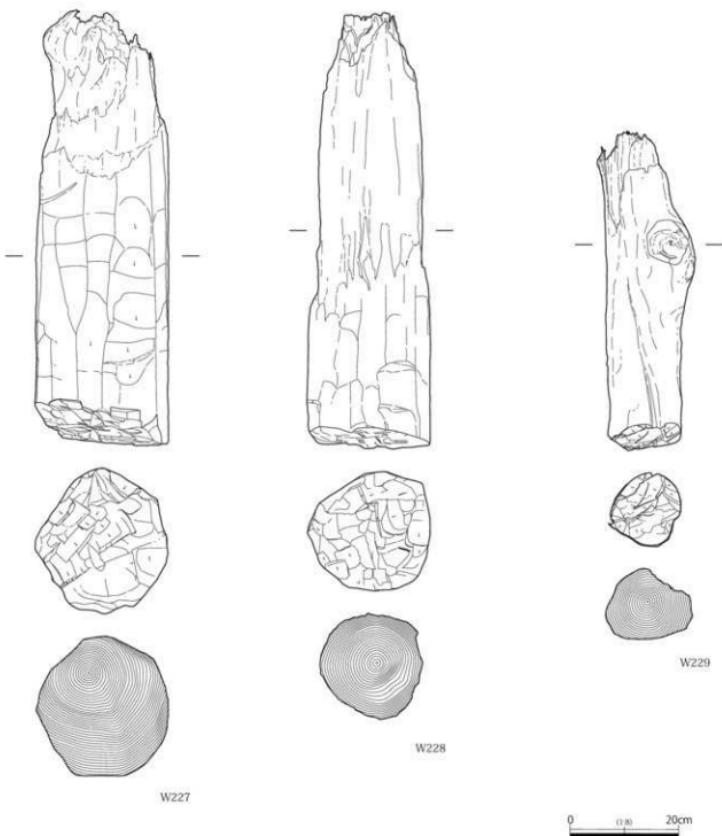
W232は第4層から出土した最大長79.6cm、最大幅45.3cmを測る板材で、一短辺は湾曲するような形状となる。その端部から約10cm内側に2カ所の枘穴を左右均等にあけている。壁板であろうか。3439ピットで出土したW233は礎板であるが、作業台のようなものを再加工して転用している。

第271図W234は蹴放しままたは楣である。短辺の片側のみ突出させるように切り出し、片面に方立板を嵌め込むための長方形の溝と扉の回転軸を入れる軸鈎孔をもつ。軸鈎孔は一つしか見られないため、片扉式である。W235は蹴放しの一端を切り落として再加工したものである。W234は第2-2層、W235は第4層で出土した。

W236～第272図W241は掘立柱建物の水平構造材（梁、桁など）と考えられる。W237は一面に多数の疵痕が認められる。W238は遺存する端部が出枘状にされており、方形の貫穴を等間隔で配すが、中央の1カ所は欠き込みとなっている。横断面形は不整な台形を呈す。W239・W240は端部の仕口は輪菫込か。W241は大型の継長板材で長方形の貫穴を複数あけ、両側面の対称位置に枘穴をもつものである。W236・W240は4038溝、W237は3003溝、W238は3438流路、W239は第3層、W241は第4層でそれぞれ出土した。

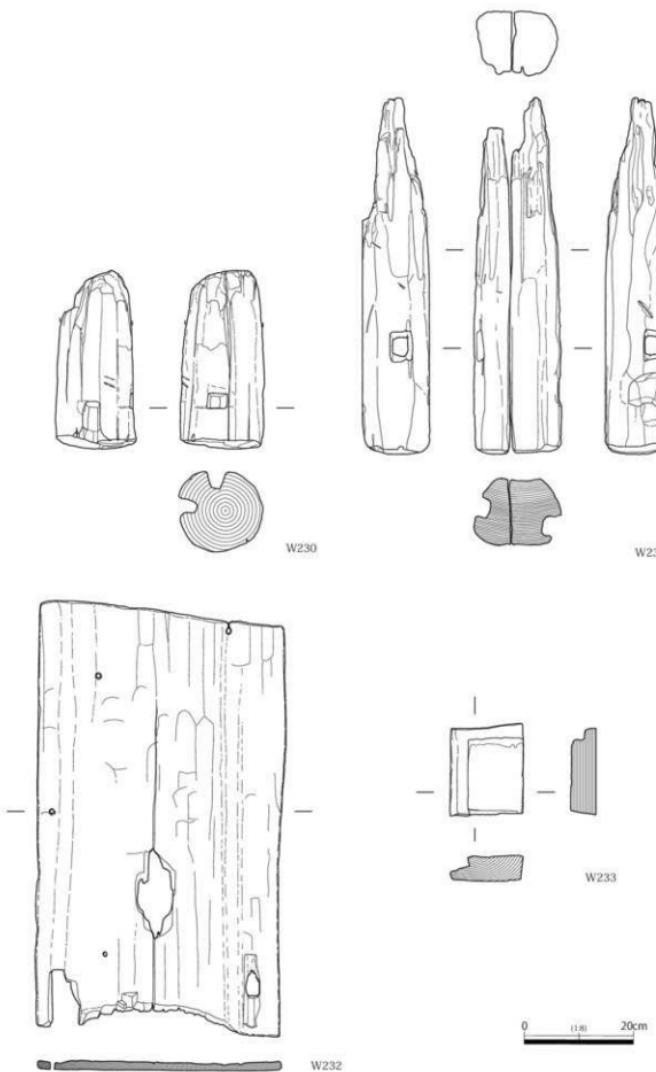


第268図 木器 建築材 (1)

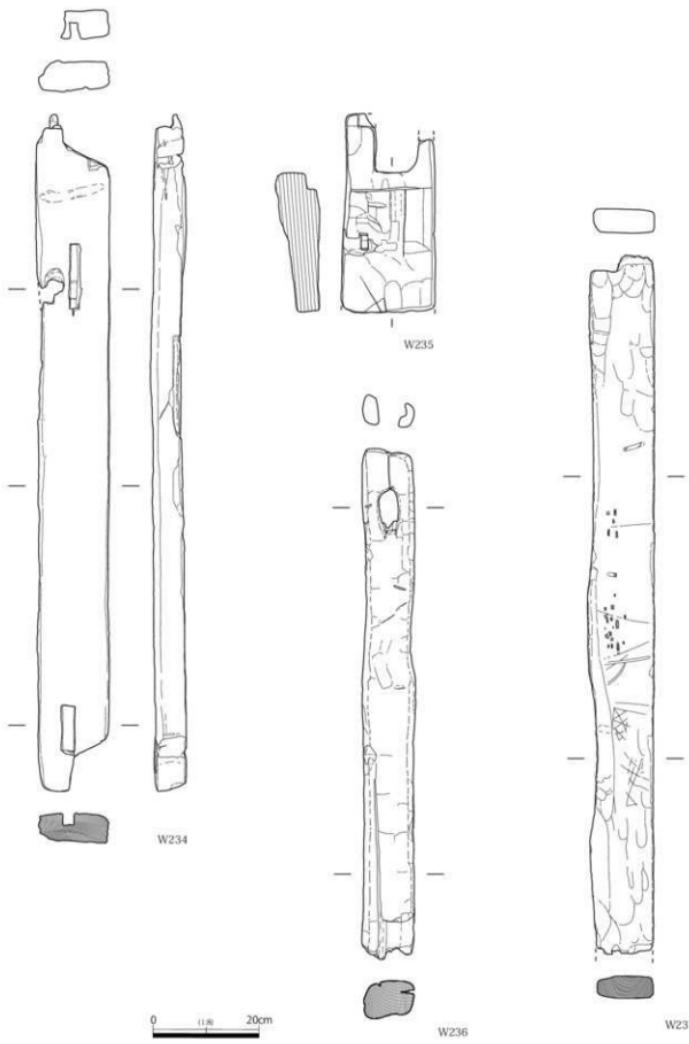


第269図 木器 建築材 (2)

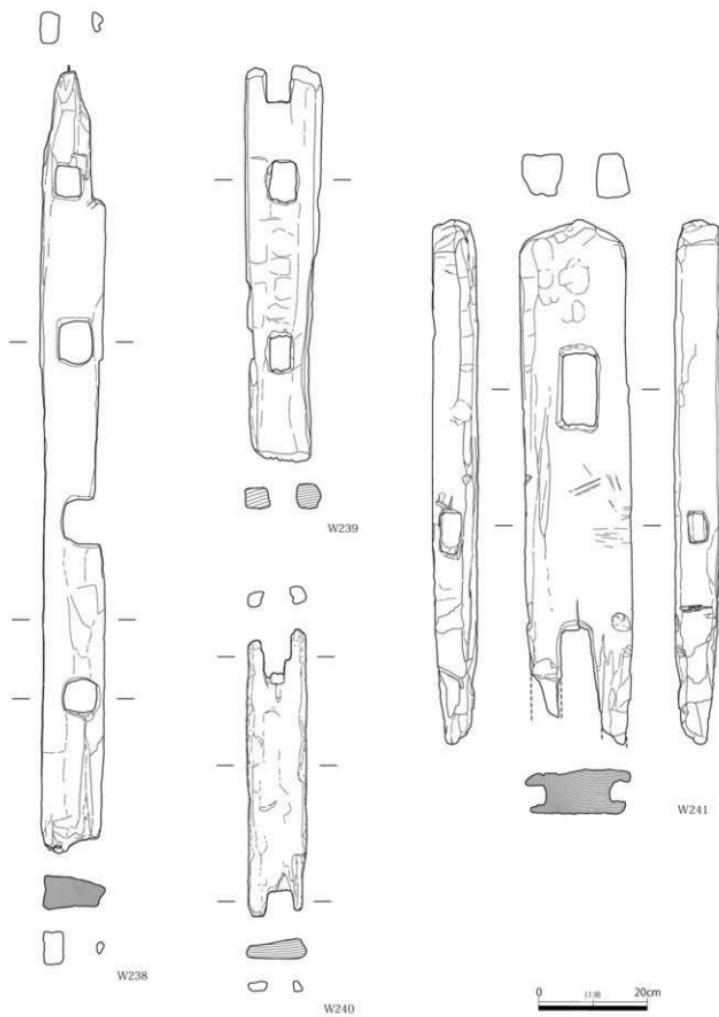
0 (1m) 20cm



第270図 木器 建築材 (3)



第271図 木器 建築材 (4)



第272図 木器 建築材 (5)

用途不明品（第273～277図、PL.178・184）

第273図W242～第276図W287は用途不明品である。

第273図W242は細い角棒状製品の両端付近を左右からわざかに抉り込み、布巻具のような形態である。W243・W244は針状、W245は網針状の製品である。W246は薄く細長い板状製品の一端を主頭状に作出し、円孔をあけている。W247は亜鉛状の平面形をもち、両側に小円孔をあけている。別製品と組み合わせる部材か。W248は札状の製品で一端を突出させる。W249は一側縁に切欠きをもつ。W250は檜扇状の製品であるが、厚さが3mmあるため異なる性格のものか。W251は有頭棒で、全長5.3cmの小型品である。W252は円筒状に加工した製品の内側に細枝を軸として入れている。W253は両端から円孔を割りソケット状にしている。矢の中柄とも考えられる。W254～W259は棒状品で、W255やW259のように先端を尖らせるものもある。W260は円柱状製品の一方を削り込んで有頭状にしており、木鍤の一種であろうか。

第274図W261は丸棒の一端をさらに細く削り出した錐または整状の製品とも考えられるが、先端が焦げて欠失している。W262は円柱の一端をやや細く削り出し、先端からV字状の溝を2条入れている。W263は横断面円形で何かの柄のように見えるが、欠失している部分に長方形の枘穴が確認できるため、別製品と組み合わせるものであろう。樹種はマツ属である。W266は芯去材を用い、先端からやや下がった位置に両側から欠き込みを入れている。W267は円錐形を呈す身の上部を削り出して紐掛けと考えられる頭部を作っており、鍤のようなものか。W270は表面が丁寧に仕上げられており、枘穴をもつため、別製品と組み合わせて使用するものである。W271～W274は形状もしくは何らかの製品の一部か。第275図W275・W276は針葉樹を削り込んで加工しているが、遺存する形状から見て槽ではないと判断した。W279は容器の把手の可能性がある。W281～W283は自在か。

第276図W284は円筒状製品の身に枘穴が3カ所見られ、一端は細く削り出している。加工はやや粗雑である。W285・W286は接合しないが形態及び木取りからすれば同一の製品だった可能性がある。W287は側面に欠き込みをもつ端材である。

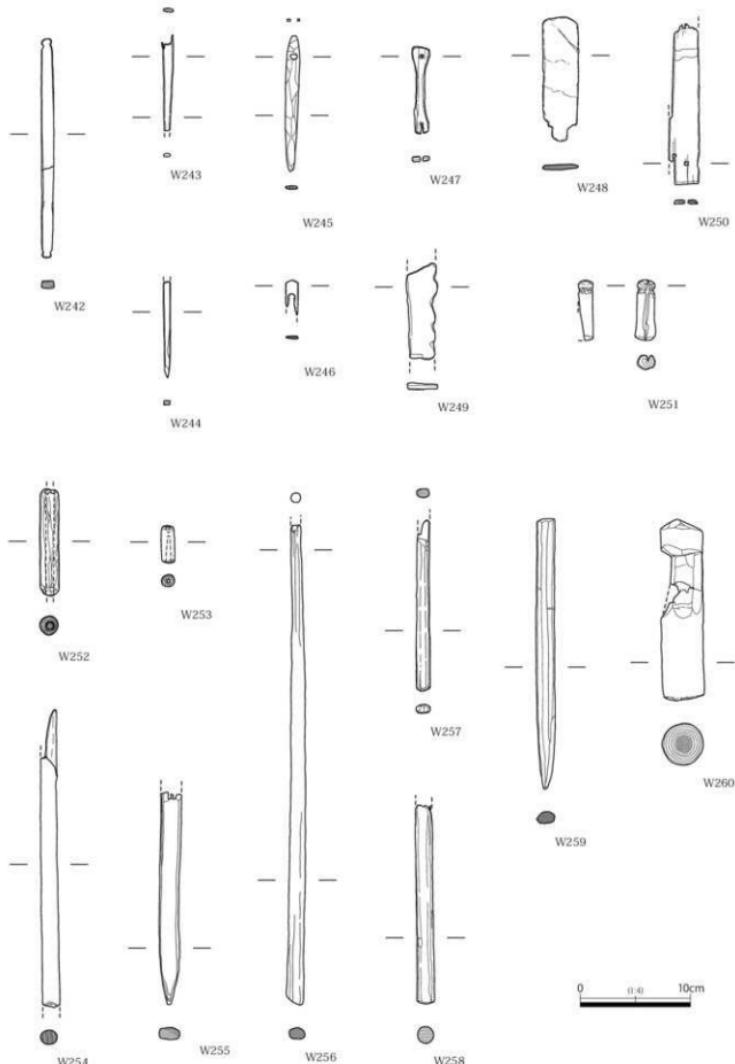
W244・W268・W271・W273・W281は3006溝、W250・W254～W257・W259・W264・W272・W275・W277・W278は3003溝、W269は3002集石、W258は3014溝、W276は3005集石、W267・W274は4038溝、W247・W287は4221溝、W279は4191溝、W261は4192溝、W282は4044土坑、W251は4040ピット、W248・W249・W253・W263・W283は第4層、W252は第43層、W245・W262は第44層、W246は第41層、W243・W260・W265・W266・W280・W284～W286は第3層、W242は第22層でそれぞれ出土した。

また、第277図W288～W291は墨痕が確認できないが木簡状を呈す木製品である。W288・W289は表裏面とも平滑で、上端及び左右両辺削り、下端は切り折りされている。W289には表面に刃物痕が多数残る。W290は表面が削り調整によって平滑になっている。裏面は未調整で、上端を主頭状に加工しており、左右両辺は削り、下端は割れである。W291は長方形の材の左右を切欠き荷札木簡状を呈す。上端及び左辺削り、右辺及び下端割れである。

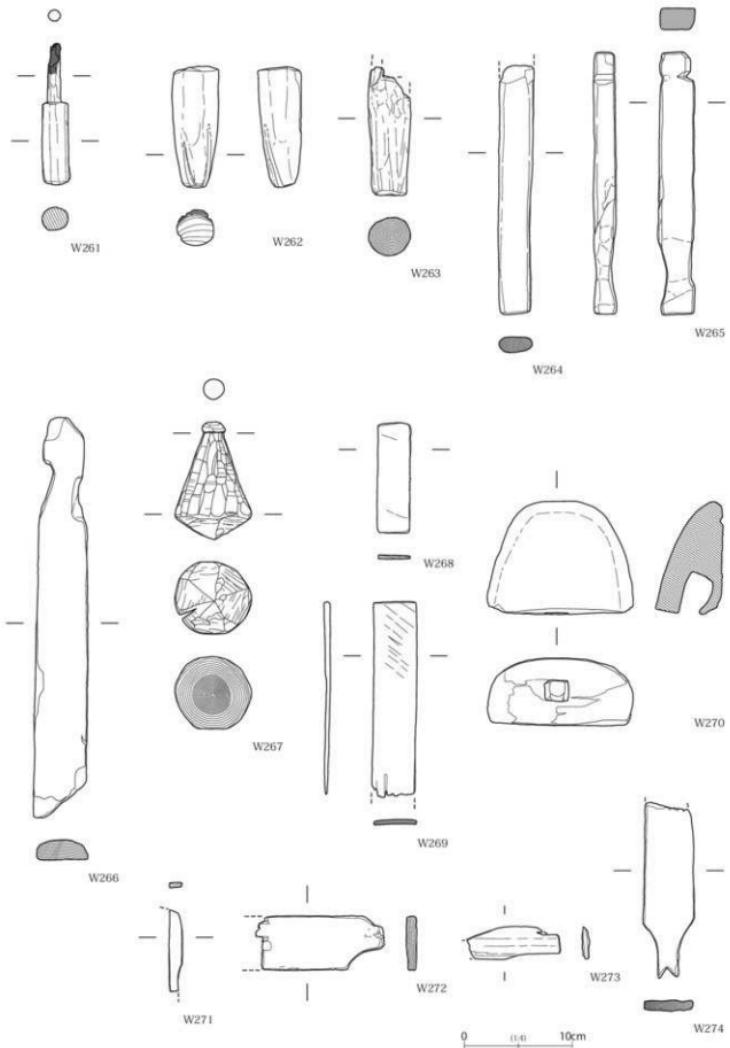
W288～W290は4038溝、W291は第22層から出土した。

かご（第278図、PL.39）

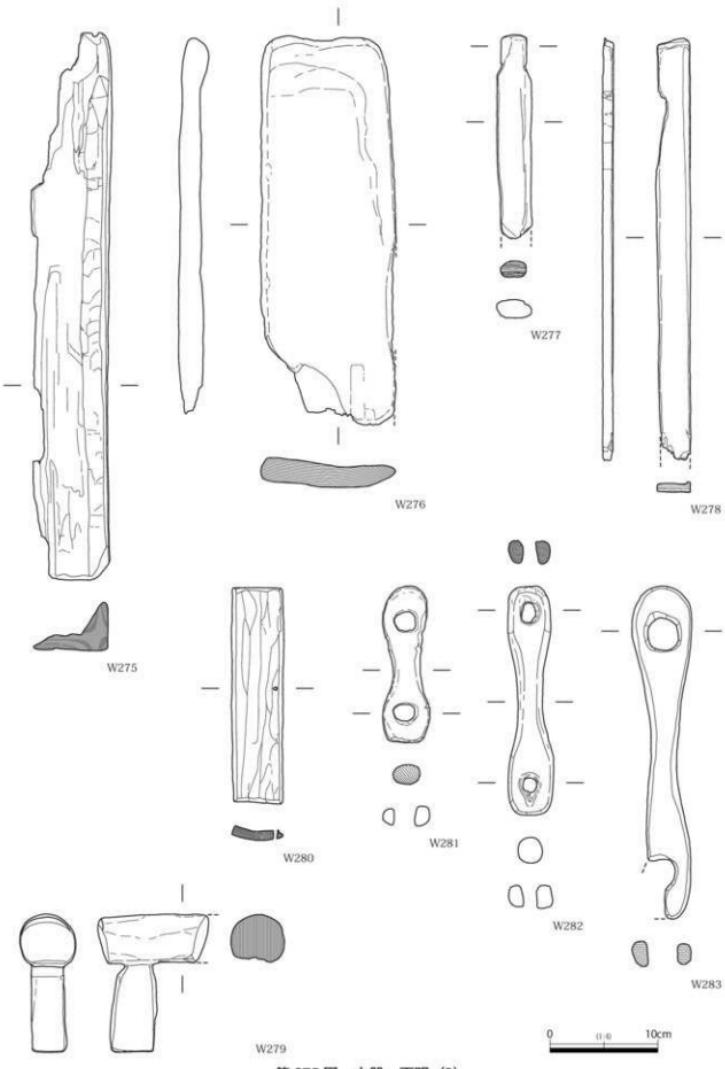
3006溝底面で出土した。底部は方形の網代底で、2本1単位の2本飛び網代、体部は1本1単位の2本飛び網代で編まれる。素材はマタタビ属であった（第VII章第6節参照）。



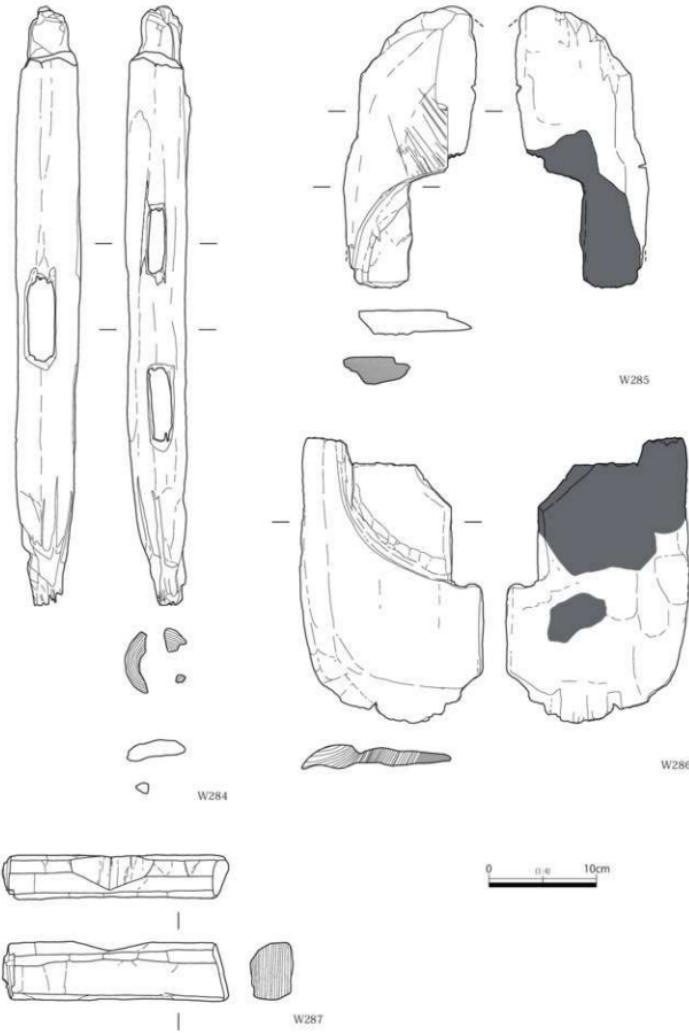
第273図 木器 不明 (1)



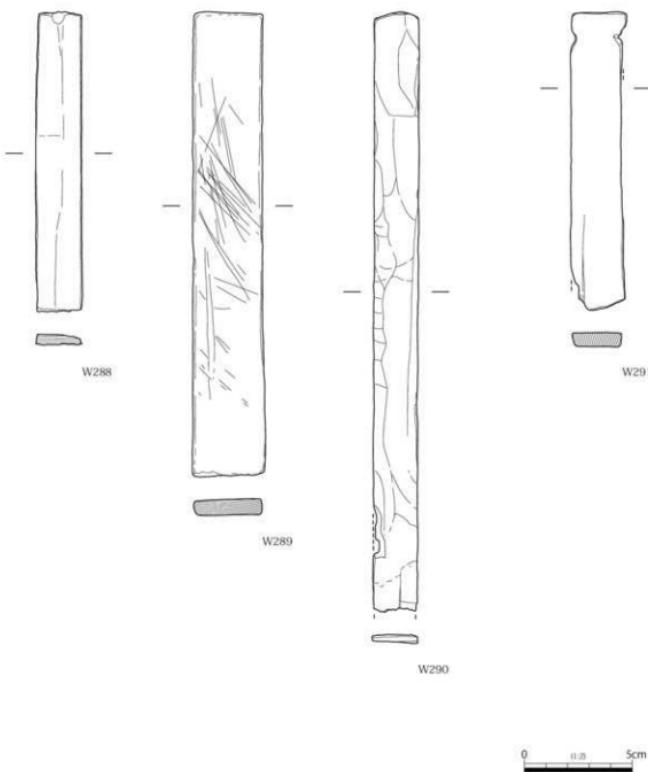
第274図 木器 不明 (2)



第275図 木器 不明(3)



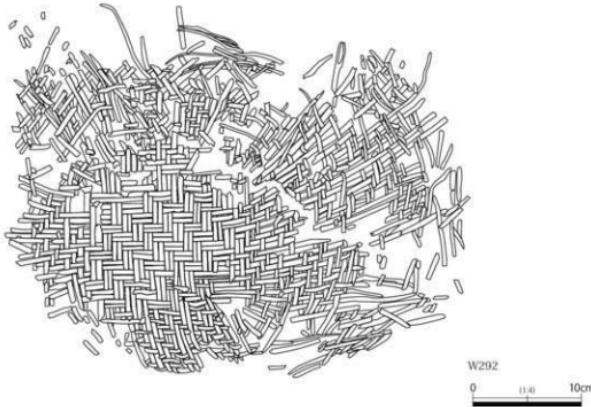
第276図 木器 不明 (4)



第277図 木器 不明(5) 木筒状木製品

<参考文献>

町田章・上原真人編 1984『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所



第278図 木器 かご

(4) 金属器、鉄関連遺物

銅製品（第279図、PL.185）

M3は耳環で、腐食の進行により銅地が露出している。4038溝埋土下層から出土した。M4は環状銅製品で、刀子の柄頭または籠の可能性がある。4038溝埋土最上部で出土した。

M5～M8は銅製腰帶具で、M5・M6は巡方、M7は丸柄、M8は鉈尾である。M5は $1.9 \times 21\text{ cm}$ と小型品で、大孔・脚鉢式〔田中2003、銅製腰帶具の分類は以下同じ〕に分類される。表裏金具が残り、脚鉢が2カ所認められる。それに対してM6は横長で孔も細長く、「長方形」に分類されるものである。表裏金具とも残り、表面及び側面に黒漆が遺存する。M7は表金具のみで、細長孔・脚鉢式である。M8は裏金具で外鉈が4カ所見られ、銅製鉈尾II類・外鉈式にあたる。M5は3003溝、M6は第4-1層、M7・M8は3006溝で出土した。

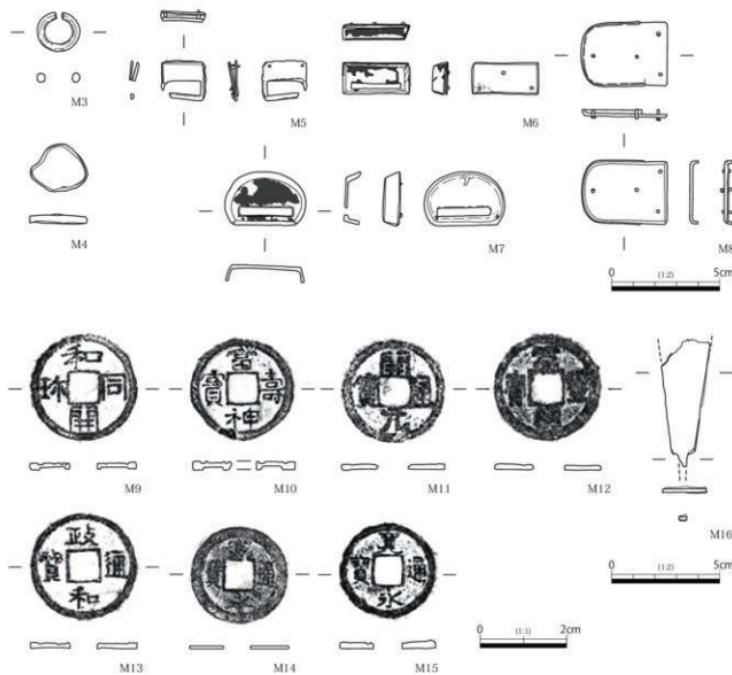
M9～M15は錢貨である。M9は和同開弥で、和同開弥A、「開」の門構えの上端が開く「新和銅」に属する〔奈良国立文化財研究所1974〕。4038溝埋土最上部で出土した。M10は富壽神寶で、富の冠が「ム」となり、第4画が加わることから富壽神寶Bと考えられる〔前掲文献〕。3006溝で出土した。M11は開元通寶で、背面上方に仰月の鑄印があり、唐錢・非紀地錢（会昌開元）と考えられる〔永井2002〕。M12は元豐通寶、M13は政和通寶、M14・M15は寛永通寶である。M11・M12は第1層、M13は第2-2層、M14・M15は客土及び表土から出土した。

鉄製品（第279図、PL.185）

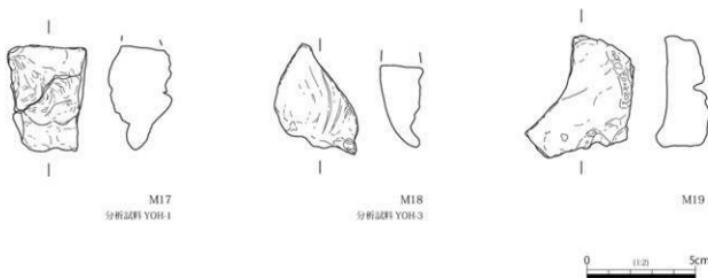
第279図 M16は鉄鎌で、鎌身上部を欠失しており、整頭式または方頭斧箭式と考えられる。第4-2層で出土した。

鉄関連遺物（第280・281図、PL.186・187）

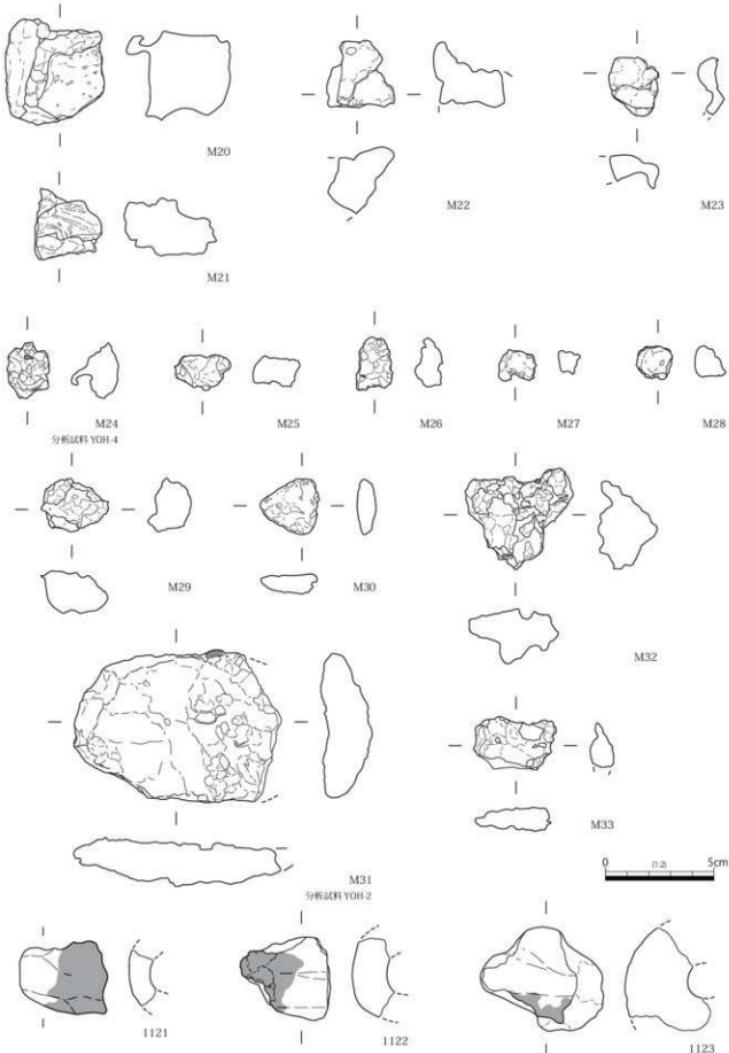
第280図 M17～第281図 M22は流出溝滓またはその可能性をもつ鉄滓である。M17・M18は上面に細かな流れ皺が確認できる。M17は2片に割れており、割れ口を見ると上面表皮直下の気孔が肥



第279図 金属器



第280図 鉄門連遺物 (1)



第281図 鉄関連遺物 (2)

大している。下面是舟底状だが、上手側で不規則な凹凸がある。M18は下面是平坦だが土砂を噛み込んで凹凸が目立つ。M17・M18は分析調査を行っており、砂鉄を始発原料とする製鍊滓と推定された（分析結果に関してはすべて第VII章第5節参照）。M17～M19は3162溝、M20は第2層以下、M21は第3層、M22は第4層からそれぞれ出土した。M23は流動滓で、第4層で出土した。

M24～M28は長さ及び幅が2cm前後で同様の外観をしており、当初鍛冶滓と考えたが、M24を分析調査した結果、炉内滓と推定された。

M29・M30は鍛冶滓、M31～M33は腕形鍛冶滓である。M31は平面不整梢円形を呈し、右側部が破面となる。上手側部、下面を中心に木炭を噛む。下面には中小の気泡が目立つ。分析調査の結果、砂鉄を始発原料とする製鍊鍛冶滓と考えられる。M24～M28は第4-2層、M29は3433溝、M30は第2-2層、M31・M32は3006溝、M33は3120ピットからそれぞれ出土した。

1121～1123は輪の羽口である。1121は外面が被熱、溶融して白色のガラス質滓が付着している。1122・1123にも変色した被熱部が認められ、1123は厚手で他の2点より大型だが、内径は約2cmと細い。

<参考文献>

- 田中広明 2003『地方の豪族と古代の官人』KASHIWA 学術ライブラリー 01、柏書房
町田 章編 1974『平城宮発掘調査報告VI 平城京左京一条三坊の調査』奈良国立文化財研究所

第4節 出土遺物－文字資料－

(1) 木簡

3区・4区では、計19点の木簡が出土した（第282～286図、表7、PL.188～196）。中世以降に比定される17号～19号木簡（W309～W311）を除き、他はすべて古代の木簡である。出土遺構別に見ると、3006溝が7点と最も多く、3003溝が4点、4038溝が3点となり、大半が建物群の西側、南側を区画する溝から出土している。

なお、木簡の釈読及び評価は、独立行政法人国立文化財機構奈良国立文化財研究所（史料研究室）による受託調査研究の成果に基づいている。木簡の釈文記載様式や型式番号等は『木簡研究』（木簡学会編）の記載様式、分類に準じる。釈文の漢字は現行常用字体に改めたが、「廣」「應」は正字体を使用し、異体字は「マ」（部の異体字）のみ使用した。

遺物図版において、木簡に続くアラビア数字は木簡の長さ（文字の方向）、幅、厚さを示し（単位はmm）、欠損している場合の法量は括弧付きで示した。法量に続く3桁の数字が木簡の型式番号である。

1号木簡及び12号木簡については解剖学的観点からの樹種同定を行っており、それ以外の木簡は表面に表れた材の特徴を実体顕微鏡で観察する方法により樹種を判定している。

1号木簡（W293）

〔謹_{ムカシ}〕

・「恐_ミ奉御前□白龍命

・「使孔王部直万呂午時

4228ピットで出土しており、出土層位は上半部が埋土上層、下半部は底面付近である。文書木簡。上端・左右両辺削り、下端折れ。スギ・柘目。

「某（御）前（謹）白」（某の〈御〉前に〈謹みて〉白す）の書式で書き出す、いわゆる前白木簡である。この書式は、大宝令の施行により解・辞・牒などの様式が整えられる前の、7世紀末を中心とした時代に多用されたもので、口頭伝達と密接にかかわるものとされる。

「恐_ミ奉」は、藤原宮木簡第11号木簡にみえる「恐_ミ受賜申大夫前」の事例を参照すると、「奉」は「受賜」に対応し「うけたまわりて」と読むことが理解できる。「龍命」は前白木簡によく見える語で、「寵命坐」として「上級者の命令をお伺いして」程度の意味で用いられ、要件・品目などが続く場合もある。類例は、奈良県藤原宮跡出土木簡（8号）、奈良県飛鳥京跡菟池出土木簡（4号）、埼玉県小敷田遺跡出土木簡（1号）、滋賀県西河原森ノ内遺跡出土木簡（11号）に知られるほか、平城宮跡出土木簡（11367号）に「寵大命」とする削屑がある。

裏面の「直」は孔王部氏の姓（かばね）とも見られるが、これまでに知られている孔王部氏の姓は連・造・首及び無姓のみで「孔王部直」の事例は知られておらず、「直」は名の一部で「直万呂」（じき（なお）まろ）の可能性がある。使者名に続く「午時」は類例から見て発信時刻と考えられる。午時は暦の十二時を中心とした前後2時間というが、あるいは「お昼頃」程度の使われ方かもしれない。「午時」の下数文字分は表面が調査時の傷によって剥離して失われている。

2号木簡（W294）

皮之□

4038溝で出土した。木簡の種別は不明。上下両端折れ、左右両辺削り。スギ・柘目。



第282図 木簡 (1)

第VI章 3区・4区の調査成果

「皮」の字体は、7世紀木簡のそれに類似するもので、例えば奈良県石神遺跡出土木簡の「奈尔皮」(奈良国立文化財研究所編 2003『飛鳥・藤原宮跡発掘調査出土木簡概報』17所収)の「皮」によく似る。万葉仮名を表したものであろう。

なお、この木簡は1号木簡とは直接は接合せず厚みもやや異なるが、法量、材質、木目、字体から見て同一木簡の断片の可能性がある。

3号木簡 (W295)

「□ (天地逆ノ絵ヲ抹消。)
」

4038溝で出土した。木簡の種別は不明。四周削り。スギまたはヒノキ科・板目。

天地逆の絵を抹消しているか。1文字目は「収」あるいは「後」の可能性がある。

4号木簡 (W296)

「□ □」

4038溝で出土した。木簡の種別は不明。上端切断の後粗い削り、下端二次的整形、左右両刃削り。ヒノキ科・板目。わずかに墨痕が残る。

5号木簡 (W297)

(追筆)

「『孔王部淨主廿四 繼廿八 八 淨成 十四』
「大大」因幡國高草郡刑マ郷戸主刑マ□繩孔王部廣公十六」

(追筆)

掘立柱建物9の3450ピットで出土した。記録木簡。上下両端切断、左刃削れ、右刃削り。スギ・板目。

「因幡國高草郡刑部郷」という国・郡・郷名や、人物の姓名、数字が記されている。□は、「礼」「私」「和」の可能性がある。郷名に続く人名(孔王部□繩)は同郷在住の戸主、それに続く人名(孔王部廣公ほか4名)はその戸口と考えられ、数字は年齢であろう。

当遺跡が所在する良田地域は、「和名類聚抄」によると因幡國高草郡に組み込まれている。ただ、刑部郷については、良田地域より西側の鳥取市松原・吉岡地域に比定されており、遺跡が位置する良田地域の帰属は明らかでない。

本木簡は記録木簡(歴名)でありながら国名から書き出されている点がやや異質で、2箇所認められる追筆がどの段階のものであるかも不明である。

6号木簡 (W298)

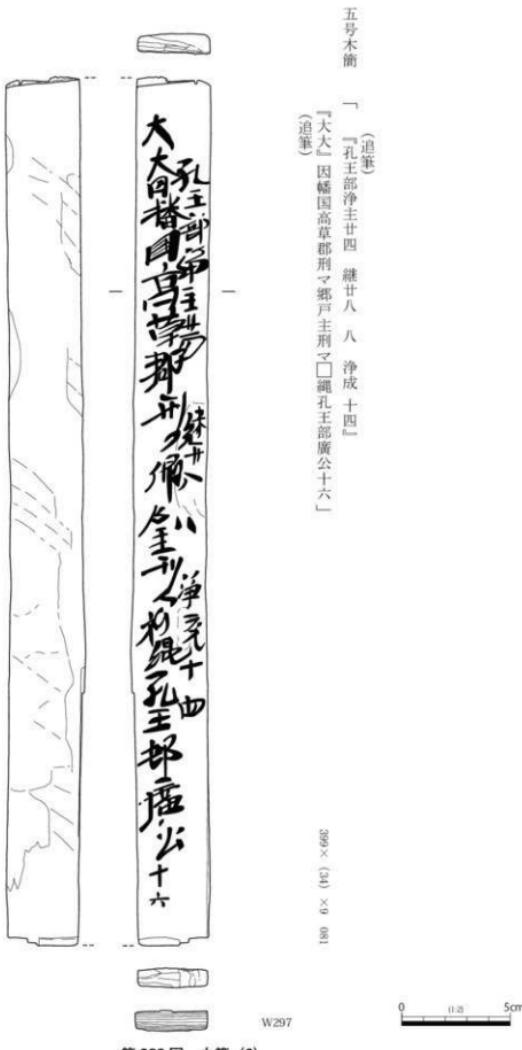
・ □□□□□□白益
・ □□□□□

3006溝で出土した。記録木簡か。上下両端折れ、左刃削れ、右刃二次的削り。スギ・板目。

表面3文字目は土偏の文字、6文字目は合点であろうか。白益はそれぞれ旁のつく文字となる可能性もある。

7号木簡 (W299)

・ □公足百弔□
・ □日子



第283図 木簡 (2)

第VI章 3区・4区の調査成果

3006溝で出土した。記録木簡か。上端二次的切断、下端折れまたは切断、左右両辺削り。針葉樹・柾目。

表面6文字目は数字または「束」などの単位であろう。

8号木簡 (W300)

- ・□九升四合 □
- ・□ □

3006溝で出土した。帳簿木簡。上端折れ、下端切断、左右両辺削り。スギ・柾目。

表面6文字目は「米」「束」「末」などの可能性がある。なお、8号木簡と9号木簡は寸法や木取りのみならず木目の入り方についても共通性が認められたため、一資料につき3カ所で年輪幅を計測し、おのおの平均化して得た数値データに基づいて年輪幅の推移を見たところ、その変動もよく一致していた。よって両者はもとは一連のものであったか、同じ原材から製作された可能性が高い。

9号木簡 (W301)

- 〔斗.〕
- ・□□三升一合 □
- ・□□□ □

3006溝で出土した。帳簿木簡。上端折れ、下端切断か、左右両辺削り。スギ・柾目。

表面1文字目は数字であろう。

10号木簡 (W302)

- ・「訟申事追□」
〔延.〕
- ・「□不□得符
□日 □」
〔廿.〕

3003溝埋土下層で出土した。文書木簡。上端切断、下端二次的削り、左右両辺削り。ヒノキ科・板目。

裏面1文字目は「仍」「承」の可能性がある。「延ぶるをえざれ」と読むか。

11号木簡 (W303)

- 〔今.〕
- ・「□□□□」
〔急進.〕
- ・「□□□□」

3006溝で出土した。文書木簡か。上端削り、下端折れ、左右両辺削れ。ヒノキ科・板目。

12号木簡 (W304)

- ・磨磨国播国
- ・□ □

3003溝で出土した。習書木簡。上端削れ、下端切断、左右両辺削り。ヒノキ・板目。

「磨」の筆跡はやや太くしっかりとしているが、それに対し「国」「播」は細く小さい。裏面は二次的な削りによって文字が消されており、わずかに墨痕が残る。



第284図 木筒 (3)



第285図 木筒 (4)

13号木簡 (W305)

「□マ吉在」

3006溝で出土した。付札木簡か。上端・左辺削り、下端切断、右辺削りか。スギ・板目。

左右両辺の下部は斜めに削り。下端は二次的削りの可能性がある。1文字目は「同」か。

14号木簡 (W306)

- ・□□□□□
- ・□ □ □

3003溝で出土した。木簡の種別は不明である。上端折れ、下端切断、左右両辺割れ。スギ・板目。

墨痕は明瞭ながら割れによって大部分を欠失しており、判読できない。

15号木簡 (W307)

- ・□□□□
- ・□

3006溝で出土した。木簡の種別は不明である。上端折れ、下端・左辺削り。右辺割れ。針葉樹・板目。

下端は二次的削りか。天地逆の可能性がある。

16号木簡 (W308)

□

3003溝で出土した。木簡の種別は不明である。上下両端折れ、左右両辺割れ。スギ・板目。

わずかに1カ所墨痕が確認できる。

17号木簡 (W309)

「元應元年

4区第2-2層で出土した。木簡の種別は不明である。上端・左右両辺削り、下端折れ。スギ?・板目。

当遺跡で出土した木簡のうち年紀のあるものは17号木簡のみで、元應元年は1319年である。

18号木簡 (W310)

「□ □

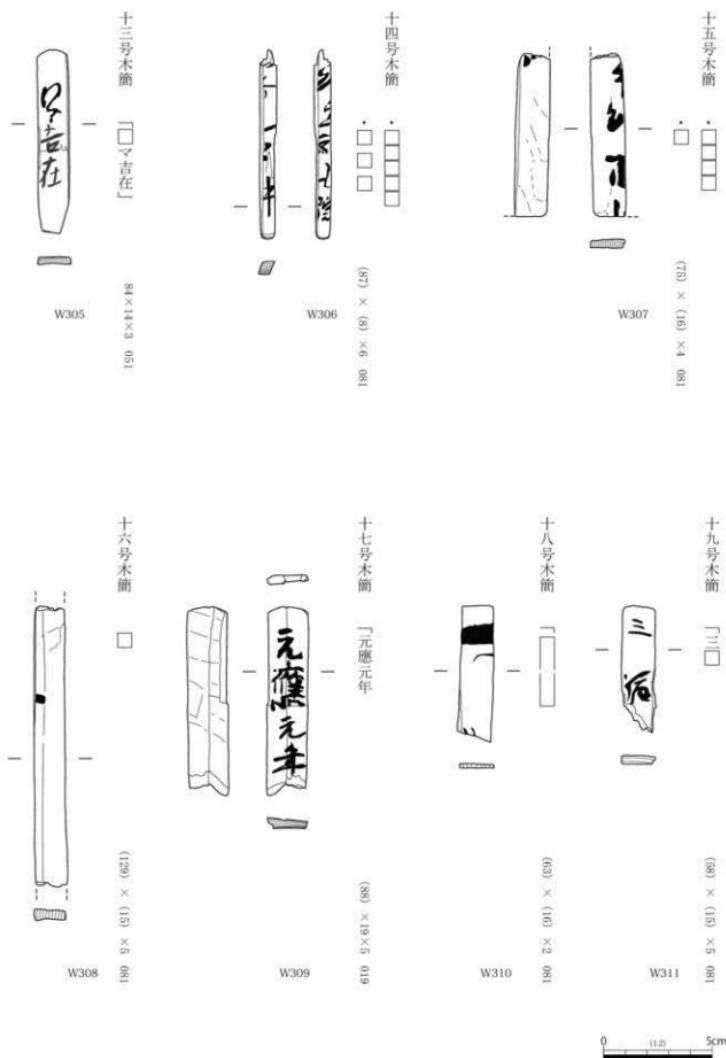
4区第2-2層で出土した。木簡の種別は不明である。上端削り、下端折れ、左右両辺二次的削れ。スギ・板目。

太さの異なる墨線が横方向に走っており、文字ではなく墨画の可能性がある。

19号木簡 (W311)

「三□

4区第2-1層で出土した。木簡の種別は不明である。上端切断、下端折れ、左右両辺削り。スギ・板目。



第286図 木簡 (5)

表7 木簡一覽表

植物 番号	種別	地区 出土遺構・層位	法線 (mm) () は残存値			木筋 型式	樹種	木取り	調整	説文
			長さ	幅	厚さ					
1号 W293	文書木箋	4区 2D-6b 4228 ピット	(187)	24	6	019	ヒノキ科	板目	上端・左右両辺削り、 下端折れ	〔譜〕 -「恐・奉禪圓白龍命」 -「佛乳王部直万呂半牛」
2号 W294	不明	4区 2C-7b 4038 滝	(52)	23	4	019	スギ	板目	上下端削れ、左右両辺 削り	度之□
3号 W295	不明	4区 2C-7i 4038 滝	86	33	3	065 (左または 右ノキ)	針葉樹	板目	四則成形	〔天地逆ノ松竹梅〕 □
4号 W296	不明	4区 2C-7b 4038 滝	(260)	25	5	051	ヒノキ科	板目	上端折れ、下端削り、 左右両辺削り	〔 〕
5号 W297	記録木箋	3区 2D-7c 組立柱建物 9 (2450 ピット)	399	(34)	9	081	スギ	板目	上下端削れ、左端削り、 右端二次の削り	〔 道筆〕 -「孔王御淨主廿四 繁廿八 八 清浄 十四 〔大〕大國高麗高草郡射々郡ノ主 〔道筆〕 箭マ・圓孔王御公十六」
6号 W298	記録木箋?	3区 2D-8e 3006 滝	(115)	(23)	5	081	スギ	板目	上端折れ、左端削り、 右端二次の削り	-□□□□□白毫 □□□□□〔 〕
7号 W299	記録木箋?	3区 2D-8e 3006 滝	(52)	(21)	4	081	針葉樹	板目	上端二次の切斷、下端 折れまたは切斷、左右 両端削り	-□公足百疊□ -□口子
8号 W300	輪薄木箋	3区 2D-8e 3006 滝	(73)	17	4	019	スギ	板目	上端削れ、下端切斷、 左右両辺削り	-「升舟四合 □」 -〔 〕
9号 W301	輪薄木箋	3区 2D-8e 3006 滝	(106)	17	5	019	スギ	板目	上端折れ、下端切断、 左右両辺削り	〔牛〕 -□□三井一合 □ -□□□ □
10号 W302	文書木箋	3区 2D-7e 3003 滝	150	60	7	011	ヒノキ科	板目	上端切斷、下端二次の 削り、左右両辺削り	〔記事道口〕 〔基〕 -□□□□□博脊 □日 □
11号 W303	文書木箋?	3区 2D-8e 3006 滝	(67)	(13)	5	081	ヒノキ科	板目	上端削れ、下端折れ、 左右両辺削れ	〔 〕 -□□□□ 〔急進〕 -□□□□
12号 W304	背景木箋	3区 2D-6e 3003 滝	(136)	23	8	081	セビノキ	板目	上端折れ、下端切斷、 左右両端削り	背景木箋同 -〔 〕(文字数等不明)
13号 W305	付札木箋?	3区 2D-8e 3006 滝	84	14	3	051	スギ	板目	上端・左端削り、下端 切斷、右端削りか く	〔□マ吉在〕
14号 W306	不明	3区 2D-5e 3003 滝	(87)	(8)	6	081	スギ	板目	上端削れ、下端切斷、 左右両端削れ	-□□□□□ -□ □ □
15号 W307	不明	3区 2D-8e 3006 滝	(75)	(16)	4	081	針葉樹	板目	上端削れ、下端・左端 削り(下端二次の削り か)、右端削れ	-□□□□ -□
16号 W308	不明	3区 2D-5e 3003 滝	(129)	(15)	5	081	スギ	板目	上端削れ、左右両辺 削れ	□
17号 W309	不明	4区 2D-7a 第22層	(88)	19	5	019	スギ?	板目	上端削れ、下端削れ、 左右両端削れ	元應元年
18号 W310	不明	4区 2C-28 第22層	(63)	(16)	2	081	スギ	板目	上端削れ、下端削れ、 左右両端削れ	〔 〕
19号 W311	不明	4区 2C-7g 第21層	(58)	(15)	5	081	スギ?	板目	上端切斷、下端削れ、 左右両端削れ	三□

坐は切片採取による同定。それ以外は実体顕微鏡による観察。

(2) 墨書き土器

概要 墨書き土器は総数で 169 点出土した（第 287 ~ 296 図、PL.197 ~ 209）。この数字は、本来同一個体であった資料でも接合関係になければ 1 点として計上したものである。

調査区ごとの内訳を見ると、3 区 152 点、4 区 17 点と圧倒的な差が生じている。これは土地の利用状況と墨書き土器の帰属時期に相関しており、谷奥側の 4 区は墨書き土器の使用が顕著となる 8 世紀後半以降の建物等が希薄で主として耕作地となることが影響している。

出土遺構・層位別に見ると、4038 溝で 5 点、3003 溝で 29 点、3006 溝で 33 点、3014 溝で 3 点、3432 溝・3433 溝で 22 点、掘立柱建物 2 (3141 ピット、3143 ピット) で 2 点、第 4 層で 7 点、第 3 ~ 4 層で 3 点、第 3 層で 4 点、第 2 層で 36 点、客土・攪乱で 16 点、掘立柱建物 9 (3383 ピット)・掘立柱建物 10 (3359 ピット)・掘立柱建物 13 (3445 ピット)・3009 溝・3438 流路・第 5 層・第 42 層・第 1 層でそれぞれ 1 点という内訳になっている。3003 溝、3006 溝、3432・3433 溝といった建物群周囲の溝に廃棄されたものが多いという傾向が窺える。また 3 区第 2 層（主体は第 2・2 層）で出土した資料の多くは、耕作に伴う後世の攪拌で遺構及び第 4 層（整地土）包含遺物を巻き上げたものと考えられる。

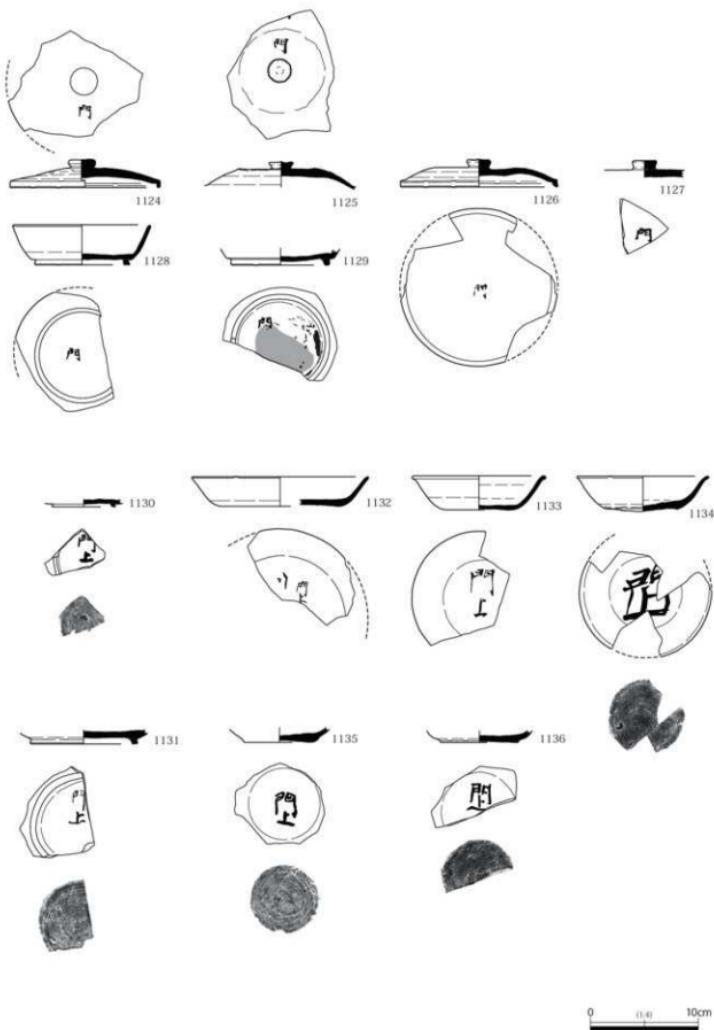
字形別に見ると、「門」一字及び「門+○」（門上、門東、門西など）の形をとるものが 45 点（可能性があるものを含む、以下同様）と最も多く、墨書き土器全体の 27% を占める。次いで多いのが「家」「宅」「井」の 7 点（4%）、「荒田（大内）」の 6 点（3%）と続く。「大内」（3 点）や「下内」（2 点）は「内」を基軸とした表記と考えられ、「荒田大内」も同様の内容を表す文字もしくは「大内」が「荒田大内」を省略した表記なのであれば、全体の中では主体的な位置を占める。その他に注意される墨書きとして、「馬津」や「船」といった水運を表すもの、地名に係る表記と考えられるもの（「越」「高郡」「□見庄」など）、人名の可能性があるもの（「今主」「田子」）が挙げられる。

個々の积文や出土遺構・層位等は表 8 ~ 13 に列記しており、本節では字形ごとに概観していく。
「門」「門+○」 第 287 図 1124 ~ 第 289 図 1168 は「門」あるいは「門+○」と表記されたものである。

1124 ~ 1127 は「門」一字のみ表記されており、筆跡は細く丁寧で、文字の大きさも 1.2 ~ 1.5 cm 角と小さい。扁平・ボタン状のつまみを有す蓋 1124 ~ 1127、外傾して直線的に立ち上がる浅い体部をもつ高台付坏 1128・1129 が見られ、8 世紀前半に比定される。1129 は墨書きのある底部外面を転用硯として使用している。

1130 ~ 1136 は墨書き「門上」の一群である。文字は線の太さ、大きさ、跳ね・止めなど個々でばらつきが認められる。1130 と 1131 のみ高台付坏で、他は坏である。1135 は「上」の上部が、1134・1136 は「上」のほぼ全体が門構えの中に収まるように表記されている点が特徴的である。高台付坏 1130・1131、坏 1133 ~ 1136、皿 1132 などがあり、1132 は 8 世紀後半、その他は概ね 8 世紀末から 9 世紀前半に比定されよう。1137 ~ 1140 は墨書きに积読できない文字を含むが、「門上」と表記されている可能性をもつ。土器の時期は 8 世紀末から 9 世紀前半であろう。

1141 ~ 1143・1146 は「門宅」と表記されたもの、またはその可能性が高いもので、坏と高台付坏がある。1141・1142 は門構えの左側下端部に跳ねが認められることが特徴的で、2 文字目が不明ながら 1144 や 1145 の「門」も同じ特徴を持つ。ただし、1145 は跳ねの方向が逆である。1141・1142 は 9 世紀前半、1143 ~ 1145 は 9 世紀後半 ~ 10 世紀初頭に比定されよう。



第287図 墓書土器 (1) 「門」 ①

0 10cm

1147～1154は「門東」と表記された高台付坏、坏で、その可能性があるものを含む。1147の「一」は追筆と考えられる。1149は「門」の上に「一」があり、三文字目が不明ながら「東」の上端とも見れる墨痕が認められる。1150は「門東」と「家二」の文字が通っておらず、底面範囲に文字を収めるためか下半の「家二」が右方向に流れている。1151は重複する場所に古い別文字の可能性がある墨痕が薄く認められる。1154の3文字目も同様の性格で、「門東」は新たに書き直されたものであろう。また、1147・1150・1153は門構え右側が簡略化されて一筆で書かれており、「リ（りとう）」状となっていることが特徴的である。1154は8世紀後半、それ以外は8世紀末～9世紀前半頃のものと考える。

1155・1156は「門西」で、1155は筆跡が太く丁寧で、1156は門構えの左下端に跳ねがあり右側上部も潰れていて線もやや細い。さらに「西」下部に不要な横画が1本入っている。どちらも8世紀後半のものと考える。

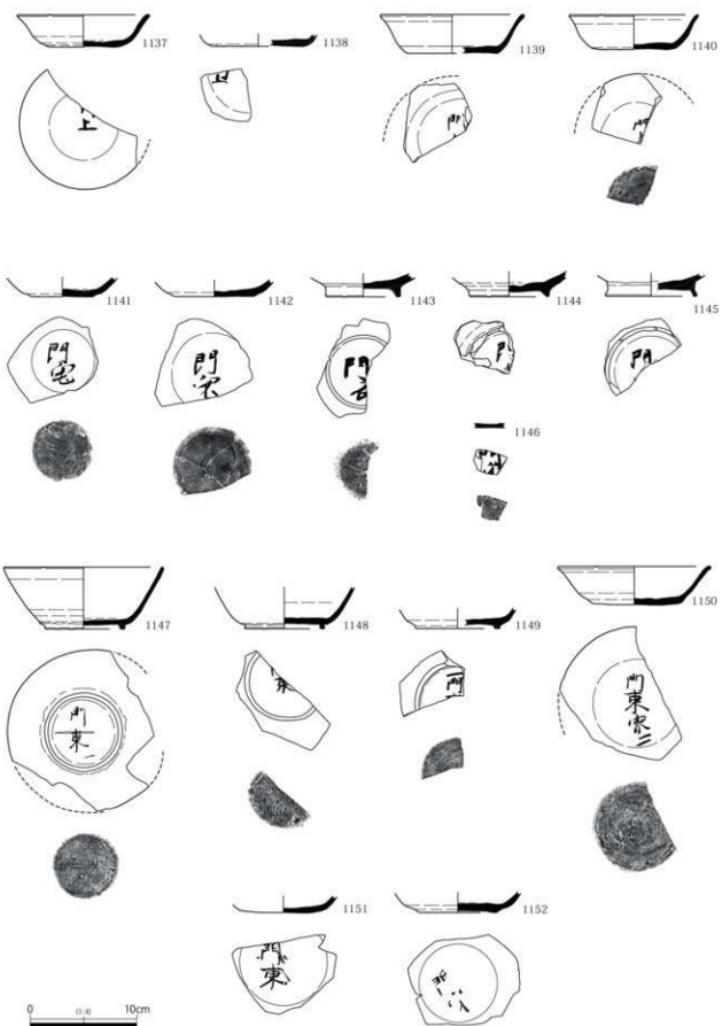
1157～1168は「門」及びその可能性がある文字（群）の全体形が不明確なものである。1157は蓋天井部中央に大きく門構えが見えるため、「門」一字の可能性があるだろう。それに対して1158は「門」が底面中央よりやや上に位置しており、さらに文字が続く可能性をもつ。1166は土師器坏底面に墨書きされており、1文字目は門構え左側、2文字目は払いの可能性がある。1157・1159・1160・1166は9世紀後半、1158は8世紀後半と考えられる。

「家」「宅」 第290図1169は「東大家」と表記されている。2文字目部分は遺存状況が悪いこともあり割れ、剥落が顕著だが、出土時に「大」の右側払い部分が確認できている。1170～1173は「宅」あるいは「宅」と考えられるもので、「門宅」のように別の文字を組み合わせて表記していた可能性があるだろう。1174・1175は「家」か。1169は8世紀末～9世紀前半、1174・1175は8世紀後半に比定され、1170～1172は9世紀、1173は9世紀末～10世紀前半か。

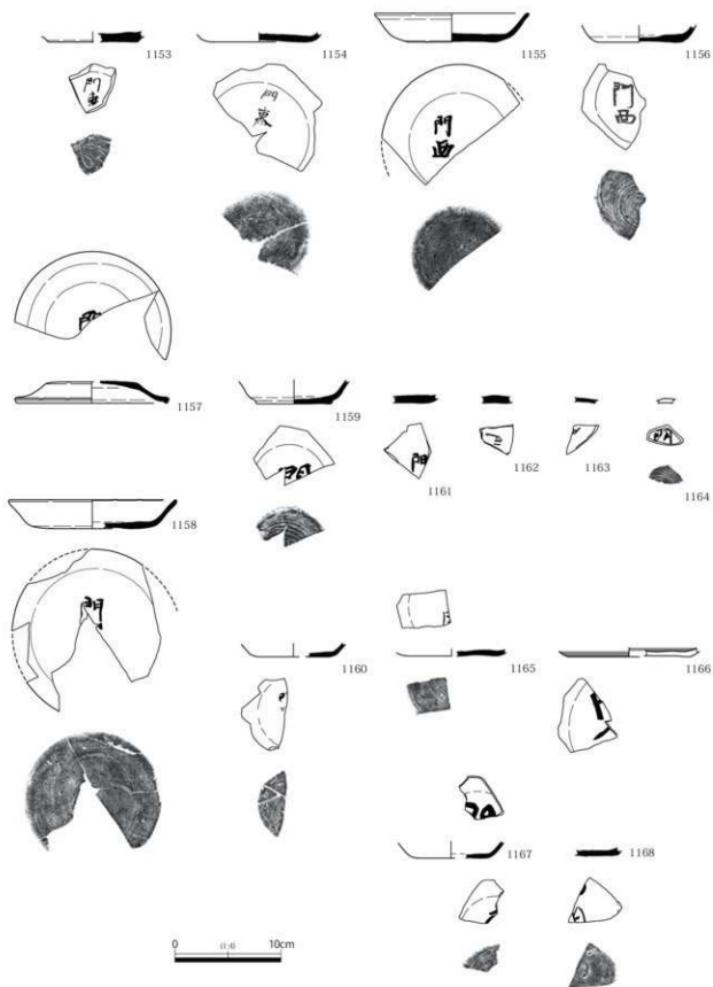
「井」 1176～1182は「井」と表記された一群である。全体形が窺えるのが1179のみで詳細は不明だが、文字は大きいものが多く、1179のように「井」一文字で使用されている可能性もある。後述するように「石井」という墨書きもあるため、当然、複数文字表記の一部ということも考えられる。1176・1180は8世紀、1177・1181・1182は8世紀末～9世紀前半のものか。

「荒田（大内）」 第291図1183～1189は「荒田」及びその可能性が考えられるものである。「荒田」は良田地域の旧地名（旧荒田村、明治4年改称）であり、その点からも特筆すべき文字といえる。1183・1184は「荒田大内」となっており、「荒田」に続く文字が読み取れない1186～1188についても同様に表記されていた可能性があるだろう。須恵器蓋、高台付坏、坏そして土師器坏が見られ、1183・1184・1189は8世紀後半、1185・1187・1188は8世紀末～9世紀前半に比定される。

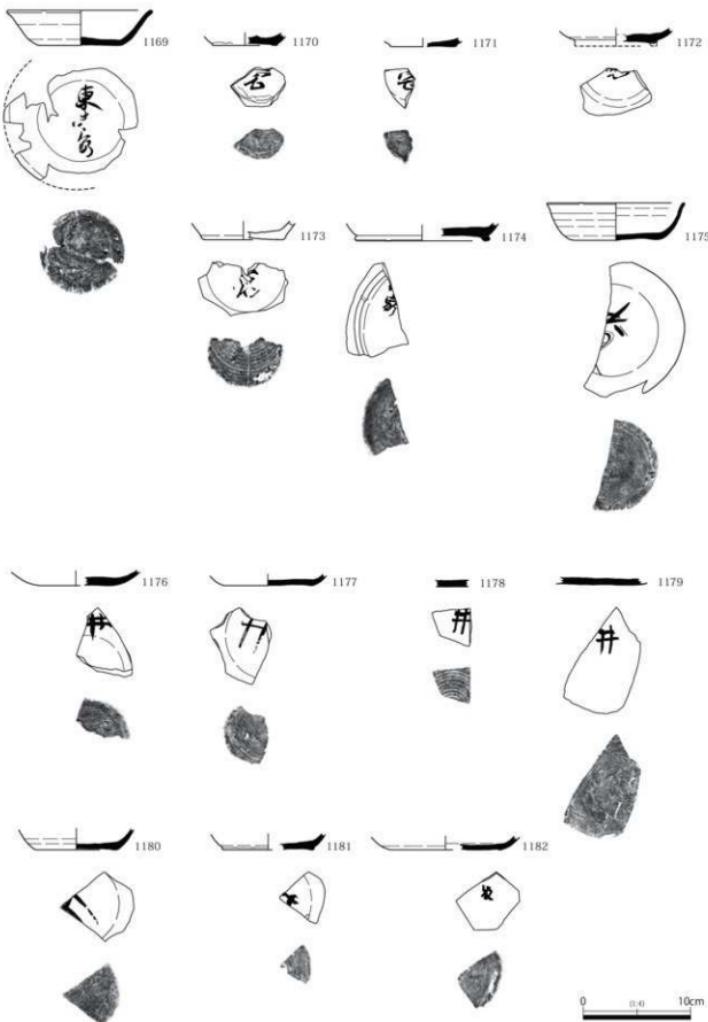
「大内」「下内」 1190～1197は「大内」「下内」またはその可能性が考えられるものである。1190・1191は「大内」で、いずれも高台内側の全面を使って墨書きされている。1191は「内」の「人」部分の書き方に特徴があり、一画目を真っ直ぐに下ろし、それに直角気味に丶を付ける。「大」の払いは1190・1191とも左右に大きく広がる。1192の「大内」は文字が小さく、筆跡は「荒田大内」のそれに近似する。1193・1194は「下内」で、文字は1cm角に満たず小さい。1195～1197は「内」が確認でき、「大内」「下内」を構成する一文字であった可能性がある。1195・1196の筆跡は、「荒田大内」「下内」に近い。1190・1191・1193・1194は8世紀前半、1192・1196・1197は8世紀末～9世紀前半に比定されると考える。



第288図 墓書土器(2)「門」②

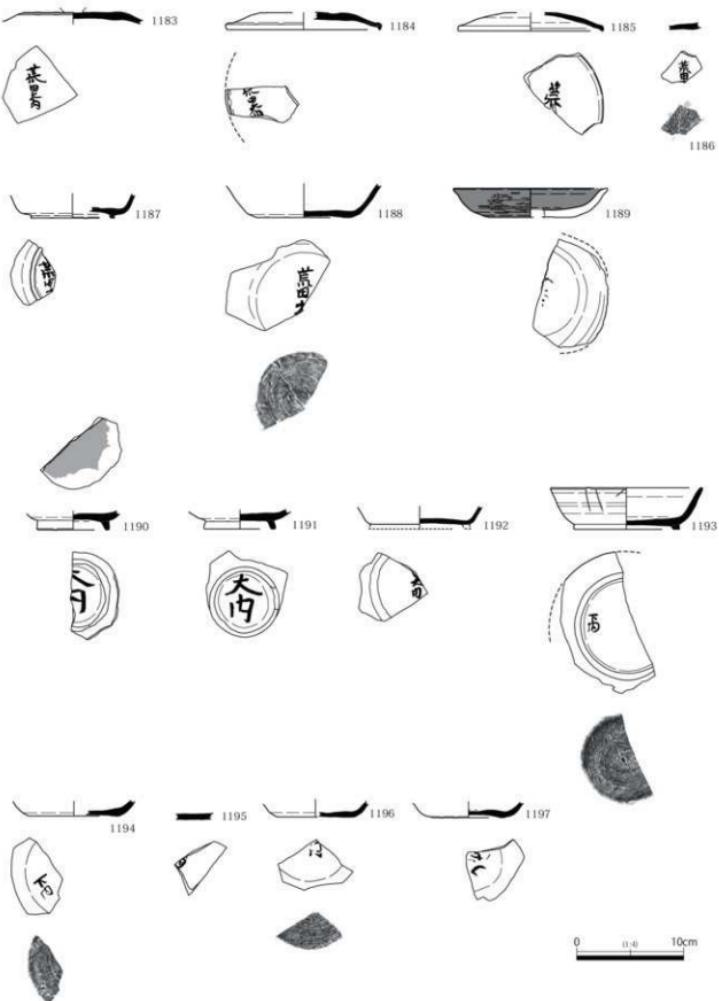


第289図 墓書土器(3)「門」③



第290図 墓書土器 (4)「家」「宅」「井」

第VI章 3区・4区の調査成果



第291図 墨書き土器 (5)「荒田大内」「大内」「下内」ほか

その他 第292図1198は8世紀後半の高台付坏で、文字の右端が不明だが「上」か。1199・1200は文字の全体形が不明ながら「東」の可能性が高い。1201・1202はどちらも8世紀末～9世紀前半の坏底面に「東」の文字が確認でき、その上部を欠くが当遺跡での出土例を勘案すれば「門東」を構成する一部であったとも考えられる。1203は9世紀末～10世紀前半の須恵器皿の底面に3文字が確認でき、2文字目は「東」、1文字目は門構えの一部と見られる。

1204は8世紀の須恵器蓋で、天井部内面に「越」と墨書きされている。1205は8世紀後半の須恵器蓋の天井部内面に細い線で「高都」と墨書きされており、「高都」は高草郡を省略した表記と考えられる。1206・1207は8世紀後半の高台付坏で、「石井」「清水」の文字が明瞭に残る。1208は8世紀末～9世紀前半の須恵器蓋天井部に「□見庄」が見え、内面を転用視としている。1209は9世紀後半と見られる蓋で、天井部に2行にわたり墨書きされている。右側の2文字目は偏が土、旁が屋となっており、転読できていない。左側は2文字確認でき、深緑の可能性がある。当遺跡と丘陵を隔てた東側に位置する高住平田遺跡でも「深緑曹□〔司ガ〕」と表記された墨書き土器が出土している。1210は9世紀末～10世紀前半の坏の見込に墨書きされており、文字は「桟谷」であろうか。1211・1212は文字の一部を欠いており読み切れていないが、それぞれ「績」「畠」の可能性がある。どちらも8世紀後半に比定されよう。1213は壺の底面に「新」と見られる文字が表記されている。1214は「新□」でさらに文字が続く。1215は小片だが坏と考えられ、「□壙」の文字が確認できる。

第293図1216は「馬津」、1218は「□津」、1219は「船」の文字が見え、いずれも水運に係る表記である。1217は「馬」の一字が確認でき、1216と同様の表記か。1216・1217は8世紀末～9世紀前半、1218は8世紀後半、1219は9世紀後半のものと考える。

1220は「今主」、1221は「田子」で、人名の可能性がある。1220は8世紀末～9世紀前半の高台付坏、1221は8世紀後半の蓋である。1222は赤彩された土師器坏の底面に「仲」と見られる表記があり、8世紀後半のものである。1223は土師器坏底部に小さく「日ガ」が見える。10世紀頃のものか。1224は8世紀後半の蓋の体部左右に文字または記号と考えられる墨書きがある。

1228～第296図1292は、墨書き（墨痕）が確認できるものの文字を転読（判別）できるほど遺存していない資料である。1232は跳ねのような部位が見えるが、天地等不明である。1248は「東」の可能性がある。1249・1251は2文字分の墨痕が見える。1265は土師器壺頸部に墨痕が認められ、文字ではなく絵の可能性がある。1276は1185と同一個体と考えられるが、接点はない。「内」または「田」であろうか。1288の墨痕は「門」の可能性がある。

なお、鳥取市教育委員会が実施した試掘調査においても第1トレンチSD-02で墨書き土器が1点出土している〔鳥取市教育委員会2010〕。9世紀前半の須恵器坏底面に「□〔門ガ〕東」と表記されており⁽³⁰⁾（PL.202参照）、本調査の結果SD-02は3006溝であることが明らかとなった。

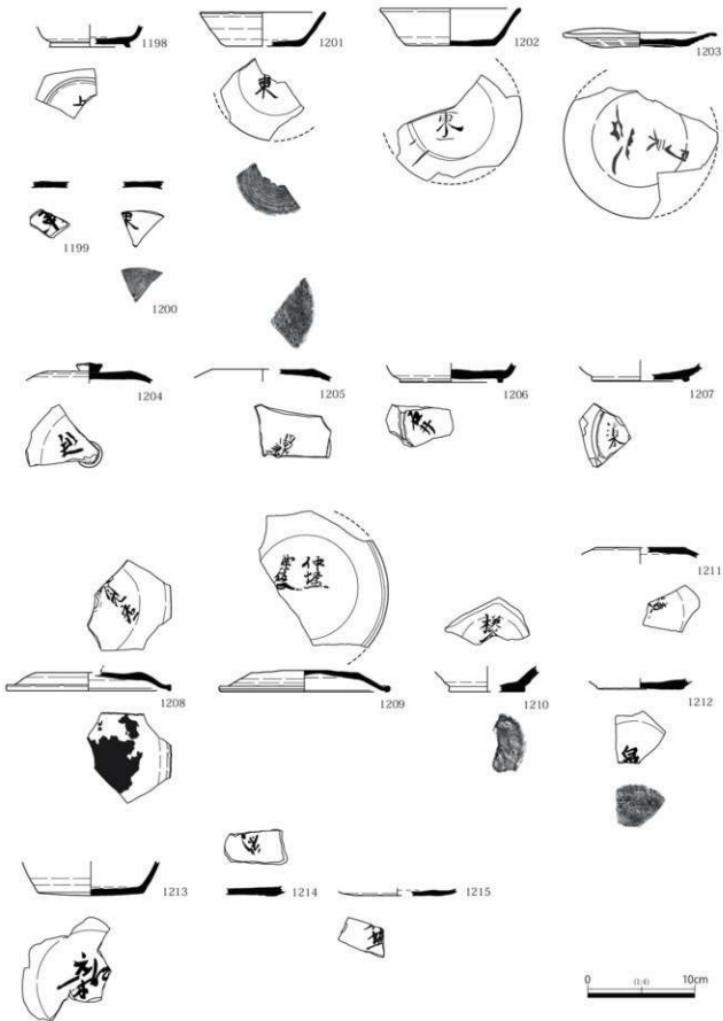
註

墨書きについては赤外線写真をもとに再転読しており、試掘調査時の転文から修正している。赤外線写真の撮影は独立行政法人国際文化財機構奈良文化財研究所の中村一郎氏、墨書きの再転読は同研究所の山本崇氏にお世話になった。記して感謝申し上げる。

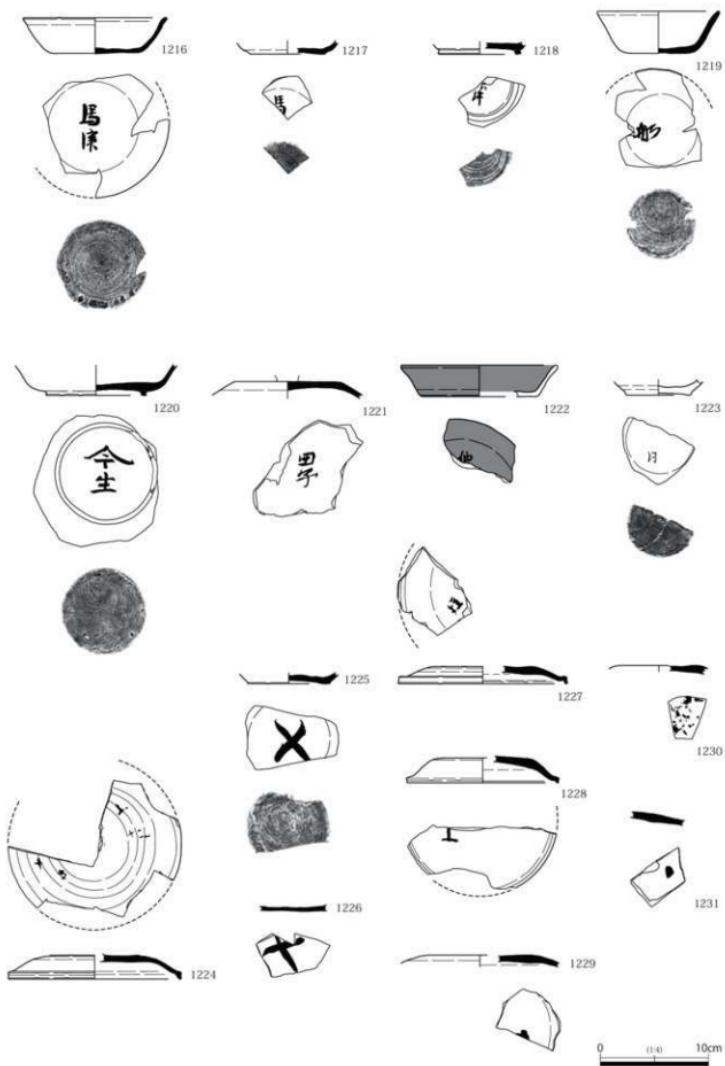
＜参考文献＞

鳥取市教育委員会 2010『平成21（2009）年度 鳥取市内遺跡発掘調査報告書』

第VI章 3区・4区の調査成果

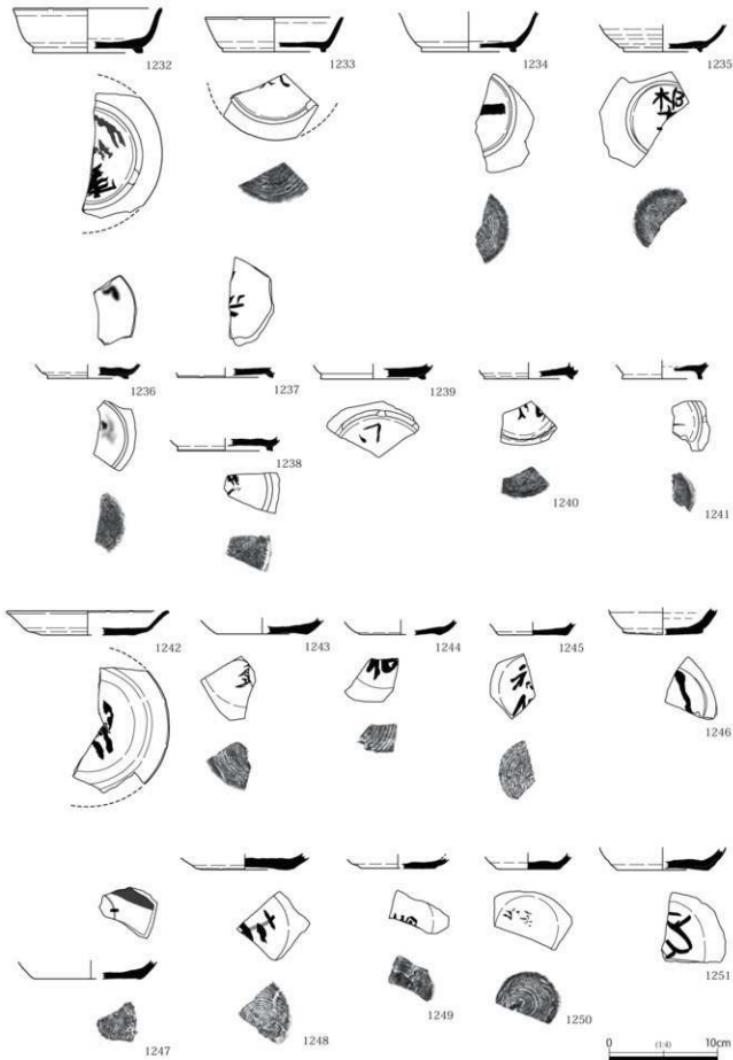


第292図 墨書き器 (6)「東」「高郡」「石井」ほか



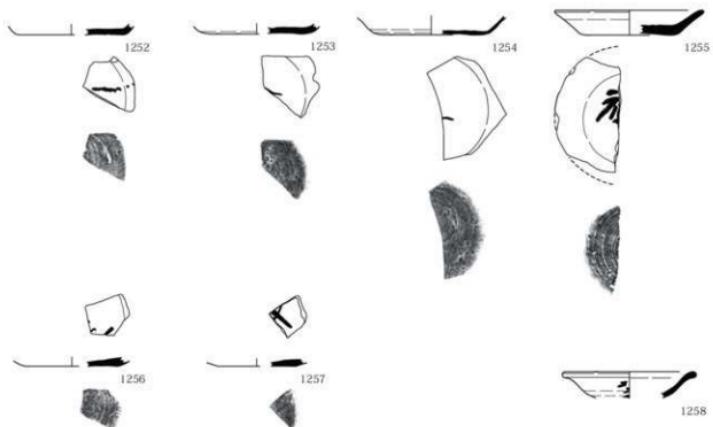
第293図 墨書き土器 (7) 「馬津」「津」「船」ほか

第VI章 3区・4区の調査成果

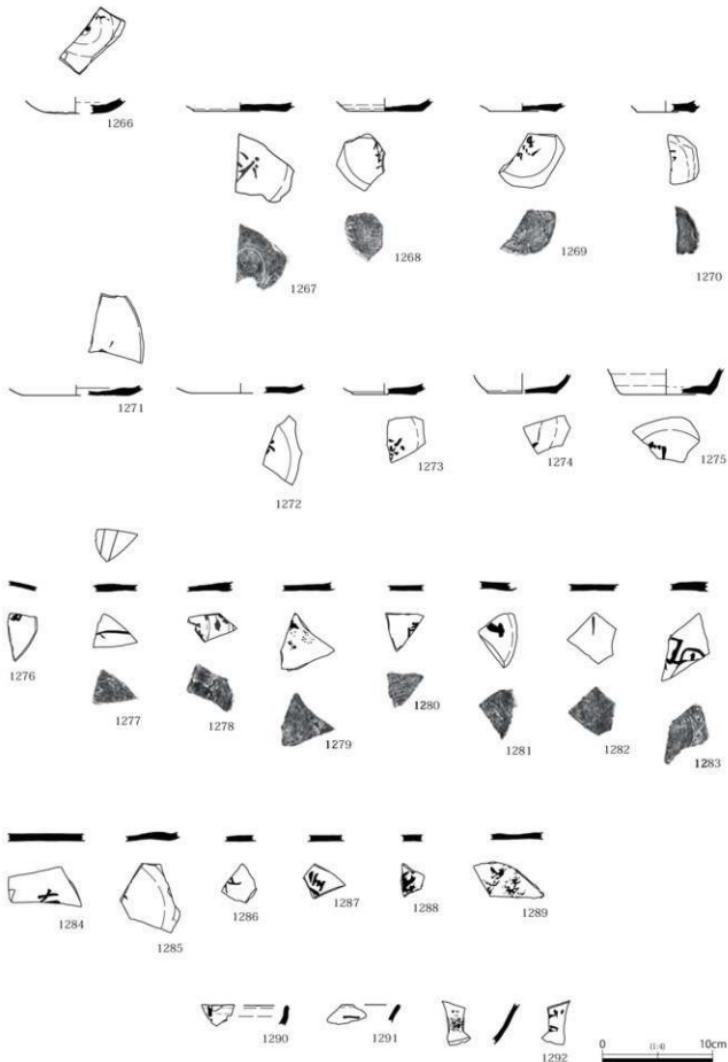


第294図 墨書き器 (8) その他①

第VI章 3区・4区の調査成果



第295図 墨書き土器 (9) その他②



第296図 墨書き土器（10）その他③

表8 墓書土器一覧表(1)

遺物番号	地区 グリッド	出土遺構 層位	種別 器種	軽文	墨書記載部位		文字 サイズ	備考
1124	3区 2D-7e	3003溝 埋土上層	須恵器 蓋	「門」	天井部	下	小	
1125	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 蓋	□／「門」	外側	上	小	
1126	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 蓋	「門」	天井部内面	中心	小	
1127	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 蓋	「門」	内面	中心	小	
1128	3区 2D-7e	3003溝 埋土上層	須恵器 高台付环	「門」	底部外側	中心	小	
1129	3区 2D-6c	第22層	須恵器 高台付环	「門」	底部外側	左上	小	軸用硯
1130	3区 2D-7c	3433溝 埋土	須恵器 高台付环	門上	底部外側	中心	中	
1131	3区 2D-7e	3003溝 埋土	須恵器 高台付环	須恵器 門□ 〔上〕	底部外側	上	中	
1132	3区 2D-6c	第22層	須恵器 环	「門上」／□	底部外側	中心・右	小	
1133	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 环	「門上」	底部外側	中心	中	
1134	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 环	「門上」	底部外側	中心	大	
1135	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 环	「門上」	底部外側	中心	中	
1136	3区 2D-7c	第22層	須恵器 环	「門上」	底部外側	中心上	中	
1137	3区 2D-7b	第4層	須恵器 环	□上 〔門n〕	底部外側	中心	中	
1138	3区 2D-5e	3003溝 埋土上層	須恵器 环	□□上 〔門上〕	底部外側	左	—	
1139	3区 2D-7b	3438流路 埋土	須恵器 环	「門□」	底部外側	中心	中	
1140	3区 2D-6c	第22層	須恵器 环	「門□」 〔上〕	底部外側	中心	小	
1141	3区 2D-7b	3433溝 埋土	須恵器 环	「門宅」	底部外側	中心	大	
1142	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 环	「門宅」	底部外側	中心左	大	攢乱
1143	3区 2D-7b	第3層	須恵器 高台付环	「門□」 〔宅〕	底部外側	中心	中	1223
1144	4区 2D-7a	第1層	須恵器 高台付环	「門□」	底部外側	中心上	中	
1145	3区 2D-5e	3003溝 埋土上層	須恵器 高台付环	「門□」	底部外側	中心	中	
1146	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 环？	□□ 〔門宅〕	底部外側	中心	中	高台付环か
1147	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 高台付环	「門東」「一」	底部外側	全体	中	
1148	3区 2D-5e	第2-1層	須恵器 高台付环	□東 〔門n〕	底部外側	中心	中	
1149	3区 2D-7c	3433溝 埋土	須恵器 高台付环	「一門□」	底部外側	中心	小	
1150	3区 2D-5e	3003溝 埋土上層	須恵器 环	「門東家二」	底部外側	中心	中	
1151	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 环	門東	底部外側	中心左	中	
1152	3区 2D-7c	第22層 ～第4層	須恵器 环	「門□」	底部外側	中心左	中	

※文字サイズ 小：15 cm 未満、中 15 cm 以上 20 cm 未満、大：20 cm 以上

表9 墓書土器一覧表(2)

遺物番号	地区 グリッド	出土遺構 層位	種別 器種	篆文	墨書記載部位	文字 サイズ	備考
1153	3区 2D-6d	第22層	須恵器 环	門東	底部外面	上	小
1154	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 环	「門東口」	底部外面	中心・上	小 書き直し?
1155	3区 2D-5e	3003溝 埋土上層	須恵器 环	「門西」	底部外面	中心左	中
1156	3区 2D-5e	3003溝 埋土上層	須恵器 环	「門西」	底部外面	左	大
1157	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 蓋	「門」	天井部	中心	大
1158	3区 2D-7c	3433溝 埋土	須恵器 里	「門」	底部外面	中心	大
1159	3区 2D-7c	第22層	須恵器 环	「門」	底部外面	中心	大
1160	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 环	「□□ 〔門〕」	底部外面	上	中
1161	3区 2D-6d	第5層	須恵器 环	「門」	底部外面	~	中
1162	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 环	「門□」	底部外面	~	小
1163	3区 2D-7e	3003溝 埋土上層	須恵器 蓋?	「門」	天井部内面	~	小
1164	3区 2D-7b	3433溝 埋土	土師器 环	門	底部外面	中心	中
1165	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 环	□ 〔門+〕	見込部	中心	~
1166	3区 2D-7c	3433溝 埋土	土師器 环	□□ 〔門+〕	底部外面	中心	大
1167	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 环	(外側) □ (内側) □ 〔門+〕	底部外面 見込部	中心上 ~	大 ~
1168	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 环	□ 〔門+〕	底部外面	中心	中
1169	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 环	「東大家」	底部外面	中心	大
1170	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 环	□宅	底部外面	下	中
1171	3区 2D-7b	3433溝 埋土	須恵器 环	宅	底部外面	下	中
1172	3区 2D-5e	3003溝 埋土上層	須恵器 高台付环	□□ 〔宅+〕	底部外面	中心	中
1173	3区 2D-7b	3433溝 埋土	土師器 环	宅	底部外面	中心・下	中
1174	3区 2D-5d	第22層	須恵器 高台付环	□□□	底部外面	左	中 二字目は家の可能性
1175	3区 2D-6c	第22層	須恵器 环	□ 〔家+〕	底部外面	中心	大
1176	3区 2D-7d	第22層	須恵器 环	井	坏部外面	側面	中
1177	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 环	井	底部外面	左	大
1178	3区 2D-7c	掘立柱建物2 3143ピット 埋土	須恵器 环	井	底部外面	上	中
1179	3区 2D-6e	客土	須恵器 环	「井」	底部外面	中心	中
1180	3区 2D-6d	客土	須恵器 环	□ 〔井+〕	底部外面	中心	大

表10 墓書土器一覧表(3)

遺物番号	地区 グリッド	出土遺物 層位	種別 器種	転文	墨書き記載部位		文字 サイズ	備考
1181	3区 2D-7e	3003清 埋土上層	須恵器 环	□ 〔井〕	底部外側	中心	中	
1182	3区 2D-6c	掘立柱建物 13 3445 ピット 埋土	須恵器 环	□□ 〔井〕	底部外側	左上	小	筆使は1282の2文字目と同じ
1183	3区 2D-6c	第4層	須恵器 蓋	「荒田大内」	内面	左	小	
1184	3区 2D-6e	3003清 埋土上層	須恵器 蓋	荒田大内	内面	左	小	
1185	3区 2D-6c	3433清 埋土	須恵器 蓋	「荒」	内面	中心	中	1276と同一個体、接点なし
1186	3区 2D-7c	3006清 埋土	須恵器 环	「荒田□ 〔大〕」	底部外側	左	小	
1187	4区 2C-6i	第4層	須恵器 高台付环	「荒田□」	底部外側	左	中	
1188	3区 2D-6c	第4層	須恵器 环	「荒田大」	底部外側	中心	中	
1189	3区 2D-7e	3003清 埋土上層	土師器 皿	□ 〔荒〕	底部外側	中心	—	
1190	3区 2D-6b	第2.1層	須恵器 高台付环	「大内」	底部外側	中心	大	
1191	3区 2D-6c	第2.2層	須恵器 高台付环	「大内」	底部外側	中心	大	
1192	3区 2D-6e	3003清 埋土上層	須恵器 高台付环	□大内	底部外側	中心	小	
1193	3区 2D-5e	3003清 埋土上層	須恵器 高台付环	「下内」	底部外側	左	小	
1194	3区 2D-6c	3003清 埋土上層	須恵器 环	「下内」	底部外側	左	小	
1195	3区 2D-7c	第4層	須恵器 环	□□ 〔内〕	体部内面	—	小	
1196	3区 2D-7c	亂	須恵器 环	内	底部外側	中心	小	
1197	3区 2D-6d	第2.2層	須恵器 环	□□ 〔大〕	底部外側	中心	中	
1198	3区 2D-6c	第2.2層	須恵器 高台付环	□ 〔上〕	底部外側	上	小	
1199	3区 2D-6c	第2.2層	須恵器 环	東	底部外側	中心	中	
1200	3区 2D-7c	3433清 埋土	須恵器 环	□ 〔東〕	底部外側	右	中	
1201	3区 2D-7b	3006清 埋土	須恵器 环	東	底部外側	中心	中	
1202	3区 2D-7b	3006清 埋土最下層	須恵器 环	東一	底部外側	中心	中	
1203	3区 2D-6b 2D-6c	第4層	須恵器 皿	□□□□ 〔東〕	底部外側	中心	大	
1204	4区 2C-6j	第4.2層	須恵器 蓋	「越」	天井部内面	上	中	
1205	3区 2D-7d	客土	須恵器 蓋	「高都」	天井部内面	中心	中	
1206	4区 2D-7a	4038清 埋土中層	須恵器 高台付环	「石井」	底部外側	左上	中	見込に墨付着、転用假?
1207	4区 2C-7i	第3層	須恵器 高台付环	「清水」	底部外側	左	小	
1208	3区 2D-6c	掘立柱建物 2 3141 ピット 埋土	須恵器 蓋	□見庄」	天井部	右下	中	内面転用現

表 11 墓書土器一覧表 (4)

遺物 番号	地区 グリッド	出土遺構 層位	種別 器種	篆文	墨書記載部位	文字 サイズ	備考
1209	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 蓋	「中□／□□」 〔添縁。〕 (右側2文字日字幅二層)	天井部 外面	中心 上	中 -
1210	3区 2D-7c	第22層	須恵器 环	「秋谷。」	見込部	中心上	中
1211	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 蓋	「□」 〔鉢。〕	天井部内面	中心	中
1212	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 环	「□」 〔鼎。〕	底部外側	中心	中
1213	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 壺	「□」 〔新。〕	底部外側	中心	大 3003溝出土破片と接合
1214	3区 2D-5e	3003溝 埋土上層	須恵器 环	「新□」	見込	左	中 蓋の可能性も
1215	4区 2C-7j	4038溝 埋土	須恵器 环	□埴	底部外側	左	中 蓋の可能性あり 「埴」は型の意味
1216	3区 2D-7c	3433溝 埋土	須恵器 环	「馬津」	底部外側	中心	中
1217	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 环	「馬」	底部外側	上	中
1218	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 高台付环	□□」 〔馬津ノ可能性。〕	底部外側	中心	小
1219	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 环	「蛇」	底部外側	左	大
1220	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 高台付环	「今主」	底部外側	中心	大 人名
1221	3区 2D-7c	客土	須恵器 蓋	「田子」	内面	中心	中
1222	3区 2D-7c	3014溝 埋土最下層	土師器 环	「仲」	底部外側	上	小
1223	3区 2D-7c	第22層	土師器 环	「日。」	底部外側	上	小
1224	4区 2C-7h	4038溝 埋土	須恵器 蓋	「□□」／「×」	天井部周縁	左右 小 -	一文字目は山か小
1225	3区 2D-7c	機乱	須恵器 环	「十」	底部外側	中心	大
1226	3区 2D-8e	3006溝 埋土	須恵器 环	「□」 〔十。〕	底部外側	-	大
1227	4区 2D-6a	第22層	須恵器 蓋	「□」	天井部外側	左	中
1228	3区 2D-6c	掘立柱建物9 3383ピット 埋土	須恵器 蓋	「□」	内面	左	中
1229	4区 2C-6i	第4層	須恵器 蓋	「□」	天井部内面	-	-
1230	3区 2D-8c	漫乱	須恵器 蓋	「□」	天井部内面	-	-
1231	4区 2C-6j	第3層～第4層	須恵器 蓋	「□」	天井部内面	-	-
1232	3区 2D-7c	3003溝 埋土上層	須恵器 高台付环	「□□」	底部外側	-	大 方向不詳
1233	3区 2D-6c	第22層	須恵器 高台付环	「□」	底部外側	中心	中
1234	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 高台付环	「□」	底部外側	-	大
1235	3区 2D-7c	3433溝 埋土	須恵器 高台付环	「□□」(禁)	底部外側	中心	大
1236	3区 2D-7d	客土	須恵器 高台付环	「□」	見込部 底部外側	上 上	中

表12 墓書土器一覧表(5)

遺物番号	地区 グリッド	出土遺物 層位	種別 器種	転文	墨書き記載部位	文字 サイズ	備考
1237	3区 2D-7c	3433 潟 埋土	須恵器 高台付环	[]	見込部 中心	大	
1238	3区 2D-6d	客土	須恵器 高台付环	□	底部外側 中心	-	
1239	3区 2D-6d	掘立柱建物 10 3359 ピット 埋土	須恵器 高台付环	□	底部外側 上	中	
1240	3区 2D-6d	第22層	須恵器 高台付环	[]	底部外側 -	大	
1241	3区 2D-7b	3433 潟 埋土	須恵器 高台付环	□	底部外側 -	-	
1242	4区 2C-8j	第3層	須恵器 环	□	底部外側 中心	大	友、麦など
1243	3区 2D-6d	第22層	須恵器 环	□□□	底部外側 中心	-	
1244	3区 2D-7b	3006 潟 埋土最下層	須恵器 环	[]	底部外側 -	大	
1245	3区 2D-6d	第22層	須恵器 环	□□	底部外側 中心	大	
1246	4区 2C-6j	第3層	須恵器 环	□	底部外側 -	大	
1247	3区 2D-6d	第22層	須恵器 环	□	見込部 -	大	
1248	3区 2D-7c	第22層	須恵器 环	□(東ノ可能性)	底部外側 中心	大	
1249	3区 2D-6c	第22層	須恵器 环	[]	底部外側 中心	中	2文字分
1250	3区 2D-7b	3433 潟 埋土	須恵器 环	[]	底部外側 下	中	
1251	3区 2D-6c	3432 潟 埋土	須恵器 环	[]	底部外側 -	大	2文字分
1252	3区 2D-7c	掘立柱建物 9 3450 ピット 埋土	須恵器 环	[]	底部外側 -	大	
1253	3区 2D-7c	擾乱	須恵器 环	□	底部外側 中心	-	
1254	3区 2D-5e	客土	須恵器 环	□	底部外側 中心	-	
1255	3区 2D-7c	第22層	須恵器 皿	□	底部外側 中心上	大	
1256	3区 2D-6e	第21層	須恵器 环	□	見込部 -	-	
1257	3区 2D-7b	客土	須恵器 环	□	見込部 -	-	
1258	3区 2D-5e	3003 潟 埋土上層	須恵器 皿	□□	底部外側 -	-	
1259	3区 2D-7b	3433 潟 埋土	土師器 环	[]	底部外側 中心	大	
1260	3区 2D-7b	3433 潟 埋土	須恵器 环	□	底部外側 中心	大	
1261	3区 2D-7c	3014 潟 埋土	土師器 环	□	底部外側 -	-	
1262	3区 2D-6d	第22層	土師器 环	□	見込 -	大	
1263	3区 2D-6b	3009 潟 埋土	土師器 环	□	底部外側 下部	-	
1264	4区 2C-6j	第3層～第4層	土師器 皿	□□	底部外側 中心	大	

表13 墓書土器一覧表(6)

遺物番号	地区 グリッド	出土遺構 層位	種別 器種	积文	墨書記載部位	文字 サイズ	備考
1265	4区 2C-7i	4038 深 埋土	土師器 蓋		頭部外側	-	-
1266	4区 2C-6j	第2-2層	頭忠器 环	□□	見込内面	-	-
1267	3区 2D-7d	客土	頭忠器 环	[]	底部外側	中心	中
1268	3区 2D-7c	第2層	頭忠器 环	□□□□	底部外側	中心	中
1269	3区 2D-7c	3006 深 埋土	頭忠器 环	[]	底部外側	中心	中
1270	3区 2D-7c	3433 深 埋土	頭忠器 环	[]	底部外側	-	-
1271	3区 2D-7b	客土	頭忠器 环	□	見込部	-	-
1272	3区 2D-7d	客土	頭忠器 环	□	底部外側	-	-
1273	3区 2D-7e	3003 深 埋土上層	頭忠器 环	□	底部外側	-	-
1274	3区 2D-5e	3003 深 埋土上層	頭忠器 环	□	体部外側	-	-
1275	3区 2D-7c	第2-2層	頭忠器 环	□	底部外側	左	中
1276	3区 2D-6c	3433 深 埋土	頭忠器 蓋	□ (田または内s)	内面	中心	中
1277	3区 2D-7d	3006 深 埋土	頭忠器 环	□ (内面二割縫アリ)	底部外側	-	-
1278	3区 2D-6c	第2-2層	頭忠器 环	□	底部外側	-	-
1279	3区 2D-7c	3006 深 埋土	頭忠器 环	[]	底部外側	-	-
1280	3区 2D-7c	3014 深 埋土	頭忠器 环	□	底部外側	-	中
1281	3区 2D-7b	3433 深 埋土	頭忠器 环	□	底部外側	下	-
1282	3区 2D-7c	漫乱	頭忠器 环	□	底部外側	中心	-
1283	3区 2D-6c	第2-2層	頭忠器 环	[]	底部外側	大	高台付环か
1284	3区 2D-7d	第2-2層	頭忠器 环	□	底部外側	中心	中
1285	3区 2D-7c	3433 深 埋土	頭忠器 环	□	底部外側	-	-
1286	3区 2D-7c	3006 深 埋土	頭忠器 环	□	底部外側	-	-
1287	3区 2D-7e	3003 深 埋土上層	頭忠器 环	□	底部外側	-	中
1288	4区 2C-7j	第3層下面	頭忠器 环	□	底部外側	-	-
1289	4区 2C-7i	4038 深 埋土	頭忠器 高台付环	□	底部外側	-	-
1290	3区 2D-7e	3003 深 埋土上層	頭忠器 环	□	口縁部外側	-	-
1291	3区 2D-7b	3006 深 埋土	頭忠器 环	□	体部外側	-	-
1292	3区 2D-7e	3003 深 埋土上層	頭忠器 环	□/□	環部外側	-	-
-	3区 2D-8e	3006 深 埋土	頭忠器 环	□東 (内s)	底部外側	下	中
							鳥取市教育委員会試掘調査出土資料(PL.202)

表 14 土器観察表 (1)

編號 番号	県名 県名	場所 場所	種類 種類	寸法(cm) 寸法(cm)	特徴 特徴	船上 船上	現成 現成	色調 色調	備考 備考
1	18 28	1区 28.0m	第1層 土質層	内側 内側 幅16.2 高さ2.0	内側・ナメ 内側・口縁斜面ナメ、底部以下テヅリ	良 良好	内外ともに深い褐色		
2	18 28	1区 25.9m	第1層 土質層	内側 内側 幅13.5 高さ2.3	内側・ナメ 内側・口縁斜面ナメ	良 良好	内外とも灰褐色		
3	18 28	1区 25.8m	第2層 土質層	- 幅1.8	内側・口縁斜面ナメ、底部斜面削り	良 良好	内外とも灰褐色		
4	18 28	1区 25.9m	第3層 土質層	- 幅2.5	内側・口縁斜面ナメ、底部削り 内側・口縁斜面ナメ、高さ2.0	良 良好	内外とも灰褐色	表面擦打跡 見出部に削込みがあり	
5	18 28	1区 25.10m - 28	第3層 土質層 高台付近	- 幅2.4	内側・口縁斜面ナメ、底部削り	良 良好	内外とも灰褐色	底部にヘタ記号「×」	
6	18 28	1区 25.19m - 28	第3層 土質層	内側 内側 幅4.6	内側・高さ2.0 内側・高さ1.5 内側・口縁斜面ナメ、底部削り	良 やや悪	内外とも稍褐色		
7	18 28	1区 1012溝 地表上1層	土質層	- 幅1.6	内側・高さ2.0 内側・口縁斜面ナメ	良 良好	内外とも灰褐色		
9	22 28	2区 25.29m	第1層 土質層	内側 内側 幅1.6	内側・口縁斜面ナメ、底部削り	良 良好	褐色系、灰褐色		
10	22 28	2区 25.29m	第2層 土質層	内側 内側 幅1.1	内側・口縁斜面ナメ 内側・口縁斜面ナメ	良 良好	褐色系、灰褐色 内側・灰褐色		
11	23 28	(第2層付近)	青磁 瓶	内側 幅1.5	内側・口縁斜面ナメ、高さ2.0	良 良好	褐色系、オーライズ色 青磁色、灰褐色	見出部に擦痕1本	
12	26 28	2区 25.10m	第2層 土質層	内側 内側 幅1.8	内側・口縁斜面ナメ 内側・口縁斜面ナメ	良 良好	内外とも灰褐色	輪脚3方に擦痕の既存あり	
13	26 28	2区 25.24m	第2層 土質層	内側 内側 幅4.6	内側・1段腰帯2条の平行沈丸文 内側・コロナ	良 良好	内外ともに深い褐色		
15	26 28	2区 25.10m	第2層 土質層	内側 内側 幅1.5	内側・口縁斜面ナメ 内側・ナメ	良 良好	内外とも灰褐色		
16	26 28	2区 25.10m	第2層 土質層	内側 内側 幅2.1	内側・口縁斜面ナメ 内側・口縁斜面ナメ	良 良好	内外とも灰褐色		
17	26 28	2区 25.10m	第2層 土質層	内側 内側 幅1.7	内側・口縁斜面ナメ、底部削り	良 良好	内外とも稍褐色		
18	26 28	2区 25.5m	第2層 土質層	内側 内側 幅4.8	内側・口縁斜面ナメ、底部削り 内側・口縁斜面ナメ、底部削り	良 良好	内外ともに深い褐色 内側斜面		
19	26 28	2区 25.29m	第2層 土質層	内側 内側 幅1.7	内側・口縁斜面ナメ、底部削り	良 良好	内外とも灰褐色		
20	26 28	2区 25.10m	第2層 土質層	内側 内側 幅4.5	内側・口縁斜面ナメ 内側・コロナ	良 良好	外・灰褐色 内・灰褐色	内側斜面	
21	26 28	2区 25.29m	第2層 土質層	内側 内側 幅2.1	内側・口縁斜面ナメ 内側・口縁斜面ナメ	良 やや良	外・灰褐色 内・灰褐色	内側斜面	
22	26 28	2区 25.29m	第2層 土質層	内側 内側 幅5.7	内側・口縁斜面ナメ、底部削り 内側・ナメ	良 やや良	内外とも灰褐色	内側斜面	
23	26 28	2区 25.10m	内側 瓶	内側 内側 幅1.4	内側・口縁斜面ナメ 内側・口縁斜面ナメ	良 良好	褐色系、白色 褐色系、灰褐色		
24	26 28	2区 25.29m	第2層 土質層	内側 内側 幅1.2	内側・口縁斜面ナメ 内側・ナメ	良 良好	内外ともに深い褐色		
25	26 28	2区 25.10m	第3層 土質層	内側 内側 幅2.9	内側・口縁斜面ナメ 内側・口縁斜面ナメ	良 良好	内外とも灰褐色		
26	26 28	2区 25.29m	第2層 土質層	内側 内側 幅5.7	内側・口縁斜面ナメ、底部削り 内側・ナメ	良 やや良	内外とも灰褐色	内側斜面	
27	26 28	2区 25.10m (横幅)	第3層 土質層	内側 内側 幅2.4	内側・口縁斜面ナメ 内側・口縁斜面ナメ	良 良好	外・灰褐色 内・灰褐色	内側斜面	
28	26 28	2区 25.10m	第3層 土質層	内側 内側 幅1.6	内側・口縁斜面ナメ 内側・ナメ、底部削り	良 良好	外・稍褐色 内・灰褐色		
29	26 28	2区 25.29m	第2層 土質層	内側 内側 幅3.0	内側・ナメ 内側・口縁斜面ナメ	良 良好	内外とも稍褐色		
30	26 28	2区 25.10m	第3層 土質層	内側 内側 幅4.8	内側・削り込み不規則、鋸歯に鉄突文 内側・削り込み不規則	良 やや良	内外ともに深い褐色		
31	26 28	2区 25.10m	第2層 土質層	内側 内側 幅1.7	内側・口縁斜面ナメ 内側・ナメ	良 良好	内外ともに深い褐色		
32	26 28	2区 25.29m	第2層 土質層	内側 内側 幅1.5	内側・削り込みナメ 内側・口縁斜面ナメ	良 良好	内外とも灰褐色		
33	26 28	2区 25.29m	第2層 土質層	内側 内側 幅1.6	内側・削り込みナメ 内側・口縁斜面ナメ	良 良好	内外とも灰褐色		
34	26 28	2区 25.29m	第2層 土質層	内側 内側 幅1.5	内側・削り込みナメ 内側・口縁斜面ナメ	良 良好	内外とも灰褐色		
35	26 28	2区 25.29m	第2層 土質層	内側 内側 幅1.4	内側・大穴削り込みナメ 内側・口縁斜面ナメ	良 良好	内外とも灰褐色	内側斜面	
36	26 28	2区 25.29m	第3層 土質層	内側 内側 幅1.9	内側・大穴削り込みナメ 内側・口縁斜面ナメ	良 良好	内外とも灰褐色		
37	26 28	2区 25.10m	第3層 土質層	内側 内側 幅1.4	内側・削り込みナメ 内側・口縁斜面ナメ	良 良好	外・灰褐色 内・灰褐色		
38	26 28	2区 25.29m	第2層 土質層	内側 内側 幅2.0	内側・光沢削り込みナメ 内側・口縁斜面ナメ、大穴部分ナメ	良 良好	外・灰褐色 内・灰褐色		
39	26 28	2区 25.29m	第2層 土質層	内側 内側 幅1.0	内側・削り込みナメ 内側・ナメ	良 良	内外とも灰褐色	内側斜面	
40	26 28	2区 25.29m	第3層 土質層	内側 内側 幅2.5	内側・口縁斜面ナメ 内側・口縁斜面ナメ	良 良好	内外とも灰褐色		
41	26 28	2区 25.29m	第3層 土質層	内側 内側 幅2.8	内側・口縁斜面ナメ 内側・口縁斜面ナメ	良 良好	外・灰褐色 内・灰褐色		
42	26 28	2区 25.29m	第3層 土質層	内側 内側 幅3.6	内側・口縁斜面ナメ 内側・口縁斜面ナメ	良 良好	内外とも灰褐色		

第VI章 3区・4区の調査成果

表 15 土器觀察表 (2)

被取 扱番 号	被取 扱名	被取 扱場所	被取 扱種 別	被取 扱面積 (ha)	被取 扱高 (t)	被取 扱形 式	被取		被取 扱年 間
							被取 扱量 (t)	被取 扱量 (t)	
43 156	31区 被取扱建物1 2300 t 20t	被取扱 建物1	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ、施設面積未算り 内面、内面ナシ、花園ナシナシ	便 良好	外・从新築面→既報値 外・从新築面			
44 156	31区 被取扱建物1 2310 t 20t	被取扱 建物1	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ	便 良好	内面とも活用化			行
45 156	31区 被取扱建物1 3350 t 20t	被取扱 建物1	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ、施設面積未算り 内面、内面ナシ、花園ナシナシ	便 良好	外・从新築面→既報値 外・从新築面			行
46 156	31区 被取扱建物1 3250 t 20t	被取扱 建物1	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ、施設面積未算り 内面、内面ナシ、花園ナシナシ	便 良好	内面とも活用化			行
47 156	31区 被取扱建物1 2248 t 20t	被取扱 建物1	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ 内面ナシ	便 良好	内面とも活用化			行
48 156	31区 被取扱建物1 3145 t 20t	被取扱 建物1	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ 内面ナシ(施設面積未算り)	便 中等	外・新築面 外・明確未算り			行
49 156	31区 被取扱建物1 3163 t 20t	被取扱 建物1	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ 内面ナシ、花園ナシナシ	便 良好	外・从新→既報リバース 外・从新			行
50 156	31区 被取扱建物1 3180 t 20t	被取扱 建物1	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ 内面ナシ	便 中等	内面とも活用化			行
51 156	31区 被取扱建物2 3340 t 20t	被取扱 建物2	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ 内面ナシナシ	便 良好	外・从新 外・从新→一時休憩			行
52 156	31区 被取扱建物2 3344 t 20t	被取扱 建物2	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ 内面ナシナシ	便 中等	内面とも活用化(前回)			行
53 156	31区 被取扱建物2 2412 t 20t	被取扱 建物2	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ 内面ナシナシ	便 良好	外・新築面→既報 外・从新面→既報			行
54 156	31区 被取扱建物2 3339 t 20t	被取扱 建物2	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ 内面ナシナシ	便 良好	外・从新 外・从新			行
55 156	31区 被取扱建物2 3087 t 20t	被取扱 建物2	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ 内面ナシナシ	便 良好	内面とも活用化			行
56 156	31区 被取扱建物2 3068 t 20t	被取扱 建物2	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ 内面ナシナシ	便 良好	内面とも活用化			行
57 156	31区 被取扱建物2 3087 t 20t	被取扱 建物2	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ 内面ナシナシナシ	便 良好	外・从新 外・从新			行
58 156	31区 被取扱建物2 3007 t 20t	被取扱 建物2	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ 内面ナシナシ	便 良好	外・从新→既報 外・从新			行
59 156	31区 被取扱建物2 3069 t 20t	被取扱 建物2	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ 内面ナシナシ	便 良好	外・从新→既報 外・从新→一時休憩			行
60 156	31区 被取扱建物2 3069 t 20t	被取扱 建物2	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ 内面ナシナシナシ	中等	外・从新 外・从新とも活用化			行
61 156	31区 被取扱建物2 3143 t 20t	被取扱 建物2	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ 内面ナシナシ	便 良好	内面とも活用化			行
62 156	31区 被取扱建物2 2212 t 20t	被取扱 建物2	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ 内面ナシナシ	便 良好	外・从新 外・从新→一時休憩			行
63 156	31区 被取扱建物2 3344 t 20t	被取扱 建物2	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ 内面ナシナシ	便 良好	内面とも活用化			行
64 156	31区 被取扱建物2 3087 t 20t	被取扱 建物2	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ 内面ナシナシ	便 良好	外・从新→既報 外・从新			行
65 156	31区 被取扱建物2 3007 t 20t	被取扱 建物2	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ 内面ナシナシ	便 良好	内面とも活用化			行
66 156	31区 被取扱建物2 3344 t 20t	被取扱 建物2	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ 内面ナシナシ	便 良好	外・从新 外・从新→一時休憩			行
67 156	31区 被取扱建物2 3087 t 20t	被取扱 建物2	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ 内面ナシナシ	便 良好	外・从新 外・从新→一時休憩			行
68 156	31区 被取扱建物2 3069 t 20t	被取扱 建物2	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ 内面ナシナシ	便 良好	内面とも活用化			行
69 156	31区 被取扱建物2 3114 t 20t	被取扱 建物2	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ 内面ナシナシ	便 良好	外・从新 外・从新→一時休憩			行
70 156	31区 被取扱建物2 3335 t 20t	被取扱 建物2	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ 内面ナシナシ	便 良好	内面とも活用化			行
71 156	31区 被取扱建物2 3210 t 20t	被取扱 建物2	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ 内面ナシナシ	便 中等	内面とも活用化			行
72 156	31区 被取扱建物4 3061 t 20t	被取扱 建物4	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ 内面ナシナシ	便 良好	内面とも活用化			行
73 156	31区 被取扱建物3 3211 t 20t	被取扱 建物3	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ 内面ナシナシ	便 良好	外・从新→既報未算り、花園面積ナシ、施設面積未算り 内面ナシナシ			行
74 156	31区 被取扱建物3 3335 t 20t	被取扱 建物3	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ 内面ナシナシ	便 良好	外・从新→既報未算り、花園面積ナシ、施設面積ナシ 内面ナシナシ			行
75 156	31区 被取扱建物4 3281 t 20t	被取扱 建物4	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ 内面ナシナシ	便 中等	内面とも活用化			行
76 156	31区 被取扱建物4 3382 t 20t	被取扱 建物4	内面 内面	被取扱ナシ、施設面積ナシ 内面ナシナシ	便 良好	内面とも活用化			行

表 16 土器観察表 (3)

編 番 号	県 名	調査 地区	地 形	柱 径(cm)	高 さ(cm)	特 徴	動 土	破 成	色 調	備 考
73 180	3区 23区 23区	波佐野 4 3302 ピット 付	須世野 村	φ 18.8 △ 29	外縁：氧化小孔溝等(凹凸なし) 内縁：氧化たたずみ等(凹凸なし)	質 やや硬 内:灰褐色 外:灰褐色				
74 180	3区 23区	波佐野 4 3300 ピット 付	須世野 村	φ 11.0 △ 26	外縁：斜面ナメ 内縁：斜面ナメ	質 良好 内:灰褐色 外:灰褐色				
75 180	3区 23区 23区	波佐野 4 3303 ピット 付	須世野 村	φ 1.9 △ 1.6	内縁：斜面ナメ、底部斜面未見り 内縁：斜面ナメ、底部ナメ	中や硬 やや硬 内:灰褐色 外:灰褐色				
76 180	3区 23区 23区	波佐野 4 3304 ピット 付	須世野 村	φ 1.6 △ 1.6	内縁：ナメ 内縁：ナメ	中や硬 やや硬 内:灰褐色 外:灰褐色				
77 180	3区 23区 23区	波佐野 4 3305 ピット 付	須世野 村	φ 4.3 △ 4.3	内縁：ナメ 内縁：ナメ	中や硬 やや硬 内:灰褐色 外:灰褐色				
78 181	3区 23区 23区	波佐野 5 3302 ピット 付	土師野 村	φ 1.9 △ 3.0	内縁：ナメ、底部斜面未見り 内縁：ナメ	質 良好 内:灰褐色 外:灰褐色				
79 181	3区 23区 23区	波佐野 5 3303 ピット 付	土師野 村	φ 1.6 △ 1.6	内縁：斜面ナメ 内縁：ナメ	質 良好 内:灰褐色 外:灰褐色				
80 181	3区 23区 23区	波佐野 5 3304 ピット 付	土師野 村	φ 1.6 △ 4.2	内縁：受部ナメ 内縁：上ナメ後成文化	質 良好 内:灰褐色 外:灰褐色				
81 181	3区 23区 23区	波佐野 5 3305 ピット 付	須世野 村	φ 12.8 △ 0.9	内縁：斜面ナメ 内縁：斜面ナメ	質 良好 内:灰褐色 外:灰褐色				
82 181	3区 23区 23区	波佐野 6 3306 ピット 付	土師野 村	φ 2.5 △ 2.5	内縁：口縁ナメナメ、底部ハケナメ 内縁：口縁ナメナメ、底部ハケナメ	質 良好 内:灰褐色 外:灰褐色				
83 181	3区 23区 23区	波佐野 6 3307 ピット 付	須世野 村	φ 12.8 △ 2.9	内縁：灰青色ナメ、側壁ナメナメ、底部下平斜面ナメ 内縁：灰青色ナメ、側壁ナメナメ	質 やや良 内:灰褐色 外:灰褐色				
84 181	3区 23区 23区	波佐野 6 3308 ピット 付	須世野 村	φ 16.4 △ 1.2	内縁：斜面ナメ 内縁：斜面ナメ	質 良好 内:灰褐色 外:灰褐色				
85 182	3区 23区 23区	波佐野 7 3309 ピット 付	須世野 村	φ 12.7 △ 2.7	内縁：灰青色ナメ、側壁ナメナメ、底部下平斜面ナメ 内縁：灰青色ナメ、側壁ナメナメ	中や硬 やや硬 内:灰褐色 外:灰褐色				
86 182	3区 23区 23区	波佐野 7 3310 ピット 付	須世野 村	φ 12.8 △ 1.9	内縁：灰青色ナメ 内縁：ナメ	質 良好 内:灰褐色 外:灰褐色				
87 182	3区 23区 23区	波佐野 7 3311 ピット 付	須世野 村	φ 14.8 △ 2.0	内縁：斜面ナメ 内縁：斜面ナメ	質 良好 内:灰褐色 外:灰褐色				
88 182	3区 23区 23区	波佐野 7 3312 ピット 付	須世野 村	φ 12.8 △ 1.9	内縁：斜面ナメ 内縁：斜面ナメ	質 良好 内:灰褐色 外:灰褐色				
89 182	3区 23区 23区	波佐野 7 3313 ピット 付	須世野 村	φ 12.7 △ 2.9	内縁：斜面ナメ 内縁：斜面ナメナメ、底部斜面未見り 内縁：斜面ナメナメ	質 良好 内:灰褐色 外:灰褐色				
90 182	3区 23区 23区	波佐野 7 3314 ピット 付	須世野 村	φ 11.2 △ 2.1	内縁：ココナメ 内縁：ココナメ	質 良好 内:灰褐色 外:灰褐色				
91 182	3区 23区 23区	波佐野 7 3315 ピット 付	須世野 村	φ 14.4 △ 4.4	内縁：ナメ、側壁ナメ 内縁：調整ナメ	質 良好 内:灰褐色 外:灰褐色				
92 182	3区 23区 23区	波佐野 7 3316 ピット 付	須世野 村	φ 13.8 △ 2.8	内縁：斜面ナメ 内縁：斜面ナメ	質 良好 内:灰褐色 外:灰褐色				
93 183	3区 23区 23区	波佐野 8 3317 ピット 付	須世野 村	φ 15.8 △ 2.0	内縁：斜面ナメ 内縁：斜面ナメ	中や硬 やや硬 内:灰褐色 外:灰褐色				
94 183	3区 23区 23区	波佐野 8 3318 ピット 付	須世野 村	φ 11.8 △ 3.3	内縁：斜面ナメ 内縁：斜面ナメ	質 良好 内:灰褐色 外:灰褐色				
95 183	3区 23区 23区	波佐野 8 3319 ピット 付	須世野 村	φ 1.8 △ 1.8	内縁：底部下平～凸台斜面ナメ 内縁：ナメ	質 良好 内:灰褐色 外:灰褐色				
96 183	3区 23区 23区	波佐野 8 3320 ピット 付	須世野 村	φ 1.1 △ 1.1	内縁：斜面ナメ 内縁：斜面ナメ	硬 硬 内:灰褐色 外:灰褐色				
97 183	3区 23区 23区	波佐野 8 3321 ピット 付	須世野 村	φ 1.6 △ 2.6	内縁：斜面ナメ(二重底により不明確) 内縁：ナメ(底部斜面未見)	硬 軟 内:灰褐色 外:灰褐色				
98 183	3区 23区 23区	波佐野 8 3322 ピット 付	須世野 村	φ 2.9 △ 4.4	内縁：ナメ 内縁：ナメ、底部ナメナメ	質 良好 内:灰褐色 外:灰褐色				
99 183	3区 23区 23区	波佐野 8 3323 ピット 付	須世野 村	φ 5.1 △ 5.1	内縁：ナメ 内縁：ナメ	質 良好 内:灰褐色 外:灰褐色				
100 184	4区 23区	波佐野 9 4273 ピット 付	土師野 村	φ 12.0 △ 7.6	内縁：口縁ナメナメ、底部ハケナメナメ 内縁：口縁ナメナメナメ	質 良好 内:オーライプ灰褐色～オーライ ブ灰褐色				
101 184	4区 23区	波佐野 9 4274 ピット 付	須世野 村	φ 4.0 △ 3.7	内縁：ナメ 内縁：ナメ	質 良好 内:灰褐色 外:灰褐色				
102 184	4区 23区	波佐野 9 4275 ピット 付	1.ニチヨウ 村	φ 4.0 △ 3.7	内縁：ナメ 内縁：ナメ	質 良好 内:灰褐色 外:灰褐色				

表 17 土器觀察表 (4)

表 18 土器観察表(5)

編號	県名	県市町	遺跡	種類	L径(cm)	幅(cm)	特徴	出土	焼成	色調	備考
144	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 墓	42	内径：火舟形凹輪ハラタケリ。つまみ船形に伴うナメ。体張 内面：火舟形ナメ。体張凹輪ナメ	質 やや良 内/外白身～灰白色					
145	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 墓	39	内径：火舟形ナメ。体張凹輪ナメ	質 良好 内/黄褐色					
146	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 墓	32	内径：火舟形凹輪ハラタケリナメ。体張凹輪ナメ	質 良好 内/灰白色					
147	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	48	内径：直底形ナメ。体張土手回転ナメ。下手回転ハラタケリ直 縁ナメ	質 良好 内/灰白色				底部目録。ヘラ号等「〇」	
148	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	—	内径：ナメ	質 良好 内/外白身～灰白色					
149	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	33	内径：直底形凹輪ナメ。下手回転ナメ	質 良好 内/灰白色				底部に記載	
150	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	42	内径：直底形凹輪ナメ。高台落ナメ。体張凹輪ナ メ	質 良好 内/黄褐色～灰白色					
151	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	45	内径：直底形ナメ。体張凹輪ナメ	質 良好 内/外白身～灰白色					
152	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	45	内径：直底形ナメ。高台ハラタケリ直縁ナメ	質 良好 内/外白身～灰白色					
153	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	42	内径：直底形ナメ	質 良好 内/外白身～灰白色					
154	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	33	内径：直底形凹輪ナメ。火舟形凹輪ナメ	質 良好 内/外白身～灰白色				底部ヘラ号？	
155	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	23	内径：直底形ナメ。火舟形凹輪ナメ	質 良好 内/外白身～灰白色					
156	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	27	内径：直底形凹輪ナメ。火舟形凹輪ナメ	質 良好 内/外白身～灰白色					
157	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	—	内径：直底形凹輪ナメ。火舟形凹輪ナメ。体張凹輪ナメ	質 良好 内/外白身～灰白色				底部に記載	
158	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	33	内径：直底形凹輪ナメ。下手回転ナメ。体張凹輪ナ メ	質 良好 内/外白身～灰白色					
159	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	15	内径：直底形凹輪ナメ。体張凹輪ナメ	質 良好 内/外白身～灰白色					
160	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	33	内径：直底形凹輪ナメ。体張凹輪ナメ。高台落ナ メ	質 良好 内/黄褐色				底部外側にヘラ記号	
161	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	33	内径：直底形凹輪ナメ。体張凹輪ナメ。高台落ナ メ	質 良好 内/外白身～灰白色					
162	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	43	内径：直底形ナメ。火舟形凹輪ナメ	質 良好 内/灰白色					
163	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	127	内径：直底形凹輪ナメ。体張凹輪ナメ	質 良好 内/外白身～オーリーブ灰					
164	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	27	内径：直底形凹輪ナメ	質 良好 内/外白身～灰白色					
165	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	33	内径：直底形凹輪ナメ。体張凹輪ナメ。下手回転ナメ	質 良好 内/外白身～灰白色					
166	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	—	内径：直底形ナメ。体張凹輪ナメ	質 良好 内/外白身～灰白色				底部に記載	
167	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	33	内径：直底形凹輪ナメ。体張凹輪ナメ。下手回転ナメ	質 良好 内/外白身～灰白色					
168	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	33	内径：直底形凹輪ナメ。体張凹輪ナメ。下手回転ナメ	質 良好 内/外白身～灰白色					
169	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	—	内径：直底形ナメ。体張凹輪ナメ	質 良好 内/外白身～灰白色					
170	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	15	内径：直底形ナメ。体張凹輪ナメ	質 良好 内/外白身～灰白色					
171	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	33	内径：直底形凹輪ナメ。体張凹輪ナメ。高台落ナ メ	質 良好 内/外白身～灰白色					
172	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	—	内径：直底形凹輪ナメ。体張凹輪ナメ	質 良好 内/外白身～灰白色					
173	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	29	内径：直底形ナメ	質 良好 内/外白身					
174	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	30	内径：直底形凹輪ナメ。体張凹輪ナメ。火舟形凹輪ナメ。体張凹輪ナメ	質 良好 内/外白身～灰白色					
175	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	32	内径：直底形ナメ。体張凹輪ナメ	質 良好 内/外白身～灰白色					
176	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	26	内径：直底形ナメ。体張凹輪ナメ。高台落ナメ	質 良好 内/外白身～灰白色				大井戸内側にヘラ記号	
177	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	34	内径：つまみ部ナメ。体張凹輪ナメ	質 良好 内/外白身～灰白色					
178	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	—	内径：火舟形凹輪ナメ。体張凹輪ナメ	質 良好 内/外白身～灰白色				底部内側に横手記号	
179	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	32	内径：直底形ナメ。体張凹輪ナメ	質 良好 内/外白身～灰白色				底部内側に部分2条の横手記号	
180	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	46	内径：直底形凹輪ナメ。体張凹輪ナメ。火舟形凹輪ナメ。体張凹輪ナメ	質 良好 内/外白身～灰白色					
181	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	34	内径：直底形ナメ。火舟形凹輪ナメ。体張凹輪ナメ	質 良好 内/外白身～灰白色					
182	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	65	内径：直底形凹輪ナメ。体張凹輪ナメ	質 良好 内/外白身～灰白色					
183	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	67	内径：直底形ナメ。体張凹輪ナメ	質 良好 内/外白身～灰白色					
184	新潟	3区 25.5cm 土上層	須世郡 高台付近	68	内径：直底形凹輪ナメ。体張凹輪ナメ	質 良好 内/外白身～灰白色					

表 19 土器觀察表 (6)

表 20 土器觀察表 (7)

表21 土器観察表(8)

編番 番号	国名 番号	調査 地名	種別	L寸幅(cm) 幅高(cm)	備考	出土 状況	色調	備考
267 175	3区 2D-2b	3006唐 土上部	瓦器部 片	Φ 36.0 △ 7.5	外側 花茎脚部赤り、高台付ナメ。底面平ナメト。下手 内側 花茎ナメ。底面脚部ナメ	埋	良好 内外釉とも灰白	
268 175	3区 2D-2b	3006唐 土上部	瓦器部 片	Φ 32.7 △ 5.29	外側 花茎脚部赤り、底面脚部ナメ。下端ナメ 内側 花茎ナメ。底面脚部ナメ	埋	良好 内外釉とも灰白～灰白	
269 175	3区 2D-2b	3006唐 土上部	瓦器部 片	Φ 32.4 △ 5.6	外側 花茎脚部赤り、底面脚部ナメ 内側 花茎ナメ。底面脚部ナメ	埋	良好 内外釉とも灰白～灰白	底部外側にヒラ記号
270 175	3区 2D-2c	3006唐 土上部	瓦器部 片	Φ 32.8 △ 5.09	外側 花茎脚部赤り、底面脚部ナメ。下端ナメ 内側 花茎脚部赤り、底面脚部ナメ。下端ナメ	埋	中古級 内/灰白～灰白 内/灰白～灰白	
271 175	3区 2D-2c	3006唐 土上部	瓦器部 片	Φ 32.2 △ 5.5	外側 花茎脚部赤り、底面脚部ナメ。下端ナメ 内側 花茎ナメ。底面ナメ	埋	良好 内/灰白～グリーン色 内/灰白～明黄褐色	
272 175	3区 2D-2c	3006唐 土上部	瓦器部 片	Φ 31.4 △ 5.34	外側 花茎脚部赤り、底面脚部ナメ。下端ナメ 内側 花茎ナメ。底面脚部ナメ	埋	良好 内外釉とも灰白	
273 175	3区 2D-2c	3006唐 土上部	瓦器部 片	Φ 31.2 △ 5.09	外側 花茎脚部赤り、底面脚部ナメ 内側 花茎ナメ。底面脚部ナメ	埋	良好 内/灰白 内/灰白	
274 175	3区 2D-2c	3006唐 土上部	瓦器部 片	Φ 31.8 △ 5.17	外側 花茎脚部赤り、底面ナメ 内側 花茎ナメ	埋	中古級 内/灰白～灰白 内/灰白	
275 175	3区 2D-2c	3006唐 土上部	瓦器部 片	Φ 31.4 △ 5.14	外側 ナメ無 内側 ナメ無	埋	良好 内外釉とも灰白	
276 175	3区 2D-2c	3006唐 土上部	瓦器部 片	Φ 30.9 △ 5.07	外側 口縁部から全体にナメ付ナメナメ 内側 ナメナメ	埋	良好 内外釉とも灰白	
277 175	3区 2D-2c	3006唐 土上部	瓦器部 片	Φ 31.0 △ 6.3	外側 花茎脚部ナメ。高台付ナメ。底面ナメナメナメ 内側 ナメ接着ナメ付ナメ。指紋付	埋	良好 内外釉とも灰白	
278 175	3区 2D-2c	3006唐 土上部	瓦器部 片	Φ 31.2 △ 6.3	外側 花茎脚部ナメ。高台付ナメ。底面ナメ 内側 ナメ接着ナメ付ナメ。指紋付	埋	良好 内/灰白 内/灰白	外側周囲灰白
279 175	3区 2D-2c	3006唐 土上部	瓦器部 片	Φ 31.8 △ 5.25	外側 花茎脚部ナメ付ナメナメ 内側 ナメ	埋	良好 内/灰白～灰白 内/灰白	
280 175	3区 2D-2c	3006唐 土上部	瓦器部 片	Φ 31.1 △ 5.26	外側 ナメナメ 内側 ナメナメ	埋	良好 内外釉とも灰白	
281 175	3区 2D-2c	3006唐 土上部	瓦器部 片	Φ 31.0 △ 5.30	外側 口縁部ハマリ接着ナメ。底面ナメ 内側 ナメナメ	埋	良好 内外釉とも灰白	
282 175	3区 2D-2c	3006唐 土上部	瓦器部 片	Φ 29.4 △ 4.4	外側 口縁部ナメ。底面ナメナメナメ。体部ナメト。脚部ナメ 内側 ナメ接着ナメ付ナメ	中古級 内/灰白 内/灰白	内/灰白 内/灰白	
283 175	3区 2D-2c	3006唐 土上部	瓦器部 片	Φ 22.2 △ 4.7	外側 口縁部ナメ。底面ナメナメナメ 内側 ナメ接着ナメ付ナメ。体部ナメナメ	埋	良好 内/灰白 内/灰白	
284 175	3区 2D-2c	3006唐 土上部	瓦器部 片	Φ 20.4 △ 9.5	外側 口縁部ナメ。底面ナメ 内側 ナメ接着ナメナメナメ	埋	良好 内/灰白～灰白 内/灰白	内/灰白
285 175	4区 4D-2b	4009唐 土上部	瓦器部 片	Φ 13.6 △ 2.8	外側 天井脚部ナメナメナメ。底面脚部ナメ 内側 ナメ接着ナメ付ナメナメ	埋	良好 内外釉とも灰白	
286 175	4区 4D-2b	4009唐 土上部	瓦器部 片	Φ 13.0 △ 2.8	外側 天井脚部ナメナメナメ。底面脚部ナメ 内側 ナメ接着ナメ付ナメナメ	埋	良好 内外釉とも灰白	
287 175	4区 4D-2b	4009唐 土上部	瓦器部 片	Φ 12.8 △ 3.0	外側 ナメナメナメ 内側 口縁部ナメナメナメ	埋	良好 内/灰白 内/灰白	内/灰白
288 175	4区 4D-2b	4009唐 土上部	瓦器部 片	Φ 12.9 △ 3.0	外側 ナメナメナメ 内側 ナメナメナメ	埋	良好 内/灰白 内/灰白	
289 175	4区 4D-2b	4009唐 土上部	瓦器部 片	Φ 12.0 △ 2.6	外側 ナメナメナメ 内側 ナメナメナメ	埋	良好 内/灰白～暗灰褐色 内/灰白	
290 175	4区 4D-2b	4009唐 土上部	瓦器部 片	Φ 11.8 △ 2.7	外側 天井脚部ナメナメナメ。底面脚部ナメ 内側 ナメ接着ナメ付ナメナメ	埋	良好 内/灰白 内/灰白	
291 175	4区 4D-2b	4009唐 土上部	瓦器部 片	Φ 11.5 △ 2.6	外側 天井脚部ナメナメナメ。底面脚部ナメ 内側 ナメ接着ナメ付ナメナメ	埋	良好 内/灰白 内/灰白	
292 175	4区 4D-2b	4009唐 土上部	瓦器部 片	Φ 11.0 △ 2.6	外側 天井脚部ナメナメナメ。底面脚部ナメ 内側 ナメ接着ナメ付ナメナメ	埋	良好 内/灰白 内/灰白	
293 175	4区 4D-2b	4009唐 土上部	瓦器部 片	Φ 10.0 △ 2.5	外側 天井脚部ナメナメナメ。底面脚部ナメ 内側 ナメ接着ナメ付ナメナメ	埋	良好 内/灰白 内/灰白	
294 175	4区 4D-2b	4009唐 土上部	瓦器部 片	Φ 9.8 △ 2.4	外側 天井脚部ナメナメナメ。底面脚部ナメ 内側 ナメ接着ナメ付ナメナメ	埋	良好 内/灰白 内/灰白	
295 175	4区 4D-2b	4009唐 土上部	瓦器部 片	Φ 9.5 △ 2.4	外側 天井脚部ナメナメナメ。底面脚部ナメ 内側 ナメ接着ナメ付ナメナメ	埋	良好 内/灰白 内/灰白	
296 175	4区 4D-2b	4009唐 土上部	瓦器部 片	Φ 9.2 △ 2.4	外側 天井脚部ナメナメナメ。底面脚部ナメ 内側 ナメ接着ナメ付ナメナメ	埋	良好 内/灰白 内/灰白	
297 175	4区 4D-2b	4009唐 土上部	瓦器部 片	Φ 9.0 △ 2.4	外側 天井脚部ナメナメナメ。底面脚部ナメ 内側 ナメ接着ナメ付ナメナメ	埋	良好 内/灰白 内/灰白	
298 175	4区 4D-2b	4009唐 土上部	瓦器部 片	Φ 8.8 △ 2.3	外側 天井脚部ナメナメナメ。底面脚部ナメ 内側 ナメ接着ナメ付ナメナメ	埋	良好 内/灰白 内/灰白	
299 175	4区 4D-2b	4009唐 土上部	瓦器部 片	Φ 8.5 △ 2.3	外側 天井脚部ナメナメナメ。底面脚部ナメ 内側 ナメ接着ナメ付ナメナメ	埋	良好 内/灰白 内/灰白	
300 175	4区 4D-2b	4009唐 土上部	瓦器部 片	Φ 8.4 △ 2.2	外側 天井脚部ナメナメナメ。底面脚部ナメ 内側 ナメ接着ナメ付ナメナメ	埋	良好 内/灰白 内/灰白	底部墨記号「升」
301 175	4区 4D-2b	4009唐 土上部	瓦器部 片	Φ 8.2 △ 2.2	外側 天井脚部ナメナメナメ。底面脚部ナメ 内側 ナメ接着ナメ付ナメナメ	埋	良好 内/灰白 内/灰白	底部墨記号「升」
302 175	4区 4D-2b	4009唐 土上部	瓦器部 片	Φ 8.0 △ 2.2	外側 天井脚部ナメナメナメ。底面脚部ナメ 内側 ナメ接着ナメ付ナメナメ	埋	良好 内/灰白 内/灰白	底部墨記号「升」
303 175	4区 4D-2b	4009唐 土上部	瓦器部 片	Φ 7.8 △ 2.2	外側 天井脚部ナメナメナメ。底面脚部ナメ 内側 ナメ接着ナメ付ナメナメ	埋	良好 内/灰白 内/灰白	
304 175	4区 4D-2b	4009唐 土上部	瓦器部 片	Φ 7.6 △ 2.1	外側 天井脚部ナメナメナメ。底面脚部ナメ 内側 ナメ接着ナメ付ナメナメ	埋	良好 内/灰白 内/灰白	
305 175	4区 4D-2b	4009唐 土上部	瓦器部 片	Φ 7.4 △ 2.1	外側 天井脚部ナメナメナメ。底面脚部ナメ 内側 ナメ接着ナメ付ナメナメ	埋	良好 内/灰白 内/灰白	
306 175	4区 4D-2b	4009唐 土上部	瓦器部 片	Φ 7.2 △ 2.0	外側 天井脚部ナメナメナメ。底面脚部ナメ 内側 ナメ接着ナメ付ナメナメ	埋	良好 内/灰白 内/灰白	
307 175	4区 4D-2b	4009唐 土上部	瓦器部 片	Φ 7.0 △ 2.0	外側 天井脚部ナメナメナメ。底面脚部ナメ 内側 ナメ接着ナメ付ナメナメ	埋	良好 内/灰白 内/灰白	

表 22 土器観察表(9)

編號	県名	県市名	発掘場所	鉢形	L径(cm)	H径(cm)	特徴	船上	破成	色調	備考
308	176	4区 25-7	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底部軽く削り 外縁：鋸歯状ナメ、底面横輪郭	質	板 内/外白色	内/外白色	
309	176	4区 25-7b	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内面と外面	底部へ記号「〇」
310	176	4区 25-7	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内面と外面	底部へ記号
311	176	4区 25-7a	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内面と外面	
312	176	4区 25-7	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	やや良	内/外白色	
313	176	4区 25-7a	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	
314	176	4区 25-7b	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内面と外面	
315	176	4区 25-7	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	板 内/外白色	内/外白色	
316	176	4区 25-7b	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内面と外面	
317	176	4区 25-7a	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	板	内面と外面	
318	177	4区 25-7a	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内面と外面	内側に自然輪付帯
319	177	4区 25-7	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	
320	177	4区 25-7b	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	内側に自然輪付帯
321	177	4区 25-7	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	
322	177	4区 25-7a	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	内側に自然輪付帯
323	177	4区 25-7b	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	
324	177	4区 25-7	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	
325	177	4区 25-7b	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	
326	177	4区 25-7	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	
327	177	4区 25-7b	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	
328	177	4区 25-7	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	
329	177	4区 25-7b	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	
330	178	4区 25-7a	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	内側に自然輪付帯
331	178	4区 25-7b	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	内側に自然輪付帯
332	178	4区 25-7	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	内側に自然輪付帯
333	178	4区 25-7b	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	内側に自然輪付帯
334	178	4区 25-7	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	内側に自然輪付帯
335	178	4区 25-7b	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	内側に自然輪付帯
336	178	4区 25-7	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	内側に自然輪付帯
337	178	4区 25-7b	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	内側に自然輪付帯
338	178	4区 25-7	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	内側に自然輪付帯
339	178	4区 25-7b	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	内側に自然輪付帯
340	178	4区 25-7	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	内側に自然輪付帯
341	178	4区 25-7b	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	内側に自然輪付帯
342	178	4区 25-7	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	内側に自然輪付帯
343	178	4区 25-7b	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	内側に自然輪付帯
344	178	4区 25-7	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	内側に自然輪付帯
345	178	4区 25-7b	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	内側に自然輪付帯
346	178	4区 25-7	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	内側に自然輪付帯
347	178	4区 25-7b	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	内側に自然輪付帯
348	178	4区 25-7	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	下部に乳突
349	178	4区 25-7b	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	
350	178	4区 25-7	4018 濱 土	須世田 型	Φ18.8	6.1	内面：凹底ナメ、底面横輪郭	質	良好	内/外白色	

表 23 土器観察表 (10)

編集 番号	国屋 番号	調査 地名	施設 種別	土質(cm)	特徴	相土	焼成	色調	備考
351	178	4区 2C-7a	廻ら玉	■ 13.8	二つの熱帯により表面が剥れて調整不明	■	良好	内外両面ともに灰白色	
352	178	4区 2C-7b	廻ら玉	■ 18.4	内面 ■ 1.5 壁面は堅密な粘土	■	良好	外側 ■ 低火候 ~ 黄褐色 内側 ■ 灰色 ~ 黑褐色	
353	179	4区 2D-7a	廻ら玉	■ 18.0	内面 ■ 1.5 丸みを帯び、口縁部斜面	■	良好	外側 ■ 黄褐色 内側 ■ 黑褐色	炭化部内部へタ記号(×)
354	179	4区 2D-7a	廻ら玉	■ 18.5	内面 ■ 1.5 天井部分、壁面	■	良好	外側 ■ 黑褐色 内側 ■ 黑褐色	外側厚付
355	179	4区 2D-7a	廻ら玉	■ 18.8	内面 ■ 1.5 保険の内側、口縁部内側	■	やや良好	内面 ■ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
356	179	4区 2D-7a	廻ら玉	■ 21.1	内面 ■ 1.5 壁面	■	良好	外側 ■ 黄褐色 内側 ■ 黄褐色	
357	179	4区 2D-7a	廻ら玉	■ 11.7	内面 ■ 1.5 壁面は堅密で、内側を土壁	■	良好	内面 ■ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
358	179	4区 2C-7c	廻ら玉	■ 13.8	内面 ■ 1.5 壁面 ■ 2.0 帽子の内側	■	良好	内面 ■ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
359	179	4区 2D-7a	上部	■ 27.4	内面 ■ 1.5 口縁部 ■ 1.5 保険	■	良好	外側 ■ 黑褐色 ~ 黄褐色 内側 ■ 黑褐色 ~ 黄褐色	
360	180	4区 2C-7c	廻ら玉	■ 11.4	内面 ■ 1.5 天井部分 ■ 1.5 壁面	■	良好	内面 ■ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
361	180	4区 2C-7c	廻ら玉	■ 15.5	内面 ■ 1.5 壁面 ■ 1.5 口縁部内側	■	良好	外側 ■ 黑褐色 ~ 黄褐色 内側 ■ 黑褐色	内側厚付
362	180	4区 2D-7a	廻ら玉	■ 12.2	内面 ■ 1.5 丸みを帯び、口縁部内側	■	良好	内面 ■ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
363	180	4区 2C-7b	廻ら玉	■ 17	内面 ■ 1.5 壁面 ■ 1.5 口縁部内側	■	良好	内面 ■ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	つまみ内ヘタ記号(●)
364	180	4区 2D-7a	廻ら玉	■ 1.4	内面 ■ 1.5 壁面	■	良好	内面 ■ 黄褐色 ~ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	内面厚付
365	180	4区 2D-7a	廻ら玉	■ 15.9	内面 ■ 1.5 丸みを帯び、口縁部内側 ■ 1.5 壁面	■	やや良好	外側 ■ 黄褐色 内側 ■ 黄褐色	
366	180	4区 2D-7a	廻ら玉	■ 2.5	内面 ■ 1.5 天井部分 ■ 1.5 壁面 ■ 1.5 口縁部内側	■	良好	外側 ■ 黄褐色 内側 ■ 黄褐色	つまみ内ヘタ記号
367	180	4区 2C-7a	廻ら玉	■ 2.2	内面 ■ 1.5 天井部分 ■ 1.5 壁面 ■ 1.5 口縁部内側	■	良好	内面 ■ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
368	180	4区 2D-7a	廻ら玉	■ 27	内面 ■ 1.5 丸みを帯び、口縁部 ■ 1.5 壁面	■	良好	外側 ■ 黑褐色 ~ 黄褐色 内側 ■ 黑褐色	
369	180	4区 2D-7a	廻ら玉	■ 2.8	内面 ■ 1.5 丸みを帯び、天井部分 ■ 1.5 壁面	■	良好	内面 ■ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
370	180	4区 2C-7b	廻ら玉	■ 1.8	内面 ■ 1.5 壁面	■	良好	内面 ■ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
371	180	4区 2D-7a	廻ら玉	■ 1.6	内面 ■ 1.5 壁面	■	良好	外側 ■ 黄褐色 内側 ■ 黄褐色	
372	180	2C-7a	廻ら玉	■ 2.2	内面 ■ 1.5 丸みを帯び、天井部分 ■ 1.5 壁面	■	良好	内面 ■ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
373	180	2D-7a	廻ら玉	■ 1.1	内面 ■ 1.5 丸みを帯び、天井部分 ■ 1.5 壁面	■	良好	内面 ■ 黄褐色 ~ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
374	180	4区 2D-7a	廻ら玉	■ 12.8	内面 ■ 1.5 壁面	■	良好	内面 ■ 黄褐色 ~ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
375	180	4区 2C-7b	廻ら玉	■ 3.7	内面 ■ 1.5 天井部分 ■ 1.5 壁面	■	良好	内面 ■ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
376	180	4区 2C-7b	廻ら玉	■ 2.0	内面 ■ 1.5 壁面	■	良好	外側 ■ 黄褐色 内側 ■ 黄褐色	
377	180	4区 2D-7a	廻ら玉	■ 4.0	内面 ■ 1.5 天井部分 ■ 1.5 壁面	■	やや良好	内面 ■ 黄褐色 ~ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
378	180	4区 2D-7a	廻ら玉	■ 2.5	内面 ■ 1.5 天井部分 ■ 1.5 壁面	■	良好	内面 ■ 黄褐色 ~ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
379	180	4区 2C-7b	廻ら玉	■ 3.1	内面 ■ 1.5 壁面	■	良好	内面 ■ 黄褐色 ~ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
380	180	4区 2D-7a	廻ら玉	■ 2.2	内面 ■ 1.5 丸みを帯び、口縁部 ■ 1.5 壁面	■	良好	内面 ■ 黄褐色 ~ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
381	180	4区 2D-7a	廻ら玉	■ 2.6	内面 ■ 1.5 丸みを帯び、天井部分 ■ 1.5 壁面	■	良好	内面 ■ 黄褐色 ~ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
382	180	4区 2C-7b	廻ら玉	■ 2.4	内面 ■ 1.5 丸みを帯び、口縁部 ■ 1.5 壁面	■	良好	内面 ■ 黄褐色 ~ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
383	180	4区 2D-7a	廻ら玉	■ 3.7	内面 ■ 1.5 天井部分 ■ 1.5 壁面	■	良好	内面 ■ 黄褐色 ~ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
384	180	4区 2D-7a	廻ら玉	■ 2.0	内面 ■ 1.5 壁面	■	良好	外側 ■ 黄褐色 ~ 黄褐色 内側 ■ 黑褐色	
385	180	4区 2D-7a	廻ら玉	■ 2.4	内面 ■ 1.5 天井部分 ■ 1.5 壁面	■	良好	外側 ■ 黄褐色 ~ 黄褐色 内側 ■ 黑褐色	
386	180	4区 2C-7b	廻ら玉	■ 2.6	内面 ■ 1.5 天井部分 ■ 1.5 壁面	■	良好	外側 ■ 黄褐色 ~ 黄褐色 内側 ■ 黑褐色	
387	180	4区 2D-7a	廻ら玉	■ 2.6	内面 ■ 1.5 天井部分 ■ 1.5 壁面	■	良好	内面 ■ 黄褐色 ~ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
388	180	4区 2C-7b	廻ら玉	■ 2.8	内面 ■ 1.5 天井部分 ■ 1.5 壁面	■	良好	内面 ■ 黄褐色 ~ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
389	180	4区 2D-7a	廻ら玉	■ 2.5	内面 ■ 1.5 天井部分 ■ 1.5 壁面	■	良好	内面 ■ 黄褐色 ~ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
390	180	4区 2C-7b	廻ら玉	■ 2.4	内面 ■ 1.5 天井部分 ■ 1.5 壁面	■	良好	内面 ■ 黄褐色 ~ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
391	180	4区 2D-7a	廻ら玉	■ 2.4	内面 ■ 1.5 天井部分 ■ 1.5 壁面	■	良好	内面 ■ 黄褐色 ~ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
392	180	4区 2D-7a	廻ら玉	■ 2.8	内面 ■ 1.5 天井部分 ■ 1.5 壁面	■	良好	内面 ■ 黄褐色 ~ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
393	180	4区 2C-7b	廻ら玉	■ 2.6	内面 ■ 1.5 天井部分 ■ 1.5 壁面	■	良好	内面 ■ 黄褐色 ~ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
394	180	4区 2D-7a	廻ら玉	■ 2.5	内面 ■ 1.5 天井部分 ■ 1.5 壁面	■	良好	内面 ■ 黄褐色 ~ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
395	180	4区 2D-7a	廻ら玉	■ 2.8	内面 ■ 1.5 天井部分 ■ 1.5 壁面	■	良好	内面 ■ 黄褐色 ~ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
396	180	4区 2D-7a	廻ら玉	■ 2.4	内面 ■ 1.5 天井部分 ■ 1.5 壁面	■	良好	内面 ■ 黄褐色 ~ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
397	180	4区 2C-7b	廻ら玉	■ 2.6	内面 ■ 1.5 天井部分 ■ 1.5 壁面	■	良好	内面 ■ 黄褐色 ~ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
398	180	4区 2D-7a	廻ら玉	■ 2.4	内面 ■ 1.5 天井部分 ■ 1.5 壁面	■	良好	内面 ■ 黄褐色 ~ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
399	180	4区 2C-7b	廻ら玉	■ 2.6	内面 ■ 1.5 天井部分 ■ 1.5 壁面	■	良好	内面 ■ 黄褐色 ~ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	
400	180	4区 2D-7a	廻ら玉	■ 2.7	内面 ■ 1.5 天井部分 ■ 1.5 壁面	■	良好	内面 ■ 黄褐色 ~ 黄褐色 外側 ■ 黄褐色	

表24 土器觀察表(11)

編號	國名 番号	調査 場所	遺物 別類	種類	L寸径(cm) 幅径(cm)	特徴	出土	集成	色調	備考
301	181	4区 25-7a	4008漢 土器	ミニチュ ア	約35 △2.5	手づくね成形	質 良好	内外面とも黄褐色		
302	181	4区 25-7b	4018漢 堆積土器	堆積土器	約34.0 △2.2	内面・ナデ △2.2	質 良好	内外面ともに良い保存		
303	181	4区 25-7c	4018漢 堆積土器	堆積土器	約34.4 △2.1	内面・ナデ・削跡有り	質 良好	内外面とも明るい褐色		
304	181	4区 25-7d	4018漢 堆積土器	堆積土器	約34.5 △2.0	内面・削跡有り、底盤小凹 内面・有目、底盤小凹	質 良好	外・内に古い褐色～褐色		
305	181	4区 25-7e	4018漢 堆積土器	堆積土器	約34.6 △2.6	内面・ナデ・削跡有り	質 良好	外・内に古い褐色～褐色		
306	181	4区 25-7f	4018漢 堆積土器	堆積土器	約35.5 △2.5	底盤丸み整型	質 良好	内外面ともに古い褐色		
307	181	4区 25-7g	4018漢 堆積土器	堆積土器	約35.5 △2.6	内面・削跡有り 内面・有目	質 良好	内外面ともに古い褐色		
308	182	3区 25-7h	3006漢 土器	現世器 蓋	約34.0 △4.0	内面・外骨壺ハラ切り残ナメ・底盤削ナメ 内面・丸底ナメ・底盤削ナメナメ	やや良 好	内外面とも灰褐色		
309	182	3区 25-7i	3006漢 土器	現世器 蓋	約34.0 △4.0	内面・丸底ナメ・底盤削ナメナメ	質 良好	内外面とも灰褐色	大井部内面にヘリ記号 旋紋つまみ	
400	182	3区 25-7j	3006漢 土器	現世器 蓋	約34.4 △4.0	内面・丸底ナメ・底盤削ナメ 手平丁回転ナメ	質 良好	内外面とも灰褐色	大井部に進記号「〇」?	
401	182	3区 25-7k	3006漢 土器	現世器 蓋	約34.4 △4.0	内面・手平丁回転ナメ・底盤削ナメ	質 良好	内・暗褐色 外・灰白色	大井部自然断層	
402	182	3区 25-7l	3006漢 土器	現世器 蓋	約34.4 △4.0	内面・丸骨壺ハラ切り残ナメ・底盤削ナメ 内面・丸底ナメ・底盤削ナメナメ	質 良好	外・灰褐色 内・灰褐色	ひびみ悪い	
403	182	3区 25-7m	3006漢 土器	現世器 蓋	約34.4 △4.0	内面・丸骨壺ハラ切り残ナメ・底盤削ナメ 内面・丸底ナメ・底盤削ナメ	質 良好	外・暗褐色 内・灰褐色		
404	182	3区 25-7n	3006漢 土器	現世器 蓋	約34.4 △4.0	内面・丸骨壺ハラ切り残ナメ・底盤削ナメ 内面・回転ナメ	質 良好	外・灰褐色 内・灰褐色		
405	182	3区 25-7o	3006漢 土器	現世器 蓋	約34.4 △4.0	内面・丸骨壺ハラ切り残ナメ・底盤削ナメ 内面・丸底ナメ・底盤削ナメ	やや良 好	外・灰褐色 内・灰褐色		
406	182	3区 25-7p	3006漢 土器	現世器 蓋	約34.5 △4.0	内面・丸骨壺ハラ切り残ナメ・底盤削ナメ 内面・丸底ナメ・底盤削ナメ	質 良好	内外面とも灰褐色		
407	182	3区 25-7q	3006漢 土器	現世器 蓋	約34.5 △4.0	内面・底盤削ナメ・底盤削ナメ	質 良好	内外面とも灰褐色		
408	182	3区 25-7r	3006漢 土器	現世器 蓋	約34.5 △4.0	内面・底盤削ナメ・底盤削ナメ	質 良好	内外面とも灰褐色	前面に進記号?	
409	182	3区 25-7s	3006漢 土器	現世器 蓋	約34.5 △4.0	内面・底盤削ナメ・底盤削ナメ 内面・丸底ナメ・底盤削ナメ	質 良好	内外面とも灰褐色		
410	182	3区 25-7t	3006漢 土器	現世器 蓋	約34.5 △4.0	内面・底盤削ナメ・底盤削ナメ 内面・丸底ナメ・底盤削ナメ	質 良好	内外面とも灰褐色		
411	182	3区 25-7u	3006漢 土器	現世器 蓋	約34.5 △4.0	内面・底盤削ナメ・底盤削ナメ 内面・丸底ナメ・底盤削ナメ	質 良好	内外面とも灰褐色		
412	182	3区 25-7v	3006漢 土器	現世器 蓋	約34.5 △4.0	内面・底盤削ナメ・底盤削ナメ 内面・丸底ナメ・底盤削ナメ	質 良好	内外面とも灰褐色		
413	182	3区 25-7w	3006漢 土器	現世器 蓋	約34.5 △4.0	内面・底盤削ナメ・底盤削ナメ 内面・丸底ナメ・底盤削ナメ	質 良好	内外面とも灰褐色		
414	182	3区 25-7x	3006漢 土器	現世器 蓋	約34.5 △4.0	内面・底盤削ナメ・底盤削ナメ 内面・丸底ナメ・底盤削ナメ	質 良好	内外面とも灰褐色		
415	182	3区 25-7y	3006漢 土器	現世器 蓋	約34.5 △4.0	内面・底盤削ナメ・底盤削ナメ 内面・丸底ナメ・底盤削ナメ	質 良好	外・灰褐色 内・灰褐色	内面自然断層	
416	182	3区 25-7z	3006漢 土器	現世器 蓋	約34.5 △4.0	内面・ドリップ孔・底盤削ナメ	質 良好	内・灰褐色		
417	182	3区 25-7a	3006漢 土器	現世器 蓋	約34.5 △4.0	内面・ドリップ孔・底盤削ナメ 内面・丸底ナメ・底盤削ナメ	質 良好	外・灰褐色 内・灰褐色		
418	182	3区 25-7b	3006漢 土器	土器	約34.5 △4.0	内面・底盤削ナメ・底盤削ナメ 内面・丸底ナメ・底盤削ナメ	質 良好	内外面とも灰褐色		
419	183	3区 25-7c	3006漢 土器	土器	約34.5 △4.0	内面・底盤削ナメ・底盤削ナメ 内面・丸底ナメ・底盤削ナメ	質 良好	内外面とも灰褐色	外斜材行者	
420	183	3区 25-7d	3006漢 土器	土器	約34.5 △4.0	内面・底盤削ナメ・底盤削ナメ 内面・丸底ナメ・底盤削ナメ	やや良 好	内外面とも灰褐色		
421	183	3区 25-7e	3006漢 土器	土器	約34.5 △4.0	内面・底盤削ナメ・底盤削ナメ 内面・丸底ナメ・底盤削ナメ	やや良 好	外・灰褐色～褐色～灰褐色 内・灰褐色		
422	183	3区 25-7f	3006漢 土器	土器	約34.5 △4.0	内面・底盤削ナメ・底盤削ナメ 内面・丸底ナメ・底盤削ナメ	質 良好	外・灰褐色 内・灰褐色		
423	183	3区 25-7g	3006漢 土器	土器	約34.5 △4.0	内面・底盤削ナメ・底盤削ナメ 内面・丸底ナメ・底盤削ナメ	質 良好	外・灰褐色 内・灰褐色		
424	183	3区 25-7h	3006漢 土器	土器	約34.5 △4.0	内面・底盤削ナメ・底盤削ナメ 内面・丸底ナメ・底盤削ナメ	質 良好	外・灰褐色 内・灰褐色		
425	183	3区 25-7i	3006漢 土器	土器	約34.5 △4.0	内面・底盤削ナメ・底盤削ナメ 内面・丸底ナメ・底盤削ナメ	質 良好	外・灰褐色 内・灰褐色		
426	183	3区 25-7j	3006漢 土器	土器	約34.5 △4.0	内面・底盤削ナメ・底盤削ナメ 内面・丸底ナメ・底盤削ナメ	質 良好	外・灰褐色 内・灰褐色		
427	183	3区 25-7k	3006漢 土器	土器	約34.5 △4.0	内面・底盤削ナメ・底盤削ナメ 内面・丸底ナメ・底盤削ナメ	質 良好	外・灰褐色 内・灰褐色		
428	183	3区 25-7l	3006漢 土器	土器	約34.5 △4.0	内面・底盤削ナメ・底盤削ナメ 内面・丸底ナメ・底盤削ナメ	質 良好	外・灰褐色 内・灰褐色		
429	183	3区 25-7m	3006漢 土器	土器	約34.5 △4.0	内面・底盤削ナメ・底盤削ナメ 内面・丸底ナメ・底盤削ナメ	やや良 好	外・灰褐色 内・灰褐色		
430	183	3区 25-7n	3006漢 土器	土器	約34.5 △4.0	内面・底盤削ナメ・底盤削ナメ 内面・丸底ナメ・底盤削ナメ	やや良 好	外・灰褐色 内・灰褐色	内斜材行者	

表 25 土器觀察表 (12)

表 26 土器観察表 (13)

施設 番号	施設 名	施設 別	種類	L径(cm) 幅(cm)	特徴	地土	焼成	色調	備考
472	3区 23-7b	3438 油路 川上	土器部 皿	Φ 12.6 2.4	内面：底部調整不順（ハコ留を複数）、底部分ナメ 内面：ナメ	黄 良好	内、灰白色 内、灰褐色～暗オリーブ褐色	内面底面等	
473	3区 23-7c	3438 油路 川上	土器部 皿	Φ 12.0 △ 4.4	内面：底部分ナメナメ、ナメケズリ 内面：ナメナメ	黄 良好	内、灰白色 内、灰褐色～灰白色	内面底面等	
474	3区 23-7c	3438 油路 川上	土器部 皿	Φ 18.4 △ 2.6	内面：口縁部調整、口縁部ハタマ、底部分ナメ 内面：口縁部ハタマ、底部分ナメ	黄 良好	内、灰白色 内、灰褐色～灰白色	表面の一部が剥離	
475	3区 23-7b	3438 油路 川上部	地盤部 土	Φ 11.9 △ 2.6	内面：口縁部調整不明、底部分ナメ 内面：口縁部調整不整、底部分ナメ、側面注目、側面注目 (内面と土も調整不明)	黄 やや軟	内面と土も橙色		
476	3区 23-7b	3432 唐 土	底盤部 蓋	Φ 11.4 △ 1.0	内面：凹凸ナメ 内面：火候足ナメ、底盤凹凸ナメ	黄 良好	内面と土も灰白色～オリーブ 灰白色		
477	3区 23-7c	3432 唐 土	底盤部 蓋	Φ 11.6 △ 2.4	内面：火青苔ナメ、底盤凹凸ナメ 内面：火青苔ナメ、底盤凹凸ナメ	黄 良好	内、灰黄色 内、灰白色		
478	3区 23-7c	3432 唐 土	底盤部 蓋	Φ 17.9 △ 3.1	内面：火青苔凹凸あり、つまみ突起付口凹ナメ、底盤 凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ	黄 良好	内、灰黄色 内、灰褐色～灰白色		
479	3区 23-7c	3014 唐 土	底盤部 蓋	Φ 18.5 △ 2.1	内面：火青苔凹凸あり底盤凹凸ナメ、底盤上手凹凸ナメナメ 内面：火青苔ナメ、底盤凹凸ナメ	黄 良好	内面と土も灰白色		
480	3区 23-7c	3432 唐 土	底盤部 蓋	Φ 26.6 △ 2.0	内面：つまみ突起、火青苔凹凸あり底盤ナメ 内面：火青苔凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ	黄 良好	内、灰白色 内、灰褐色	火青苔外に赤色斑駁	
481	3区 23-7c	3432 唐 土	底盤部 蓋	Φ 12.7 △ 2.0	内面：火青苔凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ 内面：火青苔ナメ、底盤凹凸ナメ	黄 良好	内面と土もオリーブ 灰白色		
482	3区 23-7c	3432 唐 土	底盤部 蓋	Φ 12.6 △ 4.3	内面：底盤ナメナメ、底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ 内面：凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ	黄 良好	内、灰白色 内、灰白色	底部ヘラ記号	
483	3区 23-7c	3014 唐 土	底盤部 蓋	Φ 11.5 △ 3.4	内面：底盤凹凸ナメナメ、底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ 内面：底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ	黄 良好	内、灰白色 内、灰白色		
484	3区 23-7c	3432 唐 土	底盤部 蓋	Φ 26.0 △ 2.0	内面：底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ 内面：底盤ナメ、底盤凹凸ナメ	黄 良好	内、灰白色 内、灰白色	底白に燒成済の斑駁	
485	3区 23-7c	3014 唐 土	底盤部 蓋	Φ 23.3 △ 2.1	内面：底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ 内面：底盤ナメ、底盤凹凸ナメ	黄 良好	内、灰白色 内、灰白色	底白に燒成済の斑駁	
486	3区 23-7c	3432 唐 土	底盤部 蓋	Φ 25.0 △ 2.5	内面：底盤凹凸ナメナメ、底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ 内面：ナメナメ、底盤凹凸ナメ	黄 良好	内面と土も灰白色	底部ヘラ記号	
487	3区 23-7c	3432 唐 土	底盤部 蓋	Φ 26.0 △ 4.9	内面：底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ 内面：底盤ナメ、底盤凹凸ナメ	黄 良好	内面と土も灰白色		
488	3区 23-7c	3432 唐 土	底盤部 蓋	Φ 15.4 △ 2.2	内面：底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ 内面：底盤ナメ、底盤凹凸ナメ	黄 良好	内面と土も灰白色		
489	3区 23-7c	3432 唐 土	底盤部 蓋	Φ 11.6 △ 3.3	内面：底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ 内面：底盤ナメ、底盤凹凸ナメ	黄 良好	内、灰白色 内、灰白色		
490	3区 23-7c	3432 唐 土	底盤部 蓋	Φ 13.2 △ 3.4	内面：底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ 内面：底盤ナメ、底盤凹凸ナメ	黄 良好	内、灰白色 内、灰白色		
491	3区 23-7c	3432 唐 土	底盤部 蓋	Φ 12.8 △ 2.3	内面：底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ 内面：底盤ナメ、底盤凹凸ナメ	黄 良好	内、灰白色 内、灰白色		
492	3区 23-7c	3432 唐 土	底盤部 蓋	Φ 13.9 △ 3.6	内面：底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ 内面：底盤ナメ、底盤凹凸ナメ	黄 良好	内、灰白色 内、灰白色		
493	3区 23-7c	3014 唐 土	底盤部 蓋	Φ 12.4 △ 4.5	内面：底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ 内面：凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ	黄 良好	内、灰白色 内、灰白色		
494	3区 23-7c	3432 唐 土	底盤部 蓋	Φ 12.9 △ 4.7	内面：底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ 内面：凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ	黄 良好	内面と土も灰白色		
495	3区 23-7c	3432 唐 土	底盤部 蓋	Φ 12.0 △ 4.8	内面：底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ 内面：底盤ナメ、底盤凹凸ナメ	黄 やや軟	内面と土も青褐色～灰白色		
496	3区 23-7c	3432 唐 土	底盤部 蓋	Φ 12.0 △ 4.8	内面：底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ 内面：底盤ナメ、底盤凹凸ナメ	黄 やや軟	内面と土も青褐色～灰白色		
497	3区 23-7c	3432 唐 土	底盤部 蓋	Φ 12.0 △ 5.5	内面：底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ 内面：底盤ナメ、底盤凹凸ナメ	黄 やや軟	内面と土も灰白色		
498	3区 23-7c	3432 唐 土	底盤部 蓋	Φ 14.0 △ 4.7	内面：底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ 内面：凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ	黄 良好	内、灰白色 内、灰白色		
499	3区 23-7c	3432 唐 土	底盤部 蓋	Φ 12.5 △ 2.8	内面：底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ 内面：底盤ナメ、底盤凹凸ナメ	黄 やや軟	内面と土も灰白色		
500	3区 23-7c	3432 唐 土	底盤部 蓋	Φ 4.1 △ 4.1	内面：底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ 内面：底盤ナメ、底盤凹凸ナメ	黄 良好	内、灰白色 内、灰白色		
501	3区 23-7c	3014 唐 土	底盤部 蓋	Φ 15.8 △ 2.2	内面：底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ 内面：底盤ナメ、底盤凹凸ナメ	黄 良好	内面と土も灰白色		
502	3区 23-7c	3432 唐 土	底盤部 蓋	Φ 12.8 △ 2.1	内面：底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ 内面：底盤ナメ、底盤凹凸ナメ	黄 やや軟	内面と土も灰白色～灰褐色		
503	3区 23-7c	3014 唐 土	底盤部 蓋	Φ 12.3 △ 2.3	内面：底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ 内面：底盤ナメ、底盤凹凸ナメ	黄 やや軟	内、灰白色 内、灰白色		
504	3区 23-7c	3014 唐 土	底盤部 蓋	Φ 12.0 △ 1.8	内面：底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ 内面：底盤ナメ、底盤凹凸ナメ	黄 やや軟	内、灰白色 内、灰白色	内面等行差	
505	3区 23-7c	3014 唐 土	底盤部 蓋	Φ 12.0 △ 2.5	内面：底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ 内面：底盤ナメ、底盤凹凸ナメ	黄 良好	内面と土も灰白色		
506	3区 23-7c	3432 唐 土	底盤部 蓋	Φ 12.4 △ 2.2	内面：底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ、底盤凹凸ナメ 内面：底盤ナメ、底盤凹凸ナメ	黄 良好	内面と土も灰白色		

表27 土器観察表(14)

編號	國名 番号	調査 地区	遺跡 位置	種別	寸法(cm) 高さ(cm)	備考	出土	成形	色調	備考
507	3区 308	3区 2D-7b	3432 墓 土上	直筒形	φ 12.0 2.0	外側：底面刮削あり。底盤上平凹型ナット。下平凹型ナット底 内側：斜面ナット	否	手工作 内/灰白色～灰黄色 内/灰白色		
508	3区 308	3区 2D-7b	3432 墓 土上	直筒形	φ 16.8 2.0	外側：斜面ナット。上部端部に斜面を持つ 内側：斜面ナット。底盤凹型ナット	否	手工作 内/灰白色 内/灰白色		
509	3区 308	3区 2D-7b	3423 墓 土上	直筒形	φ 15.0 2.0	外側：斜面ナット 内側：斜面ナット	良好	内/灰白色 内/灰白色		
510	3区 308	3区 2D-7b	3423 墓 土上	直筒形	φ 15.0 2.0	外側：斜面ナット。底盤凹型ナット。底盤凹型ナット	良好	内/灰白色 内/灰白色		
511	3区 308	3区 2D-7c	3432 墓 土上	直筒形	φ 12.8 2.0	外側：底面刮削あり。底盤凹型ナット。底盤凹型ナット 内側：斜面ナット	良好	内/灰白色～灰白色 内/灰白色	内側に焼き跡	
512	3区 308	3区 2D-7c	3432 墓 土上	直筒形	φ 12.0 2.0	外側：斜面ナット 内側：斜面ナット	良好	内/灰白色～灰黄色 内/灰白色～灰黄色		
513	3区 308	3区 2D-6c	3014 墓 土上	直筒形	φ 5.9 1.0	外側：斜面ナット 内側：斜面ナット	良好	内/灰白色		
514	3区 308	3区 2D-7c	3423 墓 土上	直筒形	φ 12.0 2.0	外側：底面刮削あり。底盤凹型ナット 内側：底面ナット。底盤凹型ナット	良好	内/灰白色 内/灰白色		
515	3区 308	3区 2D-6c	3423 墓 土上	直筒形	φ 12.1 2.0	外側：底面刮削あり。底盤凹型ナット 内側：斜面ナット	良好	内/灰白色 内/灰白色		
516	3区 308	3区 2D-6c	3423 墓 土上	直筒形	φ 12.0 2.0	外側：底面刮削ナット。底盤凹型ナット 内側：斜面ナット	良好	内/灰白色～灰白色 内/灰白色		
517	3区 308	3区 2D-7c	3432 墓 土上	直筒形	φ 11.5 2.0	外側：斜面ナット 内側：底面ナット。一部ナット	良好	内/灰白色 内/灰白色		
518	3区 308	3区 2D-7c	3432 墓 土上	直筒形	φ 16.8 2.0	外側：斜面ナット 内側：底面ナット	良好	内/灰白色～灰黄色		
519	3区 308	3区 2D-7c	3014 墓 土上	直筒形	φ 12.0 2.0	外側：底面刮削あり。底盤凹型ナット 内側：斜面ナット	良好	内/灰白色～灰黄色		
520	3区 308	3区 2D-7c	3014 墓 土上	直筒形	φ 12.0 2.0	外側：底面刮削あり。底盤凹型ナット 内側：斜面ナット	良好	内/灰白色～灰黄色 内/灰白色		
521	3区 308	3区 2D-7c	3432 墓 土上	直筒形	φ 12.0 2.0	外側：底面ナット。高台底～底盤ナット 内側：斜面ナット。底盤ナット	良好	内/灰白色～灰黄色 内/灰白色	内側面が赤茶色	
522	3区 308	3区 2D-7c	3432 墓 土上	直筒形	φ 12.0 2.0	外側：底面ナット 内側：ナット	良好	内/灰白色～灰黄色 内/灰白色		
523	3区 308	3区 2D-7c	3014 墓 土上	直筒形	φ 12.0 2.0	外側：底面刮削あり。底盤ナット 内側：ナット	良好	内/灰白色～灰黄色 内/灰白色		
524	3区 308	3区 2D-7c	3432 墓 土上	直筒形	φ 12.0 2.0	外側：底面刮削あり。底盤ナット 内側：ナット	良好	内/灰白色～灰黄色 内/灰白色		
525	3区 308	3区 2D-7c	3432 墓 土上	直筒形	φ 12.2 2.0	外側：ナット 内側：ナット	良好	内/灰白色～灰黄色 内/灰白色		
526	3区 308	3区 2D-7c	3014 墓 土上	直筒形	φ 12.4 2.0	外側：底面刮削あり。底盤ナット 内側：ナット	良好	内/灰白色 内/灰白色		
527	3区 308	3区 2D-7c	3014 墓 土上	直筒形	φ 12.0 2.0	外側：底面刮削あり。底盤ナット 内側：底面ナット	良好	内/灰白色～灰黄色		
528	3区 308	3区 2D-7c	3432 墓 土上	直筒形	φ 12.0 2.0	外側：底面刮削あり。底盤ナット 内側：ナット	良好	内/灰白色 内/灰白色		
529	3区 308	3区 2D-7c	3432 墓 土上	直筒形	φ 12.0 2.0	外側：底面刮削あり。底盤ナット 内側：ナット	良好	内/灰白色 内/灰白色		
530	3区 308	3区 2D-7c	3432 墓 土上	直筒形	φ 14.4 2.0	外側：工具によるナット 内側：ナット	良好	内/灰白色～灰黄色 内/灰白色	外側面打痕	
531	3区 308	3区 2D-7c	3432 墓 土上	直筒形	φ 12.0 2.0	外側：底面刮削あり。底盤ナット 内側：ナット	良好	内/灰白色～灰黄色 内/灰白色		
532	3区 308	3区 2D-7c	3014 墓 土上	直筒形	φ 12.0 2.0	外側：底面刮削あり。底盤ナット 内側：ナット	良好	内/灰白色～灰黄色 内/灰白色	外側に剥離現象	
533	3区 308	3区 2D-7c	3432 墓 土上	直筒形	φ 12.0 2.0	外側：底面刮削あり。底盤ナット 内側：ナット	良好	内/灰白色～灰黄色 内/灰白色	内側に化粧付着	
534	3区 308	3区 2D-7c	3432 墓 土上	直筒形	φ 12.0 2.0	外側：底面刮削あり。底盤ナット 内側：ナット	良好	内/灰白色～灰黄色 内/灰白色		
535	3区 308	3区 2D-7c	3014 墓 土上	直筒形	φ 12.0 2.0	外側：底面刮削あり。底盤ナット 内側：ナット	良好	内/灰白色～灰黄色 内/灰白色		
536	3区 308	3区 2D-7c	3432 墓 土上	直筒形	φ 16.0 2.0	外側：ナット 内側：ナット	良好	内/灰白色 内/灰白色	外側に剥離現象	
537	3区 308	3区 2D-7c	3014 墓 土上	直筒形	φ 12.0 2.0	外側：底面刮削あり。底盤ナット 内側：ナット	良好	内/灰白色～灰黄色 内/灰白色		
538	3区 308	3区 2D-7c	3432 墓 土上	直筒形	φ 17.0 2.0	外側：底面刮削あり。底盤ナット 内側：ナット	良好	内/灰白色～灰黄色 内/灰白色		
539	3区 308	3区 2D-7c	3432 墓 土上	直筒形	φ 12.2 2.0	外側：底面ナット。斜面削り、斜面削り、斜面削り 内側：ナット	良好	内/灰白色 内/灰白色	内側面が赤茶色	
540	3区 308	3区 2D-6c	3432 墓 土上	直筒形	φ 12.8 2.0	外側：斜面削り。底盤ナット。斜面削り 内側：ナット	良好	内/灰白色～灰黄色 内/灰白色	内側面が赤茶色	
541	3区 308	3区 2D-6c	3432 墓 土上	直筒形	φ 13.0 2.0	外側：底面へ切り落しナット。斜面削り、斜面削り、斜面削り 内側：ナット	良好	内/灰白色 内/灰白色	内側面が赤茶色	
542	3区 308	3区 2D-6c	3432 墓 土上	直筒形	φ 16.8 2.0	外側：斜面削りナット。斜面削り 内側：底盤削りナット。上部斜面ナットナット。底盤ナット 内側：ナット	良好	内/灰白色～灰黄色 内/灰白色	内側面が赤茶色	
543	3区 308	3区 2D-7b	3432 墓 土上	直筒形	φ 12.0 1.9	外側：底面刮削あり。ナット 内側：ナット	良好	内/灰白色～灰黄色 内/灰白色		
544	3区 308	3区 2D-6c	3432 墓 土上	直筒形	φ 12.4 1.9	外側：斜面削り 内側：ナット	良好	内/灰白色 内/灰白色		
545	3区 308	3区 2D-7b	3432 墓 土上	直筒形	φ 14.4 2.0	外側：底面刮削ありナット。底盤ナット 内側：ナット	良好	内/灰白色～灰黄色 内/灰白色		
546	3区 308	3区 2D-7c	3432 墓 土上	直筒形	φ 12.8 1.6	外側：底面刮削あり。ナット 内側：ナット	良好	内/灰白色 内/灰白色		
547	3区 308	3区 2D-7b	3014 墓 土上	直筒形	φ 12.0 1.7	外側：底面刮削ありナット。底盤ナット 内側：ナット	やや差 やや差	内/灰白色～灰黄色 内/灰白色		
548	3区 308	3区 2D-6c	3014 墓 土上	直筒形	φ 12.4 1.9	外側：底面刮削ありナット。底盤ナット 内側：ナット	良好	内/灰白色 内/灰白色	内側面打痕	

表28 土器觀察表(15)

編號	国名 番号	調査区 別	種類	口徑(cm) 底径(cm)	特徴	出土 状況	構成	色調	備考
546	190	3区 23-26	3433 壺 土器	12.0 △.9	内面：底部凹削。底部ナメ。	質 良好	内外面とも淡黄褐色 丁度良		
550	190	23-26	3014 壺 土器	△.5.1	内面：ナメ。	質 良好	内外面とも淡黄褐色		
551	190	3区	3433 壺 土器	△.8.4	内面：口縁部ナメ。底部ナメ？。底の口の調整不確実！	質 良好	内外面とも相応		
552	190	23-26	3014 壺 土器	△.6.9	内面：口縁部ナメ。底部ナメ？。側面凹削。	質 良好	内外面とも相応		
553	190	3区	3433 壺 土器	△.4.4	内面：口縁部ナメ。底部ナメ？。上端に一箇ナメ	質 良好	内外面とも相応		
554	190	23-26	3014 壺 土器	△.2.1.3	内面：口縁部ナメ。底部ナメ？。底部ナメ。	質 良好	外：淡黄色 内：素黄色		
555	190	3区	3432 壺 土器	△.2.28	内面：口縁部ナメ。底部ナメ？。底部ナメ？。側面凹削。	質 良好	内外面とも淡黄褐色		
556	190	23-26	3433 壺 土器	△.18.8	内面：ナメ。	質 良好	内外面とも相応		
556	190	3区 23-26	3433 壺 堆土器	△.7.8	内面：口縁部ナメ。底部ナメ。	質 良好	外：灰白色 内：灰白色		
557	190	23-26	3433 壺 堆土器	△.2.8	内面：ナメ。堆土器底。	質 良好	外：灰白色 内：灰白色		春日は細かい。
558	190	3区 23-26	3433 壺 堆土器	△.5.3	内面：堆土器底。	質 良好	外：灰白色 内：灰白色		
559	190	23-26	3433 壺 堆土器	△.6.6	内面：堆土器底。ナメ。	中古前	やや外：灰白色 内：灰白色		
560	190	23-26	3014 壺 堆土器	△.2.5	内面：ナメ（底の口の調整不確実）。	質 良好	外：灰白色 内：灰白色		
561	190	23-26	3433 壺 堆土器	△.2.5	内面：ナメ（底の口の調整不確実）。	質 良好	外：灰白色 内：灰白色		
562	190	23-26	3014 壺 土器	△.1.5	内面：ナメ。堆土器底。	中古後	外：灰白色 内：灰白色		
563	190	23-26	3004 壺 土器	△.10.0	内面：口縁部凹削ナメ。底部ナメ。底部ナメ？。	質 良好	外：灰白色～淡色 内：灰白色		
564	190	23-26	3004 壺 土器	△.2.6	内面：口縁部凹削ナメ。底部ナメ？。底部ナメ？。	中古後	外：灰白色～淡色 内：灰白色		
565	190	23-26	3004 壺 土器	△.4.2	内面：凹削ナメ。	質 良好	外：灰白色		
566	190	23-26	3006 壺 堆土器	△.2.5	内面と底も整美不規	質 良好	内外面とも淡黄色		
567	190	23-26	3006 壺 土器	△.7.6	内面：ナメ。	質 良好	内外面とも灰青色		
568	190	23-26	3009 壺 土器	△.1.1	内面：口縁部ナメ。底部ナメ。	質 良好	外：灰白色 内：灰白色		
569	190	23-26	3009 壺 土器	△.1.6	内面：口縁部ナメ。底部ナメ。	中古後	外：灰白色～淡色 内：灰白色		
570	190	23-26	3009 壺 土器	△.4.6	内面：ナメ（底の口の調整不規）。	中古後	やや外：灰白色～淡色 内：灰白色		
571	190	23-26	3009 壺 土器	△.2.5	内面：口縁部凹削ナメ。底部ナメ？。底部ナメナメナメ。	質 良好	内外面とも灰青色		
572	190	23-26	3009 壺 土器	△.3.4	内面：口縁部凹削ナメ。底部ナメナメナメナメ。	質 良好	内外面とも灰青色		
573	190	23-26	3009 壺 土器	△.1.9	内面：ナメ？。底凹削ナメ。	質 良好	内外面とも相応		
574	190	23-26	3009 壺 土器	△.9.8	内面：ナメ。	質 良好	内外面とも相応		
575	190	23-26	3009 壺 土器	△.2.3	内面：底部凹削ナメ。底部ナメ。	中古後	外：灰白色 内：灰白色		
576	190	23-26	3009 壺 土器	△.2.7	内面：凹削ナメ。	質 良好	内外面とも相応		
577	190	23-26	3009 壺 土器	△.2.8	内面：底部凹削ナメ。底部ナメ。	中古後	やや外：灰白色～淡色 内：灰白色		
578	190	23-26	3009 壺 土器	△.5.8	内面：凹削ナメ？。底凹削ナメ。	質 良好	内外面とも灰青色		
579	190	23-26	3009 壺 土器	△.3.3	内面：凹削ナメ。	質 良好	内外面とも灰青色		
580	190	23-26	3009 壺 土器	△.1.5	内面：底部凹削ナメ。底部ナメ。	中古後	外：灰白色 内：灰白色		
581	190	23-26	3009 壺 土器	△.1.6	内面：凹削ナメ。	質 良好	内外面とも相応		
582	190	23-26	3009 壺 土器	△.2.0	内面：凹削ナメ。	中古後	やや外：灰白色～淡色 内：灰白色		
583	190	23-26	3287 壺 土器	△.2.6.6	内面：口縁部ナメナメ。底部ナメナメナメ。	質 良好	内外面とも相応		
584	190	23-26	3414 壺 土器	△.4.6	内面：口縁部ナメナメ。	質 良好	内外面とも相応		
585	190	23-26	3474 壺 土器	△.4.7	内面：口縁部凹削ナメ。底部ナメ。	質 良好	外：灰白色 内：灰白色		
586	190	23-26	3474 壺 土器	△.5.3	内面：口縁部凹削ナメ。底部ナメ。	質 良好	内外面とも相応		
587	190	23-26	3474 壺 土器	△.5.8	内面：凹削ナメ。	質 良好	内外面とも相応		
588	190	23-26	3474 壺 土器	△.5.8	内面：凹削ナメ。	質 良好	内外面とも灰青色		
589	190	23-26	3500 壺 土器	△.3.1	内面：口縁部ナメナメ。	質 良好	外：灰白色 内：灰白色		
590	190	23-26	3500 壺 土器	△.3.2	内面：口縁部ナメナメ。	質 良好	外：灰白色 内：灰白色		
591	190	23-26	4039 壺 土器	△.4.5	内面：凹削ナメ。	質 良好	内外面とも相応		
592	190	23-26	4039 壺 土器	△.5.8	内面：凹削ナメ。	質 良好	内外面とも灰青色		
593	190	23-26	4044 壺 土器	△.1.8	内面：凹削ナメ。	質 良好	外：灰白色 内：灰白色		
594	190	23-26	4044 壺 土器	△.1.8	内面：凹削ナメ。	質 良好	外：灰白色 内：灰白色		
595	190	23-26	4044 壺 土器	△.2.9	内面：凹削ナメ。	質 良好	外：灰白色 内：灰白色		
596	190	23-26	4108 壺 土器	△.1.2	内面：凹削ナメ。	質 良好	外：灰白色 内：灰白色		
597	190	23-26	4108 壺 土器	△.1.6	内面：凹削ナメ。	質 良好	内外面とも灰青色		
598	190	23-26	4108 壺 土器	△.1.8	内面：凹削ナメ。	質 良好	外：灰白色 内：灰白色		
599	190	23-26	4108 壺 土器	△.2.9	内面：凹削ナメ。	質 良好	外：灰白色 内：灰白色		
600	190	23-26	4108 壺 土器	△.3.6	内面：凹削ナメ。	質 良好	外：灰白色 内：灰白色		

表 29 土器觀察表 (16)

表30 土器觀察表(17)

編號	國名 省名	調査 区域	地名	口径(cm) 底径(cm)	特徴	出土 状況	色調	備考
635	196 3区 25-54	3473北東 土川	土師器 高杯	φ 22.3 △ 13.6	内面・受部の全体ハケナゲナギ、底面ナギ。受部と脚部の唇 内面・受部の全体ハケナゲナギ。脚部ナギ。脚部ナギ	良 良好	内・外黄とも稍色 内・外灰	内外青赤色形 内・外灰
636	196 3区 25-54	3473北東 土川	土師器 高杯	φ 21.0 △ 8.4	内面・口縁部ナギ。脚部ハケナギ・脚部ナギ。	良 良好	内・外黄とも稍色	内外青赤色形
637	196 3区 25-54	3473北東 土川	土師器 高杯	φ 20.9 △ 7.9	内面・受部ハケナギ・口縁ナギ、下手ナギナミナギ	良 良好	内・外黄とも稍色	内外青赤色形
638	197 3区 25-64	3473北東 土川	土師器 高杯	φ 17.6 △ 6.4	内面・受部ナギ・口縁ナギ、下手ナギナミナギ。 内面・受部ハケナギの上手ナギ後付。下手溝なし・脚部ナギ	良 やや良	内・外黄・深褐色 内・外黄・深褐色	内外青赤色形 内・外灰
639	197 3区 25-64	3473北東 土川	土師器 高杯	φ 18.0 △ 7.4	内面・ナギ、ハケナギ 内面・口縁部ナギ	良 良好	内・外灰・深褐色 内・外灰・深褐色	内・外灰
640	197 3区 25-64	3473北東 土川	土師器 高杯	φ 16.9 △ 6.9	内面・ナギ 内面・ナギ・脚部後付。しづり	良 やや良	内・外黄ともに少い・稍色	原原山城跡(129件) 内外青赤色形
641	197 3区 25-54	3473北東 土川	土師器 高杯	φ 17.7 △ 8.8	内面・口縁部ハケナギ・下手ナギナミナギ。脚部ナギハケナギ 内面・ナギ・脚部後付	良 良好	内・外黄・深褐色 内・外灰	小型、外脚後付・灰斑
642	197 3区 25-54	3473北東 土川	土師器 高杯	φ 11.2 △ 6.4	内面・ナギナギ。脚部ハケナギ・脚部ナギ。脚部ナギナギ 内面・ナギナギ。脚部ハケナギ・脚部ナギ。脚部ナギナギ	良 良好	内・外黄とも稍色	内・外灰
643	197 3区 25-64	3473北東 土川	土師器 高杯	φ 14.5 △ 5.5	内面・丸井印形あり・脚部ナギナギ。脚部ナギ回転ナギ。 上手ナギナギ・脚部ナギナギ	良 良好	内・外黄・深褐色 内・外灰	内脚付形 まみ足付
644	197 3区 25-54	3473北東 土川	土師器 高杯	φ 27.2 △ 2.9	内面・脚部ナギナギ。ナギナギナギ。二段脚部直通	良 良好	内・外黄・深褐色 内・外灰	外脚後付形
645	197 3区 25-54	3473北東 土川	土師器 高杯	φ 21.7 △ 5.9	内面・脚部ナギナギ。ナギナギナギナギ 内面・ナギナギ・脚部後付	良 良好	内・外灰・深褐色 内・内灰・稍色	内脚後付形
646	197 3区 25-64	3473北東 土川	土師器 高杯	φ 17.7 △ 6.0	内面・受部ナギナギ。下手ナギナギ。中堅動土筋附にヨリ變形 口縁部ナギ。受部腰と横方向のヨリオ根筋ナギ方 向のナギ	良 良好	内・輕色・深褐色 内・輕色・明青褐色	内外青赤色形 内・外灰
647	197 3区 25-64	3473北東 土川	土師器 高杯	φ 14.7 △ 5.8	内面・受部ナギナギ。ハケナギ 内面・底面・側面・脚部ナギ。受部動力方向のヨリオ根筋ナギ 内面・ナギ	良 やや良	内・外黄とも稍色	内外青赤色形
648	198 3区 25-64	3164北東 土川	土師器 片	φ 11.2 △ 4.3	内面・底面凹形あり。口縁部ナギ。体部回転ナギナギ 内面・口縁部ナギ	小中細 良好	内・灰	内・灰
649	198 3区 25-64	3164北東 土川	土師器 片	φ 12.8 △ 5.8	内面・底面凹形あり。体部上回転ナギナギ。下手ナギナギ	良 良好	内・灰	内・灰
650	198 3区 25-64	3164北東 土川	土師器 片	φ 12.0 △ 5.9	内面・ナギナギ 内面・ナギ	良 良好	内・灰	内・灰
651	198 3区 25-64	3164北東 土川	土師器 片	φ 9.4 △ 4.0	内面・ナギ 内面・当面・脚部ナギ	良 良好	内・灰	内・灰
652	198 3区 25-64	3164北東 土川	土師器 片	φ 12.0 △ 5.9	内面・底面凹形あり。口縁部ナギ。体部ナギナギ。下手ナギナギ 内面・ナギ	中中細 良好	内・灰	内・灰
653	198 3区 25-64	3164北東 土川	土師器 片	φ 14.2 △ 5.7	内面・底面凹形あり。体部ナギナギ。下手ナギナギ 内面・ナギ	中中細 良好	内・内灰ともに少い・稍色	内脚後付形
654	198 3区 25-64	3164北東 土川	土師器 片	φ 14.8 △ 5.8	内面・底面凹形あり。体部ナギナギ 内面・ナギ	良 良好	内・灰・黄褐色 内・灰・黄褐色	外脚後付形?
655	198 3区 25-64	3164北東 土川	土師器 片	φ 11.5 △ 4.1	内面・底面凹形あり。口縁ナギ 内面・ナギ	中中細 良好	内・灰・黄褐色 内・灰・黄褐色	上脚部外側保有者?
656	198 3区 25-64	3164北東 土川	土師器 片	φ 12.3 △ 2.9	内面・底面凹形あり。口縁ナギ 内面・ナギ	良 良好	内・内灰とも灰白色・オートマチック	成が非常に悪い・底辺部の可塑性 もある
657	198 3区 25-64	3164北東 土川	土師器 片	φ 12.0 △ 5.8	内面・底面凹形あり。体部ナギナギ。下手ナギナギ 内面・ナギ	良 良好	内・灰・黄褐色 内・灰・黄褐色	内・外灰
658	198 3区 25-64	3164北東 土川	土師器 片	φ 11.9 △ 5.9	内面・底面凹形あり。ナギナギ 内面・ナギ	良 良好	内・内灰ともに少い・稍色	内・灰
659	198 3区 25-64	3164北東 土川	土師器 片	φ 12.4 △ 5.5	内面・底面凹形あり。口縁ナギ 内面・ナギ	良 良好	内・内灰とも灰白色・オートマチック	成が非常に悪い・底辺部の可塑性 もある
660	198 3区 25-64	3164北東 土川	土師器 片	φ 11.5 △ 5.5	内面・底面凹形あり。体部ナギナギ。下手ナギナギ 内面・ナギ	良 良好	内・内灰とも灰褐色・黒色	内・外灰
661	198 3区 25-64	3005東石 川	土師器 片	φ 12.4 △ 5.4	内面・底面凹形あり。体部ナギナギ。下手ナギナギ 内面・ナギ	中や細 良好	内・内灰とも灰白色・オートマチック	内・外灰
662	198 3区 25-64	3164北東 土川	土師器 片	φ 12.0 △ 5.8	内面・底面凹形あり。体部ナギナギ。下手ナギナギ 内面・ナギ	良 良好	内・内灰ともに少い・稍色	内・灰
663	198 3区 25-64	3164北東 土川	土師器 片	φ 11.9 △ 5.9	内面・底面凹形あり。体部ナギナギ。下手ナギナギ 内面・ナギ	良 良好	内・内灰とも灰白色・オートマチック	内・灰
664	198 3区 25-64	3164北東 土川	土師器 片	φ 12.4 △ 5.8	内面・底面凹形あり。体部ナギナギ。下手ナギナギ 内面・ナギ	良 良好	内・内灰とも灰褐色・黒色	内・外灰
665	198 3区 25-64	3164北東 土川	土師器 片	φ 12.0 △ 5.8	内面・底面凹形あり。体部ナギナギ。下手ナギナギ 内面・ナギ	良 良好	内・内灰とも灰褐色・黒色	内・外灰
666	198 3区 25-64	3164北東 土川	土師器 片	φ 12.0 △ 5.8	内面・底面凹形あり。体部ナギナギ。下手ナギナギ 内面・ナギ	良 良好	内・内灰とも灰褐色・黒色	内・外灰
667	198 3区 25-64	3164北東 土川	土師器 片	φ 12.4 △ 5.4	内面・底面凹形あり。体部ナギナギ。下手ナギナギ 内面・ナギ	良 良好	内・内灰とも灰褐色・黒色	内・外灰
668	198 3区 25-64	3164北東 土川	土師器 片	φ 12.5 △ 5.2	内面・ナギ 内面・ナギ	良 良好	内・灰	内・灰
669	198 3区 25-64	3164北東 土川	土師器 片	φ 12.5 △ 5.2	内面・ナギ 内面・ナギ	良 良好	内・内灰とも灰白色・オートマチック	内・外灰
670	198 3区 25-64	3164北東 土川	土師器 片	φ 12.5 △ 5.2	内面・ナギ 内面・ナギ	良 良好	内・灰	内・灰
671	199 3区 25-75	3009東 川	土師器 片	φ 14.0 △ 10.0	内面・ナギ 内面・当面・底面	良 良好	内・灰	内・灰
672	199 3区 25-64	3443北東 土川	土師器 片	φ 21.4 △ 11.0	内面・ナギ 内面・ナギ	良 良好	内・内灰とも灰白色	内外青赤色形
673	199 3区 25-64	3009東 川	土師器 片	φ 14.0 △ 10.0	内面・ナギ 内面・ナギ	良 良好	内・内灰とも灰白色	内・外灰
674	199 3区 25-64	3009東 川	土師器 片	φ 14.0 △ 10.0	内面・ナギ 内面・ナギ	良 良好	内・内灰とも灰白色	内・外灰
675	199 3区 25-64	3400北東 土川	土師器 片	φ 22.2 △ 12.6	内面・ナギ 内面・ナギ	良 良好	内・灰	内・灰
676	199 3区 25-64	3400北東 土川	土師器 片	φ 22.6 △ 12.7	内面・ナギ 内面・ナギ	良 良好	内・灰	内・灰

第VI章 3区・4区の調査成果

表31 土器観察表(18)

編號	属國	属州	遺跡	種別	寸法(cm)	備考	出土	成成	色調	備考
675 201	4区	4316 土坑	土壁	柱	φ 21	内面 ナラ 外側 壁面刷毛ナラ、4回剥ハタケナラ	直好	西	灰黑色 内/灰黑色	
676 201	4区	4316 1.5m 2.5m	土壁	柱	φ 39	内面 ナラ 内側 壁面刷毛ナラ、底部ハタケナラ	直好	西	灰黑色 内/灰黑色	外側刷毛
677 201	4区	4317 2月	土壁	柱	φ 115	内面 口縁部ヨコナラ、底部ハタケナラ	直好	西	灰黑色-灰オリーブ色 内/灰白色	口縁部-底面に外側からの打ち込み
678 201	4区	4317 2月	土壁	柱	φ 22.5	内面 口縁部ヨコナラ、底部ハタケナラ	直好	西	灰黑色-灰オリーブ色 内/灰白色	
679 201	4区	4317 2月	土壁	柱	φ 6.7	内面 口縁部ヨコナラ、底部ハタケナラ	中中良	西	灰黑色 内/灰黑色-灰黑色	底部のみ
680 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 14.0	内面 ハタケナラ	直好	西	灰黑色 内/灰黑色	
681 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 12.7	内面 ハタケナラ	直好	西	内面も灰黑色	
682 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 6.6	内面 ハタケナラ	直好	西	内面も灰黑色	
683 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 21	内面 ハタケナラ	直好	西	内面も灰黑色	
684 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 11.7	内面 天然漆面糊ナラヘタナラ 内側 壁面刷毛ナラ	直好	西	内面も灰黑色	
685 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 16	内面 天然漆面糊ナラヘタナラ 内側 壁面刷毛ナラ	直好	西	内面も灰黑色	
686 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 10.0	内面 天然漆面糊ナラヘタナラ 内側 壁面刷毛ナラ	直好	西	内面も灰黑色	つまみ欠損
687 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 9.9	内面 天然漆面糊ナラヘタナラ 内側 壁面刷毛ナラ	直好	西	内面も灰黑色	
688 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 4.8	内面 天然漆面糊ナラ 内側 壁面刷毛ナラ	直好	西	内面も灰黑色	
689 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 12.4	内面 ヨクナラ	直好	西	内面も灰黑色	
690 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 5.2	内面 ヨクナラ	直好	西	内面も灰黑色	
691 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 12.6	内面 ヨクナラ	直好	西	内面も灰黑色	
692 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 2.8	内面 ヨクナラ	直好	西	内面も灰黑色	
693 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 12.8	内面 天然漆面糊ナラヘタナラ 内側 壁面刷毛ナラ	直好	西	内面も灰黑色	
694 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 2.4	内面 天然漆面糊ナラ 内側 壁面刷毛ナラ	直好	西	内面も灰黑色	
695 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 15.5	内面 天然漆面糊ナラ 内側 壁面刷毛ナラ	直好	西	内面も灰黑色	
696 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 14.5	内面 天然漆面糊ナラ 内側 壁面刷毛ナラ	直好	西	内面も灰黑色	
697 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 12.2	内面 天然漆面糊ナラヘタナラ 内側 壁面刷毛ナラ	直好	西	内面も灰黑色	
698 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 12.2	内面 天然漆面糊ナラ 内側 壁面刷毛ナラ	直好	西	内面も灰黑色	
699 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 1.6	内面 壁面刷毛ナラ 内側 壁面刷毛ナラ	直好	西	内面も灰白色	
700 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 22	内面 壁面刷毛ナラ 内側 壁面刷毛ナラ	直好	西	内面も灰白色	
701 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 2.8	内面 壁面刷毛ナラ 内側 壁面刷毛ナラ	直好	西	内面も灰白色	
702 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 1.6	内面 壁面刷毛ナラ 内側 壁面刷毛ナラ	直好	西	内面も灰白色	
703 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 1.9	内面 壁面刷毛ナラ 内側 壁面刷毛ナラ	直好	西	内面も灰白色	
704 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 2.2	内面 壁面刷毛ナラ 内側 壁面刷毛ナラ	直好	西	内面も灰白色	外側刷毛
705 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 2.4	内面 壁面刷毛ナラ 内側 壁面刷毛ナラ	直好	西	内面も灰白色	
706 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 1.6	内面 壁面刷毛ナラ 内側 壁面刷毛ナラ	直好	西	内面も灰白色	
707 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 11.8	内面 壁面刷毛ナラ 内側 壁面刷毛ナラ	直好	西	内面も灰白色	口縁部内面付材
708 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 5.4	内面 壁面刷毛ナラ 内側 壁面刷毛ナラ	直好	西	内面も灰白色	
709 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 6.7	内面 ナラ 内側 壁面刷毛ナラ	直好	西	内面も灰白色	708と同一樹木
710 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 5.4	内面 ナラ 内側 壁面刷毛ナラ	直好	西	内面も灰白色	709と同一樹木
711 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 11.8	内面 壁面刷毛ナラ 内側 壁面刷毛ナラ	直好	西	内面も灰白色	
712 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 11.8	内面 壁面刷毛ナラ 内側 壁面刷毛ナラ	直好	西	内面も灰白色	
713 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 1.6	内面 壁面刷毛ナラ 内側 壁面刷毛ナラ	直好	西	内面も灰白色	
714 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 2.0	内面 壁面刷毛ナラ 内側 壁面刷毛ナラ	直好	西	内面も灰白色	
715 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 2.1	内面 壁面刷毛ナラ 内側 壁面刷毛ナラ	直好	西	内面も灰白色	
716 202	2区	2022 1月	土壁	柱	φ 2.3	内面 壁面刷毛ナラ 内側 壁面刷毛ナラ	直好	西	内面も灰白色	外側に一部赤鉛粉付

表 32 土器觀察表 (19)

第VI章 3区・4区の調査成果

表33 土器観察表(20)

編集番号	県名	調査区域	遺跡	種別	寸法(cm) 直徑(cm)	備考	出土	成形	色調	年代
764	207 20c	4区 2C-6	第43番	土器	一 φ 4.0	外面：ハナヒタギ、底面：ナメ 内面：ハナヒタギ、ナメ	審	良好	西/に(こ)青碧色～17.0cm 内/灰黑色	
762	207 20d-h	4区 2C-6	第43番	碗	φ 8.6	外面：ハナヒタギ、底面：ナメ 内面：ハナヒタギ	審	良好	西/紫黑色 内/灰黑色	紀末
763	208 20c	4区 2C-6	第44番	豆型	φ 12.8 φ 1.9	外面：丸筒型内輪へテクスリ。底面：ハナヒタギナメ 内面：ハナヒタギナメ	審	良好	内/青黑色	
764	208 20c	4区 2C-6	第44番	豆型	φ 14.1 φ 4.0	外面：口縁部・高台切欠ナメ。底面へ切り落付 内面：口縁部ナメ、底面ナメ	審	良好	内/青色	
765	208 20c	4区 2C-6	第44番	豆型	φ 12.7 φ 2.2	外面：深腹筒型ナメ。底面：ハナヒタギナメ 内面：ハナヒタギナメ	審	良好	内/青色	
766	208 20c	4区 2C-6	第44番	豆型	φ 12.0 φ 3.8	外面：口縁部コロナメ。底部：ハナヒタギナメ 内面：口縁部ナメ、底面ナメ	審	良好	西/灰黑色 内/灰黑色	
767	208 20c	4区 2C-6	第44番	豆型	φ 10.9	外面：ナメナメ 内面：口縁部ナメ、底面：ナメ	審	良好	西/オレンジ色 内/灰黑色	外側自然剥着
768	208 20c	4区 2C-6	第44番	豆型	φ 10.3	外面：口縁部ナメ、底面：ナメ 内面：ナメナメ	審	良好	西/灰黑色 内/灰黑色	
769	208 20c	4区 2C-6	第44番	豆型	φ 4.2	西面：ナメナメ 内面：ハナヒタギナメ、指紋圧痕	審	良好	西/青黑色 内/灰黑色-前青黑色	
770	208 20c	4区 2C-6	第44番	土器	φ 12.3	外面：ナメナメ 内面：ナメナメ	審	良好	内/青色	
771	208 20c	4区 2C-6	第44番	豆型	φ 11.8 φ 4.9	外面：口縁部コロナメ。底面：ナメ 内面：口縁部コロナメ、底面ナメ	審	良好	内/青色	外側剥着
772	208	4区 2C-6	第44番	土器	φ 12.0 φ 4.6	外面：コロナメ 内面：口縁部ナメ、口縁部ハナヒタギナメ	審	良好	西/灰黑色 内/灰黑色	外側剥着
773	208	4区 2C-6	第44番	土器	φ 11.6 φ 3.6	外面：ナメナメ 内面：ナメナメ	審	良好	西/灰黑色 内/灰黑色	外側剥着
774	208 20c	4区 2C-6	第44番	土器	φ 11.6 φ 3.6	外面：ナメナメ 内面：口縁部コロナメ、底面：ナメナメ/ハナヒタギナメ	審	良好	西/灰黑色 内/灰黑色	外側剥着
775	208 20c	4区 2C-6	第44番	土器	φ 11.6 φ 3.6	外面：ナメナメ 内面：口縁部コロナメ、底面：ナメナメ	審	良好	西/灰黑色 内/灰黑色-に(こ)青碧色	外側剥着
776	208	4区 2C-6	第44番	土器	φ 10.5 φ 3.6	外面：コロナメ 内面：口縁部コロナメ、底面：ナメナメ	審	良好	西/灰黑色 内/灰黑色	外側剥着
777	208	4区 2C-6	第44番	土器	φ 27.4	外面：口縁部コロナメ、底面：ナメナメ 内面：口縁部コロナメ、底面：ナメナメ	審	良好	西/灰黑色-黒色 内/灰黑色-リップ色	外側剥着
778	208	4区 2C-6	第44番	土器	φ 26.8 φ 8.0	外面：口縁部コロナメ。底盤付のナメ薄型小片 内面：口縁部コロナメ、底盤付のナメ薄型小片	審	良好	西/灰黑色 内/灰黑色	
779	208	4区 2C-6	第44番	土器	φ 26.8	外面：口縁部コロナメ。底盤付のナメ薄型小片	審	良好	西/に(こ)青碧色 内/灰黑色	
780	208	4区 2C-6	第44番	土器	φ 24.1 φ 4.2	外面：ナメナメ 内面：ハナヒタギナメ	やや良	良好	西/に(こ)青碧色 内/灰黑色	内側剥着
781	208	4区 2D-6a	第42番	豆型	φ 12.8 φ 3.9	外面：ナメナメ 内面：ナメナメ	審	中好	内/青色	
782	208	4区 2D-6b	第42番	豆型	φ 11.8 φ 3.6	外面：「ツ」字彫刻ナメ。底盤付ハナヒタギナメ。底盤付 ナメナメ	審	良好	内/青色	つまみ内記号「×」
783	209	4区 2D-6a	第42番	豆型	φ 11.8 φ 3.2	外面：「ツ」字彫刻ナメ。底盤付ハナヒタギナメ。底盤付 ナメナメ	審	良好	内/青色	
784	209	4区 2D-6b	第42番	豆型	φ 11.8 φ 2.6	外面：深腹筒型ナメ。底盤付ナメ 内面：ナメナメ	審	良好	西/青黑色 内/灰黑色	花部今号記
785	209	4区 2D-6b	第42番下	豆型	φ 10.9 φ 2.6	外面：底盤付コロナメ。底盤付ハナヒタギナメ。底盤付 ナメナメ	審	良好	西/青黑色 内/灰黑色	花部今号記「○」
786	209	4区 2D-6b	第42番下	豆型	φ 10.4 φ 4.5	外面：深腹筒型ナメ。底盤付ハナヒタギナメ 内面：ナメナメ	審	良好	内/青色	内側堆積物の灰白色 423番出土資料と同様
787	209	4区 2D-6a	第42番	豆型	φ 14.2 φ 3.3	外面：口縁部ナメ。底盤付ハナヒタギナメ 内面：ナメナメ	審	良好	内/青色	
788	209	4区 2D-6a	第42番	豆型	φ 13.3	外面：ナメナメ 内面：ナメナメ	審	良好	西/灰黑色 内/灰黑色	内側剥着
789	209	4区 2D-6a	第42番	豆型	φ 14.0	外面：口縁部ナメ。底盤付ハナヒタギナメ 内面：ナメナメ	審	良好	内/青色	
790	209	4区 2D-7a	第42番	豆型	φ 17.2 φ 3.5	外面：口縁部ナメ。底盤付ハナヒタギナメ 内面：ナメナメ	審	良好	内/青色	
791	209	4区 2D-6a	第42番	土器	φ 19.8 φ 3.3	外面：口縁部ナメ。底盤付ハナヒタギナメ 内面：ナメナメ	審	良好	内/青色	内側剥着
792	209	4区 2D-6a	第42番	土器	φ 17.0 φ 3.2	外面：ナメナメ 内面：ナメナメ	審	良好	内/青色	内側剥着
793	209	4区 2D-6a	第42番	土器	φ 20.0 φ 3.8	外面：ハナヒタギナメ。底盤付ハナヒタギナメ 内面：ナメナメ	審	良好	内/青色	
794	209	4区 2D-6a	第42番	土器	φ 20.0 φ 3.8	外面：ハナヒタギナメ。底盤付ハナヒタギナメ 内面：ナメナメ	審	良好	内/青色	内側剥着
795	209	4区 2D-6a	第42番	土器	φ 30.2	外面：口縁部直筒型ナメ。底盤付ナメ。底盤付ハナヒタギナメ 内面：ナメナメ	審	良好	西/灰黑色 内/青色	内側剥着
796	209	4区 2D-7a	第24番	土器	φ 22.4 φ 3.4	外面：口縁部ナメ。底盤付ハナヒタギナメ 内面：口縁部ナメ。底盤付ハナヒタギナメ	審	良好	西/灰黑色-灰黑色 内/青色	
797	209	4区 2D-6	第41番	豆型	φ 31	外面：「ツ」字彫刻ナメと胡刺り。底盤付ハナヒタギナメ 内面：ナメナメ	審	良好	内/青色	内側剥着
798	209	4区 2D-6	第41番	豆型	φ 20	外面：ハナヒタギナメ。底盤付ハナヒタギナメ 内面：ナメナメ	審	良好	内/青色	
799	209	4区 2D-6	第41番	豆型	φ 0.8	外面：ナメナメ 内面：ナメナメ	審	良好	西/灰黑色 内/青色	外側剥着記号「(月)」
800	210	4区 2D-6	第41番	豆型	φ 0.9	外面：ナメナメ 内面：ナメナメ	審	良好	西/灰黑色 内/青色	外側剥着記号「×」
801	210	4区 2D-7	第41番	豆型	φ 11.5 φ 3.1	外面：口縁部ナメナメ。底盤付ハナヒタギナメ。底盤付ハ ナヒタギナメ 内面：ナメナメ	審	良好	内/青色	灰黑色内部へ虹色

表34 土器観察表(21)

発見 番号	発見 場所	遺物 名	鉢類	口徑(cm) 底径(cm)	特徴	船上	現成	色調	備考
802	230 4区 25-6	第41層	須世部 高台付	17.9	内面：口縁部～高台部ナメ。底部ナメ 外側：口縁部ナメ。底部ナメ	良	良好	内外面とも灰白色	
803	230 4区 26-7	第41層	須世部 高台付	21	内面：口縁部ナメ。底部ナメ	良	良好	内外面とも灰白色	底部外側にスタンプ文
804	230 23-6	第41層	須世部 高台付	15.0	内面：口縁部ナメ。底部上部切欠きアリ。底部下部 ナメ：口縁部ナメ。底部上部切欠きアリ	良	良好	内・外面とも灰白色 内・外色	底部ヘラ記号「x」
805	230 23-6	第41層	須世部 高台付	51	内面：口縁部ナメ。底部上部切欠きアリ	良	良好	内・外面とも灰白色 内・外色	
806	230 23-6	第41層	須世部 高台付	22	内面：口縁部ナメ。底部上部切欠きアリ	良	良好	内外面とも灰白色	
807	230 23-6	第41層	須世部 高台付	32	内面：口縁部ナメ	良	良好	内・外白～灰白色 内・外色	
808	230 23-6	第41層	須世部 高台付	29	内面：口縁部ナメ	良	良好	内外面とも灰白色	
809	230 23-6	第41層	須世部 高台付	29	内面：口縁部ナメ	良	良好	内外面とも灰白色	底部外側ヘラ記号「x」
810	230 23-6	第41層	須世部 高台付	29	内面：口縁部ナメ	良	良好	内外面とも灰白色	
811	230 4区 26-6	第41層	須世部 高台付	60	内面：受部下部切欠きアリ。受部下部切欠きアリ。3条の溝 複数：縫合部切欠きアリ	良	良好	内・外白 内・外著色	
812	230 4区 27-6	第41層	須世部 高台付	48	内面：口縁部ナメ。底部上部切欠きアリ。2条の溝 複数：縫合部切欠きアリ	良	良好	外・灰白色 内・外白	
813	230 23-6	第41層	須世部 高台付	11.3	内面：口縁部ナメ。底部ナメ	良	良好	内外面とも灰白色	
814	230 23-6	第41層	土師器 高台付	10.3	内面：口縁部ナメ。底部ナメ。底部外側共通	良	良好	内外面とも灰白色	内・外著色
815	230 23-6	第41層	土師器 高台付	43	内面：口縁部ナメ。底部外側共通	良	良好	内外面とも灰白色	内・外著色
816	230 23-6	第41層	土師器 高台付	21.3	内面：ヨコナメ	良	良好	内外面とも灰白色	内・外著色
817	230 23-6	第41層	土師器 高台付	19	内面：ナメ。底部外側共通	良	良好	内外面とも灰白色	
818	230 23-6	第41層	土師器 高台付	6.8	内面：口縁部ナメ。底部下部切欠きアリ	良	良好	内外面とも灰白色	
819	230 23-6	第41層	土師器 高台付	28	内面：口縁部ナメ。底部ナメ	良	良好	外・灰黄色～濃灰色 内・黄褐色	
820	230 23-6	第41層	手づくね 土器	19	内面：ナメ。底部外側共通	良	良好	内外面とも灰白色	
821	230 23-6	第41層	手づくね 土器	11.6	内面：ナメ。底部外側共通	良	良好	内外面とも灰白色	手づくね番号
822	231 4区 27-6	第41層	手づくね 土器	16.8	内面：ナメ。底部外側共通	良	良好	内外面とも灰白色	
823	231 4区 27-6	第41層	手づくね 土器	4.5	内面：ナメ	良	やや破損	内外面とも灰白色～灰黃褐色	
824	231 4区 27-6	第41層	須世部 高台付	11.0	内面：口縁部ナメ。底部上部切欠きアリ。底部下部切 欠きアリ	良	良好	内外面とも灰白色	
825	231 4区 27-6	第41層	須世部 高台付	12.7	内面：大舟形ナメ。底部外側共通ナメ	良	良好	内外面とも灰白色	
826	231 4区 27-6	第41層	須世部 高台付	3.0	内面：口縁部ナメ	良	良好	内外面とも灰白色	
827	231 4区 27-6	第41層	須世部 高台付	16.8	内面：「まき」底部ナメ。大舟形ナメ	良	良好	内外面とも灰白色	ボタン式つまみ
828	231 4区 27-6	第41層	須世部 高台付	3.0	内面：「まき」底部ナメ。大舟形ナメ	良	良好	内外面とも灰白色	元井地内ヘラ記号
829	231 4区 27-6	第41層	須世部 高台付	15.0	内面：「まき」底部ナメ。大舟形ナメ	良	良好	内・黒褐色～灰色 内・灰褐色～灰褐色	底部外側ヘラ記号
830	231 4区 27-6	第41層	須世部 高台付	2.5	内面：「まき」底部ナメ。大舟形ナメ	良	良好	内外面とも灰白色	底部スランプ文
831	231 4区 27-6	第41層	須世部 高台付	13.4	内面：底部ナメ。身体部分ナメ	良	良好	内外面とも灰白色	
832	231 4区 27-6	第41層	須世部 高台付	14.2	内面：底部受型ナメ。底部斜面ナメ	良	良好	内外面とも灰白色	
833	231 4区 27-6	第41層	須世部 高台付	15.0	内面：底部受型ナメ。底部斜面ナメ	良	良好	内外面とも灰白色	
834	231 4区 27-6	第41層	須世部 高台付	15.0	内面：底部受型ナメ。底部斜面ナメ	良	良好	内外面とも灰白色	
835	231 4区 27-6	第41層	須世部 高台付	15.0	内面：底部受型ナメ。底部斜面ナメ	良	良好	内外面とも灰白色	
836	231 4区 27-6	第41層	須世部 高台付	15.0	内面：底部受型ナメ。底部斜面ナメ	良	良好	内外面とも灰白色	
837	231 4区 27-6	第41層	須世部 高台付	15.0	内面：底部受型ナメ。底部斜面ナメ	良	良好	内外面とも灰白色	
838	231 4区 27-6	第41層	須世部 高台付	15.0	内面：底部受型ナメ。底部斜面ナメ	良	良好	内外面とも灰白色	
839	231 4区 27-6	第41層	須世部 高台付	15.0	内面：底部受型ナメ。底部斜面ナメ	良	良好	内外面とも灰白色	
840	232 4区 28-6	第41層	土師器 高台付	24.1	内面：口縁部ナメ。底部ハメナメ	良	良好	内・灰褐色～黑色 内・灰褐色～黑色	舟形地内SBIIに附録(参考資料)
841	232 4区 28-6	第41層	土師器 高台付	24.8	内面：口縁部ナメ。底部ハメナメ	良	良好	内・灰褐色～黑色 内・灰褐色～黑色	舟形地内者
842	232 4区 28-6	第41層	土師器 高台付	22.0	内面：口縁部ナメ。底部ハメナメ	良	良好	内・灰褐色～黑色 内・灰褐色～黑色	舟形地内SBIIに附録(参考資料)
843	232 4区 28-6	第41層	土師器 高台付	15.0	内面：口縁部ナメ。底部ハメナメ	良	良好	内・灰褐色～黑色 内・灰褐色～黑色	舟形地内者
844	232 4区 28-6	第41層	土師器 高台付	15.5	内面：口縁部ナメ。底部ハメナメ	良	良好	内・灰褐色～黑色 内・灰褐色～黑色	舟形地内者

第VI章 3区・4区の調査成果

表35 土器観察表(22)

編號	試験番号	測量位置	種別	1.0倍(cm)	備考	相土	既成	色調	度数
842	212	4区 2C-6	第4層	土器部 裏	φ35.0	外側 口縁部ナメ、全体ハタケ模ナメ 内側 口縁部ナメ、全体ハタケ模ナメ	良好	やや黄 内面とも黄褐色	
843	212	4区 2C-6	第4層	土器部 裏	φ32.0	外側 口縁部ヨロコナメ、全体ナメ 内側 口縁部ヨロコナメ、全体ナメ	やや黒	外にいきの褐色～黄褐色 内にいきの褐色	
844	212	4区 2C-6	第4層	土器部 脚部	φ37	外側 ナメナリ	良好	外側とも灰褐色 内にいきの褐色	外脚ヘナ記号
845	212	4区 2D-8a	第4層	土器部 小型人形部	φ38.0	外側 ナメナリナメナメ、底面ナメ 内側 ナメナリナメナメ、底面ナメ	やや黒	外にいきの褐色～灰褐色 内にいきの褐色	
846	212	4区 2C-7	第4層	土器部 脚部	φ44	外側 ナメ 内側 ナメ	良好	外側とも灰褐色～灰褐色	脚部上部に卓凡、内外側赤色斑
847	212	4区 2C-6	第4層	土器部 脚部	φ47	外側 ナメナメナメナメ、底面ナメ 内側 ナメナメナメナメ、底面ナメ	良好	外にいきの褐色～黄褐色 内面に黒斑有 内側に黒斑有	
848	212	4区 2C-7	第4層	土器部 脚部	φ36.4	外側 傷跡ナメナメ 内側 傷跡ナメナメ、底面ナメ	やや良	外にいきの褐色 内にいきの褐色	内脚赤色斑
849	212	4区 2C-7	第4層	土器部 脚部	φ9.3	外側 ナメナメナメ 内側 ナメナメナメ	良好	外にいきの褐色～灰褐色	
850	212	4区 2D-8a	第4層	土器部 脚部	φ38.4	外側 ハタケナメナメ 内側 ハタケナメナメナメナメ	良好	外側とも灰褐色	脚部下部(Ⅲ形)、既Sと同一個体
851	212	4区 2D-8a	第4層	土器部 脚部	φ45	外側 黄褐色ナメ、底面ナメナメナメ 内側 黄褐色ナメナメナメナメナメナメ	良好	外側とも灰褐色	脚部下部(Ⅲ形)、既Sと同一個体
852	212	4区 2C-6	第4層	土器部 脚部	φ47	外側 ナメナメナメナメナメナメ 内側 ナメナメナメナメナメナメナメナメ	良好	外にいきの褐色 内にいきの褐色	
853	212	4区 2C-6	第4層	土器部 脚部	φ42.0	外側 ナメ 内側 体側底面にいきの褐色斑、把手ナメナメ ナメナメナメナメナメナメナメナメナメナメ	やや良	外にいきの褐色 内にいきの褐色	
854	212	4区 2D-8a	第4層	土器部 脚部	φ47	外側 ナメナメナメ 内側 黄褐色ナメナメナメナメナメナメナメ	良好	外側とも灰褐色	
855	212	4区 2D-8a	第4層	土器部 脚部	φ12.5	外側 黄褐色ナメナメナメナメナメナメナメ 内側 黄褐色ナメナメナメナメナメナメナメナメ	良好	外側とも灰褐色	
856	212	4区 2D-8a	第4層	土器部 脚部	φ11.1	外側 ナメナメナメナメナメナメナメナメ 内側 ナメナメナメナメナメナメナメナメナメ	良好	外側とも灰褐色	
857	212	4区 2D-7a	第4層	土器部 脚部	φ10.0	外側 ナメナメナメナメナメナメナメナメ 内側 ナメ	良好	外側とも灰褐色	
858	212	4区 2D-7c	第3層	土器部 平底	φ4.7	外側 口縁部黒化ナメナメ 内側 ナメナメ	良好	外側とも灰褐色	外型、本腰S
859	212	4区 2D-7c	第3層	土器部 平底	φ4.4	外側 ナメナメナメナメナメナメナメ 内側 ナメナメナメナメナメナメナメナメナメ	良好	外側とも灰褐色	
860	212	4区 2D-7c	第3層	土器部 平底	φ3.9	外側 ナメナメナメナメナメナメナメ 内側 ナメナメナメナメナメナメナメナメナメ	良好	外側とも灰褐色	内脚とも赤色斑
861	212	4区 2D-7c	第3層	土器部 平底	φ3.2	外側 ナメナメナメナメナメナメナメナメ 内側 ナメナメナメナメナメナメナメナメナメ	良好	外側とも灰褐色	
862	212	4区 2D-7c	第3層	土器部 平底	φ3.0	外側 ナメナメナメナメナメナメナメナメ 内側 ナメナメナメナメナメナメナメナメナメ	良好	外側とも灰褐色	
863	212	4区 2D-7c	第3層	土器部 平底上部	φ1.6	外側 ナメナメナメナメナメナメナメ 内側 ナメナメナメナメナメナメナメナメナメ	良好	外側とも灰褐色	
864	212	4区 2D-7c	第3層	土器部 平底上部	φ1.4	外側 ナメナメナメナメナメナメナメナメ 内側 ナメナメナメナメナメナメナメナメナメ	良好	外側とも灰褐色	
865	212	4区 2D-7c	第3層	土器部 平底上部	φ1.3	外側 ナメナメナメナメナメナメナメナメ 内側 ナメナメナメナメナメナメナメナメナメ	良好	外側とも灰褐色	
866	212	4区 2D-7c	第3層	土器部 平底上部	φ1.2	外側 ナメナメナメナメナメナメナメナメ 内側 ナメナメナメナメナメナメナメナメナメ	良好	外側とも灰褐色	外脚腰行者
867	212	4区 2D-7c	第3層	土器部 平底上部	φ1.0	外側 ナメナメナメナメナメナメナメナメ 内側 ナメナメナメナメナメナメナメナメナメ	良好	外側とも灰褐色	外脚腰行者
868	212	4区 2D-7c	第3層	土器部 平底上部	φ0.9	外側 ナメナメナメナメナメナメナメナメ 内側 ナメナメナメナメナメナメナメナメナメ	良好	外側とも灰褐色	外脚腰行者
869	212	4区 2D-7c	第3層	土器部 平底上部	φ0.8	外側 ナメナメナメナメナメナメナメナメ 内側 ナメナメナメナメナメナメナメナメナメ	良好	外側とも灰褐色	外脚腰行者
870	212	4区 2D-7c	第3層	土器部 平底上部	φ0.7	外側 ナメナメナメナメナメナメナメナメ 内側 ナメナメナメナメナメナメナメナメナメ	良好	外側とも灰褐色	外脚腰行者
871	212	4区 2C-7c	第3層	土器部 裏	φ3.6	外側 口縁部黒化ナメナメナメナメナメ 内側 口縁部黒化ナメナメナメナメナメナメ	やや良	外にいきの褐色 内にいきの褐色	
872	212	4区 2C-6	第3層	土器部 裏	φ3.4	外側 口縁部ナメナメ 内側 口縁部ナメナメナメナメナメナメナメ	良好	外にいきの褐色 内にいきの褐色	外脚自然腰行者
873	212	4区 2C-6	第3層	土器部 裏	φ3.3	外側 口縁部ナメナメ 内側 口縁部ナメナメナメナメナメナメナメ	良好	外にいきの褐色 内にいきの褐色	体側外側にスランプS
874	212	4区 2C-6	第3層	土器部 裏	φ3.1	外側 口縁部ナメナメ 内側 口縁部ナメナメナメナメナメナメナメ	良好	外側とも灰褐色	体側外側ヘナ記号
875	212	4区 2C-6	第3層	土器部 裏	φ3.0	外側 口縁部ナメナメ 内側 口縁部ナメナメナメナメナメナメナメ	良好	外側とも灰褐色	体側外側ヘナ記号
876	212	4区 2C-6	第3層	土器部 裏	φ2.8	外側 口縁部ナメナメ 内側 口縁部ナメナメナメナメナメナメナメ	良好	外にいきの褐色～灰褐色 内にいきの褐色	体側外側にスランプS
877	212	4区 2C-6	第3層	土器部 裏	φ2.8	外側 口縁部ナメナメ 内側 口縁部ナメナメナメナメナメナメナメ	良好	外にいきの褐色～灰褐色	体側外側ヘナ記号
878	212	4区 2D-8a	第3層下部	土器部 裏	φ3.5	外側 口縁部ナメナメ 内側 口縁部ナメナメナメナメナメナメナメ	良好	外にいきの褐色 内にいきの褐色	足尖部ヘラ記号
879	212	4区 2D-8a	第3層	土器部 裏	φ2.4	外側 口縁部ナメナメ 内側 口縁部ナメナメナメナメナメナメナメ	やや良	外側とも灰褐色	足尖部腰行者
880	212	4区 2C-7	第3層下部	土器部 裏	φ1.9	外側 口縁部ナメナメ 内側 口縁部ナメナメナメナメナメナメナメ	良好	外側とも灰褐色	足尖ヘナ記号
881	212	4区 2C-6	第3層	土器部 裏	φ2.8	外側 体側上半輪ナメナメ 内側 体側上半輪ナメナメナメナメナメナメ	良好	外にいきの褐色 内にいきの褐色	外脚下部に系繩
882	212	4区 2C-6	第3層	土器部 裏	φ1.5	外側 ナメナメ 内側 口縁部ナメナメナメナメナメナメナメ	良好	外にいきの褐色 内にいきの褐色	足尖外側ヘナ記号
883	212	4区 2C-7	第3層	土器部 裏	φ2.6	外側 体側上半輪ナメナメ 内側 体側上半輪ナメナメナメナメナメナメ	良好	外側とも灰褐色	足尖外側ヘナ記号「×」

表 36 土器觀察表 (23)

編號	國名 番号	遺跡名	地點	層位	L×W(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
884	214	4区 2C-8	第3層	須世器 H	約12.7 △2.8	内面：全体ヨコナギ。底部斜面切欠き後ナギ 外側：全体ヨコナギ。底部斜面切欠き後ナギ	質 灰	内外とも灰褐色～暗灰褐色	外側口部斜面付近	
885	214	4区 2C-8	第3層	須世器 H	約12.7 △3.8	内面：全体ヨコナギ。底部斜面切欠き後ナギ 外側：全体ヨコナギ。底部斜面切欠き後ナギ	質 やや軟 灰	外：灰褐色～淡灰褐色 内：灰褐色～淡灰褐色		
886	214	4区 2C-5	第3層	須世器 H	△1.8	内面：全体ヨコナギ。底部斜面切欠き後ナギ	質 灰	外：灰白色 内：灰白色～黑色	内面擦付材、赤辺あり不明確	
887	214	4区 2C-4	第3層	須世器 H	約11.5 △2.8	内面：全体ヨコナギ。底部斜面切欠き後ナギ 外側：全体ヨコナギ。底部斜面切欠き後ナギ	質 良好	外：灰褐色～灰白色 内：灰白色～黑色		
888	214	4区 2C-7	第3層	須世器 H	△1.8	内面：全体ヨコナギ。底部斜面切欠き後ナギ	質 良好	外：灰褐色～黑色 内：灰白色	外側自然崩行者	
889	214	4区 2C-6	第3層	須世器 H	約12.8 △2.1	内面：ヨコナギ	質 良好	外：灰褐色 内：灰白色	内面擦付材	
890	215	4区 2C-6	第3層	土器部 H	△1.8 △2.0	内面：全体ヨコナギ。底部斜面切欠き後ナギ 外側：全体ヨコナギ。底部斜面切欠き後ナギ	質 良好	外：オリーブ色～オリーブ褐色 内：オリーブ色～オリーブ褐色		
891	215	4区 2C-6	第3層	土器部 H	△1.9	内面：全体ヨコナギ。底部斜面切欠き後ナギ 外側：ナギ	質 良好	内面灰～に赤い黄褐色～ 外側：ナギ		
892	215	4区 2C-6	第3層	土器部 H	△1.4	内面：全体ヨコナギ。底部斜面切欠き後ナギ 外側：ナギ	質 良好	外：灰褐色 内：灰褐色		
893	215	4区 2C-7a	第3層	土器部 H	△1.8	内面：全体ヨコナギ。底部斜面切欠き後ナギ 外側：ナギ	質 良好	外：灰褐色 内：灰褐色		
894	215	4区 2C-7b	第3層	土器部 H	△1.2	内面：全体ヨコナギ。底部斜面切欠き後ナギ 外側：ナギ	質 良好	外：灰褐色 内：灰褐色	内面赤色差別	
895	215	4区 2C-6a	第3層	土器部 H	△1.9	内面：全体ヨコナギ。底部斜面切欠き後ナギ 外側：ナギ	質 良好	外：灰褐色 内：灰褐色	内面赤色差別	
896	215	4区 2C-6a	第3層	土器部 H	△1.5	内面：ナギ。底部斜面切欠き後ナギ	中や軟 灰	内面灰～も褐色～灰褐色	内面赤色差別	
897	215	4区 2C-7a	第3層	土器部 H	△0.9	内面：11種類ナギ。底部ハナメ残ナギ 外側：ナギ	中や軟 灰	内面灰～灰褐色 外側：ナギ	内面赤色差別	
898	215	4区 2C-6	手づくね 上部	手づくね	△6.8 △1.8	手づくね底部	質 良好	外：灰褐色～灰褐色 内：灰褐色		
899	215	4区 2C-6	手づくね 下部	手づくね	△1.8	内面：ハナメナギナギ 外側：全体ヨコナギナギ。底部丁部ハナケナギ。下端部ナギ	質 良好	外：に赤い黄褐色～灰褐色 内：半生材有材、体側下部に乳孔		
900	215	4区 2C-6a	第3層下部	高台付近	△2.2	内面：ナギナギナギナギ	中や軟 灰	内面灰褐色～灰褐色	黑色土器(内側)	
901	215	4区 2C-6	手づくね	手づくね	△2.7	内面：ナギ。底部ナギ	質 良好	内面灰～灰褐色		
902	215	4区 2C-6	手づくね	手づくね	△2.6	内面：ナギ。底部ナギ	中や軟 灰	内面灰～灰褐色		
903	215	4区 2C-6	手づくね	手づくね	△2.6	内面：ナギ。底部ナギ	中や軟 灰	内面灰～灰褐色		
904	215	4区 2C-6	手づくね	手づくね	△2.6	内面：ナギ。底部ナギ	中や軟 灰	内面灰～灰褐色		
905	215	4区 2C-6a	手づくね	手づくね	△2.9	内面：ナギ。底部ナギ	中や軟 灰	内面灰～灰褐色		
906	215	4区 2C-6a	手づくね	手づくね	△3.1	内面：ナギ。底部ナギ	中や軟 灰	内面灰～灰褐色	内面半生化により調整不透明	
907	215	4区 2C-6	手づくね	手づくね	△3.7	内面：ナギ。表面粗面	質 良好	外：灰褐色～灰褐色 内：粗面		
908	215	4区 2C-6a	手づくね	手づくね	△4.6	内面：ナギ。表面粗面	質 良好	内面灰～も褐色		
909	215	4区 2C-6b	手づくね下部	手づくね	△4.6	内面：ナギ。表面粗面	質 良好	内面灰～も褐色		
910	215	4区 2C-6	手づくね	手づくね	△4.6	内面：ナギ。表面粗面	中や軟 灰	内：に赤い黄褐色～褐色	内面半生化により内面調整不透明	
911	215	4区 2C-6	手づくね	手づくね	△4.4	内面：ナギ。表面粗面	質 良好	内面灰～も褐色		
912	215	4区 2C-6	手づくね	手づくね	△3.7	内面：ナギ。表面粗面	質 良好	内面灰～も褐色		
913	215	4区 2C-6	手づくね	手づくね	△2.9	内面：ナギ。底部斜面ハナケナギナギ	質 良好	内面灰～も褐色	底部内側に今号記	
914	215	4区 2C-6	手づくね	手づくね	△3.0	内面：ナギ。底部斜面ハナケナギナギ	質 良好	内面灰～も褐色	底部内側に今号記	
915	215	4区 2C-6	手づくね	手づくね	△3.0	内面：ナギ。底部斜面ハナケナギナギ	質 良好	内面灰～も褐色	底部内側に今号記	
916	215	4区 2C-6	手づくね	手づくね	△3.0	内面：ナギ。底部斜面ハナケナギナギ	質 良好	内面灰～も褐色	底部内側に今号記	
917	215	4区 2C-6	手づくね	手づくね	△3.2	内面：ナギ。底部斜面ハナケナギナギ。底部ナギ。体側斜面ナギ	質 良好	内面灰～も褐色		
918	215	4区 2C-6	手づくね	手づくね	△3.5	内面：ナギ。底部斜面ハナケナギナギ。体側斜面ナギ	質 良好	内面灰～も褐色	底部外側に(?)行	
919	215	4区 2C-6	手づくね	手づくね	△7.6	内面：ナギ。底部斜面ハナケナギナギ	質 良好	内面灰～も褐色		
920	215	4区 2C-6	手づくね	手づくね	△1.1	内面：ナギ。底部ハナケナギナギ	質 良好	内：灰褐色～オリーブ褐色	底部ヘラ号記	
921	215	4区 2C-6	手づくね	手づくね	△1.2	内面：ナギ。底部ナギ。底部斜面ナギ	質 良好	内面灰～も褐色		
922	215	4区 2C-6	手づくね	手づくね	△1.3	内面：ナギ。底部ナギ。体側斜面ナギ	質 良好	内面灰～も褐色		
923	215	4区 2C-6	手づくね	手づくね	△1.9	内面：ナギ。底部ナギ。体側斜面ナギ	質 良好	内面灰～も褐色		
924	215	4区 2C-6	手づくね	手づくね	△2.9	内面：ナギ。底部ナギ。体側斜面ナギ	質 良好	内面灰～も褐色		
925	215	4区 2C-6	手づくね	手づくね	△3.0	内面：ナギ。底部ナギ。体側斜面ナギ	質 良好	内面灰～も褐色		
926	215	4区 2C-6	手づくね	手づくね	△3.0	内面：ナギ。底部ナギ。体側斜面ナギ	質 良好	内面灰～も褐色		
927	215	4区 2C-6	手づくね	手づくね	△3.2	内面：ナギ。底部斜面ハナケナギナギ。底部ナギ。体側斜面ナギ	質 良好	内面灰～も褐色		
928	215	4区 2C-6	手づくね	手づくね	△3.6	内面：ナギ。底部斜面ハナケナギナギ	質 良好	内面灰～も褐色		
929	215	4区 2C-6	手づくね	手づくね	△4.0	内面：ナギ。底部ナギ。体側斜面ナギ	質 良好	内：灰褐色～オリーブ褐色		
930	215	4区 2C-6	手づくね	手づくね	△4.0	内面：ナギ。底部ナギ。体側斜面ナギ	質 良好	内：灰褐色～オリーブ褐色		
931	215	4区 2C-6	手づくね	手づくね	△4.0	内面：ナギ。底部ナギ。体側斜面ナギ	質 良好	内面灰～も褐色		
932	215	4区 2C-6	手づくね	手づくね	△4.8	内面：ナギ。底部斜面ハナケナギナギ。底部ナギ。体側斜面ナギ	質 良好	内：灰褐色～黑色 内：灰褐色	底部外側部(?)行	
933	215	4区 2C-6	手づくね	手づくね	△5.7	内面：ナギ。底部斜面ハナケナギナギ	質 良好	内面灰～も褐色		

第VI章 3区・4区の調査成果

表37 土器観察表(24)

編號 番号	県 県名	調査 地区	遺跡 地點	種別	1.寸幅(cm) 高さ(cm)	備考	出土 状況	色調	備考
928 216	3区 3区	草22号	面付部	中 11.0	外側 面付部底面切り、底面部斜ナギ一箇ナギ		良好	内前面とも灰青褐色	
927 216	3区 3区	第22号	面付部	中 12.0	外側 面付部底面切り、底面部斜ナギ		良好	内前面とも灰青褐色	
928 216	3区 3区	第22号	面付部	中 12.2	外側 面付ナギ、底面部斜面切り		良好	内前面とも灰青褐色	
929 216	3区 3区	第22号	面付部	中 1.7	外側 面付ナギ		良好	内前面と6.6白色	
930 216	3区 3区	第22号	面付部	中 2.4	外側 面付ナギ		良好	内前面と6.6白色	
931 216	3区 3区	第22号	面付部	中 1.9	外側 面付ナギ		良好	内前面と6.6白色	
932 216	3区 3区	第22号	面付部	中 3.8	外側 面付ナギ、底部内面にシボリ目		良好	内前面と6.6白色	
933 216	3区 3区	第22号	面付部	中 2.0	外側 面付ナギ		良好	内前面と6.6白色	
934 216	3区 3区	第22号	面付部	中 1.8	外側 面付ナギ		良好	内前面と6.6白色	
935 216	3区 3区	第22号	面付部	中 4.1	外側 面付ナギ、底面部斜面切り		良好	内/灰褐色	素面形
936 216	3区 3区	第22号	面付部	中 6.6	外側 面付ナギ、底面部斜面切り		良好	内/灰褐色	
937 216	3区 3区	第22号	面付部	中 15.9	外側 面付ナギ、底面部斜面切り		良好	内前面と6.6白色	外輪形目タキ
938 216	3区 3区	土器部	比	中 12.5	外側 ナギ		良好	内/灰褐色～灰白色	
939 216	3区 3区	土器部	比	中 5.2	外側 ナギ		良好	内/灰褐色～灰白色	馬鹿耳形近底
940 216	3区 3区	土器部	比	中 4.7	外側 ナギ、底面部斜面切り		良好	内前面ともに灰青褐色～灰白色	
941 216	3区 3区	土器部	比	中 5.9	外側 ナギ		良好	内前面ともに灰青褐色～灰白色	
942 216	3区 3区	土器部	比	中 3.4	外側 面付ナギ		中やや良	内前面ともに6.6白色	
943 216	3区 3区	土器部	比	中 2.0	外側 面付ナギ、底面部斜面切り		中やや良	内/灰褐色～灰白色	
944 216	3区 3区	土器部	比	中 2.0	外側 面付ナギ		中やや良	内/灰褐色～灰白色	
945 216	3区 3区	土器部	比	中 2.9	外側 面付ナギ、底面部斜面切り		良好	内前面ともに6.6白色	
946 216	3区 3区	土器部	比	中 3.0	外側 ナギ		中やや良	内前面ともに灰青褐色	
947 216	3区 3区	土器部	比	中 2.8	外側 面付部底面切り		中やや良	内前面ともに6.6白色	
948 216	3区 3区	土器部	比	中 2.5	外側 ナギ		良好	内/灰褐色	
949 216	3区 3区	土器部	比	中 2.5	外側 面付部底面切り		良好	内/灰褐色～明青褐色	
950 216	3区 3区	土器部	比	中 2.3	外側 面付部底面切り		良好	内/灰褐色	
951 216	3区 3区	土器部	比	中 11.2	外側 ナギ、底面部斜面切り		中やや良	内前面ともに灰青褐色	外輪形目二列的に細然
952 216	3区 3区	土器部	比	中 12.4	外側 ナギ、底面部斜面切り		良好	内前面ともに灰青褐色	
953 216	3区 3区	土器部	比	中 14.0	外側 ナギ、底面部斜面切り		中やや良	内前面ともに灰青褐色	
954 216	3区 3区	土器部	比	中 1.4	外側 ナギ		良好	内/灰褐色～明青褐色	
955 216	3区 3区	土器部	比	中 1.4	外側 ナギ		良好	内/灰褐色～明青褐色	
956 216	3区 3区	土器部	比	中 2.0	外側 ナギ		良好	内/灰褐色～明青褐色	
957 216	3区 3区	土器部	比	中 11.4	外側 ナギ、底面部斜面切り		中やや良	内/灰褐色～明青褐色	
958 216	3区 3区	土器部	比	中 4.6	外側 ナギ、底面部斜面切り		良好	内前面ともに6.6白色	
959 216	3区 3区	土器部	比	中 0.6	外側 ナギ、底面部斜面切り		良好	内/灰褐色～オーバーブラック	外輪形
960 216	3区 3区	土器部	比	中 1.2	外側 ナギ、底面部斜面切り		中やや良	内/灰褐色～灰白色	
961 216	3区 3区	土器部	比	中 2.2	外側 大手部斜面切り、底面部斜ナギ		良好	内前面ともに6.6白色	天津型ヘラ記号
962 216	3区 3区	土器部	比	中 1.3	外側 花紋斜面底面切り、底面部斜ナギ		良好	内前面ともに灰褐色	底面にヘラ記号
963 216	3区 3区	土器部	比	中 2.5	外側 ナギ		良好	内/灰褐色	
964 216	3区 3区	土器部	比	中 2.1	外側 ナギ		良好	内/灰褐色	
965 216	3区 3区	土器部	比	中 2.1	外側 口縁部斜ナギ、底面部斜面切り		良好	内前面ともに6.6白色	
966 216	3区 3区	土器部	比	中 2.7	外側 口縁部斜ナギ、底面部斜面切り		中やや良	内/灰褐色～6.6白色	
967 216	3区 3区	土器部	比	中 6.3	外側 体部斜ナギ		良好	内/灰褐色	
968 216	3区 3区	土器部	比	中 6.2	外側 口縁部斜ナギ、底面部斜面切り		良好	内/灰褐色～明青褐色	外輪形表面
969 216	4区 4区	第22号	面付部	中 2.5	外側 ナギ		良好	内/灰褐色	
970 216	4区 4区	第22号	面付部	中 2.7	外側 ナギ		良好	内/灰褐色	
971 216	4区 4区	第22号以下	土器部	中 18.5	外側 口縁部斜ナギ、底面部斜面切り、底面部斜ナギ		良好	内/灰褐色～6.6白色	
972 216	4区 4区	第22号以下	土器部	中 6.3	外側 体部斜ナギ		良好	内/灰褐色	
973 216	4区 4区	第22号	面付部	中 2.5	外側 口縁部斜ナギ、底面部斜面切り		良好	内/灰褐色～明青褐色	外輪形表面
974 216	4区 4区	第22号	面付部	中 2.5	外側 ナギ		良好	内/灰褐色	
975 216	4区 4区	第22号	面付部	中 2.6	外側 ナギ、底面部斜面切り		良好	内/灰褐色～6.6白色	外輪形表面
976 216	4区 4区	第22号	面付部	中 2.7	外側 ナギ		良好	内/灰褐色～6.6白色	外輪形表面
977 216	4区 4区	第22号	面付部	中 2.7	外側 ナギ		良好	内/灰褐色～6.6白色	外輪形表面
978 216	4区 4区	第22号	面付部	中 2.7	外側 ナギ		良好	内/灰褐色～6.6白色	外輪形表面
979 216	4区 4区	第22号	面付部	中 2.7	外側 ナギ		良好	内/灰褐色～6.6白色	外輪形表面
980 216	4区 4区	第22号	面付部	中 2.7	外側 ナギ		良好	内/灰褐色～6.6白色	外輪形表面
981 216	4区 4区	第22号	面付部	中 2.7	外側 ナギ		良好	内/灰褐色～6.6白色	外輪形表面
982 216	4区 4区	第22号	面付部	中 2.7	外側 ナギ		良好	内/灰褐色～6.6白色	外輪形表面
983 216	4区 4区	第22号	面付部	中 2.7	外側 ナギ		良好	内/灰褐色～6.6白色	外輪形表面
984 216	4区 4区	第22号	面付部	中 2.7	外側 ナギ		良好	内/灰褐色～6.6白色	外輪形表面
985 216	4区 4区	第22号	面付部	中 2.7	外側 ナギ		良好	内/灰褐色～6.6白色	外輪形表面
986 216	4区 4区	第22号	面付部	中 2.7	外側 ナギ		良好	内/灰褐色～6.6白色	外輪形表面
987 216	4区 4区	第22号	面付部	中 2.7	外側 ナギ		良好	内/灰褐色～6.6白色	外輪形表面
988 216	4区 4区	第22号	面付部	中 2.7	外側 ナギ		良好	内/灰褐色～6.6白色	外輪形表面
989 216	4区 4区	第22号	面付部	中 2.7	外側 ナギ		良好	内/灰褐色～6.6白色	外輪形表面
990 216	4区 4区	第22号	面付部	中 2.7	外側 ナギ		良好	内/灰褐色～6.6白色	外輪形表面
991 216	4区 4区	第22号	面付部	中 2.7	外側 ナギ		良好	内/灰褐色～6.6白色	外輪形表面
992 216	4区 4区	第22号	面付部	中 2.7	外側 ナギ		良好	内/灰褐色～6.6白色	外輪形表面
993 216	4区 4区	第22号	面付部	中 2.7	外側 ナギ		良好	内/灰褐色～6.6白色	外輪形表面
994 216	4区 4区	第22号	面付部	中 2.7	外側 ナギ		良好	内/灰褐色～6.6白色	外輪形表面
995 216	4区 4区	第22号	面付部	中 2.7	外側 ナギ		良好	内/灰褐色～6.6白色	外輪形表面
996 216	4区 4区	第22号	面付部	中 2.7	外側 ナギ		良好	内/灰褐色～6.6白色	外輪形表面
997 216	4区 4区	第22号	面付部	中 2.7	外側 ナギ		良好	内/灰褐色～6.6白色	外輪形表面
998 216	4区 4区	第22号	面付部	中 2.7	外側 ナギ		良好	内/灰褐色～6.6白色	外輪形表面
999 216	4区 4区	第22号	面付部	中 2.7	外側 ナギ		良好	内/灰褐色～6.6白色	外輪形表面

表38 土器観察表(25)

編號	県名 市号	調査 場所	種類	L×W(cm) 底面 径(cm)	特徴	船上	現成	色調	備考
873	219	4区 25-46	第2層上面 瓦玉土器	約20.2 △2.9	内面：ヨコナタ 外側：斜面	良	良好	内外面とも灰白色	内外面灰白色
971	219	4区 25-7	青磁 瓶	△4.8	内面：施釉、底面平たい。 外側：白	良	良好	内外面ともオリーブ色	施釉
972	219	4区 25-46	陶土	△3.3	内面：施釉、模倣文	良	良好	内外面ともオリーブ色	模倣文
973	219	4区 25-7	青磁 瓶	△2.0	内面：施釉、底面	良	良好	施釉面：オリーブ色 底面：灰白色	施釉青磁瓶1個
974	219	4区 25-46	第22層	△1.8	内面：青磁	良	良好	施釉面：オリーブ色 底面：灰白色	
975	219	4区 25-46	第22層	△2.9	内面：施釉、底面	良	良好	施釉面：オリーブ色 底面：灰白色	
976	219	4区 25-7	青磁 瓶	△1.1	内面：底面施釉、底部：黒ラメ入り	良	良好	内外面とも灰白色 底面：灰白色	施釉青磁瓶1個
977	219	4区 25-46	第21層 瓦玉土器	△2.8	内面：施釉	良	良好	施釉面：灰白色 底面：灰白色	印
978	219	4区 25-46	第2層上面 青竹 瓶	△2.7	- 内面：底面：青竹施釉、青竹 柄	良	良好	施釉面：灰白色 底面：青竹色	
979	219	4区 25-7	青磁 瓶	△2.2	内面：底面施釉	良	良好	施釉面：オリーブ色一端 底面：灰白色	標準?
980	219	4区 25-46	第21層 青竹	△2.5	内面：斜面	良	良好	内外面とも灰白色	施釉
981	220	3区 25-46	土器	△3.8	内面：底面施釉、底面平たい。	良	中等	内外面とも灰白色	内外面赤褐色
982	220	3区 25-46	土器	△1.8	内面：土台なし。底面平たい。	小等級	中等	内外面：灰白色	内外面赤褐色
983	220	3区 25-46	土器	△0.6	内面：底面施釉、底面平たい。せき	中等級	中等	内外面：灰白色	
984	220	3区 25-7	青磁 瓶	△1.1	内面：底面施釉、上口多子平たい丸瓶。底面カナ △0.6	中等級	中等	内外面：灰白色	
985	220	3区 25-7	青磁 瓶	△1.4	内面：斜面	良	良好	内外面とも灰白色	天津外港にテラ号記
986	220	3区 25-46	瓦玉	△1.2	内面：底面施釉、斜面	良	良好	内外面とも灰白色	底面斜面へテラ号記
987	220	3区 25-7	青磁 瓶	△1.5	内面：底面施釉、斜面	良	中等	内外面：灰白色	底面外側にテラ号記
988	220	3区 25-46	瓦玉	△2.3	内面：斜面	良	良好	内外面とも灰白色	底面外側にテラ号記
989	220	3区 25-46	瓦玉	△2.9	内面：土台なし。底面カナ。底面斜面	良	良好	内外面とも灰白色	底面外側にテラ号記
990	220	3区 25-7	青磁 瓶	△2.8	内面：斜面	良	良好	内外面とも灰白色	天津外港にテラ号記
991	220	3区 25-7	青磁 瓶	△4.2	内面：土台なし。底面斜面	良	良好	内外面とも灰白色	底面外側にテラ号記
992	220	3区 25-7	青磁 瓶	△1.5	内面：施釉、底面	良	良好	施釉面：オリーブ色 底面：灰白色	施釉青磁瓶1個
993	220	3区 25-46	青磁 瓶	△1.5	内面：施釉、底面	良	良好	施釉面：灰白色 底面：灰白色	見古文。説書「大明舟」半價
994	220	3区 25-7	青磁 瓶	△1.6	内面：施釉	良	良好	施釉面：オリーブ色 底面：灰白色	外側に墨書きの10箇部分有り
1000	226	4区 25-46	第4層 青磁	△1.5	内面：つま黒頭輪チダ。火炎部：ヘリカツナ底面輪チダ。底 面輪同ナ	良	中等	内外面とも灰白色	天津外港、底面付着、漆バレット
1001	226	4区 25-46	第4層 青磁	△2.1	内面：底面輪同ナ	良	良好	内外面：灰白色	天津外港に漆付着
1002	226	4区 25-46	第4層 青磁	△2.1	内面：斜面チダ。底面斜面	良	良好	内外面：灰白色	内面に漆付着、漆バレット
1003	226	4区 25-7	青磁	△2.9	内面：斜面チダ。底面斜面チダ。	良	良好	内外面とも灰白色	天津外港に漆付着、漆バレット
1004	226	4区 25-7	青磁	△4.9	内面：斜面チダ。底面斜面チダ。	良	良好	内外面：灰白色	漆バレット
1005	226	4区 25-46	第4層 青磁	△2.2	内面：斜面チダ。底面斜面チダ。底面斜面	良	良好	内外面：灰白色	内面に漆付着、外 面に漆付着
1006	226	4区 25-7	青磁	△4.1	内面：斜面チダ。底面斜面チダ。	良	良好	内外面：灰白色	天津外港に漆付着
1007	226	4区 25-46	第4層 青磁	△1.7	内面：斜面チダ。底面斜面チダ。底面斜面	良	良好	内外面：灰白色	内面に漆付着、漆付着
1008	226	4区 25-7	4193清 同上	△3.4	内面：斜面輪同チダ。底面ヘリカツナ底面輪同チダ。	良	良好	内外面とも灰白色	内面付着
1009	226	4区 25-46	第4層 青磁	△1.8	内面：底面輪同チダ。底面ヘリカツナ	良	良好	内外面：灰白色	内面付着
1010	226	4区 25-46	第4層 青磁	△2.1	内面：底面輪同チダ。下部ヘリカツナ。底面輪同チダ。	良	良好	内外面：灰白色	内面および底面付着
1011	226	4区 25-46	第4層 青磁	△4.1	内面：斜面チダ。底面斜面チダ。	良	良好	内外面：灰白色	内面および底面付着
1012	226	4区 25-46	第4層 青磁	△2.7	内面：斜面チダ。底面斜面チダ。	良	良好	内外面とも灰白色	内面付着
1013	226	4区 25-46	第4層 青磁	△2.7	内面：斜面チダ。	良	良好	内外面：灰白色	内面付着
1014	227	4区 25-7	4008清 同上	△4.5	内面：斜面チダ。底面	良	良好	内外面：灰白色	内面付着
1015	227	4区 25-7	4008清 同上	△3.3	内面：斜面チダ。底面	良	良好	内外面：灰白色	内面付着
1016	227	4区 25-7	4008清 同上	△4.1	内面：斜面チダ。底面斜面チダ。	良	良好	内外面：灰白色	内面付着
1017	227	4区 25-46	第4層 青磁	△1.7	内面：斜面チダ。底面斜面チダ。	良	良好	内外面とも灰白色	内面付着
1018	227	4区 25-46	第4層 青磁	△2.7	内面：斜面チダ。	良	良好	内外面とも灰白色	内面付着
1019	227	4区 25-46	第4層 青磁	△2.8	内面：斜面チダ。	良	良好	内外面とも灰白色	内面付着
1020	227	4区 25-46	第4層 青磁	△4.3	内面：斜面チダ。底面	良	良好	内外面：灰白色	内面付着
1021	227	4区 25-7	4008清 同上	△3.1	内面：斜面チダ。底面	良	良好	内外面：灰白色	内面付着
1022	227	4区 25-7	4008清 同上	△3.5	内面：斜面チダ。底面	良	良好	内外面：灰白色	内面付着
1023	227	4区 25-7	4008清 同上	△3.8	内面：斜面チダ。底面	良	良好	内外面とも灰白色	内面付着
1024	227	4区 25-7	4008清 同上	△3.8	内面：斜面チダ。	良	良好	内外面：灰白色	内面付着
1025	227	4区 25-7	4008清 同上	△3.8	内面：斜面チダ。底面	良	良好	内外面とも灰白色	内面付着
1026	227	4区 25-7	4008清 同上	△3.8	内面：斜面チダ。底面	良	良好	内外面：灰白色	内面付着

第VI章 3区・4区の調査成果

表39 土器観察表(26)

編號	区域 番号	調査 番号	遺跡 位置	種別	L寸幅(cm) W寸高(cm)	備考	出土	成形	色調	備考
1077	227	4区 23.9m	第4層	土	△ 24	内面 陶器ハセタズリ丸ナメ、1脚脚付軽ナメ	やや青 良好	内外面とも灰白色	転写鏡(天井部内面、壁打音)	
1058	227	3区 23.6m	第22層	壁	△ 15	外側 つまみ足ナメ、天井部脚付ハラクズリ脚ナメ、腰窓用 軽ナメ	良好	内外面とも灰白色	転写鏡(天井部内面)	
1079	227	4区 26.7m	第44層	壁	△ 15	内面 つまみ足ナメ	良好	内外面とも灰白色	つまみ内(漆記号、 転写鏡(天井部内面))	
1080	227	4区 23.6m	第3層	壁	△ 15.8 23	外側 つまみ足ナメ、天井部脚付ハラクズリ脚ナメ、腰窓用 軽ナメ	中等	内外面とも稍灰白色	転写鏡(天井部内面、壁打音)	
1081	227	4区 23.6m	第22層	土	△ 22	内面 つまみ足ナメ、腰窓用ナメ	良好	内/黄灰白 内/灰白	転写鏡(天井部内面、壁打音)	
1082	227	3区 23.7m	第4層	壁	△ 15	外側 天井部脚付ハラクズリ脚ナメ、腰窓用軽ナメ 内側 天井部脚付ナメ、保留脚付ナメ	良好	内外面とも灰白色	△(2)号、転写鏡	
1083	227	4区 23.7m	第4層	壁	△ 20	外側 つまみ足ナメ、天井部脚付ハラクズリ脚ナメ、保 留脚付ナメ	中等	内/灰白～暗灰白 内/灰白	転写鏡(天井部内面、壁打音)	
1084	227	4区 23.6m	第42層	壁	△ 20 96	内面 つまみ足ナメ、天井部脚付ハラクズリ脚ナメ、腰窓用軽 ナメ	中等	内外面とも灰白色	転写鏡(天井部内面、壁打音)	
1085	227	4区 23.6m	第41層以下	壁	△ 27	外側 つまみ足ナメと丸ナメ、つまみ足軽ナメ、保留脚 軽ナメ	良好	内/灰白～稍灰白 内/灰リーブ化	転写鏡(天井部内面)	
1086	228	4区 23.6m	4221溝 底上	壁	△ 16.0 △ 22	内面 天井部脚付ハラクズリ、脚ナメ、天井部脚付ハラ クズリ、天井部軽ナメ	良好	内外面とも灰白色	転写鏡(天井部内面)	
1087	228	4区 23.6m	第4層	壁	△ 12	内面 つまみ足ナメ、天井部脚付ハラクズリ脚ナメ、保 留脚付ナメ	良好	内外面とも灰白色	内面墨れ也多、自然軋打音、転写 鏡(天井部内面、壁打音)	
1088	228	3区 23.6m	W22号	壁	△ 13 △ 18	内面 天井部脚付ナメ、保留脚付ナメ	良好	内外面とも灰白色	転写鏡(天井部内面、壁打音)	
1089	228	3区 23.6m	第22層	壁	△ 18	内面 天井部脚付ハラクズリ？(窓打音のため断定不能)、保 留脚付ナメ	良好	内/灰白色 内/灰白色	転写鏡(天井部内面、壁打音)	
1090	228	3区 23.6m	窓付壁 壁上	壁	△ 19	内面 天井部脚付切妻ナメ、腰窓用ナメ	良好	内外面とも灰白色	転写鏡(天井部内面)	
1091	228	3区 23.6m	第21層	壁	△ 19	内面 天井部脚付切妻ナメ、腰窓用ナメ	良好	内外面とも灰白色	転写鏡(天井部内面)	
1092	228	3区 23.6m	土上	壁	△ 11	内面 天井部脚付ナメ、保留脚付ナメ	良好	内外面とも灰白色	転写鏡(天井部内面)	
1093	228	3区 23.6m	第3層	壁	△ 18	内面 天井部脚付切妻ナメ、天井部脚付切妻ナメ	良好	内外面とも灰白色	転写鏡(天井部内面)	
1094	228	3区 23.6m	3250ピット 底上	壁	△ 19	内面 天井部脚付切妻ナメ	良好	内外面とも灰白色	△(2)号、転写鏡	
1095	228	3区 23.6m	第21層	壁	△ 18	内面 天井部脚付切妻ナメ	良好	内外面とも灰白色	転写鏡(天井部内面、壁打音)	
1096	228	3区 23.6m	糞	壁	△ 11	内面 天井部脚付ナメ、保留脚付ナメ	良好	内外面とも灰白色	転写鏡(天井部内面)	
1097	228	3区 23.6m	第3層	壁	△ 18	内面 天井部脚付ナメ、保留脚付ナメ	良好	内外面とも灰白色	転写鏡(天井部内面)	
1098	228	3区 23.6m	3250ピット 底上	壁	△ 18	内面 天井部脚付ナメ、保留脚付ナメ	良好	内外面とも灰白色	転写鏡(天井部内面、壁打音)	
1099	228	3区 23.6m	糞	壁	△ 18	内面 天井部脚付ナメ、保留脚付ナメ	良好	内外面とも灰白色	転写鏡(天井部内面)	
1100	229	3区 23.6m	3423溝 底上	壁	△ 32	内面 天井部脚付切妻ナメ	良好	内外面とも灰白色	素面内(壁打音)、転写 鏡	
1101	229	3区 23.6m	糞	壁	△ 18	内面 天井部脚付ナメ、保留脚付ナメ	良好	内外面とも灰白色	転写鏡(天井部内面、壁打音)	
1102	229	3区 23.6m	糞	壁	△ 11	内面 天井部脚付ナメ、保留脚付ナメ	良好	内外面とも灰白色	転写鏡(天井部内面、壁打音)	
1103	229	3区 23.6m	糞	壁	△ 10	内面 天井部脚付ナメ	良好	内外面とも灰白色	転写鏡(天井部内面)	
1104	229	3区 23.6m	糞	壁	△ 10	内面 天井部脚付切妻ナメ	良好	内外面とも灰白色	転写鏡(天井部内面、壁打音)	
1105	229	3区 23.6m	糞	壁	△ 10	内面 天井部脚付切妻ナメ	良好	内外面とも灰白色	転写鏡(天井部内面、壁打音)	
1106	229	3区 23.6m	糞	壁	△ 14.8	内面 天井部脚付切妻ナメ、天井部脚付切妻ナメ	良好	内外面とも灰白色	転写鏡(天井部内面)	
1107	229	3区 23.6m	糞	壁	△ 18	内面 天井部脚付切妻ナメ、天井部脚付切妻ナメ	良好	内外面とも灰白色	転写鏡(天井部内面)	
1108	229	3区 23.6m	糞	壁	△ 18	内面 天井部脚付切妻ナメ、天井部脚付切妻ナメ	良好	内外面とも灰白色	転写鏡(天井部内面、壁打音)	
1109	229	3区 23.6m	糞	壁	△ 18	内面 天井部脚付切妻ナメ	良好	内外面とも灰白色	転写鏡(天井部内面)	
1110	229	3区 23.6m	糞	壁	△ 18	内面 天井部脚付切妻ナメ	良好	内外面とも灰白色	転写鏡(天井部内面)	
1111	229	3区 23.6m	糞	壁	△ 18	内面 天井部脚付切妻ナメ	良好	内外面とも灰白色	転写鏡(天井部内面)	
1112	229	3区 23.6m	糞	壁	△ 18	内面 天井部脚付切妻ナメ	良好	内外面とも灰白色	転写鏡(天井部内面)	
1113	229	3区 23.6m	糞	壁	△ 17	内面 天井部脚付切妻ナメ	良好	内外面とも灰白色	転写鏡(天井部内面、壁打音)	
1114	229	3区 23.6m	糞	壁	△ 18	内面 天井部脚付切妻ナメ	良好	内外面とも灰白色	転写鏡(天井部内面、壁打音)	

表40 土器觀察表(27)

編號	國名 番号	遺跡名	層位	柱径 直徑(cm)	柱高 高さ(cm)	特徵	船上	現成	色調	備考
1115	230 23-4	3区 第22層	須世部 基盤	11.8	1.4	内面：斜面斜ナギ、斜面斜面ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	内外面とも灰白色～灰黑色	私用便？（見占屋、薪付窓）
1116	230 23-6d	3区 堆積物 基盤	△8	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面ナギ	良	良好	内外面とも灰黑色	当面の△？（見占屋）	私用便？（見占屋内に壁板）	
1117	230 4区 4	4023堆 土上	須世部 基盤	—	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面ナギ	良	良好	外：灰白色～灰黑色 内：灰白色	私用便（受領内面）	
1118	230 23-7c	3区 土上	須世部 基盤	—	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面ナギ、2当面に望る込みに△を造	良	良好	内外面とも灰黑色	私用便（受領内面、薪付窓）	
1119	230 23-7c	3区 土上	須世部 基盤	△4.2	内面：見占屋ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色 内：灰白色	私用便（見占屋）	
1120	230 23-9e	3区 土上土下	須世部 基盤	△5.5	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色～灰黑色 内：灰白色～灰黑色	須世部外側に薪材置	
1124	287 23-7v	3区 土上土下	須世部 基盤	2.6	内面：尖状圓錐形ハナギと斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色～灰黑色 内：灰白色～灰黑色	井戸外側に薪材置【門】	
1125	287 23-9e	3区 土上土下	須世部 基盤	△2.6	内面：尖状圓錐形ハナギと斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	黒わざに△をむ 内外面とも灰黑色	須世部外側に薪材置【口・門】	
1126	287 23-9e	3区 土上土下	須世部 基盤	14.7	内面：斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	内外面とも灰黑色	天津井内側に薪材置【門】	
1127	287 23-9e	3区 土上土下	須世部 基盤	△1.5	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	内外面とも灰黑色	天津井内側に薪材置【門】	
1128	287 23-9e	3区 土上土下	須世部 基盤	3.7	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色～灰黑色 内：灰白色	須世部に薪材置【門】	
1129	287 23-9e	3区 第22層	須世部 基盤	△1.6	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色 内：灰白色	須世部に薪材置【門】	
1130	287 23-9e	3区 土上土下	須世部 基盤	△1.7	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	内外面とも灰黑色	須世部に薪材置【門】	
1131	287 23-9e	3区 土上土下	須世部 基盤	△1.4	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色～灰黑色 内：灰白色	須世部に薪材置【門】	
1132	287 23-9e	3区 第22層	須世部 基盤	△1.6	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	内外面とも灰黑色	須世部外側に薪材置【門】	
1133	287 23-9e	3区 土上土下	須世部 基盤	△1.1	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色～灰黑色 内：灰白色	須世部外側に薪材置【門】	
1134	287 23-9e	3区 土上土下	須世部 基盤	△1.1	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色 内：灰白色	須世部外側に薪材置【門】	
1135	287 23-9e	3区 土上土下	須世部 基盤	△1.8	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色～灰黑色 内：灰白色	須世部外側に薪材置【門】	
1136	287 23-9e	3区 第22層	須世部 基盤	△1.1	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色～灰黑色 内：灰白色	須世部外側に薪材置【門】	
1137	287 23-9e	3区 土上土下	須世部 基盤	12.2	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	内外面とも灰黑色	須世部外側に薪材置【門】	
1138	287 23-9e	3区 土上土下	須世部 基盤	△1.1	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色～灰黑色 内：灰白色	須世部外側に薪材置【門】	
1139	287 23-9e	3区 土上土下	須世部 基盤	12.1	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色 内：灰白色	須世部外側に薪材置【門】	
1140	287 23-9e	3区 土上土下	須世部 基盤	△1.1	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色～灰黑色 内：灰白色	須世部外側に薪材置【門】	
1141	287 23-9e	3区 土上土下	須世部 基盤	△1.8	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色～灰黑色 内：灰白色	須世部外側に薪材置【門】	
1142	287 23-9e	3区 土上土下	須世部 基盤	△1.6	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	内外面とも灰黑色	須世部外側に薪材置【門】	
1143	287 23-9e	3区 第3層	須世部 基盤	△1.1	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色 内：灰白色	須世部外側に薪材置【門】	
1144	287 23-9e	3区 土上土下	須世部 基盤	△1.7	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色 内：灰白色	須世部外側に薪材置【門】	
1145	287 23-9e	3区 土上土下	須世部 基盤	△1.7	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色 内：灰白色	須世部外側に薪材置【門】	
1146	287 23-9e	3区 土上土下	須世部 基盤	△1.8	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色～灰黑色 内：灰白色	須世部外側に薪材置【門】	
1147	287 23-9e	3区 土上土下	須世部 基盤	△1.6	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色～灰黑色 内：灰白色	須世部外側に薪材置【門】	
1148	287 23-9e	3区 土上土下	須世部 基盤	△1.1	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色 内：灰白色	須世部外側に薪材置【門】	
1149	287 23-9e	3区 土上土下	須世部 基盤	△2.9	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色～灰黑色 内：灰白色	須世部外側に薪材置【門】	
1150	287 23-9e	3区 土上土下	須世部 基盤	△2.1	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色～灰黑色 内：灰白色	須世部外側に薪材置【門】	
1151	287 23-9e	3区 土上土下	須世部 基盤	△2.1	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色～灰黑色 内：灰白色	須世部外側に薪材置【門】	
1152	287 23-9e	3区 第4層	須世部 基盤	△2.0	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色 内：灰白色	須世部外側に薪材置【門】	
1153	287 23-9e	3区 第22層	須世部 基盤	△1.9	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色 内：灰白色	須世部外側に薪材置【門】	
1154	287 23-9e	3区 土上土下	須世部 基盤	△1.8	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色～灰黑色 内：灰白色	須世部外側に薪材置【門】	
1155	287 23-9e	3区 土上土下	須世部 基盤	△1.8	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色～灰黑色 内：灰白色	須世部外側に薪材置【門】	
1156	287 23-9e	3区 土上土下	須世部 基盤	△1.6	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色～灰黑色 内：灰白色	須世部外側に薪材置【門】	
1157	287 23-9e	3区 土上土下	須世部 基盤	△1.5	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色 内：灰白色	須世部外側に薪材置【門】	
1158	287 23-9e	3区 土上土下	須世部 基盤	△2.1	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色～灰黑色 内：灰白色	天津井外側に薪材置【門】	
1159	287 23-9e	3区 第22層	須世部 基盤	△2.3	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色～灰黑色 内：灰白色	須世部外側に薪材置【門】	
1160	287 23-9e	3区 土上土下	須世部 基盤	△1.3	内面：斜面斜面斜ナギ、斜面斜面斜ナギ	良	良好	外：灰白色～灰黑色 内：灰白色	須世部外側に薪材置【門】	

表41 土器観察表(28)

編號 番号	調査 区域 番号	遺跡 地點	種別	L寸幅(cm) 幅高(cm)	備考	相土	焼成	色調	度数
1361 280	3区 23区	第5層 底面	陶器	△ 0.48	外側 回転赤手り、端部ナド	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「門」
1362 280	3区 23区	3000層 底上部 井	陶器	△ 0.07	外側 端部赤手り 内側 ナド	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「門」
1363 280	3区 23区	3000層 底上部 蓋?	陶器	△ 0.14	外側 回転ナド後手ナテ	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「門」
1364 280	3区 23区	3000層 底上部 井	陶器	△ 0.04	外側 端部回転赤手り 内側 赤手り	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「門」
1365 280	3区 23区	3000層 底上部 井	陶器	△ 0.06	外側 花形回転赤手り?、体部ナド 内側 ナド	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「□」 内側 ナド
1366 280	3区 23区	3432層 底上部 井	陶器	△ 0.09	外側 渡邊不明 内側 未定	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「□」 内側 ナドを含む
1367 280	3区 23区	3006層 底上部 井	陶器	△ 0.16	外側 花形回転り、底面から脇面にかけてナド、体部回転ナド	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「門」
1368 280	3区 23区	3006層 底上部 井	陶器	△ 0.08	外側 花形ナド、底部回転ナド	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「□」 内側 ナド
1369 280	3区 23区	3006層 底上部 井	陶器	△ 0.14	外側 花形回転赤手り?、体部回転ナド、下端ナド	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「大屋」
1370 280	3区 23区	3006層 底上部 井	陶器	△ 0.17	外側 花形回転赤手り、体部回転ナド	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「門」
1371 280	3区 23区	3433層 底上部 井	陶器	△ 0.14	外側 花形回転り、底面から脇面にかけてナド後脚跨ぎナ	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「門」
1372 280	3区 23区	3003層 底上部 井	陶器	△ 0.14	外側 花形回転赤手り後手ナド、高台基部、体部回転ナド	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「□」 内側 ナド
1373 280	3区 23区	3432層 底上部 井	陶器	△ 0.17	外側 花形回転赤手り、体部ナド	■	中や軟	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「門」
1374 280	3区 23区	第22号 底白井	陶器	△ 0.16	外側 花形回転赤手り、高台基部ナド、体部回転ナド	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「門」
1375 280	3区 23区	第22号 底	陶器	△ 0.18	外側 花形回転ナド、底部回転ナド	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「□」へへ記号?
1376 280	3区 23区	第22号 底上部	陶器	△ 0.15	外側 回転ナド	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「」
1377 280	3区 23区	3006層 底上部 井	陶器	△ 0.11	外側 花形回転赤手り、体部回転ナド。下端に付帯赤手り 内側 手打ち目	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「」
1378 280	3区 23区	3006層 底上部 井	陶器	△ 0.06	外側 回転赤手り	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「」
1379 280	3区 23区	3006層 底上部 井	陶器	△ 0.06	外側 回転赤手り	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「」
1380 280	3区 23区	3006層 底上部 井	陶器	△ 0.19	外側 回転赤手り切り、体部ナド	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「」
1381 280	3区 23区	3003層 底上部 井	陶器	△ 0.16	外側 花形回転赤手り、体部回転ナド	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「□」
1382 280	3区 23区	3445号 底上部 井	陶器	△ 0.12	外側 花形回転赤手り、体部ナド	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「□」 内側 ナド
1383 280	3区 23区	第4号 底上部 井	陶器	△ 0.13	外側 大型回転赤手り?、身舟から脇面にかけて回転ナド 内側 ハナタナ?、体部回転ナド	■	良好	内・外側とも灰白色	大半部内側に墨書き「東川之内」
1384 280	3区 23区	3003層 底上部 井	陶器	△ 0.16	外側 光滑な底面赤手り?、身舟ナド、体部回転ナド 内側 ハナタナ?、回転赤手ナド	■	良好	内・外側とも灰白色	底部内側に墨書き「東川之内」
1385 280	3区 23区	3432層 底上部 井	陶器	△ 0.16	外側 大量の小底面に斜めハカリ模様ナド、体部ナド	■	良好	内・外側とも灰白色	光澤部内側に墨書き「英」
1386 280	3区 23区	3006層 底上部 井	陶器	△ 0.06	外側 花形回転赤手り、底面ナド	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「□」 内側 ナド
1387 280	3区 23区	3006層 底上部 井	陶器	△ 0.17	外側 大型回転赤手り上端ナド、底部ナド回転ナド	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「」
1388 280	3区 23区	3006層 底上部 井	陶器	△ 0.19	外側 花形回転赤手り、底面ナド	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「□」 内側 ナド
1389 280	3区 23区	3006層 底上部 井	陶器	△ 0.31	外側 回転ナド?、底部ナド	■	中や軟	内・外側とも灰黄色	底部外側に墨書き「□」 内側 手打ち目
1390 280	3区 23区	3006層 底上部 井	陶器	△ 0.27	外側 花形回転赤手り、底部ナド	■	良好	内・外側とも灰黄色	底部外側に墨書き「」 内側 手打ち目
1391 280	3区 23区	3006層 底上部 井	陶器	△ 0.18	外側 手打ち目ナド	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「」
1392 280	3区 23区	3006層 底上部 井	陶器	△ 0.17	外側 花形回転赤手り、底面ナド	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「」
1393 280	3区 23区	3006層 底上部 井	陶器	△ 0.19	外側 花形回転赤手り?、底面ナド	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「」
1394 280	3区 23区	3003層 底上部 井	陶器	△ 0.15	外側 花形回転赤手り?、体部回転ナド	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「」
1395 280	3区 23区	第4号 底上部 井	陶器	△ 0.05	外側 回転赤手りナド?	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「□」 内側 ナド
1396 280	3区 23区	3432層 底上部 井	陶器	△ 0.15	外側 花形回転赤手り、底面回転ナド	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「」
1397 280	3区 23区	第22号 底上部 井	陶器	△ 0.14	外側 花形回転赤手り。底部ナド	■	中や軟	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「□」 内側 ナド
1398 280	3区 23区	第22号 底白井	陶器	△ 0.20	外側 花形回転赤手りナド?、底面ナド	■	良好	内・外側とも灰白色	底部に墨書き「」
1399 280	3区 23区	第22号 底上部 井	陶器	△ 0.15	外側 花形回転赤手り	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「」
1400 280	3区 23区	3432層 底上部 井	陶器	△ 0.16	外側 花形回転赤手り?、底面ナド	■	良好	内・外側とも灰白色	底部外側に墨書き「」

表 42 土器觀察表 (29)

表43 土器観察表(30)

編號	県名	調査 地区	遺跡 名	種別	L寸(cm) 幅寸(cm)	備考	出土	発見	色調	備考
1240 294	3区 2D-6d	第22号	遺跡部	柱	1.5	内面：底面剥離部あり。高台面側底面剥離部あり。底面剥離部	黒	良好	内面と底面	底面に墨書き〔一〕
1241 294	3区 2D-7b	3432遺 跡部	柱	1.5	内面：剥離なし。		黒	良好	内/灰黑色	底面に墨書き〔口〕
1242 294	4区 2C-6d	第2号	遺跡部	柱	1.22	内面：剥離なし。底面剥離部あり。	黒	良好	内面と底面	底面外側に墨書き〔口〕
1243 294	3区 2D-6d	第22号	柱	1.5	内面：底面剥離部あり。底面剥離部あり。	黒	中や黒	内面と底面	底面外側に墨書き〔口〕	
1244 294	3区 2D-7b	3006遺 跡部	柱	1.4	内面：底面剥離部あり。底面剥離部あり。	黒	良好	内/灰黄色	底面外側に墨書き〔一〕	
1245 294	2D-6d	第22号	柱	1.1	内面：底面剥離部あり。底面剥離部あり。上半円柱ナメ	黒	良好	内面と底面	底面外側に墨書き〔口〕	
1246 294	4区 2C-6d	第3号	遺跡部	柱	2.5	内面：底面剥離部あり。底面剥離部あり。	黒	良好	内面と底面	底面外側に墨書き〔口〕
1247 294	3区 2D-6d	第22号	柱	1.6	内面：底面剥離部あり。底面剥離部あり。	黒	良好	内面と底面	底面に墨書き〔口〕	
1248 294	3区 2D-7c	第22号	柱	1.5	内面：底面剥離部あり。底面ナメ	黒	良好	内面と底面	底面外側に墨書き〔口〕	
1249 294	2D-6d	第22号	柱	0.98	内面：底面剥離部あり。	黒	良好	内面と底面	底面外側に墨書き〔一〕	
1250 294	2D-7b	3432遺 跡部	柱	1.5	内面：底面剥離部あり。底面ナメ。	黒	良好	内面と底面	底面外側に墨書き〔一〕	
1251 294	2D-6d	3432遺 跡部	柱	2.1	内面：底面剥離部あり。底面剥離部ナメ	黒	良好	内面と底面	底面外側に墨書き〔一〕	
1252 295	3区 2D-6e	3400ビット 跡地	柱	1.0	内面：底面剥離部あり。底面ナメ。	黒	中や黒	内面と底面	底面外側に墨書き〔一〕	
1253 295	3区 2D-7c	遺跡	柱	0.98	内面：底面剥離部あり。底面ナメ	黒	中や黒	内面と底面	底面外側に墨書き〔口〕	
1254 295	3区 2D-6d	第22号	柱	1.8	内面：底面ナメ。底面剥離部ナメ	黒	良好	内/灰黑色	底面外側に墨書き〔口〕	
1255 295	3区 2D-7b	第22号	柱	2.3	内面：底面剥離部あり。底面ナメ。	黒	良好	内/灰黑色-灰黑色	底面外側に墨書き〔口〕 底面外側に墨書き〔一〕	
1256 295	3区 2D-6e	第21号	遺跡部	柱	0.98	内面：底面剥離部あり。底面ナメ。	黒	良好	内面と底面	底面に墨書き〔口〕
1257 295	3区 2D-7b	第22号	柱	0.6	内面：底面剥離部あり。底面ナメ	黒	良好	内面と底面	底面に墨書き〔口〕	
1258 295	3区 2D-5e	3006遺 跡部	柱	2.0	内面と底面ナメ	黒	良好	内/灰黑色-灰黑色	底面外側に墨書き〔口〕	
1259 295	3区 2D-6d	3432遺 跡部	柱	4.2	内面：底面剥離部あり。底面ナメ。下端ナメ	黒	良好	内面と底面	底面外側に墨書き〔一〕	
1260 295	2D-7b	3420遺 跡部	柱	2.4	内面：底面剥離部あり。底面ナメ	黒	良好	内/灰黑色-灰黑色	底面外側に墨書き〔口〕	
1261 295	3区 2D-7c	3014遺 跡部	柱	1.3	内面：底面剥離部あり。底面ナメ	黒	良好	内面と底面	底面外側に墨書き〔口〕	
1262 295	3区 2D-6d	第22号	柱	1.5	内面：底面剥離部あり。底面剥離部不明	黒	中や黒	内/灰黑色	底面外側に墨書き〔口〕	
1263 295	3区 2D-6d	3006遺 跡部	柱	2.9	内面ナメ	黒	良好	内面と底面	底面外側に墨書き〔口〕	
1264 295	4区 2C-6d	第3号 ~4号	土管部	柱	1.1	内面：底面ナメ。底面剥離部ナメ	中や黒	中や黒	内面と底面	底面外側に墨書き〔口〕
1265 295	4区 2C-6d	4008遺 跡部	柱	0.9	内面：底面剥離部あり。	中や黒	良好	内/灰黑色-灰黑色	底面外側の墨書きは板（人面）の可逆性	
1266 295	3区 2D-7c	第22号	柱	1.2	内面：底面ナメ。底面へクチ付底面剥離部	黒	良好	内面と底面	見込みに墨書き〔口〕	
1267 295	3区 2D-7d	第2号	柱	0.17	内面：底面剥離部あり。底面ナメ	黒	良好	内面と底面	底面外側に墨書き〔一〕	
1268 295	3区 2D-7c	3432遺 跡部	柱	1.1	内面：底面剥離部あり。底面ナメ	黒	良好	内面と底面	底面外側に墨書き〔口〕	
1269 295	3区 2D-7c	3006遺 跡部	柱	0.98	内面：底面剥離部あり。底面ナメ。	黒	良好	内/灰黑色	底面外側に墨書き〔一〕	
1270 295	2D-6d	3432遺 跡部	柱	1.0	内面：底面剥離部あり。底面ナメ	黒	中や黒	内面と底面	底面外側に墨書き〔一〕	
1271 295	3区 2D-7b	第2号	柱	0.98	内面：底面へクチ付ナメ。底面ナメ。	黒	良好	内/灰黑色	底面外側に墨書き〔口〕	
1272 295	3区 2D-7d	第2号	柱	0.98	内面：底面へクチ付ナメ。底面ナメ	黒	良好	内面と底面	底面外側に墨書き〔口〕	
1273 295	3区 2D-6d	3006遺 跡部	柱	1.0	内面：底面剥離部あり。底面ナメ	黒	良好	内面と底面	底面外側に墨書き〔口〕	
1274 295	3区 2D-5e	3000遺 跡部	柱	1.7	内面：底面ナメ。底面剥離部ナメ	黒	良好	内/灰黑色-灰黑色	底面外側に墨書き〔口〕	
1275 295	3区 2D-7c	第22号	柱	2.3	内面：底面ナメ。底面剥離部ナメ	黒	中や黒	内/灰黑色	底面外側に墨書き〔口〕	
1276 295	3区 2D-6d	3432遺 跡部	柱	0.98	内面：底面へクチ付ナメ。底面ナメ。	黒	良好	内/灰黑色	内面に墨書き〔口〕(前までは内)」 「100上回り」	
1277 295	3区 2D-7d	3006遺 跡部	柱	0.98	内面：底面へクチ付ナメ。	黒	良好	内面と底面	底面外側に墨書き〔口〕(内面へ剥離ナメ) 〔リ〕	
1278 295	3区 2D-6d	第22号	柱	0.98	内面：底面へクチ付ナメ。	黒	良好	内面と底面	底面外側に墨書き〔口〕	
1279 295	3区 2D-7c	3432遺 跡部	柱	0.97	内面：底面ナメ。	黒	良好	内面と底面	底面外側に墨書き〔口〕	
1280 295	3区 2D-7c	3014遺 跡部	柱	0.95	内面：底面へクチ付ナメ。	黒	良好	内面と底面	底面に墨書き〔口〕	
1281 295	3区 2D-7b	3432遺 跡部	柱	0.97	内面：底面へクチ付ナメ。	黒	中や黒	内面と底面	底面外側に墨書き〔口〕、内面に墨書き〔口〕	
1282 295	3区 2D-7c	3432遺 跡部	柱	0.95	内面：底面へクチ付ナメ。	黒	良好	内面と底面	底面外側に墨書き〔口〕	

表44 土器観察表(31)

編號 番号	測定区 測定区	遺物 類別	種別 種別	△深(cm) 底深(cm)	特徴	地主 地主	構成 構成	色調 色調	備考
1281 296	3区 25.7c	第22層 H	須世器 H	— △0.8	内面：剥離未見？ 内面：ナメ	質 質	良好 良好	内／灰白色 内／褐色	底部外側に墨書き「」
1284 296	3区 25.7d	第22層 H	須世器 H	— △0.6	内面：ナメ 内面：ナメ	質 質	良好 良好	内前面とも灰褐色 内／褐色	底部外側に墨書き「」
1285 296	3区 25.7e	3433層 H	須世器 H	— △0.6	内面：ナメ 内面：ナメ	質 質	良好 良好	内／灰褐色 内／褐色	底部外側に墨書き「」
1286 296	3区 25.7f	3000層 H	須世器 H	— △0.5	内面暗とモナデ	質 質	良好 良好	内前面とも灰褐色	底部外側に墨書き「」
1297 296	3区 25.7g	3000層 H	須世器 H	— △0.5	内面：剥離未見？ 内面：ナメ	質 質	良好 良好	内前面とも灰褐色 内／褐色	底部外側に墨書き「」
1288 296	3区 25.7h	第21層下部 H	須世器 H	— △0.5	内面：ナメ	質 質	良好 良好	内／灰褐色 内／褐色	内面に墨書き「」
1289 296	3区 25.7i	4018層 H	須世器 H	— △0.6	内面：剥離未見？ 内面：ナメ	質 質	良好 良好	内／灰褐色 内／褐色	底部に墨書き「」
1290 296	3区 25.7j	3000層 H	須世器 H	— △1.8	内面暗とモナデ	質 質	良好 良好	内前面とも灰褐色 内／褐色	底部外側に墨書き「」
1291 296	3区 25.7k	3000層 H	須世器 H	— △1.6	内内面ナメ	質 質	中や暗 良好	内前面とも灰褐色 内／褐色	底部外側に墨書き「」
1292 296	3区 25.7l	2003層 H	須世器 H	— △4.0	内内面剥離ナメ	質 質	良好 良好	内内面とも灰褐色 内／褐色	内内面に墨書き「」/「」、文字

表45 土製品観察表(1)

編集番号	試験番号	調査地区	土壤分類	種別	法面(cm) (△: 稲作)	得取 (調査等)	出土	腐成	色調	備考
8	18	1区 2区	第2型	上耕	最高大根: 3.6 最高小根: 2.9	手づくね成形	黒	中中根、内外側とも灰白色	重量 21 g	
14	26	2区 2D-1区	第2型	上耕	最高大根: 3.5 最高小根: 0.9	手づくね成形	黒	良好、灰白色	重量 25 g	
994	223	4区 2D-1区	第3型	上耕	最高大根: 2.7 最高小根: △25.9	馬頭・植付式	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好・割合	
995	221	4区 2D-1区	第3型	上耕	最高大根: 2.7 最高小根: △26.7	馬頭・植付式	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好・割合	
996	221	3区 2区	第3型	上耕	最高大根: 2.6 最高小根: △9.9	馬頭・植付式	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好・割合	
997	221	4区 2D-1区	第3型	上耕	最高大根: 2.7 最高小根: △23.3	馬頭・植付式	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好・割合	
998	221	3区 2D-1区	第3型	上耕	最高大根: 2.6 最高小根: △10.8	馬頭・植付式	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好・割合	
999	221	4区 2D-1区	第3型	上耕	最高大根: 2.7 最高小根: △8.7	馬頭・植付式	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好	
1000	221	4区 2D-1区	第3型	上耕	最高大根: 2.7 最高小根: △8.7	馬頭・植付式	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好・割合	
1001	221	3区 2D-1区	第3型	上耕	最高大根: 2.6 最高小根: △12.6	馬頭・植付式	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好	
1002	221	3区 2D-1区	第3型	上耕	最高大根: 2.5 最高小根: △23.3	馬頭・植付式	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好	
1003	221	4区 2D-1区	第3型	上耕	最高大根: 2.5 最高小根: △16.1	馬頭・植付式	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好	
1004	221	4区 2D-1区	第3型	上耕	最高大根: 2.5 最高小根: △10.9	馬頭・植付式	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好	
1005	221	3区 2D-1区	第3型	上耕	最高大根: 1.9 最高小根: △1.3	手づくね成形	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好	
1006	221	4区 2D-1区	第3型	上耕	最高大根: 2.3 最高小根: △2.3	手づくね成形	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好	
1007	221	4区 2D-1区	第3型	上耕	最高大根: 2.6 最高小根: △23.3	手づくね成形	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好	
1008	221	3区 2D-1区	第3型	上耕	最高大根: 2.5 最高小根: △14.1	手づくね成形	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好	背面に孔有り
1009	221	4区 2D-1区	第3型	上耕	最高大根: 2.4 最高小根: △12.2	手づくね成形	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好	
1010	221	4区 2D-1区	第3型	上耕	最高大根: 2.5 最高小根: △1.5	手づくね成形	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好	
1011	221	4区 2D-1区	第3型	上耕	最高大根: 2.6 最高小根: △1.8	手づくね成形	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好	
1012	221	3区 2D-1区	第3型	上耕	最高大根: 2.5 最高小根: △13.3	手づくね成形	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好	
1013	221	3区 2D-1区	第3型	上耕	最高大根: 2.5 最高小根: △7.0	手づくね成形	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好	
1014	221	4区 2D-1区	第3型	上耕	最高大根: 2.1 最高小根: △1.1	手づくね成形	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好	
1015	221	4区 2D-1区	第3型	上耕	最高大根: 2.6 最高小根: △1.8	手づくね成形	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好	
1016	221	2D-1区	土耕	最高大根: △2.9 最高小根: △1.9	手づくね成形	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好		
1017	221	4区 2D-1区	上耕	最高大根: 3.1 最高小根: △2.2	手づくね成形	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好	重量 335 g	
1018	221	4区 2D-1区	上耕	最高大根: 3.1 最高小根: △2.6	手づくね成形	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好	重量 30 g	
1019	221	3区 2D-1区	上耕	最高大根: 3.6 最高小根: △3.9	手づくね成形	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好	重量 47 g	
1020	221	4区 2D-1区	上耕	最高大根: 4.6 最高小根: △1.1	手づくね成形	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好	重量 54 g	
1021	221	4区 2D-1区	上耕	最高大根: 2.5 最高小根: △1.3	手づくね成形	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好	重量 328 g	
1022	221	4区 2D-1区	上耕	最高大根: 3.2 最高小根: △2.0	手づくね成形	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好	重量 363 g	
1023	221	4区 2D-1区	上耕	最高大根: 2.4 最高小根: △1.3	手づくね成形	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好	重量 87 g	
1024	221	4区 2D-1区	上耕	最高大根: 2.4 最高小根: △2.2	手づくね成形	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好	重量 29 g	
1025	221	3区 2D-1区	第3型	上耕	最高大根: 3.1 最高小根: △2.2	手づくね成形	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	重量 276 g 底付	
1026	221	3区 2D-1区	第22型	耕翻率	最高大根: 4.7 最高小根: △1.7	工具によるナガカ 2面に分子状の剥離	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	重量 21 g	
1027	221	4区 2D-1区	第41型	土耕	最高大根: 3.0 最高小根: △1.4	手づくね成形	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好	△側面・底付有、当該部分のみ 剥離か、重量 36 g
1028	221	4区 2D-1区	第41型	土耕	最高大根: 4.2 最高小根: △1.8	手づくね成形	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	重量 298 g 地形	
1029	221	4区 2D-1区	第41型	土耕	最高大根: 1.8 最高小根: △1.7	手づくね成形	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好	重量 1 g
1030	221	3区 2D-1区	第22型	土耕	最高大根: 2.2 最高小根: 1.4	手づくね成形	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好	重量 4 g
1031	221	3区 2D-1区	第22型	土耕	最高大根: 2.4 最高小根: 1.4	手づくね成形	黒	△に高い濃褐色 内側・外側: 灰白色	良好	重量 9 g

表46 土製品観察表(2)

編號	県名	調査区	地名	種類	法度(cm) (△:残存)	特徴 (遺物等)	出土	現成	色調	備考
1032	25	3区 25-5c	原生貝塚1 3113 ピート 埋土	土師	最高長29cm 最高幅16cm	手づくね成形	實 良好	内斜面とも灰白色	最高4g	
1033	25	3区 25-7c	第4層	土師	最高長1.31 最高幅1.5 最高厚1.2	手づくね成形	實 良好	灰黃色	最高5g	
1034	25	3区 25-6c	第21層	土師	最高長1.3 最高幅1.3 最高厚1.0	手づくね成形	實 良好	黑色	最高5g	
1035	25	3区 25-6c	原生貝塚3 3113 ピート 埋土	土師	最高長31 最高幅14 最高厚14	手づくね成形	實 良好	内斜面とも灰黃色	最高5g	
1036	25	3区 25-5c	第24層	土師	最高長1.3 最高幅1.5 最高厚1.5	手づくね成形	實 良好	灰黃色	最高4g	
1037	25	3区 25-7c	3000層 埋土1号	土師	最高長29 最高幅16 最高厚16	手づくね成形	實 やや良	灰黃色	最高4g	
1038	25	3区 25-6d	第22層	土師	最高長1.32 最高幅1.7 最高厚1.6	手づくね成形	實 良好	灰白色	最高5g	
1039	25	3区 25-5c	3000層 埋土1号	土師	最高長33 最高幅18 最高厚18	手づくね成形	實 良好	灰黃色	最高10g	
1040	25	3区 25-6c	第5層	土師	最高長1.34 最高幅1.8 最高厚1.8	手づくね成形	實 良好	灰色	最高10g	
1041	25	3区 25-6c	3000層 埋土1号	土師	最高長41 最高幅15 最高厚15	手づくね成形	實 良好	灰白色	最高8g	
1042	25	3区 25-7c	3000層 埋土1号	土師	最高長43 最高幅1.5 最高厚1.5	手づくね成形	實 良好	灰白色	最高10g	
1043	25	3区 25-7c	3014層 埋土1号	土師	最高長50 最高幅20 最高厚20	丁寧なナデ	實 良好	灰白色	最高10g	
1044	25	3区 25-6c	第4層	土師	最高長1.31 最高幅1.8 最高厚1.1	手づくね成形	實 良好	灰黃色～黃褐色	最高3g	
1045	25	3区 25-6c	第22層	土師	最高長2.6 最高幅1.2 最高厚1.0	手づくね成形	實 良好	灰黃色	最高3g	
1046	25	3区 25-6c	第22層	土師	最高長3.2 最高幅0.9 最高厚0.9	手づくね成形	實 良好	灰色	最高2g	
1047	25	3区 25-6c	3164生貝	土師	最高長1.4 最高幅1.1	ナデ、手づくね成形	實 良好	灰白色	最高3g 出現	
1048	25	3区 25-6c	第22層 (埋土1号)	土師	最高長4.2 最高幅1.0 最高厚0.9	手づくね成形	實 良好	灰黃色	最高4g	
1049	25	3区 25-7c	3432層 埋土	土師	最高長36 最高幅11 最高厚11	氯化物のため調整不明	實 やや良	灰黃色	最高3g	
1050	25	3区 25-7c	第22層	土師	最高長4.4 最高幅1.1 最高厚1.1	手づくね成形	實 良好	灰黃色	最高4g	
1051	25	3区 25-6c	3006層 第22層	土師	最高長10 最高幅12 最高厚12	ナデ、手づくね成形	實 良好	灰白色	最高5g	
1052	25	3区 25-6d	第22層	土師	最高長4.3 最高幅1.5 最高厚1.3	手づくね成形	實 良好	黑色	最高7g	
1053	25	3区 25-6c	第5層	土師	最高長3.5 最高幅2.2 最高厚2.0	手づくね成形	實 良好	灰白色	最高10g	
1054	25	4区 25-6c	第2層	不明	最高長2.1 最高幅1.8 最高厚1.6	1.ナデ	實 良好	灰色	最高7g 出現	
1055	25	4区 25-6c	第4層以下	土師	最高長3.1 最高幅2.3 最高厚1.9	手づくね成形	實 良好	褐色	最高11g	
1056	25	4区 25-6c	第1層	土師	最高長3.8 最高幅2.8 最高厚2.4	手づくね成形後ナデ	實 良好	灰褐色～灰褐色	最高26.8g	
1057	25	3区 25-7c	3000層 埋土1号	土師?	最高長6.6 最高幅4.2 最高厚4.2	手づくね成形、物語灰	實 良好	灰褐色～灰白色	最高15g 編目11の可能性も	
1058	25	3区 25-7c	3000層 埋土1号	土師?	最高長7.6 最高幅6.0 最高厚6.0	手づくね成形、物語灰	實 良好	灰褐色	最高11g 編目11の可能性も	
1059	25	3区 25-5c	第24層	土師?	最高長7.1 最高幅2.9 最高厚2.9	手づくね成形	實 良好	灰白色	最高30g	
1121	28	4区 25-6c	4102層 埋土1号	土師?	最高長4.0 最高幅3.4 最高厚3.2	手づくね成形。外殻は粗熱、消融して白色白ガラス質部分	實 やや良	褐色 褐色	最高26.8g	
1122	28	3区 25-6c	3000層 埋土1号	土師?	最高長4.1 最高幅3.8 最高厚1.6	ナデ	實 良好	内・灰白色 内・灰白色	最高13g 出現	
1123	28	3区 25-6c	3000層 埋土1号	土師?	最高長5.7 最高幅4.8 最高厚2.9	ナデ	實 良好	内・灰白色 内・灰白色	最高14g 出現	
1125	28	3区 25-7c	3000層 埋土1号	土師?	最高長4.0 最高幅3.8 最高厚2.9	ナデ	實 良好	内・灰白色 内・灰白色	最高29g 出現	報告

第VI章 3区・4区の調査成果

表47 石器観察表(1)

編號 番号	県 県名	調査 地区	遺跡 地點	種別	法量 (cm) (△、残存)	重量 (g)	特徴 (調整等)	備考
S1 20	2区 2D-2a	第2層	磨製石斧	磨製石斧	10.4 12.2 10.8	25.32	斧面と毛彫形の研削が複数。自然面の凹凸が残る。	結晶片岩?
S2 36	2区 2D-2b	表土	大形砂利石斧	磨製石斧	5.2 4.0	49	基部に斜行刃が認められ、扇面として再利用か。	結晶片岩?
S3 231	3区 2D-6c	3095' 1/2 -> 地上	打製石器	磨製石斧	1.46 1.43 0.32	0.49		小型
S4 231	4区 2C-6	第4層	打製石器	磨製石斧	1.65 1.60 1.50	1.28		表面質感?
S5 231	3区 2D-7a	3000' 墓 地上1/2	石核	磨製石斧	2.6 2.5	297		花崗岩(風化鉱物)
S6 231	3区 2D-6c	第22層	刮削	磨製石斧	1.39 1.19	11.40		花崗岩
S7 231	4区 2D-8a	第3層	刮削	磨製石斧	2.6 1.63 1.3	13.87		花崗岩(風化鉱物)
S8 231	3区 2D-6c	3475' 沿路 地上	石核	磨製石斧	1.25 2.3	7.98		
S9 232	3区 2D-7d	2006' 墓 地上1/2	磨製石斧	磨製石斧	1.06 1.2 1.2	16		
S10 232	3区 2D-7b	2006' 墓 4.1' 埋	磨製石斧	磨製石斧	1.31 1.55 1.45	430	刃部欠損	
S11 232	4区 2C-7c	第1層	磨製石斧	磨製石斧	1.28 1.2 2.3	196		
S12 232	4区 2C-7c	第3層	磨製石斧	磨製石斧	4.9 5.1 4.2	71	刃部、背面(研磨)は鋭い。	
S13 232	4区 2D-6a	第42層	磨製石斧	磨製石斧	4.5 5.3 2.5	127	刃部、小型灰燼等	
S14 232	4区 2C-6	第42層	磨製石斧	磨製石斧	5.8 3.7 1.3	56.40	全体形は鋸形を呈す小器で、片面に縦に研められ るのが不明確である。	
S15 232	4区 2C-6	第45層	磨製石斧	磨製石斧	8.9 5.0 2.2	96	刃部、小型灰燼等	
S16 232	3区 2D-7c	2006' 墓 地上1/2	扁平片沿石斧	磨製石斧	1.24 1.9 1.3	250		
S17 233	3区 2D-7a	2003' 墓 地上1/2	鑿状石斧	磨製石斧	3.6 0.7 0.5	3		
S18 233	3区 2D-6a	第22層	刮削	磨製石斧	4.4 4.1 1.8	47		
S19 233	4区 2D-6b	第43層	石核	磨製石斧	5.5 6.5 2.8	47		
S20 233	4区 2C-7b	第22層	石核丁未成品	磨製石斧	11.4 6.2 1.1	123	成形尚未準乳	
S21 233	4区 2D-6a	W 4.4以下	敲打	磨製石斧	9.9 6.0 4.4	413	一部に研ぎ跡、刃物痕	
S22 233	3区 2D-6a	2000' 墓 地上1/2	敲打	磨製石斧	11.5 6.7 5.9	70	3面に斜行刃が認められる。	
S23 234	3区 2D-7c	3436' 沿路 地上	敲打?	磨製石斧	15.5 11.3 6.1	1440		
S24 234	4区 2D-7a	4008' 墓 地上	敲打	磨製石斧	8.9 8.7 7.5	812		
S25 234	4区 2D-6a	第3層	敲打	磨製石斧	8.1 8.3 4.7	440		
S26 234	4区 2C-7b	第3層	敲打	磨製石斧	10.8 9.9 2.0	210		
S27 234	3区 2D-6c	第22層	敲打	磨製石斧	9.1 8.6 5.7	550		
S28 235	4区 2D-7a	4010' 墓 地上1/2	敲打	磨製石斧	1.7 4.2 2.8	58		
S29 235	4区 2C-7c	4010' 墓 地上1/2	敲打	磨製石斧	8.3 1.7 1.6	26	上面に穿孔(矢頭)	
S30 235	4区 2C-7c	4010' 墓 地上	敲打	磨製石斧	5.6 10.4 5.3	232		

表48 石器観察表(2)

編號 番号	県区 番号	遺物 種別	種別	法量 (cm) (△: 岩片)	重量 (g)	特徴 (消費等)	備考
S31 235	4区 23-7a	4038 壓 土	砾石	最大長 106 最小長 54 最厚 27	222		
S32 235	4区 23-7	4039 壓 土	砾石	最大長 34 最小長 37 最厚 26	33		
S33 235	4区 23-7	4038 壓 土	砾石	最大長 28 最小長 25 最厚 53 最薄 62	96.95		
S34 235	4区 23-7	4038 壓 土	砾石	最大長 107 最小長 129 最厚 27	961	自然	S33・54 同一の石核か
S35 235	4区 23-7	4039 壓 土	砾石	最大長 77 最小長 77 最厚 29	363		
S36 235	4区 23-7	4038 壓 土	砾石	最大長 98 最小長 79 最厚 28	224		
S37 236	4区 23-7a	4038 壓 土	砾石	最大長 162 最小長 125 最厚 74	1105		
S38 236	4区 23-6a	4221 壓 土	砾石	最大長 109 最小長 114 最厚 33	434	骨物による擦条痕が多数残る	
S39 236	3区 23-7a	3-5610 リイ ン脚 第3-4層	砾石	最大長 204 最小長 78 最厚 55	1111		
S40 236	3区 23-7a	3003 壓 土	砾石	最大長 77 最小長 35 最厚 19	68		
S41 237	3区 23-6a	3003 壓 土上層	砾石	最大長 125 最小長 84	1382		
S42 237	2区 23-7a	2003 壓 土上層	砾石	最大長 124 最小長 80 最厚 52	868		
S43 237	3区 23-6c	3110 ピット 地土上層	砾石	最大長 143 最小長 49 最厚 49	356		
S44 237	3区 23-6c	3120 ピット 地土	砾石	最大長 47 最小長 44 最厚 32	91		
S45 238	3区 23-5d	第4層 (堅地土層)	砾石	最大長 97 最小長 66 最厚 48	284	3面の底面が認められ、万物面を残す	
S46 238	3区 23-5d	堅地土層	砾石	最大長 84 最小長 53 最厚 14	81.1		
S47 238	4区 23-6a	第4層以下	砾石	最大長 49 最小長 30 最厚 22	45		
S48 238	4区 23-7	第4層	砾石	最大長 80 最小長 49 最厚 35	159		
S49 238	4区 23-7a	4038 壓土同 第4層	砾石	最大長 68 最小長 39 最厚 28	96.78		
S50 238	4区 23-6d	第4.1層	砾石	最大長 47 最小長 24 最厚 11	22		
S51 238	4区 23-6d	第4.4層	砾石	最大長 110 最小長 74 最厚 51	369	二次的な被削により、柱状が形成・剥離	
S52 239	4区 23-6a	第3層	砾石	最大長 43 最小長 33 最厚 23	4268		
S53 239	4区 23-6c	第3層	砾石	最大長 62 最小長 7.6 最厚 32	266	自然・復行面	S34・54 同一の石核か
S54 239	4区 23-7b	第3層以下	砾石	最大長 101 最小長 68 最厚 41	429	自然	S34・53 同一の石核か
S55 239	4区 23-6a	第3層	砾石	最大長 71 最小長 37 最厚 38	873		
S56 239	4区 23-6c	第3層	砾石	最大長 56 最小長 33 最厚 32	86.52		
S57 239	4区 23-7	第3層	砾石	最大長 108 最小長 55 最厚 37	276		
S58 239	4区 23-7	第3層	砾石	最大長 60 最小長 71 最厚 23	222		
S59 240	3区 23-6c	第2.2層	砾石	最大長 113 最小長 117 最厚 30	1384		
S60 240	3区 23-6c	第2.2層	砾石	最大長 102 最小長 93 最厚 66	658		

第VI章 3区・4区の調査成果

表49 石器観察表(3)

編號 番号	県國 番号	調査 場所	種別	法量 (cm) (△、残存)	重量 (g)	特徴 (測定等)	備考
561 240	4区 2C-7b	第2層	砸石	縦大底: 6.9 横大底: 4.5 縦大厚: 0.9	29.27		
562 240	4区 2C-7c	第22層	砸石	縦大底: 11.2 横大底: 4.8 縦大厚: 4.2	277		
563 241	4区 2D-6c	4191 潜 土上	不明	縦大底: 11.8 横大底: 7.6 縦大厚: 5.0	79.86	砸石。刃物痕あり。砸石として使用か	
564 241	3区 2D-7b	第22層	他?	縦大底: 5.4 横大底: 2.9 縦大厚: 1.5	37.4	砸石の可能性あり	
565 241	4区 2D-6a	第42層	敲撃率	縦大底: 3.0 横大底: 3.6 縦大厚: 3.2	36.35	片側穿孔の邊で擦れが付いた未完成品か。一側面に 穿孔(削痕)があり砸石を転用したものか?	
566 241	4区 2C-7b	第3層	刮尖	縦大底: 2.0 横大底: 1.9 縦大厚: 1.0	5.45	古墳時代小形器の形態	碧玉
567 241	3区 2D-6e	第22層	碧玉	縦大底: 1.9 横大底: 0.55	0.77		緑色部分灰?
568 241	4区 2C-6	第3層	碧玉(或玉)	縦大底: 0.8 横大底: 0.5	0.25	断面形は舟舟状で縦長い舟をもつており、未研削	碧玉
569 241	4区 2C-6	第22層以下 (碧玉製作過程)	碧玉(或玉)	縦大底: 1.5 横大底: 1.75 縦大厚: 1.5	4.67	角柱状。鋸切済有	碧玉
570 241	4区 2C-6	第3層 (碧玉製作過程)	碧玉(或玉)	縦大底: 2.3 横大底: 2.0	13.30	角柱状。鋸切済有	碧玉

表50 木器観察表(1)

編號 番号	県國 番号	調査 場所	種別	法量 (cm) (△、残存)	特徴 (測定等)	物理 番号	木取引	備考
W1 30	2区 2D-7b	第32層	円形曲輪 底板?	縦大底: △10.9 横大底: △10.9 縦大厚: 0.9	内側に幾回削った痕跡がある。底辺長14.8 cm (底面)	(底面)	板目材	
W2 30	2区 2D-7b	第32層	板材	縦大底: 11.7 横大底: 11.0 縦大厚: 1.0	一度削根	(底面)	板目材	
W3 30	2区 2D-7b	第32層	舟型凹丁款	縦大底: 56.5 横大底: 39 縦大厚: 1.5	舟型凹丁款(丸足)の構造	3-4	縮木取引	
W4 36	2区 2D-8b	2012 潜 土上	木板?	縦大底: 16.4 横大底: 15.6 縦大厚: 1.0	縫孔2箇所。未貫通縫孔1箇所 万度い減りにより内湾	ナセキ	板目材	
W5 242	4区 2D-7i	第4層	漆鞘	縦大底: 26 横大底: 24	漆茅(手竿)の柄	(底面)	芯材材	
W6 242	3区 2D-7b	3433 潜 土上	漆舟	縦大底: 14.2 横大底: 15.6 縦大厚: 5.3	(底面)	縮木取引		
W7 242	3区 2D-8e	3000 潜 木製圓立筒	漆舟?	縦大底: 13.65 横大底: 21.6 縦大厚: 1.0	(底面)	縮木取引		
W8 242	4区 2D-4a	第4層	舟型凹丁款?	縦大底: △10.9 横大底: 32 縦大厚: 1.2	舟型凹丁款(丸足)	(底面)	縮木取引	
W9 242	3区 2D-7c	第4層	馬糞?	縦大底: △10.9 横大底: 4.5 縦大厚: 2.6	(底面)	縮木取引		
W10 242	4区 2C-7g	第3層	漆桶	縦大底: △5.53 横大底: 6.4 縦大厚: 1.8	(底面)	芯材材		
W11 243	4区 2C-9	4109 潜 土上	木漆	縦大底: 2.60 横大底: 4.9 縦大厚: 3.9	(底面)	芯材材		
W12 243	4区 2C-9	4109 潜 土上	木漆	縦大底: 1.63 横大底: 1.9 縦大厚: 0.9	ナラノハキ	芯材材		
W13 243	4区 2C-9	4109 土塗 土上	木漆	縦大底: 1.56 横大底: 5.6 縦大厚: 5.0	(底面)	芯材材		
W14 243	4区 2C-9	4109 土塗 土上	木漆	縦大底: 1.68 横大底: 5.5 縦大厚: 4.5	(底面)	芯材材		
W15 243	4区 2C-9	4109 土塗 土上	木漆	縦大底: 1.55 横大底: 5.2 縦大厚: 5.1	(底面)	芯材材		
W16 243	4区 2C-9	4109 土塗 土上	木漆	縦大底: 1.72 横大底: 5.0 縦大厚: 4.2	(底面)	芯材材		
W17 243	4区 2C-9	4109 土塗 土上	木漆	縦大底: △14.3 横大底: 6.0 縦大厚: 4.9	(底面)	芯材材		

表51 木器観察表(2)

編號番号	所属番号	調査者名	遺物組立	復元	法量(cm) (△:残存)	特徴 (測定等)	測定 筆(△:残存)	本組別	備考
W18 243	4区 2G.7	419清 組立	木綿	直木板:△10.8 直木板:△4.5 直木板:△3.5			コトラ指	志村村	
W19 243	4区 2G.7a	422清 組立	木綿	直木板:△15.9 直木板:△4.4 直木板:△3.5			セブワハ	志村村	
W20 243	4区 2G.6	419清 組立	木綿	直木板:△15.9 直木板:△3.5 直木板:△3.3			セブワハ	志村村	
W21 244	3区 2D.6e	3437虎頭 組立	漆	直木板:△6.1 直木板:△12.1 直木板:△12.7	直角ヤリギンザによる加工者が残る		サヨキ	志村村財	
W22 244	3区 2D.6e	3003漆 組立上段	アシト-リ	直木板:△10.0 直木板:△3.5			(計量側)	櫻木組	
W23 244	4区 2G.4	第4組	アシト-リ	直木板:△21.8 直木板:△8.3 直木板:△4.3			(計量側)	櫻木組	
W24 244	3区 2D.6e	3003漆 組立上層	寺吉氏	直木板:△22.8 直木板:△26 直木板:△19			(計量側)	櫻木組	
W25 244	3区 2D.7c	3006清 組立	梅田(総合)	直木板:△7.9 直木板:△3.1 直木板:△1.3	下端イモもしくは切削		(計量側)	板目材	X=56,170 ライン刻ち振り出土
W26 244	3区 2D.6e	3009漆 組立上段下層	利浦幸	直木板:△6.5 直木板:△4.8 直木板:△3.5			(計量側)	志村村	
W27 245	4区 2G.7a	第1組	竹子形木器	直木板:△2.1 直木板:△7.3 直木板:△1.5			スギ	板目材	
W28 245	4区 2G.4	第22組	竹子形木器	直木板:△3.8 直木板:△3.5 直木板:△0.5			(計量側)	板目材	
W29 245	3区 2D.6e	3002集成	竹子形木器	直木板:△3.9 直木板:△4.3 直木板:△0.5			(計量側)	板目材	
W30 245	4区 2G.7	4020清 組立	著	直木板:△0.7 直木板:△0.5			(計量側)	志村村	
W31 245	4区 2G.6	第22組	著	直木板:△10.7 直木板:△1.5 直木板:△0.5			(計量側)	志村村	
W32 245	4区 2G.6	第22組	著	直木板:△14.3 直木板:△0.9 直木板:△0.7			(計量側)	志村村	
W33 245	4区 2G.4	第2組上段	著	直木板:△6.8 直木板:△4.0 直木板:△0.6	上端ヨコ		(計量側)	志村村	
W34 245	4区 2G.4	第4組	野性	直木板:△4.0 直木板:△1.9 直木板:△0.5			ヒノキ	板目材	
W35 245	4区 2G.4	第4組	野性	直木板:△4.2 直木板:△1.9 直木板:△0.8			スギ	板目材	
W36 245	4区 2G.4	第4組	野性	直木板:△3.6 直木板:△1.6 直木板:△0.5			スギ	板目材	
W37 245	4区 2D.6b	第4組	野性	直木板:△4.5 直木板:△1.6 直木板:△0.4			(計量側)	板目材	
W38 246	4区 2G.7	419清 組立	利浦	直木板:△9.7 直木板:△1.6 直木板:△0.6			(計量側)	志村村	
W39 246	3区 2D.7c	2014漆 組立	望月?	直木板:△11.5 直木板:△1.2 直木板:△1.1			(計量側)	志村村	
W40 246	4区 2G.7	4019清 組立	下端	直木板:△2.9 直木板:△1.4 直木板:△2.4	通幽下端		スギ	板目材	
W41 246	4区 2D.6a	4019清 組立	下端	直木板:△26.0 直木板:△11.2 直木板:△1.0	通幽下端、使用(尼敷)嵌入残り		(計量側)	板目材	柱分かれ部分を使用
W42 246	4区 2G.4	第4組	下端	直木板:△26.5 直木板:△11.0 直木板:△4.2	通幽下端、直木板違状況?		(計量側)	板目材	
W43 246	3区 2D.7c	3006清 組立上段	下端	直木板:△20.7 直木板:△9.6 直木板:△3.9			(計量側)	板目材	
W44 247	3区 2D.7c	3006清 組立	梅?	直木板:△1 直木板:△1.9	機物の柄か(一部削化)		サヨキ	櫻木組	
W45 247	4区 2G.4	4020清 組立	著	直木板:△1 直木板:△1.9			サヨキ	櫻木組	
W46 247	3区 2D.7c	2014漆 組立	梅?	直木板:△1 直木板:△1.9	機物はやし菅行が機物か		サヨキ	櫻木組	
W47 247	3区 2D.7c	3006清 組立上段	著	直木板:△17.6 直木板:△1.4			サヨキ	櫻木組	
W48 247	3区 2D.7c	第4組	著	直木板:△16.0 直木板:△1.7	別物の組		サヨキ	櫻木組	
W49 247	4区 2G.7b	4009清 組立	漆器類	直木板:△25.6 直木板:△5.1	直木板に銀貼記号あり		(計量側)	櫻木組	

第VI章 3区・4区の調査成果

表52 木器観察表(3)

面数 番号	樹種 番号	遺物 組合	種別	法長(cm) (△: 開存)	当量 (適性等)	備考 歩引注目地	木取り	備考
W30 247	4区 4区	第24組	漆器類	1.0m : - 1.0m : △2.0		(古葉樹)	碳水取引	
W31 247	4区 2区	第1組	漆器類	1.0m : - 漆器 : △2.1		(古葉樹)	碳水取引	
W32 247	4区 2区	第1.0組	漆器類	1.0m : △11.7 漆器 : 4.2		(古葉樹)	碳水取引	
W33 248	3区 2区	3003漆 附土下層	不明 骨器類	漆大高 : 10.3 漆大幅 : 8.6 漆大厚 : 5.9		ナガリ	碳水取引	高井脚次
W34 248	4区 2区	第4.4組	骨器把手	漆大高 : 12.1 漆大幅 : 6.0 漆大厚 : 4.7		(古葉樹)	碳水取引	
W35 248	3区 2区	3003漆 附土下層	漆器類	漆大高 : △20.3 漆大幅 : △8.6 漆大厚 : 1.0		(古葉樹)	碳水取引	
W36 248	4区 2区	4192漆 附土	漆	漆大高 : 30.7 漆大幅 : 12.4 漆大厚 : 2.3		(古葉樹)	碳水取引	
W37 248	4区 2区	4036漆 附土	漆	漆大高 : 75.7 漆大幅 : 28.2 漆大厚 : 7.2	X		碳水取引	漆瓦面付近出土
W38 249	4区 2区	4038漆 附土下層	円形曲脚 漆	漆大高 : 15.2 漆大幅 : △7.7 漆大厚 : 6.6		(古葉樹)	板目材	
W39 249	3区 2区	3003漆 附土下層+1cm	円形曲脚 漆	漆大高 : △15.0 漆大幅 : △9.5 漆大厚 : 6.5		(古葉樹)	板目材	
W40 249	4区 2区	4038漆 附土	円形曲脚 漆	漆大高 : △6.6 漆大幅 : △6.0 漆大厚 : 0.7		(古葉樹)	板目材	
W41 249	4区 2区	4038漆 附土	円形曲脚 漆	漆大高 : 17.8 漆大幅 : 10.0 漆大厚 : 0.7		(古葉樹)	板目材	
W42 249	4区 2区	4038漆 附土下層	円形曲脚 漆	漆大高 : △38.2 漆大幅 : △27 漆大厚 : 0.9		(古葉樹)	板目材	
W43 249	4区 2区	4038漆 附土下層	円形曲脚 漆	漆大高 : △38.7 漆大幅 : △29 漆大厚 : 0.8		(古葉樹)	板目材	
W44 249	4区 2区	第4組	円形曲脚 漆?	漆大高 : △36.2 漆大幅 : △4.8 漆大厚 : 0.6		(古葉樹)	板目材	
W45 249	3区 2区	第4組	円形曲脚 漆	漆大高 : △37.8 漆大幅 : △6.3 漆大厚 : 0.4		(古葉樹)	板目材	
W46 249	3区 2区	3003漆 附土	円形曲脚 漆	漆大高 : 18.2 漆大幅 : 11.4 漆大厚 : 1.6		(古葉樹)	板目材	
W47 249	4区 2区	4038漆 附土	円形曲脚 漆?	漆大高 : 19.5 漆大幅 : △7.0 漆大厚 : 0.6		(古葉樹)	板目材	
W48 249	4区 2区	4038漆 附土	円形曲脚 漆?	漆大高 : 19.1 漆大幅 : △8.1 漆大厚 : 0.6	漆付生糸織あり	(古葉樹)	板目材	
W49 249	3区 2区	3003漆 附土	円形曲脚 漆	漆大高 : 18.0 漆大幅 : △9.8 漆大厚 : 0.6		(古葉樹)	逆板目材	
W50 249	3区 2区	3164土灰 附土	円形曲脚 漆	漆大高 : 19.1 漆大幅 : △8.6 漆大厚 : 0.6		(古葉樹)	逆板目材	
W51 249	3区 2区	3003漆 附土下層	円形曲脚 漆?	漆大高 : 17.8 漆大幅 : 10.0 漆大厚 : 0.5		(古葉樹)	板目材	
W52 249	3区 2区	第1組	円形曲脚 漆	漆大高 : △8.6 漆大幅 : △17.7 漆大厚 : 0.5		(古葉樹)	板目材	
W53 250	4区 2区	4038漆 附土下層	円形曲脚 漆?	漆大高 : 20.2 漆大幅 : 19.7 漆大厚 : 0.7		(古葉樹)	板目材	
W54 250	3区 2区	3003漆 附土下層	円形曲脚 漆	漆大高 : 19.0 漆大幅 : 19.0 漆大厚 : 0.5	X		逆板目材	
W55 250	3区 2区	3167漆+土 附土	円形曲脚 漆	漆大高 : △17.8 漆大幅 : △19.0 漆大厚 : 0.5		(古葉樹)	逆板目材	
W56 250	3区 2区	3003漆 附土下層	円形曲脚 漆?	漆大高 : △25.8 漆大幅 : △37 漆大厚 : 1.1	表面に刀物痕	(古葉樹)	板目材	
W57 250	4区 2区	4038漆 附土	円形曲脚 漆?	漆大高 : △42.9 漆大幅 : △30.3 漆大厚 : 1.0		(古葉樹)	板目材	大型竹筒板となる可能性有
W58 251	3区 2区	3003漆 附土下層	漆?	漆大高 : 30.1 漆大幅 : △31.8 漆大厚 : 0.9		(古葉樹)	板目材	
W59 251	3区 2区	3003漆 附土下層+1cm	円形曲脚 漆?	漆大高 : 16.4 漆大幅 : 16.4 漆大厚 : 0.4		(古葉樹)	逆板目材	
W60 251	4区 2区	4038漆 附土下層	円形曲脚 漆?	漆大高 : △22.0 漆大幅 : △6.4 漆大厚 : 1.0		(古葉樹)	逆板目材	

表53 木器観察表(4)

編號番号	所蔵番号	調査区	遺物種類	復元	法量(cm) (△:残存)	特徴 (調査等)	調査 年(△:日付)	木版年	備考
W81	254	4区 2D-7b	第4層	円形曲物 棍棒	最太周:△25.0 最太厚:△17.8 最太幅:△19.0	(調査例)	遺伝目付		
W82	251	4区 2D-7a	4028漆 樹皮	円形曲物 棍棒	最太周:△36.5 最太厚:△36.4 最太幅:△11.0	(調査例)	板目付		
W83	254	3区 2D-7b	3006漆 樹皮下層	円形曲物 棍棒	最太周:△3.3 最太厚:△1.5 最太幅:△1.3	△平	遺伝目付		
W84	252	4区 2D-4	4028漆 樹皮	長方形曲物 棍棒	最太周:△15.4 最太厚:△5.2 最太幅:△1.0	(調査例)	遺伝目付		
W85	252	3区 2D-7b	3006漆 樹皮	円形曲物 棍棒	最太周:△27.8 最太厚:△17.3 最太幅:△8.0	内部剥落	遺伝目付		
W86	252	4区 2D-7a	4028漆 樹皮下層	捲円形曲物 棍棒	最太周:△69.2 最太厚:△21.2 最太幅:△7.7	(調査例)	遺伝目付		
W87	252	3区 2D-5e	3005漆 樹皮上層	楕圓形 棍棒	最太周:△18.3 最太厚:△1.4	内部刃物痕跡有。剥落	△ノキ	遺伝目付	
W88	253	3区 2D-5c	3006漆 樹皮下層	漆棒	最太周:△8.3 最太厚:△0.7	(調査例)	遺伝目付		
W89	253	3区 2D-7d	3018漆 樹皮	漆棒	最太周:△12.4 最太厚:△4.2 最太幅:△1.0	(調査例)	板目付		
W90	253	4区 2C-4	4196漆 樹皮	漆棒	最太周:△12.6 最太厚:△6.2 最太幅:△0.8	(調査例)	板目付		
W91	253	3区 2D-5e	3005漆 樹皮下層	漆棒	最太周:△12.4 最太厚:△4.0 最太幅:△0.8	(調査例)	板目付	中央に孔。	
W92	253	3区 2D-7b	3006漆 樹皮下層	漆棒	最太周:△14.6 最太厚:△6.9 最太幅:△0.7	(調査例)	板目付		
W93	253	4区 2C-3	4028漆 樹皮	漆棒	最太周:△12.7 最太厚:△6.0 最太幅:△0.7	(調査例)	板目付		
W94	253	4区 2D-5	4028漆 樹皮	漆棒	最太周:△17.5 最太厚:△7.6 最太幅:△1.0	(調査例)	板目付		
W95	253	3区 2D-7c	3425漆 樹皮	漆棒	最太周:△17.8 最太厚:△8.4 最太幅:△0.8	端部削化	遺伝目付		
W96	253	3区 2D-4c	3425漆 樹皮	漆棒	最太周:△18.7 最太厚:△8.4 最太幅:△0.9	中央に孔。	(調査例)	板目付	
W97	254	4区 2D-6	草3層	漆串	最太周:△12.1 最太厚:△1.7 最太幅:△0.3	(調査例)	板目付		
W98	254	4区 2C-5	4028漆 樹皮	漆串	最太周:△12.2 最太厚:△1.4 最太幅:△0.3	(調査例)	板目付		
W99	254	4区 2C-7	4028漆 樹皮	漆串	最太周:△14.9 最太厚:△1.2 最太幅:△0.3	(調査例)	板目付		
W100	254	4区 2C-4	4144層	漆串	最太周:△9.4 最太厚:△1.9 最太幅:△0.3	(調査例)	板目付		
W101	254	4区 2C-5	4028漆 樹皮	漆串	最太周:△13.3 最太厚:△1.2 最太幅:△0.5	(調査例)	板目付		
W102	254	3区 2D-6e	3005漆 樹皮上層	漆串	最太周:△24.0 最太厚:△2.3 最太幅:△0.3	上端・左右削り	(調査例)	板目付	
W103	254	4区 2C-7b	4028漆 樹皮	漆串	最太周:△6.6 最太厚:△2.3 最太幅:△0.4	(調査例)	板目付		
W104	254	3区 2D-8e	3006漆 樹皮下層	漆串	最太周:△5.3 最太厚:△1.7 最太幅:△0.3	(調査例)	板目付		
W105	254	4区 2D-7a	草2層	漆串	最太周:△4.3 最太厚:△1.8 最太幅:△0.3	(調査例)	板目付		
W106	254	3区 2D-8e	3006漆 樹皮下層	漆串	最太周:△7.3 最太厚:△1.4 最太幅:△0.4	(調査例)	板目付		
W107	254	3区 2D-8e	3006漆 樹皮下層	漆串	最太周:△4.9 最太厚:△1.0 最太幅:△0.3	(調査例)	板目付		
W108	254	4区 2D-8a	草2層	漆串	最太周:△12.5 最太厚:△1.8 最太幅:△0.3	(調査例)	板目付		
W109	254	3区 2D-8e	3006漆 樹皮下層	漆串	最太周:△9.3 最太厚:△2.0 最太幅:△0.3	(調査例)	板目付	馬形集中地点	
W110	255	4区 2C-7	4028漆 樹皮	漆串	最太周:△9.1 最太厚:△1.7 最太幅:△0.5	(調査例)	板目付		

第VI章 3区・4区の調査成果

表54 木器観察表(5)

面数 番号	地区名	遺物ID	種別	法長(cm) (△:両面)	径値 (整型等)	備考	木取り	備考
W111 25F 4区 2C-71	4038 墓 附土7号	漆串	縦大貫△62 縦大貫△44 縦大厚△3		(計量値)		板目材	
W112 25S 2区 23A-6	2000 墓 附土7号	漆串	縦大貫△31 縦大貫△14 縦大厚△5		(計量値)		板目材	
W113 25S 4区 2C-71	4038 墓 附土	漆串	縦大貫△66 縦大貫△14 縦大厚△5		(計量値)		板目材	
W114 25S 4区 2C-6	第1号	漆串	縦大貫△63 縦大貫△15 縦大厚△5		(計量値)		板目材	
W115 25S 3区 2D-7e 3413.1号	漆串	縦大貫△76 縦大貫△11 縦大厚△2			(計量値)		板目材	
W116 25S 4区 2C-6	第4号相当	漆串	縦大貫△25 縦大厚△7		(計量値)		板目材	4192号に添当
W117 25S 2区 23A-6	2000 墓 附土上層	漆串	縦大貫△101 縦大貫△14 縦大厚△4		X		板目材	
W118 25S 3区 2D-6e	3003 墓 附土7号	漆串	縦大貫△14 縦大厚△2		(計量値)		板目材	
W119 25S 4区 2C-6	4192 墓 附土	漆串	縦大貫△203 縦大貫△20 縦大厚△3		(計量値)		板目材	
W120 25S 4区 2D-6e	第2号	漆串?	縦大貫△198 縦大貫△23 縦大厚△5		(計量値)		板目材	
W121 25S 3区 2D-6e	3003 墓 附土7号	漆串?	縦大貫△188 縦大貫△17 縦大厚△5		(計量値)		板目材	
W122 25S 4区 2C-6	第42号	漆串	縦大貫△308 縦大貫△25 縦大厚△5		(計量値)		板目材	
W123 25S 4区 2C-7	4038 墓 附土	漆串	縦大貫△222 縦大貫△13 縦大厚△3		(計量値)		板目材	
W124 25S 4区 2D-7a	4038 墓 附土7号	漆串	縦大貫△338 縦大貫△16 縦大厚△4		(計量値)		板目材	
W125 25S 4区 2C-7b	4038 墓 附土	漆串	縦大貫△420 縦大貫△12 縦大厚△7		(計量値)		板目材	
W126 25S 3区 2D-6e	3003 墓 附土7号	漆串?	縦大貫△95 縦大貫△14 縦大厚△4		(計量値)		板目材	
W127 25S 4区 2D-7a	第4号	漆串	縦大貫△112 縦大貫△16 縦大厚△6		(計量値)		板目材	
W128 25S 4区 2C-7	第4号	漆串	縦大貫△127 縦大貫△18 縦大厚△3		(計量値)		板目材	
W129 25S 4区 2C-6	第4号	漆串	縦大貫△72 縦大貫△16 縦大厚△3		(計量値)		板目材	
W130 25S 4区 2C-7	第4号	漆串	縦大貫△67 縦大貫△16 縦大厚△4		(計量値)		板目材	
W131 25S 4区 2C-6	第4号相当	漆串	縦大貫△79 縦大貫△14 縦大厚△4		(計量値)		板目材	4192号に添当
W132 25S 4区 2C-7	4038 墓 附土	漆串	縦大貫△84 縦大貫△21 縦大厚△4		(計量値)		板目材	
W133 25S 2区 2C-6	4192 墓 附土	漆串?	縦大貫△93 縦大貫△17 縦大厚△9	縦貫口刃物類	(計量値)		板目材	
W134 25S 3区 2D-7a	2000 墓 附土7号	漆串	縦大貫△92 縦大貫△14 縦大厚△5		(計量値)		板目材	
W135 25S 3区 2D-6e	3003 墓 附土7号	漆串	縦大貫△73 縦大貫△13 縦大厚△5		(計量値)		板目材	
W136 25S 3区 2D-6e	3003 墓 附土7号	漆串?	縦大貫△80 縦大貫△17 縦大厚△5		X		板目材	
W137 25S 2区 23A-6	2000 墓 附土7号	漆串	縦大貫△78 縦大貫△18 縦大厚△3		(計量値)		板目材	西形集中地點
W138 25S 3区 2D-7b	3006 墓 附土	漆串	縦大貫△104 縦大貫△19 縦大厚△2		(計量値)		板目材	
W139 25T 2区 2D-6e	3003 墓 附土7号	漆串	縦大貫△189 縦大貫△22 縦大厚△2		(計量値)		板目材	
W140 25T 4区 2D-6a	第4号	漆串	縦大貫△428 縦大貫△26 縦大厚△6		(計量値)		板目材	

表55 木器観察表(6)

編號番号	所属番号	調査者名	遺物組立	復元	法量(cm) (△:残存)	特徴 (調査等)	調査 年(?)	木目	備考
W141 257	3区 2D-8e	2008清 地上下層	漆車		縦大軸:△29.0 横大軸:△1.0 縦大軸:△1.0	(調査例)	板目材	馬鹿串地元	
W142 257	3区 2D-7a	2008清 地上	漆車?		縦大軸:△26.3 横大軸:△1.7 縦大軸:△0.8	(調査例)	板目材		
W143 257	4区 2D-7a	4228清 地上	漆器漆木製品		縦大軸:△25.8 横大軸:△1.9 縦大軸:△1.0	(調査例)	板目材		
W144 257	4区 2C-4a	第2漆桶	漆桶上口(袋形)		縦大軸:△10.1 横大軸:△1.9 縦大軸:△0.8	(調査例)	板目材		
W145 257	4区 2C-7	草之原	漆桶		縦大軸:△15.6 横大軸:△1.8 縦大軸:△0.3	(調査例)	板目材		
W146 257	4区 2C-4	第4桶	漆桶?		縦大軸:△23.7 横大軸:△1.8 縦大軸:△0.8	(調査例)	板目材		
W147 258	4区 2C-7	4028清 地上中層	八型		縦大軸:△20.9 横大軸:△2.4 縦大軸:△0.3	スギ	板目材		
W148 258	4区 2C-7	4028清 地上中層	人形		縦大軸:△14.0 横大軸:△2.0 縦大軸:△0.8	(調査例)	板目材		
W149 258	4区 2C-7	第4漆桶	人形		縦大軸:△8.8 横大軸:△1.9 縦大軸:△0.3	(調査例)	板目材		
W150 258	4区 2C-7	第4桶	人形		縦大軸:△25.5 横大軸:△2.9 縦大軸:△0.6	(調査例)	板目材		
W151 258	4区 2D-6b	第4漆桶?	人形		縦大軸:△16.9 横大軸:△2.0 縦大軸:△0.6	(調査例)	板目材		
W152 258	3区 2D-8e	2008清 地上下層	八型		縦大軸:△6.6 横大軸:△1.5 縦大軸:△0.3	(調査例)	板目材		
W153 258	3区 2D-7a	2008清 地上下層	人形		縦大軸:△21.1 横大軸:△2.1 縦大軸:△0.5	(調査例)	板目材		
W154 258	4区 2C-7b	4028清 地上	人形		縦大軸:△13.4 横大軸:△4.6 縦大軸:△0.7	(調査例)	板目材		
W155 258	4区 2C-7	4028清 地上	人形		縦大軸:△10.5 横大軸:△2.4 縦大軸:△0.4	丁道部コゼ	板目材		
W156 258	3区 2D-8e	2008清 地上下層	人形		縦大軸:△31.4 横大軸:△3.4 縦大軸:△0.3	(調査例)	板目材	豊前弓	
W157 259	3区 2D-8e	2008清 地上	八型		縦大軸:△38.2 横大軸:△6.0 縦大軸:△0.7	表面に墨書きで綿巾を被った人頭(豊前)、表面に墨書きなし。	スギ	板目材	
W158 259	3区 2D-8e	2008清 地上	人形		縦大軸:△41.2 横大軸:△5.4 縦大軸:△0.7	表面に墨書きで綿巾を被った人頭(豊前)、表面に墨書きなし。	スギ	板目材	
W159 260	4区 2C-7	4028清 地上	馬形		縦大軸:△12.9 横大軸:△2.4 縦大軸:△0.7	(調査例)	板目材		
W160 260	3区 2D-8e	2008清 地上下層	馬形		縦大軸:△15.4 横大軸:△4.7 縦大軸:△0.8	表面油・糊面ともケズリ調整、表面に墨書きあり(野の面積)	スギ	板目材	
W161 260	4区 2C-4	第4漆桶	馬形		縦大軸:△16.5 横大軸:△3.0 縦大軸:△0.8	(調査例)	板目材		
W162 260	3区 2D-8e	2008清 地上下層	馬形		縦大軸:△12.3 横大軸:△2.9 縦大軸:△0.7	(調査例)	板目材		
W163 260	3区 2D-8e	2008清 地上下層	馬形		縦大軸:△15.9 横大軸:△2.4 縦大軸:△0.6	スギ	板目材		
W164 260	3区 2D-8e	2008清 地上下層	馬形		縦大軸:△6.8 横大軸:△3.0 縦大軸:△0.7	スギ	板目材		
W165 260	4区 2C-4	第4桶	馬形		縦大軸:△6.7 横大軸:△2.5 縦大軸:△0.4	(調査例)	板目材		
W166 260	4区 2C-7	4198清 地上	馬形		縦大軸:△11.9 横大軸:△3.3 縦大軸:△0.6	(調査例)	板目材		
W167 260	3区 2D-8e	2008清 地上下層	馬形		縦大軸:△4.0 横大軸:△1.7 縦大軸:△0.3	馬形(馬頭)・瓶部分	(調査例)	板目材	W169と複合しないが同一個体か
W168 260	3区 2D-8e	2008清 地上下層	馬形		縦大軸:△2.2 横大軸:△2.4 縦大軸:△0.6	(調査例)	板目材		
W169 260	3区 2D-8e	2008清 地上下層	馬形		縦大軸:△4.1 横大軸:△1.8 縦大軸:△0.3	馬形瓶部分	(調査例)	板目材	W167と複合しないが同一個体か
W170 260	3区 2D-7a	2008清 地上下層	馬形		縦大軸:△7.7 横大軸:△3.2 縦大軸:△0.7	(調査例)	板目材		

第VI章 3区・4区の調査成果

表 56 木器観察表 (7)

面数 番号	種別 番号	遺物 組合	種別	法長 (cm) (△: 周径)	径値 (通型等)	備考 寸 (日付)	水取り	備考
W171 289	4区 2C-6	4192 漢 灰土	馬形	縦大高：△6.8 横大幅：△4.5 縦大厚：0.7	(封蓋側)	板目柄		
W172 280	2区 2D-6e	2006漢 灰土下層	馬形	縦大高：△6.4 横大幅：△17 縦大厚：0.5	(封蓋側)	板目柄		
W173 281	3区 2D-6e	2006漢 灰土下層	船形	縦大高：△5.9 横大幅：△2.5 縦大厚：0.7	(封蓋側)	板目柄	馬形？	
W174 281	2区 2D-6e	2006漢 灰土下層	船形	縦大高：△5.2 横大幅：△2.2 縦大厚：0.5	(封蓋側)	板目柄	馬形？	
W175 281	4区 2D-7b	4221 漢 灰土	船形	縦大高：△6.7 横大幅：△2.0 縦大厚：0.6	(封蓋側)	板目柄	馬形？	
W176 281	4区 2D-7b	4221 漢 灰土	船形	縦大高：△11.7 横大幅：△2.5 縦大厚：0.7	(封蓋側)	板目柄		
W177 281	4区 2D-7b	4038 漢 灰土	船形	縦大高：△7.6 横大幅：△2.3 縦大厚：0.4	(封蓋側)	板目柄		
W178 281	3区 2D-6e	2006漢 灰土下層	船形	縦大高：△5.1 横大幅：△2.7 縦大厚：0.4	(封蓋側)	板目柄		
W179 281	2区 2D-6e	2006漢 灰土下層	船形	縦大高：△5.0 横大幅：△1.9 縦大厚：0.5	(封蓋側)	板目柄		
W180 281	3区 2D-6e	2006漢 灰土下層	船形	縦大高：△8.3 横大幅：△1.4 縦大厚：0.4	(封蓋側)	板目柄		
W181 281	3区 2D-6e	2006漢 灰土下層	船形	縦大高：△9.3 横大幅：△1.9 縦大厚：0.6	(封蓋側)	板目柄		
W182 281	4区 2C-7	4194 漢 灰土	船形?	縦面直彎形狀		(封蓋側)	板目柄	
W183 281	4区 2C-7	4038 漢 灰土	刀子形?	縦面直彎形狀		(封蓋側)	板目柄	
W184 281	4区 2C-7	4038 漢 灰土	鳥形?	縦大高：△11.6 横大幅：△2.0 縦大厚：0.7	(封蓋側)	板目柄		
W185 281	4区 2C-7	第3組	鳥形?	縦大高：△20.2 横大幅：△1.5 縦大厚：0.5	(封蓋側)	板目柄		
W186 282	4区 2C-7	4038 漢 灰土	舟形	縦大高：△2.0 横大幅：△1.5 縦大厚：0.4	(X)	縦木取り		
W187 282	2区 2D-6e	第23組?	船形?	縦大高：△0.7 横大幅：△1.1 縦大厚：0.2	(封蓋側)	板目柄	人形?	
W188 282	3区 2D-6e	3003 漱 灰土下層	船形?	縦大高：△0.4 横大幅：△0.5 縦大厚：0.16	(封蓋側)	縦木取り	舟形?	
W189 282	3区 2D-6e	2006漢 灰土下層	船形?	縦大高：△1.0 横大幅：△1.5 縦大厚：0.12	(封蓋側)	縦木取り	舟形?	
W190 283	4区 2C-6	4191 漱 灰土	火燭印?	縦大高：△2.7 横大幅：△4.7 縦大厚：△2.6	火燭印12箇所	(封蓋側)	縦木取り	
W191 283	4区 2C-6	第44組	火燭印?	縦大高：△4.0 横大幅：△4.0 縦大厚：△2.3	火燭印8箇所	(封蓋側)	縦木取り	
W192 283	4区 2C-6	4192 漱 灰土	火燭印?	縦大高：△3.0 横大幅：△1.6 縦大厚：△1.5	(封蓋側)	縦木取り		
W193 283	4区 2C-6	第44組	火燭印?	縦大高：△2.54 横大幅：△4.7 縦大厚：△1.5	火燭印10箇所	(X)	板目柄	
W194 283	3区 2D-7e	2003 漱 灰土下層	火燭印?	縦大高：△4.0 横大幅：△4.0 縦大厚：△2.3	火燭印10箇所のうち、未使用4箇所	(封蓋側)	縦木取り	
W195 283	3区 2D-6e	3003 漱 灰土下層	火燭印?	縦大高：△2.8 横大幅：△3.5 縦大厚：△1.7	火燭印12箇所のうち、1つは未使用	(封蓋側)	縦木取り	
W196 284	4区 2C-6	第44組	舟形?	縦大高：△7.8 横大幅：△2.3 縦大厚：△5.5	(X)	縦木取り		
W197 284	2区 2D-6e	2003 漱 灰土下層-1組	舟形?	縦大高：△10.3 横大幅：△11.3 縦大厚：△3.6	(X)	板目柄		
W198 284	3区 2D-6e	2006漢 灰土下層	つけ舟	縦大高：△1.2 横大幅：△1.7 縦大厚：△0.8	舟形?△	(封蓋側)	縦木取り	
W199 285	3区 2D-6e	第22組	支脚?	縦大高：△2.3 横大幅：△4.8 縦大厚：△2.5	支えの舟本を入れる例あり	(X)	板目柄	
W200 285	3区 2D-6e	第22組	支脚?	縦大高：△2.6 横大幅：△4.8 縦大厚：△2.9	(封蓋側)	板目柄		

表57 木器調査表(8)

編號番号	所名	調査区域	遺物	復元	法量(cm) (△:残存)	特徴 (調査等)	調査 年(日付)	本題	備考
W201	261	3区 2D-7e	W 22 番	実物	最 大 長: 25.7 最 小 長: 24.5 最 大 幅: 2.6 最 小 幅: 2.2	(調査例)	板目村		
W202	265	3区 2D-7e	W 22 番	実物	最 大 長: 16.5 最 小 長: 12.9 最 大 幅: 2.2 最 小 幅: 1.7	(調査例)	板目村		
W203	266	4区 2C-6	410E 清 地上	実	最 大 長: 41.0 最 小 長: 30.0 最 大 幅: 1.7	(調査例)	板目村		
W204	265	4区 2C-6	W 44 番	板	最 大 長: 15.7 最 小 長: 14.5 最 大 幅: 4.6 最 小 幅: 3.7	(調査例)	板目村		
W205	265	4区 2C-6	W 44 番	板	最 大 長: 16.2 最 小 長: 15.8 最 大 幅: 6.8 最 小 幅: 5.0	(スギ)	板目村		
W206	261	3区 2D-7e	343D 清 地上	板?	最 大 長: △21.2 最 小 長: 18.4 最 大 幅: 2.3	(調査例)	板目村		
W207	265	4区 2D-7e	410E 清 地上	板	最 大 長: 13.8 最 小 長: 9.9 最 大 幅: 3.6 最 小 幅: 1.6	(調査例)	道根木材		
W208	260	3区 2D-5e	300E 清 地上下層	樹材	最 大 長: 45.0 最 小 長: 28.0 最 大 幅: 2.3	(調査例)	板目村		
W209	266	3区 2D-7e	300E 清 地上	樹材?	最 大 長: 10.0 最 小 長: 2.5 最 大 幅: 1.1	(調査例)	板目村		
W210	266	4区 2C-6	410E 清 地上	樹材	最 大 長: 20.0 最 小 長: 25 最 大 幅: 2.2 最 小 幅: 1.7	(調査例)	板目村		
W211	266	3区 2D-6e	300E 清 地上下層	樹材	最 大 長: 45.8 最 小 長: 30.0 最 大 幅: 1.8	(調査例)	志村村		
W212	266	4区 2C-6	草 帽	樹材	最 大 長: 45.8 最 小 長: 1.3 最 大 幅: 1.1	(調査例)	志村村	火葬骨の可能性	
W213	266	3区 2D-7e	300E 清 地上	樹材	最 大 長: 35.8 最 小 長: 2.1 最 大 幅: 0.7	(調査例)	志村村		
W214	266	4区 2D-7e	410E 清 地上下層	樹材	最 大 長: 25.0 最 小 長: 1.6 最 大 幅: 1.7	先端にかけてハサウエー型に厚みを減じる	(調査例)	板目村	
W215	266	4区 2C-6	410E 清 地上	樹材	最 大 長: 25.0 最 小 長: 1.6 最 大 幅: 1.3	(調査例)	志村村		
W216	266	3区 2D-5e	300E 清 地上下層	樹材	最 大 長: 50.4 最 小 長: 2.7 最 大 幅: 2.9	(調査例)	志村村		
W217	266	3区 2D-6d	343D 清 地上	樹材?	最 大 長: 68.4 最 小 長: 6.1 最 大 幅: 3.5	(調査例)	志村村		
W218	266	4区 2C-6	410E 清 地上	建築材料?	最 大 長: 10.0 最 小 長: 7.6 最 大 幅: 3.0	(調査例)	板目村		
W219	267	3区 2D-6e	W 22 番	樹材	最 大 長: △38.8 最 小 長: △7.3 最 大 幅: 2.7	(調査例)	板目村	導虫駆除	
W220	267	4区 2C-7	410E 清 地上	樹材	最 大 長: △34.3 最 小 長: △11.9 最 大 幅: 0.8	(調査例)	板目村		
W221	267	3区 2D-6e	300E 清 地上下層	樹材	最 大 長: 70.2 最 小 長: 1.6 最 大 幅: 1.7	(調査例)	板目村		
W222	267	4区 2C-7	410E 清 地上	樹材	最 大 長: 25.5 最 小 長: 12.7 最 大 幅: 1.2	(調査例)	板目村		
W223	267	4区 2C-7	410E 清 地上	樹材	最 大 長: 28.8 最 小 長: 14.3 最 大 幅: 2.7	(調査例)	板目村		
W224	267	3区 2D-6d	343D 清 地上	樹材	最 大 長: 67.3 最 小 長: 26.4 最 大 幅: 2.7	表面セリギンナによる加工跡跡	(調査例)	板目村	漆板?
W225	268	3区 2D-5d	3147 ピット	柱	最 大 長: 26.0 最 小 長: 31.4 最 大 幅: 2.6	(スギ)	志村村	年輪年代測定試料No.14872-10~12	
W226	268	3区 2D-5d	3148 ピット	柱	最 大 長: 92.3 最 小 長: 49 最 大 幅: 16.5	(調査例)	志村村	年輪年代測定試料No.14872-4~6	
W227	269	3区 2D-6e	3149 ピット	柱	最 大 長: 80.1 最 小 長: 26.5 最 大 幅: 2.6	(スギ)	志村村	年輪年代測定試料No.14872-1~3	
W228	269	3区 2D-6d	3151 ピット	柱	最 大 長: 22.7 最 小 長: 21.7	(スギ)	志村村	年輪年代測定試料No.14872-1~9	
W229	269	3区 2D-6d	3157 ピット	柱	最 大 長: 16.3 最 小 長: 12.5	(スギ)	志村村	年輪年代測定試料No.14872-1~3	
W230	270	4区 2D-6a	4206 ピット	柱	最 大 長: 32.6 最 小 長: 15.1 最 大 幅: 15.0	洞孔 2 例	(調査例)	志村村	

第VI章 3区・4区の調査成果

表58 木器観察表(9)

面数 番号	種類 番号	調査 場所	種別	法量 (cm) (△: 幅)	寸法 (調整等)	備考	備考
W21	2P	3区 2D-7a	3327 ピット 樹木	柱 幅大高: 65.1 幅大厚: 12.5		(計量用)	芯材用
W22	2P	4区 2D-7a	建築部材	柱 幅大高: 79.6 幅大厚: 12.7		(計量用)	造板目材
W23	2P	3区 2D-7a	3420 ピット 樹木	梁 幅大高: 14.8 幅大厚: 4.6		(計量用)	造板目材 軸用材
W24	2P	3区 2D-7c	第 22 番	柱 幅大高: 127.2 幅大厚: 14.0 幅大厚: 1.7		丸#	板目材
W25	2P	4区 2C-7	第 4 番	建築部材	柱 幅大高: 17.5 幅大厚: 7.6	組立し、?を再加工か	(計量用) 板目材
W26	2P	4区 2C-7	4038 樹 樹木	建築部材	柱 幅大高: △62.2 幅大厚: 1.6 幅大厚: 6.8		(計量用) 板目材
W27	2P	3区 2D-6a	3000 構 樹上工場	建築材または 構造材	柱 幅大高: 13.3 幅大厚: 12.6 幅大厚: 4.3	大小の工具(?) 裁断が認められる	(計量用) 板目材
W28	2P	3区 2D-7c	3438 樹 樹木	建築部材	柱 幅大高: 117 幅大厚: 6.2		丸# 板目材
W29	2P	4区 2C-6b	第 3 番子番	建築部材	柱 幅大高: △23.0 幅大厚: 14.4 幅大厚: 1.9		丸# 板目材
W30	2P	4区 2D-7a	4038 樹 樹上工場	建築部材	柱 幅大高: 32.9 幅大厚: 11.0 幅大厚: 3.6		(計量用) 板目材
W31	2P	4区 2C-6	第 4 番	建築部材	柱 幅大高: △96.4 幅大厚: 13.0 幅大厚: 8.1		(計量用) 板目材
W32	2P	4区 2C-7a	第 3 番子番	建築部材	柱 幅大高: 19.8 幅大厚: 11 幅大厚: 1.9	組立用または各部具合 ?	(計量用) 板目材
W33	2P	2C-6	第 3 番	不明 樹木?	柱 幅大高: △8.7 幅大厚: 0.3		(計量用) 板目材
W34	2P	3区 2D-6a	3000 構 樹上工場	不明 屋根?	柱 幅大高: △8.7 幅大厚: 0.6 幅大厚: 0.4		(計量用) 板目材
W35	2P	4区 2C-6	第 4 番子番?	不明 樹木?	柱 幅大高: 12.5 幅大厚: 1.2 幅大厚: 0.3		(計量用) 板目材
W36	2P	4区 2C-7	第 4 番	不明 樹木?	柱 幅大高: △30 幅大厚: 1.1 幅大厚: 0.3		(計量用) 板目材
W37	2P	3区 2D-6a	4221 構 樹木	不明 屋根?	柱 幅大高: 7.9 幅大厚: 1.6 幅大厚: 0.5		(計量用) 板目材
W38	2P	4区 2C-6	第 4 番相当?	不明 樹木?	柱 幅大高: 12.2 幅大厚: 3.2 幅大厚: 0.5		(計量用) 板目材 4022 構に当たる
W39	2P	4区 2C-7	第 4 番	不明 樹木?	柱 幅大高: △8.6 幅大厚: 2.9 幅大厚: 0.6	切先のある板	(計量用) 板目材
W40	2P	3区 2D-6a	3000 構 樹上工場	不明 樹木?	柱 幅大高: △14.5 幅大厚: 2.7 幅大厚: 0.3		(計量用) 板目材 地盤用製品?
W41	2P	4区 2C-6	4040 ピット 樹木	不明 樹木?	柱 幅大高: 5.4 幅大厚: 1.4 幅大厚: 0.5		(計量用) 芯材用
W42	2P	4区 2C-6	第 4 番	不明 樹木?	柱 幅大高: △8.6 幅大厚: 1.7 幅大厚: 0.7		(計量用) 芯材用
W43	2P	4区 2C-6	第 4 番	不明 樹木?	柱 幅大高: △24 幅大厚: 1.2 幅大厚: 1.1		(計量用) 芯材用
W44	2P	3区 2D-6a	3000 構 樹上工場	不明 樹木?	柱 幅大高: △27.0 幅大厚: 1.6 幅大厚: 1.7		(計量用) 芯材用
W45	2P	3区 2D-6a	3000 構 樹上工場	不明 樹木製品	柱 幅大高: △8.6 幅大厚: 1.8 幅大厚: 1.1		(計量用) 芯材用
W46	2P	3区 2D-6a	3000 構 樹上工場	不明 樹木製品	柱 幅大高: △43.6 幅大厚: 1.5 幅大厚: 0.9		(計量用) 芯材用
W47	2P	3区 2D-6a	3000 構 樹上工場	不明 樹木製品	柱 幅大高: △55.5 幅大厚: 1.3 幅大厚: 0.8		(計量用) 芯材用
W48	2P	3区 2D-7c	3014 構 樹木	不明 樹木製品	柱 幅大高: 16.0 幅大厚: 1.3		(計量用) 芯材用
W49	2P	3区 2D-7c	3003 構 樹上工場	不明 樹木製品	柱 幅大高: 24.8 幅大厚: 1.7 幅大厚: 1.0		(計量用) 芯材用
W50	2P	3区 2D-7c	第 3 番	不明 樹?	柱 幅大高: 16.4 幅大厚: 2.8 幅大厚: 2.8	建築部材(芯木) の軸用材	(計量用) 芯材用

表59 木器観察表(10)

編號番号	探査番号	調査地区	遺物	復元	法量(cm) (△: 種存)	特徴 (調査等)	測定 単位(目視)	本瓶	備考
W261 274	4区 2C.4	4108 漢 粘土	不明	縦大底: 12.0 横大底: 10.0 縦大身: 10.0 横大身: 9.0	表面風化	(調査例)	芯木付		
W262 274	4区 2D.4	0144 瓶	不明	縦大底: 11.2 横大底: 9.4 縦大身: 10.0 横大身: 9.3	肩に二点状の窪を2条有す	(調査例?)	芯木付		
W263 274	3区 2D.4b	第4組	不明	縦大底: 11.8 横大底: 10.0 縦大身: 11.8 横大身: 10.5		マフ属	芯木付		
W264 274	3区 2D.7e	3000 漢 粘土上層	不明	縦大底: △21.0 横大底: 31.0 縦大身: 14.0 横大身: 35.0		(調査例)	板目付		
W265 274	4区 2C.4	第3組相当層	不明	縦大底: 28.4 横大底: 33.0 縦大身: 21.0		(調査例)	板目付		
W266 274	3区 2D.7e	第3組	不明	縦大底: 37.0 横大底: 37.0 縦大身: 1.0		(調査例)	板目付		
W267 274	4区 2C.7	4108 漢 粘土	不明	縦大底: 10.8 横大底: 7.3 縦大身: 6.7		(調査例)	芯木付		
W268 274	3区 2D.7d	3008 漢 粘土	不明	縦大底: 12.2 横大底: 30.0 縦大身: 0.8	上下端平滑削り、左右斜削削り	(調査例)	板目付		
W269 274	3区 2D.6e	3002 青石 第2層	不明	縦大底: 16.0 横大底: 40.0	上面、左右両面削り	(調査例)	追査目付	種類未定たは水瓶状木製品	
W270 274	4区 2D.4a	4212 (?) 粘土	不明	縦大底: 10.4 横大底: 13.5 縦大身: 6.2		(調査例)	板目付		
W271 274	3区 2D.8	3008 漢 粘土下層	不明	縦大底: △25.0 横大底: 42.0 縦大身: 6.5	表面削り調整	(調査例)	板目付		
W272 274	3区 2D.7e	3003 漢 粘土上層	不明	縦大底: △11.9 横大底: 5.0 縦大身: 1.0		(調査例)	板目付		
W273 274	3区 2D.8c	3008 漢 粘土下層	不明	縦大底: 10.7 横大底: 30.0 縦大身: 0.7		(調査例)	板目付		
W274 274	4区 2D.7	4108 漱 粘土	不明 時代?	縦大底: 16.2 横大底: 47.0 縦大身: 1.0		(調査例)	板目付		
W275 275	3区 2D.8c	3003 漱 粘土下層	樽?	縦大底: △30.0 横大底: △7.2 縦大身: 4.5		(調査例)	板目付		
W276 275	3区 2D.4b	3005 青石 第2層	不明	縦大底: △36.0 横大底: 42.0 縦大身: 22.0		(調査例)	板目付		
W277 275	3区 2D.6e	3008 漱 粘土上層 経(?) 飲呑舟	不明	縦大底: △38.9 横大底: 32.0 縦大身: 1.7		(調査例)	板目付		
W278 275	3区 2D.7e	3003 漱 粘土下層	不明	縦大底: 32.0 横大底: 1.3		(調査例)	板目付		
W279 275	4区 2D.7	4108 漱 粘土	把手?	縦大底: 12.9 横大底: △19.2 縦大身: 1.0		(調査例)	板目付		
W280 275	4区 2C.8	第2組	不明	縦大底: 20.0 横大底: 49.0 縦大身: 0.9	表面削り調整	(調査例)	板目付		
W281 275	3区 2D.8c	3008 漱 粘土下層	不明	縦大底: 14.5 横大底: 44.0 縦大身: 1.8	自社?	(調査例)	追査目付		
W282 275	4区 2D.4b	4044 上灰 第3層	不明	縦大底: 25.2 横大底: 42.0 縦大身: 1.1		(調査例?)	板目付		
W283 275	4区 2C.7	第4組	不明	縦大底: 28.9 横大底: 5.5 縦大身: 2.3		(調査例?)	板目付		
W284 276	4区 2D.7b	第3層	不明	縦大底: 30.6 横大底: 60.0 縦大身: 1.8	側穴状の長方形の孔3ヵ所、内部削り具合	(調査例)	芯木付		
W285 276	3区 2D.4b	第3層	不明	縦大底: △26.1 横大底: △39.8 縦大身: 2.5	一部風化	(調査例)	追査目付	W286と同一品? (複合せず)	
W286 276	3区 2D.4b	第3層	不明	縦大底: △26.4 横大底: 40.0 縦大身: 2.2	一部風化	(調査例)	追査目付	W285と同一品? (複合せず)	
W287 276	4区 2D.7a	4212 漱 粘土	不明	縦大底: △21.1 横大底: 56.0 縦大身: 4.0	一道切削か	(調査例)	板目付		
W288 277	4区 2C.7b	4108 漱 粘土	木製漆木製品	縦大底: 21.0 横大底: 65.0	表面削り平滑、上端・左右削り調整、下端削り	(調査例)	板目付	漆痕なし	
W289 277	4区 2D.7a	4108 漱 粘土	木製漆木製品	縦大底: 24.0 横大底: 68.0	上端・左右削り、下端削り	(調査例)	板目付	漆痕なし	
W290 277	4区 2C.7	4108 漱 粘土	木製漆木製品	縦大底: 21.0 横大底: 64.0	表面削り調整により平滑、表面は木製塗装 上端削り、左右削り、下端削り	(調査例)	板目付	漆痕なし	

第VI章 3区・4区の調査成果

表60 木器観察表(11)

編號 番号	調査 区域 場所	遺構 組合	種別	法量 (cm) (△: 側面)	目録 (適切等)	備考 寸法 (目地)	木取り	備考
W291 277 4区 2C-Tg	第22号	陶瓦木板灰木製物	縦大板: △138 縦大厚: 07	上端: 左右削り、右端: 下端削れ	(計量無)	板目材	表面なし	
W292 278 2区 2D-Tg	2006調 理工上丁層	かご	縦大板: △348 縦大厚: 052		マタタビ			
W293 282 4区 2D-66	4228ビト 理工上-下層	木箱	縦大板: △187 縦大厚: 05	上端: 左右両面削り、下端削れ	丸#	板目材	019型式	
W294 282 4区 2C-Tg	4038調 理工上	木箱	縦大板: △52 縦大厚: 03	上端削れ、左右両面削り	(丸#)	板目材	019型式	
W295 282 4区 2C-Tg	4038調 理工上	木箱	縦大板: △260 縦大厚: 05	上端削れ、下端削り、左右両面削り	(ヒノキ料)	板目材	065型式	
W297 283 3区 2D-Tg	3450ビト 理工上丁層	木箱	縦大板: 309 縦大厚: 05	上端削り、左端削れ、右端二次削り	(スギ)	板目材	芯材木端・081型式	
W298 284 3区 2D-86	2006調 理工上丁層	木箱	縦大板: 312 縦大厚: 05	上端削れ、左右削れ、右端二次削り	(スギ)	板目材	芯材木端・081型式	
W299 284 3区 2D-86	3006調 理工上丁層	木箱	縦大板: △52 縦大厚: 03	上端二次削り、下端削れまたは切欠、右端両面削り	(計量無)	板目材	芯材木端・081型式	
W300 284 3区 2D-86	3006調 理工上	木箱	縦大板: △73 縦大厚: 04	上端削れ、下端削り、左右両面削り、W301上端 付材	(スギ)	板目材	芯材木端・019型式	
W301 284 3区 2D-86	3006調 理工上	木箱	縦大板: △108 縦大厚: 05	上端削れ、下端切欠か、左右両面削り、W300上 端一括	(スギ)	板目材	芯材木端・019型式	
W302 285 3区 2D-76	2002調 理工上丁層	木箱	縦大板: △150 縦大厚: 06	上端削り、下端二次の削り、左右両面削り	(ヒノキ料)	板目材	芯材木端・011型式	
W303 285 3区 2D-86	3006調 理工上	木箱	縦大板: △67 縦大厚: 03	上端削り、下端削れ、左右両面削り	(ヒノキ料)	板目材	芯材木端・081型式	
W304 285 3区 2D-86	3005調 理工上丁層	木箱	縦大板: △136 縦大厚: 05	上端削れ、左右両面削り	ヒノキ	板目材	芯材木端・081型式	
W305 286 3区 2D-86	3006調 理工上丁層	木箱	縦大板: △150 縦大厚: 06	上端削り、左右両面削り	(スギ)	板目材	芯材木端・011型式、取上(F)「3006後路」 はれりのため修正	
W306 286 3区 2D-86	3003調 理工上丁層	木箱	縦大板: △87 縦大厚: 05	上端削れ、下端削り、左右両面削り	(スギ)	板目材	芯材木端・081型式	
W307 286 3区 2D-86	3006調 理工上	木箱	縦大板: △75 縦大厚: 04	上端削れ、下端・左端削り (下端二次削りの削りか, 右端削り)	(計量無)	板目材	不明・081型式	
W308 286 3区 2D-86	3003調 理工上丁層	木箱	縦大板: 329 縦大厚: 05	上下両面削れ、左右両面削れ	(スギ)	板目材	性質不明・081型式	
W309 286 3区 2D-76	第22号	木箱	縦大板: △88 縦大厚: 05	上端削り、下端削れ、左右両面削り	(スギ?)	板目材	019型式	
W310 286 4区 2C-Tg	第22号	木箱	縦大板: △63 縦大厚: 02	上端削り、下端削れ、左右両面削れ	(スギ?)	板目材	081型式	
W311 286 4区 2C-Tg	第24号	木箱	縦大板: △58 縦大厚: 05	上端削り、下端削れ、左右両面削り	(スギ?)	板目材	081型式	

測定のうち、W294～W302・W305・W311は大型鉛錠側による觀察

表61 金属器観察表(1)

編號 番号	調査 区域 場所	遺構 組合	種別	法量 (cm) (△: 側面)	重量 (g)	特徴	備考
M1 22 2区 2D-4g	第1号	陶瓦	縦大板: 24 縦大厚: 01	23			
M2 26 2区 2D-3kg	第22号	陶瓦 瓦器陶器	縦大板: 26 縦大厚: 01	542			
M3 279 4区 2D-Tg	4028調 理工上	可憐	縦大板: 185 縦大厚: 01	426	丸または細面りだった可能性が高いが、肉食が進行して表面が剥離し、鋼塊が 露出		
M4 279 4区 2D-Tg	4028調 理工上	環状陶製品	縦大板: 225 縦大厚: 05	114			刺繡または印刷
M5 279 3区 2D-86	3003調 理工上	漆器	縦大板: 19 縦大厚: 05	32	表面漆剥れあり、脚部2箇所		丸孔・脚部

表62 金属器観察表(2)

発掘 番号	県名 番号	調査 区分	種別	法長 (cm) (△:残存)	重量 (g)	特徴	備考
MM 279	4区 2C-6a	第4層	漆方(漆内板)	縦大長:15 横大長:8 高さ:7	10.43	直角形タイプの茹で方。表面及び側面に漆垢が残存する	裏蓋(上)がむち
MT 279	2区 2D-7c	2006層 灰土	丸桶	縦大長:25 横大長:37 高さ:109	11.99	直食具。脚部3箇所	脚貫孔・脚折式
MB 279	3区 2D-6d	3006層 灰土	丸桶	縦大長:30 横大長:30 高さ:95	8.72	直食具。外側が4箇所接着	円中広底式傾斜脚(脚部開口部無し、外折式)
MW 279	4区 2C-7b	4010層 灰土	脚踏 和田脚踏	縦大長:25 横大長:245 高さ:17	2.38		
MI10 279	3区 2D-6g	3006層 灰土	漆桶	縦大長:24 横大長:28 高さ:92	3.2		
MI11 279	4区 2C-6g	第1層	脚踏 和田脚踏	縦大長:24 横大長:24 高さ:95	3.62		骨頭、茎・紀元後「食器類」、H45-1、 表面に青苔
MI12 279	4区 2C-6a	第1層	脚踏 和田脚踏	縦大長:245 横大長:245 高さ:95	3.78		玉器、元和元年(1628年)贈物
MI13 279	4区 2C-7b	第22層	脚踏 和田脚踏	縦大長:245 横大長:245 高さ:95	2.87		玉器、純和元年(1111年)贈物
MI14 279	3区 2D-6c	灰土	脚踏	縦大長:23 横大長:23 高さ:95	1.55		
MI15 279	4区 2C-7c	灰土	漆桶	縦大長:22 横大長:22 高さ:91	1.94		
MI16 279	4区 2D-6a	第42層	漆桶	縦大長:△585 横大長:△515	1.96	脚踏式(または方脚漆桶形式)	
MI17 280	3区 2D-6c	3162層 灰土	圓底漆桶	縦大長:39 横大長:49 高さ:29	45.11	上面に小さな丸痕が認められる丸底漆桶。底面は平手・左肩の横筋の3箇所を 刻む。2つに割れており、割口は見当なし。上面は洗浄の実況が肥大して いる。下面の丸痕は(側面下)手に向かって傾斜する。下端は錐状だが、等に 手筋で不規則な凹凸がある。	分析試料 YOSH-1 (写真: 48.56, F: 3652g)
MI18 280	3区 2D-5c	3162層 灰土	圓底漆桶	縦大長:39 横大長:51 高さ:29	52.00	上面に深めの脚が出来る程平手丸底漆桶。左肩の横筋から上手が傾斜となる。下 面は平手だが上手を彫り込んで自分で仕立たれ。	分析試料 YOSH-1
MI19 280	3区 2D-6c	3162層 灰土	丸底漆桶?	縦大長:38 横大長:38 高さ:29	26.7		
MI20 281	4区 2C-6d	第2層以下	圓底漆桶	縦大長:45 横大長:49 高さ:47	135		第41層に複数するものか
MI21 281	4区 2C-7b	第3層	圓底漆桶	縦大長:31 横大長:32 高さ:43	44.97		
MI22 281	4区 2C-7c	第4層	圓底漆桶	縦大長:33 横大長:33 高さ:32	31.94		
MI23 281	4区 2C-6c	第4層	圓底漆桶	縦大長:23 横大長:27 高さ:12	9.98		
MI24 281	4区 2D-7a	第42層	漆油壺	縦大長:19 横大長:25 高さ:21	6.36	小壺の口部を手で押す形の鉢形壺。上面丸手で小さな気泡が付いて、土手側を中 心にして上側から下側にかけて約3mm程度の木炭を噛み込むだけではなく、底部など 底面も埋め込まれる。	分析試料 YOSH-4
MI25 281	4区 2D-7a	第42層	漆油壺	縦大長:26 横大長:17 高さ:22	5.83		
MI26 281	4区 2D-7a	第42層	漆油壺	縦大長:27 横大長:24 高さ:12	3.72		
MI27 281	4区 2D-7a	第42層	漆油壺	縦大長:17 横大長:14 高さ:10	1.36		
MI28 281	4区 2D-7a	第42層	漆油壺	縦大長:17 横大長:15 高さ:14	2.45		
MI29 281	3区 2D-6c	3433層 灰土	漆油壺	縦大長:31 横大長:24 高さ:19	12.93		
MI30 281	4区 2D-6c	第22層	漆油壺	縦大長:27 横大長:25 高さ:19	6.55		
MI31 281	3区 2D-6d	3006層 灰土	楕形漆油壺	縦大長:35 横大長:70 高さ:23	152	平底で腹前円形を有する楕形漆油壺。右側面が底面となる。横筋から下端 は細やかな脚具をしていて、上端は中央基部に丸いひし形の穴があり、下手側基部、 下端を中心に丸を彫り、下端には小さな気泡が付いてる。	分析試料 YOSH-2
MI32 281	3区 2D-7c	3006層 灰土	楕形漆油壺	縦大長:49 横大長:48 高さ:27	38.67		
MI33 281	3区 2D-6c	3120C-2 柱軸	楕形漆油壺	縦大長:38 横大長:24 高さ:13	8.65		

第VII章 自然科学分析

第1節 良田平田遺跡の古環境解析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

良田平田遺跡は湖山池の南側に位置し、湖山池南岸部から南北方向に延びる丘陵に挟まれた谷筋に立地する。これまでの発掘調査により、古墳時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代の遺構や遺物が認められている。今回の調査では、調査区の土地利用状況及び古植生に関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定、X線写真撮影観察、土壤薄片観察、植物化石分析（珪藻分析、花粉分析、植物硅酸体分析、大型植物化石分析）を実施する。

1. 調査地点

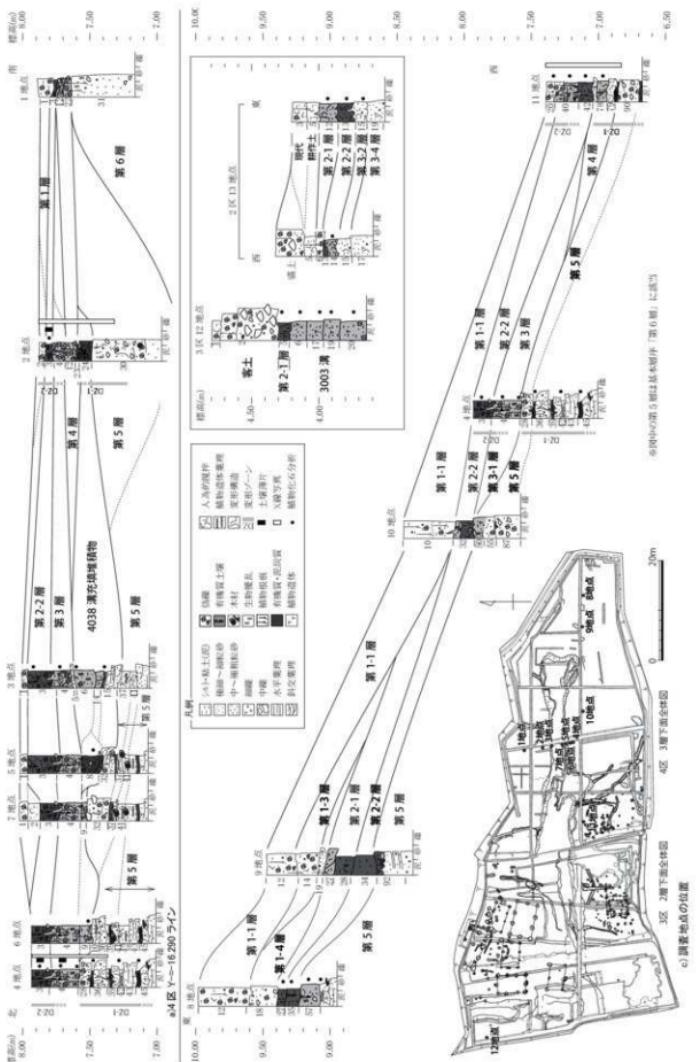
今回の調査区は、佐藤・小野（2013）による地形分類に基づくと、2区・3区が湖山池南岸の開析谷の氾濫原、4区が崖錐・扇状地に位置する。そのため、各調査区の堆積層の累重状況は地形発達過程の違いに起因して異なる。以下に各調査区・調査地点の堆積層の累重状況について、堆積物試料の層相及び調査時の断面図・写真に基づいて述べる（第297図）。なお、各調査地点の堆積層の累重中には地震動に起因する変形構造が認められるが、ここでは初生の構造について記述し、変形構造についてはX線写真観察結果と併せて後述する。また、層名は、調査後の遺物・遺構等の年代観に基づく層序対比によって設定された層名（図中のゴシック体表記）を踏襲し、細分は調査時の層名（柱状図左側の明朝体の層名）を合わせて記載する。

（1）2区 13地点〔第19・297図〕

調査地点は2区北壁の古代の畦畔が確認されている地点である。現代の盛土・耕作土直下の第2-1層は、暗灰色を呈する、粗粒砂・細粒砂混じり極細粒砂質泥からなり、著しく擾乱され初生の堆積構造は認められない。本層の形成年代は、出土遺物及び3・4区との層序対比から中世（13～15世紀頃）と推定されている。第2-2層は黒色を呈する中粒砂混じり極細粒砂質泥からなる。土壤生成が進行した堆積物で腐植が集積している。形成年代は、中世（12～13世紀頃）と推定されている。第3-2・3-3層は上方細粒化する暗灰黄～褐灰色の細粒砂～細粒砂質泥で、細礫・炭片が混じる。形成年代は古代と推定されている。第3-3層より下位には、畦畔の芯土となっている上方細粒化する砂礫～砂（河川堆積物）、さらにその下位に有機質砂質泥が堆積している。

（2）3区 12地点〔第44・297図〕

調査地点は3区西壁北部の3003溝が確認されている地点である。現在の客土直下の第2-1層は土壤生成が進行している黒色腐植質中粒砂混じり泥からなる。第2-1層に覆われている3003溝の充填堆積物は上方細粒化する中粒砂から砂質泥からなる。分析層準である20～6層は溝内の水流が減衰した後の放棄流路のような堆積環境で形成された堆積物で、各層上部は土壤生成がやや進行している。各層の形成年代は、出土遺物から、第2-1層が中世、室町期、3003溝充填堆積物は古代と推定される。



第297図 調査地点の層序及び試料採取位置

(3) 4区〔第297図、写真5~9〕

4区は3区側に開口する枝谷に位置する。調査区の堆積層は大きく第1~6層に区分されている。

第1層：本層は灰黄褐色を呈する粗粒砂・中粒砂混じり泥と、その偽礫・微小ブロック（フラグメント）からなり、炭片や遺物が混じる。偽礫の大きさは様々で、その長軸方向の配向は不規則で、著しく攪拌されている。下位層との層界は明瞭で、凹凸のある層理面をなす。これらの層相から、本層は人為的營力により形成された客土と判断され、形成年代は、出土遺物から近世以降と推定される。

第2層：本層は黒褐~暗灰色を呈する腐植質砂質泥~泥質砂からなり、第2-1層と第2-2層に細分される。第2-1層は谷奥部に残存し、やや腐植に富む砂質泥からなる。第2-2層は谷内全域に分布し、腐植に富む砂質泥~泥質砂からなる。いずれも細礫・細粒砂・粗粒砂・炭片・遺物・泥質砂の偽礫・微小ブロックが混じり、著しく攪拌されており、偽礫の構造が確認される。また、間隙・孔隙の密度が相対的に高く、土壤生成が進行している状況が窺える。上位層準から連続する根成孔隙も密に分布する。下位層との層界は明瞭で、凹凸のある層界をなし、第2-2層下部には第3層由来の偽礫が散在する。これらの層相から、第2層は人為的に攪拌された堆積物で、耕作土と判断される。形成年代は出土遺物から、第2-1層が15~16世紀（室町期）、第2-2層が13~14世紀（鎌倉期）と推定される。

第3層：本層は黒褐色~暗褐色を呈する有機質に富む泥質砂とその偽礫・微小ブロックからなり、炭片・礫・花崗岩片・砂質泥の偽礫・微小ブロック・遺物などが混じる。谷線付近では、不明瞭で不連続な葉理状の構造が部分的に確認され、砂の薄層を挟在する。上部はいずれも著しく攪拌ないし擾乱されている。このような層相から、第3層は谷上部からの間欠的な土砂流出期を挟在する、湿地のような堆積環境で形成されたことが推定される。また、上部層準形成期には人為的營力が及んだと推定される。出土遺物から、9~12世紀頃に形成された堆積物と推定される。なお下位の4038溝充填堆積物との層界は漸移的である。

4038溝は、第5層形成後の谷線部分の地表面を降水や湧水によって洗掘した浅く細い谷で、谷の傾斜が緩くなる斜面中下部で枝状に分岐している。この浅谷充填堆積物は、侵食・堆積を繰り返している、上方細粒化するトラフ型斜交葉理構造が発達する極粗粒砂~中粒砂から細粒砂質有機質泥の積層からなる。この充填堆積物中には人為的營力により投棄されたと見られる遺物が出土し、人為的に浚渫されている痕跡も確認される。本溝の形成時期は、7世紀後葉頃と見られ、8世紀後半~9世紀にかけて埋没したことが推定される。

第4層：中礫・土器片・炭片が不規則に混じる、褐色砂質泥及び泥質砂の偽礫からなる。偽礫の大きさは様々で、不規則に分布する。下位層との層界は明瞭で、凹凸のある層理面をなす。人為的營力により形成された堆積物と判断される。下位堆積物との層界は明瞭である。11地点の第4層からは8世紀の遺物が出土している。1地点より東側の谷斜面に分布する第4-4層から古墳時代中期~飛鳥時代の遺物が出土している。

第5層：4区第4層から基盤堆積物である第6層までの堆積物の総称で、基本層序（第VI章第1節）の第6層にあたる。谷線に位置する4地点の第5層は、複数の堆積層からなり、最上部の28層は塊状をなすにぶい浅黄色を呈する泥質砂からなる。下位層との層界は明瞭である。また、本層中・上部には場所によって中礫~大礫が混じる。本層は4区2地点第5層の崩積土の再堆積した土石流堆積物と見られる。本層上部は人為的に攪拌されているように見える。その直下の36層~45層はいずれも

上方細粒化する堆積物の積層からなる。36層は泥混じり細粒～中粒砂から有機質砂質泥、39層は灰色を呈する泥質細粒砂から腐植に富む砂質泥、42層は植物遺体葉理を挟在する灰色泥質細粒砂～砂混じり泥、43層は低角度のトラフ型斜交葉理の発達する中粒砂～細粒砂、45層は上方細粒化する細粒砂、砂質泥、植物遺体葉理を挟在する有機質泥からなる。このような層相から、谷線部分では間欠的な土砂流失が起こり、流出後には地下水位の高い湿地のような堆積場になっていたことが推定される。また、36層～45層の堆積期間を通じて、湿地の環境が維持されており、地下水位は上昇傾向にあった可能性がある。また、上位にかけて堆積物が粗粒化していることから、谷沿いの山地斜面の物質移動が起こりやすい状況、例えば植生空間にギャップが形成されるなど、周辺環境が変化していったことが推定される。なお、これらの層準の形成期には谷奥部では土壤生成が進行しており、立木が確認されていることから、当該期の谷奥部に林分が成立していたことが推定される。また、これらの堆積層形成期には2地点が位置する谷周縁部では、丘陵斜面側より供給されたにぶい浅黄色～灰白色を呈する、泥質中粒砂が崖錐状に堆積している。本層中には中疊・偽疊・丸木の木材が取り込まれている。また、第6層との層界では、斜面下方に向かうすべり面のような構造が確認される。これらのことから、2地点下部の第5層は谷斜面の崩壊により形成された崩積堆積物（崩積土）と判断され、堆積後に多少クリープしている可能性がある。また、本層上部は第4層形成期の人為的に削平されているが、土壤生成作用が及んでいたことから堆積後には植生に覆われていたことが推定される。

第6層：谷の基盤をなす山地を構成する花崗岩の風化堆積物なし崩積土の可能性が高い、にぶい浅黄色を呈する、泥質中粒砂からなる。本層は調査底部に部分的に確認されており、成因については検討の余地がある。

2. 試料

各分析用の試料は、放射性炭素年代測定が4地点の第5層最上部（36層最上部）、第5層下部（45層最上部）の木材遺体、X線写真撮影観察は2・3・11地点の不攪乱柱状試料、土壤薄片作製鑑定は2地点第2層（3層）、4地点第2層（3層）と第3層（4層）、珪藻分析は第6地点第3層（9層）、5地点4038溝充填堆積物（8層）、花粉分析は4地点第2・2層（3層）、第5層（45層）と第6地点第3層（9層）、植物珪酸体分析は2地点・3地点・4地点・5地点・6地点・8地点・11地点・12地点・13地点の第1-la層～第5層の30層準について実施する。

3. 分析方法

（1）放射性炭素年代測定

試料表面の汚れをピンセット等により物理的に除去する。超純水で洗浄後、試料を燃焼させ、不純物（水など）を取り除き、精製された二酸化炭素（CO₂）を得る。これを還元してグラファイトを生成する。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1 mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、小型タンデム加速器にて測定する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いてδ¹³Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma; 68%）に相当する年代である。

暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 を用いる。暦年較正とは、大気中の¹⁴C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C 濃度の変動及び半減期の違い (¹⁴C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することである。暦年較正結果は、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表している。暦年較正計算は、測定誤差 σ と 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは σ や 2σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(2) X線写真撮影観察

調査地点の不搅乱柱状試料について、厚さ 1 cm まで板状に成形し、湿潤状態のまま、管電圧 50 kvp、電流 3 mA、照射時間 270 秒の X 線強度条件において X 線写真撮影を実施した。撮影は財團法人元興寺文化財研究所の協力を得た。なお、X 線写真では、礫や酸化鉄など密度の高い物質が明色（白色）を呈し、有機質に富む堆積物や植物遺体など密度の低い物質が暗色を呈する。

(3) 土壌薄片作製鑑定

土壌薄片作製試料は、80°C で 1 日間乾燥した後、樹脂（ペトロボキシ及びシアノポン）で固化し、片面の研磨を実施する。固化及び研磨済み試料は、スーパーセメダインにより研磨面をスライドガラスに接着する。その後、反対側の面について厚さ 70 μm 程度まで研磨を行い、カナダパルサムによりカバーガラスを接着する。なお、土壌薄片による層相や構造記載は、久馬・八木久訳監修（1998）の「土壌薄片記載ハンドブック」を参照した。

(4) 珪藻分析

試料を湿重で 5 g 前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法（4 時間放置）の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸 600 倍あるいは 1000 倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に 200 個体以上を同定・計数する。化石の少ない試料はこの限りではないが、全面を走査する。珪藻の同定と種の生態性については、Horst Lange-Bertalot (2000)、Hustedt (1930-1966)、Krammer & Lange-Bertalot (1985 ~ 1991)、Desikachariy (1987)などを参考にした。

群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類する。さらに淡水生種は塩分、pH、水の流動性の 3 適応性についても生態分類する。堆積環境の変遷を考察するために珪藻化石 100 個体以上が検出された試料について珪藻化石群集層位分布図を作成する。出現率は化石総数を基数とした百分率で表し、1%以上の出現率を示す分類群についてのみ表示する（図中の●印は、総数が 100 個体以上産出した試料うち 1%以下の種を、○印は総数 100 個体未満の場合の産出を示す）。図中には、海水生・汽水生・淡水生種の相対頻度と淡水生種を基数とした塩分・pH・流速の相対頻度を示す。

(5) 花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 の混合液）処理

による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉（1973）、中村（1980）などを参考にする。結果は同定・計数結果の一覧表及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基準として、百分率で出現率を算出し図示する。

（6）植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料を乾燥・秤量後、過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタンクステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）及び葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2010）の分類を参考に同定し、計数する。

結果は、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残流量を計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算）の一覧表と層位分布図として示す。

（7）大型植物化石分析

堆積物から種実や葉などの大型植物遺体を分離・抽出するために試料100ccを水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。水洗後の試料をシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な大型植物遺体を抽出する。多量確認されるイネの穎は、主に基部の果実序柄を抽出する。大型植物遺体の同定は現生標本、石川（1994）、中山ほか（2000）などを参考に実施し、個数を数えて結果を一覧表で示す。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフンで結んで表示する。その他の抽出物は一覧表の下部に一括し、量比を定性的に示す。分析後の大型植物遺体は分類群別に容器に入れ、約70%のエタノール溶液で浸漬し、保管する。

4. 結果

表63 放射性炭素年代測定結果

地点 層位	種類	処理 方法	測定年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (層年較正用) BP	層年較正結果			Code No.	
						層差	cal BC/AD	cal BP		
4地点 36層 最上部	木材 (枝)	AAA	$2,179 \pm 30$ ± 0.34	-36.83 $\pm 2.070 \pm 30$ (2.069 ± 26)	2,070 ± 30 (2.069 ± 26)	σ	cal BC 152 - cal BC 139	cal BP 2,101 - 2,088	0.114	IAAA- 123685
						cal BC 112 - cal BC 45	cal BP 2,061 - 1,994	0.886		
						cal BC 171 - cal BC 37	cal BP 2,120 - 1,986	0.959		
						cal BC 30 - cal BC 20	cal BP 1,979 - 1,969	0.018		
4地点 45層	木材 (枝)	AAA	$2,360 \pm 20$ ± 0.39	-26.35 $\pm 2.340 \pm 30$ (2.341 ± 26)	2,340 ± 30 (2.341 ± 26)	σ	cal BC 409 - cal BC 386	cal BP 2,358 - 2,335	1.000	IAAA- 123686
						cal BC 510 - cal BC 434	cal BP 2,459 - 2,383	0.178		
						cal BC 428 - cal BC 371	cal BP 2,377 - 2,320	0.822		

1)処理方法のAAAは、酸処理-アルカリ処理-酸処理を示す。

2)年代値の算出には、Libbyの半減期5768年を使用した。

3)BP年代値は、1950年を基点として何万年前であるかを示す。

4)付記した層差は、測定層差（測定値の68%に入る範囲）を年代値に換算した値。

5)層年の計算には、RADOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer) を使用し

6)層年の計算には、補正年代によって層年較正用年代として示した、一枚目を丸める前の値を使用している。

7)年代値は、1枚目を丸める前の値が使用だが、層年較正曲線や層年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいよう

に、層年較正用年代値(1枚目)を示していない。

8)統計的に真の値が入る確率は、1) 0.683%, 2) 0.954%である

9)相対比は、σ, 2σ のそれそれを示した場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

(1) 放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定及び曆年較正結果を表63に示す。同位体効果による補正を行った測定結果は、4地点第5層上部（36層最上部）が 2070 ± 30 BP、第5層下部（45層）が 2360 ± 20 BPを示す。この年代値は西本編（2006・2007）によると、各々、弥生時代中期、縄文時代晩期末～弥生時代前期初頭に比定される。このことから、4区第5層の形成年代は縄文時代晩期末～弥生時代中期頃、4区第5層最上部の土石流の発生年代は弥生時代中期～古墳時代までの間の時期と推定される。

(2) X線写真観察

試料の星光写真及びX線写真を写真5～7に示す。4区の堆積物の累重中には、層序対比される2つの垂直範囲において、古地震痕跡と見られる堆積物の変形構造が認められた。Matsuda（2000）は、変形構造が連続的に現れる垂直範囲を変形ゾーン（deformation zone）と呼んでいる。下位より変形ゾーンDZ-1・DZ-2と呼び、X線写真撮影を実施した4区2地点・4地点・11地点の変形構造について以下に述べる。

4区2地点：本地点は谷の北側斜面に位置する。DZ-1は、第5層（30層）～第4層下部（24層）から4038溝充填堆積物にかけて認められる。崩積土と見られる第5層（30層）中部には、垂直荷重とともに円弧状のせん断応力で生じたと見られる、写真右上から左下方に、下凸の円弧状のせん断面（あるいは変形曲面）が認められる。第5層最上部から4038溝充填堆積物には、下凸のロード状構造とその上位の羽毛状ないし火炎状の流線パターンが確認される。これら堆積物の変形とともに初生の位置から移動した様々な配向をなす植物遺体片（暗色を呈する部分）が確認される。本来は植物遺体と泥は初生状態では水平葉理をなしていたと考えられる。第4層下部（23層）では暗色に写る泥がちの部分と明色に写る砂がちの領域が混ざり合った水平方向の流線パターンが認められる。本変形ゾーンでは上に向かって水平方向の応力が増す傾向を示し、上端部堆積時時期の地震イベントによって一時に生じた可能性が高い。DZ-2は、有機質泥質砂、砂質泥、土壤の偽礫からなる人為的營力を受けた堆積物からなる第3層～第1層にかけて確認される。上端は不明である。第3層～第1層の変形構造は連続的で、下部で下に凸な荷重構造と、その上位に火炎状・羽毛状の流線パターンが確認される。また、X線写真で明色を示す砂がちの堆積物下面で円弧状の剪断面が認められる。これらの堆積物は本来は水平に堆積していたと見られるが、地盤動により塑性変形したと見られる。

4区4地点：谷央の谷線に位置する。DZ-1は、第5層を構成する45層～28層の垂直範囲で確認される。変形構造は、45層の上方細粒化する細粒砂～有機質泥層は水平方向の剪断応力により膨らんだような流線と、波打った葉理構造をなす。上部では下に凸な荷重構造が認められる。43層の低角度のトラフ型斜交層理・葉理をなす中粒砂～細粒砂は、中・上部にディッシュ・アンド・ピラー構造に似た脱水構造が確認される。砂礫粒子の間隙の大きい部分が幅数cmで下に凸な弧をなし、不規則な鱗状のパターンを形成しており、この間隙の多い部分を砂礫を浸していた水が抜けたと考えられる。42層の植物遺体葉理を挟むする灰色泥質細粒砂～砂混じり泥は下凸の荷重により、葉理が不連続となっている。また、下部に下位より引きずり挙げられた砂が見られる。39層の灰色を呈する泥質細粒砂から腐植に富む砂質泥、36層の泥混じり細粒～中粒砂から有機質砂質泥層では、写真左側で下凸の強い荷重で屈曲している。また、写真左側の明色を呈する部分では下凸の弧をなすとともに、弧の両端が屈曲して縱方向・斜め方向に延びた袋状の形が集まつたパターンをなし、その間に脱水チャネルと見られる水抜け構造が確認される。一方、やや暗色を呈する部分では火炎状ないし羽毛状の流

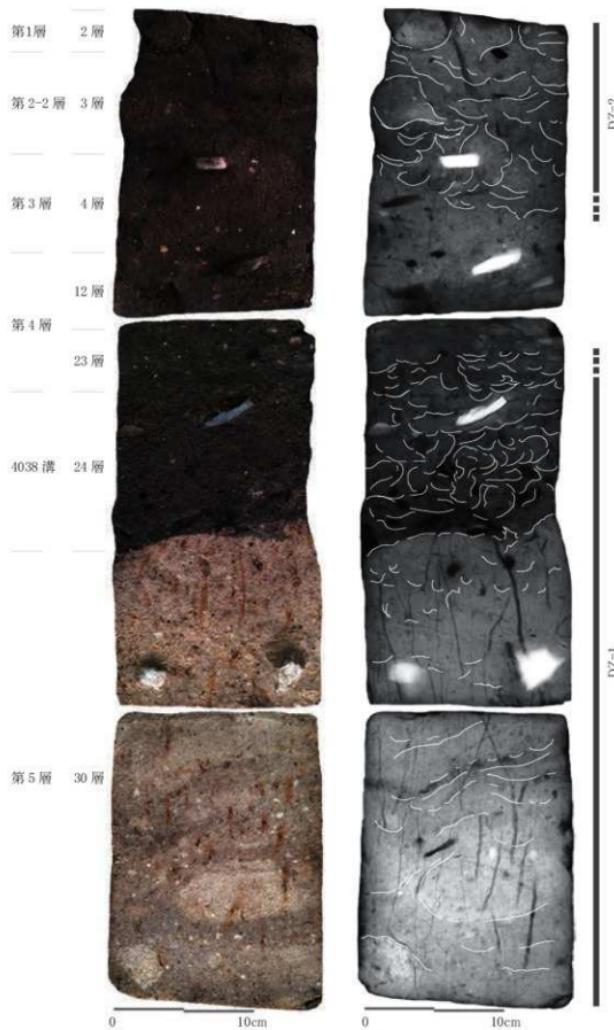


写真5 4区2地点のX線写真

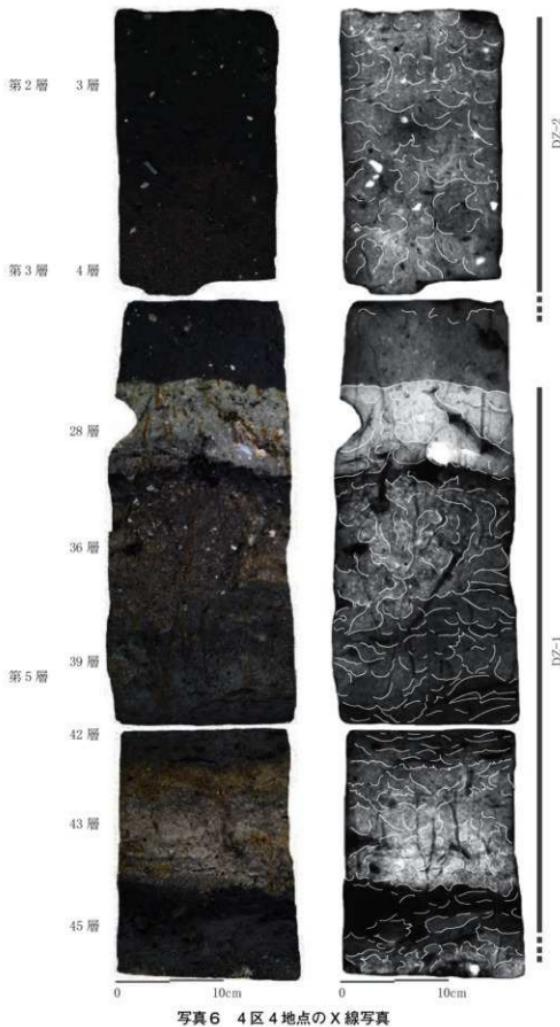


写真6 4区4地点のX線写真

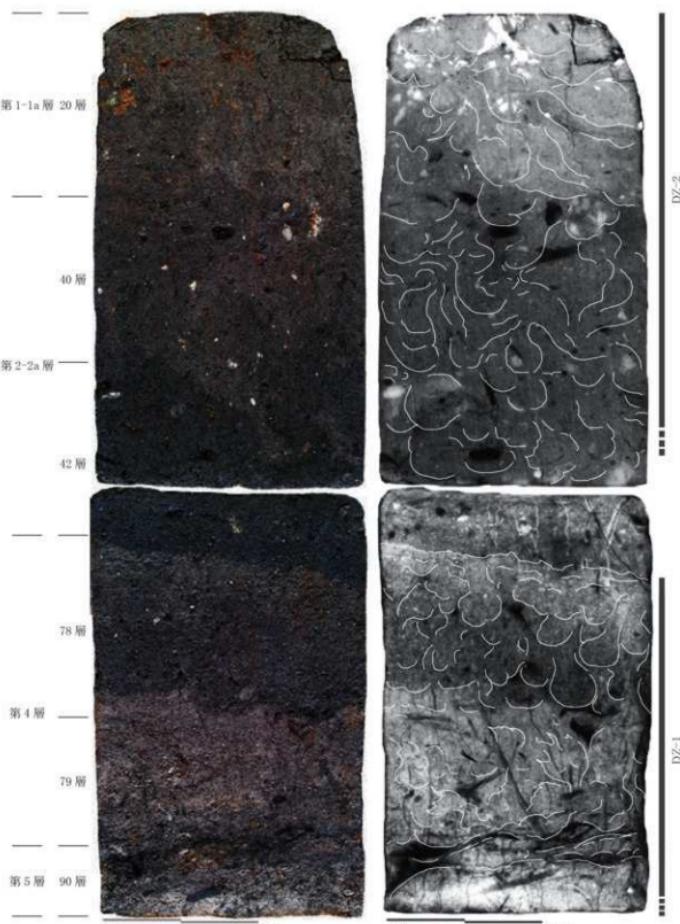


写真7 4区11地点のX線写真

線パターンが確認される。28層も下凸の塑性変形構造をなすが、上端は第3層形成時の人為的擾乱により削平されているように見える。DZ-2は人為的營力が及んでいる第3層（4層）中部～第2層3層）の垂直範囲で確認される。X線写真で暗色に写る泥がちの部分と明色に写る砂がちの領域が混ざり合ったパターンは土壤生成や人為的攪拌によると見られるが、砂がちな領域が泥がちな領域へ下凸な境界をなして接している部分が多く認められる。また第2層と第3層の層界では火炎状の流線パターンが確認され、下位堆積物が上位に引き摺り挙げられている。

4区11地点：谷口付近に位置する。DZ-1は第5層（90層）～第4層（79層・78層）で確認される。第5層（90層）の植物遺体葉理を挟む砂層は上位から荷重と、水平方向の剪断応力により膨らんだような流線パターンを示す。第4層下部の79層では下部で下凸の荷重構造、上部で羽毛状の流線パターンが確認される。78層では火炎状・羽毛状の流線パターンが確認される。DZ-2は人為的擾乱が及んでいる第2-2層下部（42層）下部～第1-1a層（20層）にかけて確認される。第2-2a層（42層）では下部で下凸の荷重構造、第2-2層上部（40層）から第1-1a層（20層）では連続する火炎状ないし羽毛状の流線パターンが確認され、下位堆積物が上位層準に引き摺り挙げられている。また第1-1a層は写真右側では、荷重構造と見られる、下凸の弧状をなす。

以上の各地点の堆積物では2つの垂直範囲で変形ゾーンが認められた。DZ-1の上端は4038溝充填堆積物であり、地震イベントの発生時期は、7世紀～9世紀頃と推定される。一方、DZ-2の上限は不明であるが、少なくとも第1-1a層が変形していることから、近世以降と推定される。近世以降の地震イベントとしては1943年9月10日の「鳥取地震」があり、それに対比される可能性がある。また、今回のDZ-1・DZ-2は、高住平田遺跡で確認されている古代の地震イベントによるDZ2と、鳥取地震に由来すると見られるDZ3に対比される可能性が強い（パリノ・サーヴェイ、2012）。

（3）土壤薄片写真観察結果

結果を写真8・9に示す。4地点第3層（4層）では、砂粒が密に充填しており、互いに接するようにして堆積している（写真9の1・2）。砂粒間は、腐植を含む泥で充填される。微細構造は、基本的に壁状をなし、細長いチャンネル状の形態を示すものが僅かに分布する。層内には、種実遺体な

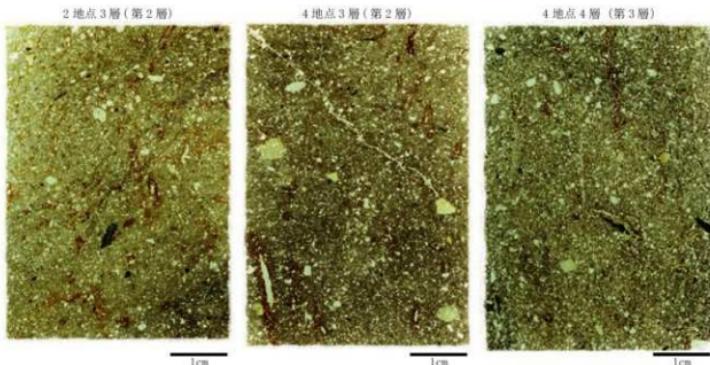


写真8 土壤薄片画像

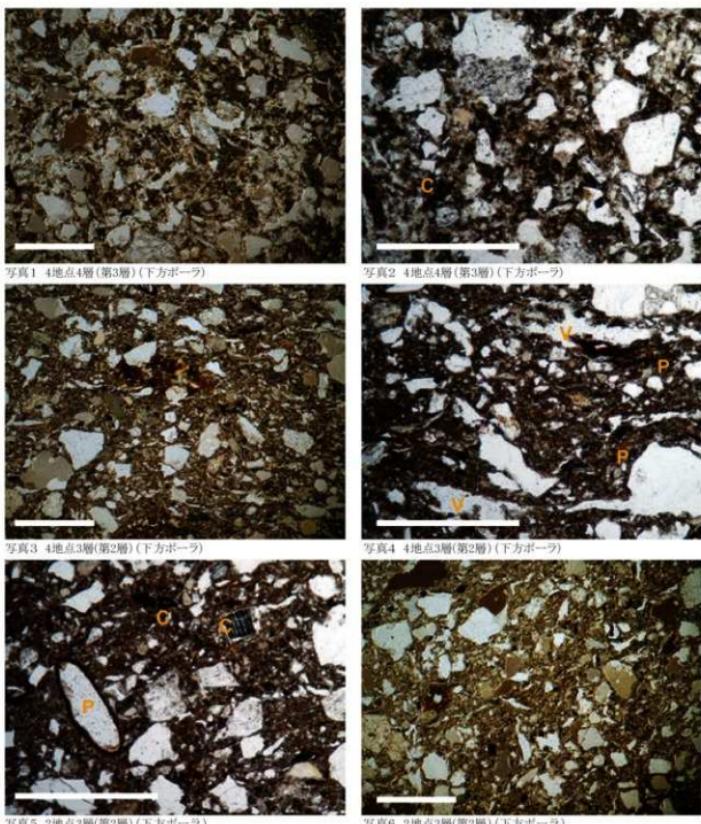


写真9 土壌薄片顕微鏡画像

どの未分解の植物片、炭化材片が含まれる。4地点第2層（3層）は、砂と泥が混在し、4地点第3層（4層）に比べ淘汰が相対的に不良である。微細構造は壁状を示す。砂粒は、個々の粒子が分離して単体で、泥で充填される傾向を示し（写真9の3）、密な充填を示す4地点第3層（4層）と層相が異なる。層内では、部分的に細長い孔隙や植物遺体片が水平方向への配向を示す領域が観察される（写真9の4）。本層では、4地点第3層（4層）と同様に種実遺体などの未分解の植物片、炭化材片が含まれる（写真9の5）。

2地点第2層（3層）は、4地点第2層（3層）と同様に構成層の淘汰が不良である。また、泥と砂

の分布が不均質である。そのため、層内では、泥及び砂がちな領域がまだらに混在するような層相を示す。泥の領域については、曲がりくねった管状の分布を示す部分も多い。層内では、4地点第2層(3層)と同様に未分解の植物片、炭化材片が含まれる。

氾濫原上に洪水によって供給される堆積物は、水流による集団移動により運搬されることが通常である。このような場合、砂粒は4地点第3層で観察されるように密集して累重すると考えられる。4地点第2層では、砂粒が個々に分離して堆積する傾向が把握され、4地点第3層と堆積状況が異なっている。この4地点第2層で観察された土壤微細構造については、齊藤(1971)、有村・鬼輪(1971)で示された現成の水田耕作土の特徴に類似する。水田耕作土では、湛水しきかきに伴い、粒子間結合力が弱化し、团粒の崩壊と碎屑物粒子の分散が進行する(齊藤, 1971)。水田に特徴的な微細構造としては、しきかきにより粗粒子のすみやかな沈降による砂の局部的集積や、4地点第2層でも確認されたような葉理状の構造が観察される。

上記のことをふまえると、4地点第2層については、洪水堆積物を母材として湛水下での人為的な擾拌によって形成された水田耕作土の可能性があることが指摘される。2地点第2層については、4地点第2層と同様に構成層の淘汰が不良であるものの、層相が異なる。2地点第2層では、管状をなす泥の領域が特徴的に観察される。形態的特徴からは、このような管状の泥の領域が、土壤動物の活動によって形成された権管と解釈される。このことから、2地点第2層については、生物擾乱の影響を大きく受けていることが推定され、今回の観察層準において、土壤発達の影響が相対的に大きかった可能性がある。この点は2地点が谷斜面に位置することとも同調的である。

なお、4地点第2層・第3層、2地点第2層では、土壤構造が発達せず、未分解の植物片が多く含まれることから、地下水位が高く、基本的に湿性の土壤環境下にあったことが推測される。また、炭化材片も多く含まれることから、分析地点周辺では、人間による植物体の燃焼行為も活発に行われていたことも推定される。

(4) 珪藻分析

結果を表64、第298図に示す。古代の遺構充填堆積物である5地点4038溝(8層)及び6地点第3層下部(9層)について、珪藻分析結果から推定される堆積時の環境について述べる。いずれの層準も、主要な珪藻化石群集が酷似している。

特徴的に認められた流水不定性種の*Amphora ovalis* var.*affinis*は環境に対する適応能力が高い種であり、さまざまな環境の水域から認められる。また、生育時の生産力が高いだけでなく、殻へのシリカの沈着が厚く、堆積後も特に化石として残りやすい。*Pinnularia rupestris*は貧塩一嫌塞性種、好酸性、流水不定性であり、比較的広範間に生育し、湿原、湿地、沼沢地などに生育していることが多い。

*Pinnularia viridiformis*は好湿地性であり、泥炭性の湿原・沼に特徴的に認められる種である。

止水性種の*Aulacoseira ambigua*は浮遊性で富栄養の池・湖の沿岸等に多いとされる(Hustedt, 1930)。また安藤(1990)は、湖沼沼澤湿地指標種としている。これは、湖沼における浮遊生種としても、沼澤湿地における付着性種としても優勢な出現が見られるものの、これら以外で見られることが希であり、湖沼や沼澤湿地の環境を指標する可能性が大きいためである。止水性種の*Pinnularia acrosphaeria*は湿地や池沼、湖の沿岸部に見られる(Patrick and Reimer, 1966)。ただし、多くの場合、湿地に爆発的に発生することが多い。*Stauroneis phoenicenteron*は止水域に認められる。Cholnoky(1968)は最適pHを6.8としている。本種も湿地や池沼・湖沼の縁辺等の止水域に生育する種である。

表 64 蒙藻分析結果

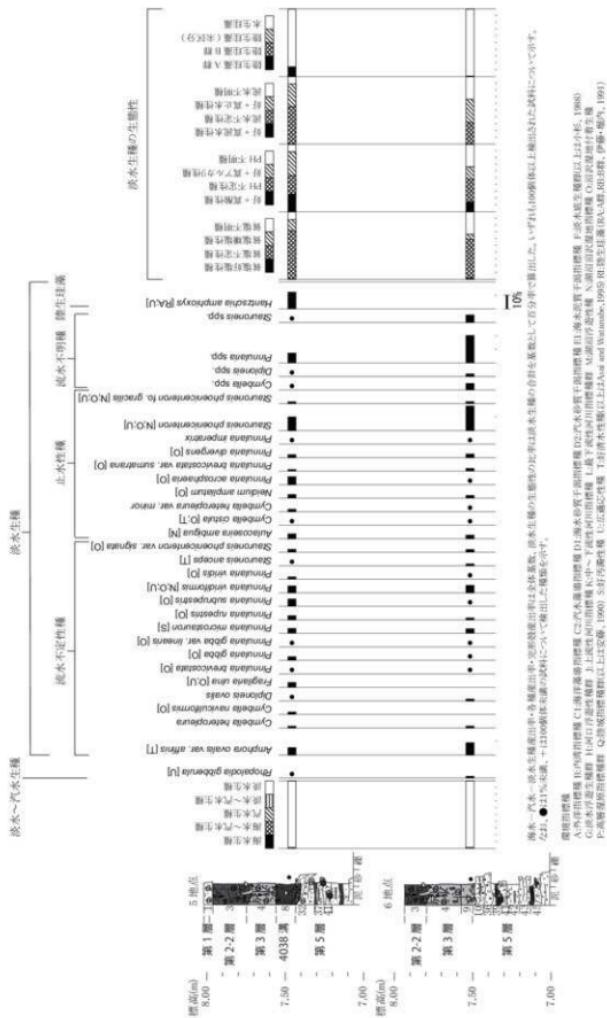
分類群	Salinity	pH	Current	環境指標種		50%充 水率 的時間	60%充 水率 的時間
				生理性	腐敗指標種		
<i>Nitzschia</i> pinnata W. Smith	Meh			<i>Nitzschia</i> pinnata D1-E1	1	-	
<i>Rheopeltis gibberulus</i> B. J. Mueller	Ogh-Meh	a-l	ind	<i>N. pinnata</i>	1	2	
<i>Aleuria</i> pectinifera (L.) Hoffm.	Ogh	a-l	ind	T	12	13	
<i>Aleuria</i> ciliata (Grev.) Simonson	Ogh-ind	a-l	ind	N	8	4	
<i>Aleuria</i> spp.	Ogh-unk	unk	ind	N	1	-	
<i>Coleosira</i> heteroplaena Kramer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	BB	-	1	
<i>Cymbella</i> ciliata (B. J.) Kirschner	Ogh-ind	ind	ind	BB	1	1	
<i>Cymbella</i> heteroplaena (Grev.) Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	O,T	1	1	
<i>Cymbella heteroplaena</i> var. minor Cleve	Ogh-hob	a-l	pH	not diagnostic	3	2	
<i>Cymbella</i> spp.	Ogh-ind	ind	ind	not diagnostic	4	1	
<i>Diplosira</i> ovalis (Hilse) Cleve	Ogh-ind	ind	ind	O	4	-	
<i>Diplosira</i> spp.	Ogh-ind	a-l	ind	not diagnostic	2	7	
<i>Fusaria</i> mucicola (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	unk	ind	not diagnostic	2	2	
<i>Fusaria</i> spp.	Ogh-ind	a-l	ind	O	1	3	
<i>Fragilaria</i> alba (P. Strack) Lange-Bertalot	Ogh-ind	a-l	ind	not diagnostic	2	-	
<i>Fragilaria</i> spp.	Ogh-ind	ind	ind	not diagnostic	1	-	
<i>Fritsella</i> vulgaris (Dumont) De Toni	Ogh-ind	a-l	ind	O	1	-	
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	a-l	pH	O,E	-	1	
<i>Gomphonema</i> sp. Ehrenberg	Ogh-ind	a-l	ind	T	-	1	
<i>Gomphonema</i> spp.	Ogh-unk	unk	ind	not diagnostic	-	1	
<i>Hantzschia amphioxys</i> (B. J.) Grunow	Ogh-ind	a-l	ind	RA,J	27	-	
<i>Hantzschia amphioxys</i> var. <i>capitata</i> Müller	Ogh-ind	a-l	ind	RA,J	2	-	
<i>Scenedesmus</i> sp. (B. J.) Kramer	Ogh-ind	ind	ind	NO	6	3	
<i>Scenedesmus</i> obliquus (B. J.) Cleve	Ogh-hob	sc-l	ind	O	1	-	
<i>Scenedesmus</i> spp.	Ogh-hob	sc-l	ind	not diagnostic	2	-	
<i>Planoula</i> aerophorea W. Smith	Ogh-ind	a-l	pH	O	13	1	
<i>Planoula</i> brevirostrata Cleve	Ogh-ind	a-l	ind	NO	1	1	
<i>Planoula</i> brevirostrata var. <i>unstrata</i> Hustedt	Ogh-ind	a-l	pH	NO	3	3	
<i>Planoula</i> divergens W. Smith	Ogh-hob	sc-l	pH	NO	5	4	
<i>Planoula</i> globosa Ehrenberg	Ogh-ind	a-l	ind	O	6	1	
<i>Planoula</i> globosa (H. L.) Hustedt	Ogh-hob	sc-l	ind	NO	1	1	
<i>Planoula</i> impingeri MBG	Ogh-hob	a-l	pH	not diagnostic	1	1	
<i>Planoula</i> microstoma (B. J.) Cleve	Ogh-ind	a-c	ind	S	8	-	
<i>Planoula</i> microstoma	Ogh-ind	a-c	pH	O	2	-	
<i>Planoula</i> microstoma	Ogh-hob	sc-l	ind	NO	7	2	
<i>Planoula</i> strobila (Gran) Cleve	Ogh-ind	a-c	pH	NO,F	1	-	
<i>Planoula</i> subcapitata Gregory	Ogh-ind	a-c	ind	RHS	1	-	
<i>Planoula</i> subcapitata Kramer	Ogh-hob	a-c	ind	NO	12	1	
<i>Planoula</i> subcapitata	Ogh-hob	a-c	pH	NO,NO,I	1	-	
<i>Planoula</i> viridis (Krammer)	Ogh-ind	ind	ind	NO,NO,I	11	8	
<i>Planoula</i> viridis (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	4	1	
<i>Planoula</i> spp.	Ogh-unk	unk	ind	not diagnostic	16	29	
<i>Staurodesma</i> acuta W. Smith	Ogh-ind	a-l	pH	NO	-	1	
<i>Staurodesma</i> acuta Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	1	2	
<i>Staurodesma</i> acutum (Müller) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	NO	22	26	
<i>Staurodesma</i> acutum (Müller) Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	NO,NO,I	3	2	
<i>Staurodesma</i> acutum (Müller) Meister	Ogh-ind	ind	ind	O	5	3	
<i>Staurodesma</i> spp.	Ogh-unk	unk	ind	not diagnostic	1	8	
Marine water					0	0	
Marine-Brackish water					9	0	
Brackish water					1	0	
Fresh-Brackish water					214	140	
Fresh water							
Total					216	142	
Abundance	Absent, Common, Few, Rare, VR, very rare,				F	R	
	VR, very very rare, Nonaren.						
Preservation	G, good; M, moderate; P, poor; VV, very poor				P	VVP	
RRH							

Salinity : pH : Current : 对于的適応性

Salinity : 海水濃度に対する適応性
 pH : 水素イオン濃度に対する適応性
 Current : 沖水に対する適応性
 I-h1 : 真淡水性種
 I-h2 : 好淡水性種
 I-p1 : 好淡水性種
 Ind : 混合不適応種
 Ogh-h1 : 好海水性種
 Ogh-h2 : 好酸好中性種
 Ogh-ind : 善酸不適応種
 Ogh-h3 : 善鹹性種
 Ogh-unk : 善鹹不適応種

調査地

A: 沿岸帶 B: 内海沿岸帶 C: 南海沿岸帶 D: 北海沿岸帶
 E: 沿岸帶 F: 南海沿岸帶 G: 北海沿岸帶 H: 遠洋性種
 F: 沿岸性種 G: 南海沿岸性種 H: 遠洋性種
 I: 最下流河川底生種群 II: 沿岸性種群 III: 上流水生種群 IV: 中-下流水生種群
 K: 高層底生種群 Q: 鮎底生種群 R: 鮎底生種群
 P: 高層底生種群 S: 鮎底生種群 T: 好海水性種 (以上はTakai & Yamada, 1995)
 S: 前浜生種群 T: 好淡水性種 (以上はTakai & Yamada, 1995)
 E: 沿岸性種群 H: 沿岸性種群 I: 伊藤・船内, 1991



第298図 主要珪藻化石群集

表 65 花粉分析結果

陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys* はコケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壤の表層部など大気に接触した環境に生活する一群（小杉、1986）である。特に、本種は離水した場所の中でも乾燥に耐えうる（伊藤・堀内、1989:1991）。また、堆積物の分析を行った際に優占（70～80%以上）していれば、空気に曝されて乾いた環境であったことが示唆される。これら分析層準の形成期は、基本的に湿地のような堆積環境下にあったと推定される。

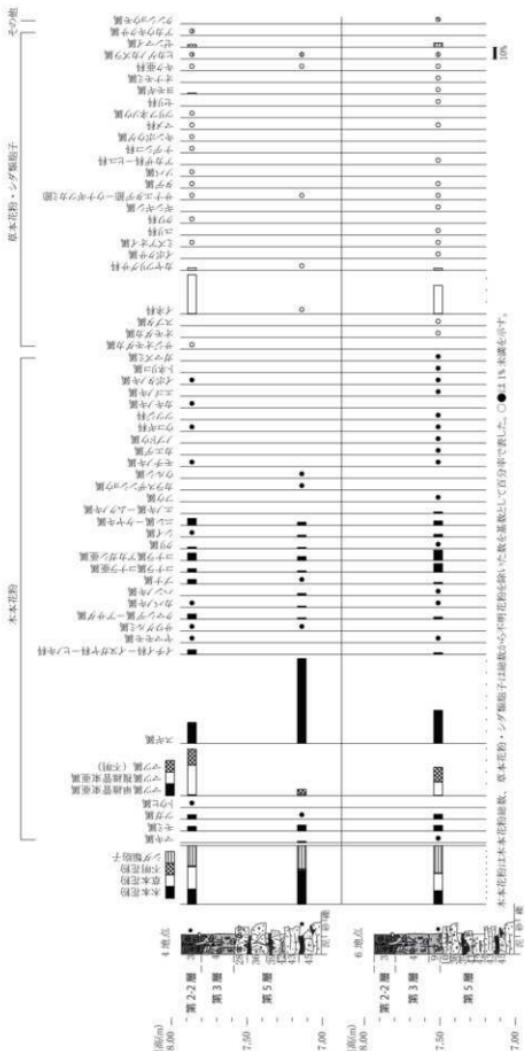
（5）花粉分析

結果を表 65、第 299 図に示す。4 区第 5 層、第 3 層下部、第 2 層の花粉化石群集は、調査地点の立地及び堆積環境を踏まえると、谷とその周囲の山地斜面の局所的な植生を強く反映していると推定される。また、第 2 層・第 3 層については生物擾乱や土壤生成作用が進行していることから、花粉化石群集は複数回の植生再生・更新を反映している群集の可能性が高い。これらの花粉化石群集の形成過程（タフォノミー）を踏まえ、植生遷について検討する。

繩文時代晩期末～弥生時代前期初頭に形成された第 5 層下部の花粉化石群集は木本花粉が卓越し、その中でスギ属が優占することが特徴である。スギ属の花粉生産量は膨大で、風媒性であるため広域に散布されるため、花粉化石産出率は実際の植生に対して過大評価される場合がある。今回の場合、4 区が位置する支谷奥部の第 5 層層準において、スギの埋没樹が確認されることから、その影響を強く反映している可能性が高く、スギ属以外の産出率が低かった木本類や、草本類などは実際の植生量より過小評価されていると見られる。

以上のことを踏まえると、繩文時代晩期末～弥生時代前期初頭の第 5 層形成期の谷底低地には、谷奥部の比較的安定した領域にスギ属などの木本類が分布し、谷内の流路沿いなど地下水位が高く、河川攪乱の影響が相対的に強い領域にイネ科やカ

種 別	45X		
	4倍点		6倍点
	4層上 第2層	45層 第5層	9層 第3層
木本花粉			
マツ属	—	3	2
モミ属	8	13	10
ブガ属	8	1	9
トクシ属	1	—	—
ツブ真珠賀曾東垂属	1	—	—
ツブ真珠賀曾東垂属	53	4	25
ツブ真珠賀曾東垂属	28	10	27
スギ属	37	188	61
イチイ科	8	—	3
ヤマモモ属	2	—	1
サワグルミ属	1	1	—
タラシキ属-アサダ属	9	3	4
カシノキ属	2	3	1
ハンノキ属	—	5	2
クス属	8	1	3
コナラ属-コナラ属	6	3	16
コナラ属-カガシ属	13	9	19
クリ属	3	3	2
シイ属	2	4	5
レム属-ヤマモチ属	12	7	8
エノキ属-ムクノキ属	—	—	3
ツバキ属	—	—	1
カラヌクシシヨウ属	—	1	—
ウルシ属	—	1	—
セナノキ属	1	—	1
カエデ属	—	—	2
ノブドウ属	—	—	1
ウリ科	1	—	1
ツヅジ科	—	—	2
カキノキ属	1	—	—
エゴノキ属	—	—	2
イボクマキ属	1	—	2
トネリコ属	—	—	1
ガマズミ属	—	—	2
草本花粉			
セイヨウキダチ属	1	—	—
オモダカ属	—	—	1
スプル属	—	—	2
イネ科	270	2	231
カヤツリグサ科	17	3	17
イボクマキ属	—	—	1
ミズアヤメ属	5	—	8
ユリ科	—	—	4
ゼンバツ科	1	—	—
ゼンバツ属	—	—	1
ナツツバタ属-ウナギゼカヒ属	5	3	3
タガザ属	1	—	1
ソバ属	1	—	—
カザゲ-ヒル科	—	—	1
ナガシコ科	1	—	—
キンポウゲ属	1	—	—
マツ科	3	—	1
ツリフネノキ属	1	—	—
セピ科	—	—	2
ヨモギ属	9	—	6
オナモ属	—	—	1
キク科	1	1	2
不明花粉	9	6	2
シダ類孢子			
ヒカクシカズラ属	3	2	1
ゼンマイ属	19	—	35
アカウカクサ属	1	—	—
セシウム類孢子	261	183	415
合 计	206	260	216
木本花粉	317	9	282
草本花粉	9	6	2
不明花粉	284	185	451
シダ類孢子	807	454	949
その他	—	—	1
ランシウモ属	—	—	1



第299図 花粉化石群集の層位分布

ヤツリグ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節などの草本類が生育していたものと思われる。一方、谷周縁から山地斜面にかけては針葉樹のスギ属のほかカラスザンショウ属・ウルシ属、ニレ属－ケヤキ属、クマシデ属－アサダ属、サワグルミ属などの高～低木となる落葉広葉樹が、より安定した山地領域にはコナラ亜属のほか、常緑広葉樹のアカガシ亜属が分布していたものと思われる。

第3層下部（9～12世紀）の花粉化石群集は、木本花粉においてマツ属（複雑管束亜属を含む）が増加すること、草本花粉が増加し、木本花粉とほぼ同率を占めるようになること、木本・草本ともに種類数が増加することが特徴である。木本花粉ではマツ属複雑管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）の増加が顕著である。本種類は生育の適応範囲が広く、極端な陽樹であることから、現在では海岸植生や二次林の代表的な樹種となっている。マツ属以外の木本花粉の種類構成をみると、ツツジ科、ウコギ科、ノブドウ属など、二次林や林縁の植生を構成する要素が特徴的に産出する。また、草本花粉ではイネ科の増加が顕著であり、オモダカ属、スプタ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ユリ科、イネ科などの水生植物ないしその種を含む種類の数も増加する。以上のことから、9～12世紀は、調査区が位置する谷内から山地斜面の植生は、第5層形成期と大きく異なり、谷斜面ではマツ属などの二次林要素が分布を拡げ、谷底低地ではスギ属などが減少し、草本類主体の植生に変化していたことが推定される。このような植生変化の原因については、第5層累重中の崩積土やその再堆積物の土石流堆積物の形成状況から、山地斜面から谷底低地にかけての植生に対する地表擾乱や河川擾乱の影響と、発掘調査成果から推定される古墳時代から古代にかけての人間活動の活発化に伴う人為的植生擾乱の影響が複合的に関係していると考えられる。

中世（鎌倉時代）の第2-2層になると、花粉化石群集は木本花粉の占める割合がさらに減少し、草本花粉が増加する。木本花粉ではマツ属複雑管束亜属がさらに増加するものの、種類構成は単調になり、栽培種のカキノキ属も産出するようになる。草本花粉ではイネ科がさらに増加し、畑作物であるソバ属花粉も産出するようになる。これらのことから、中世の鎌倉期には、植生擾乱の影響が強まり、谷周囲の山地斜面などを中心にマツ林などの二次林領域が拡大し、林分は衰退したことが推定される。また、谷底低地には草本主体の植生が拡がっていたと推定される。

（6）植物珪酸体分析

結果を表66、第300図に示す。各地点の結果をみると、栽培種のイネ属の植物珪酸体は、古代以降の堆積物から普遍的に産出することが確認される。年代別にイネ属機動細胞珪酸体の含量密度の地点別に整理すると以下のようになる。

古代（7世紀～9世紀）の層準では、4区5地点4038溝で400個/g、3区12地点3003溝で300～900個/g、2区13地点第3-1・3-2層で700～800個/gを示す。このように古代の層準のイネ属含量密度は3区・2区側で高い傾向を示す。

9世紀～12世紀頃の層準では、4区第3層の3地点で5500個/g、4地点で900～1700個/g、6地点・8地点で1000個/gを示す。このように9世紀～12世紀頃の層準では1000個/g以上の含量密度を示すが、地点によるバラツキが大きく、谷奥部で含量密度が低く、谷央部で高くなる傾向が窺える。

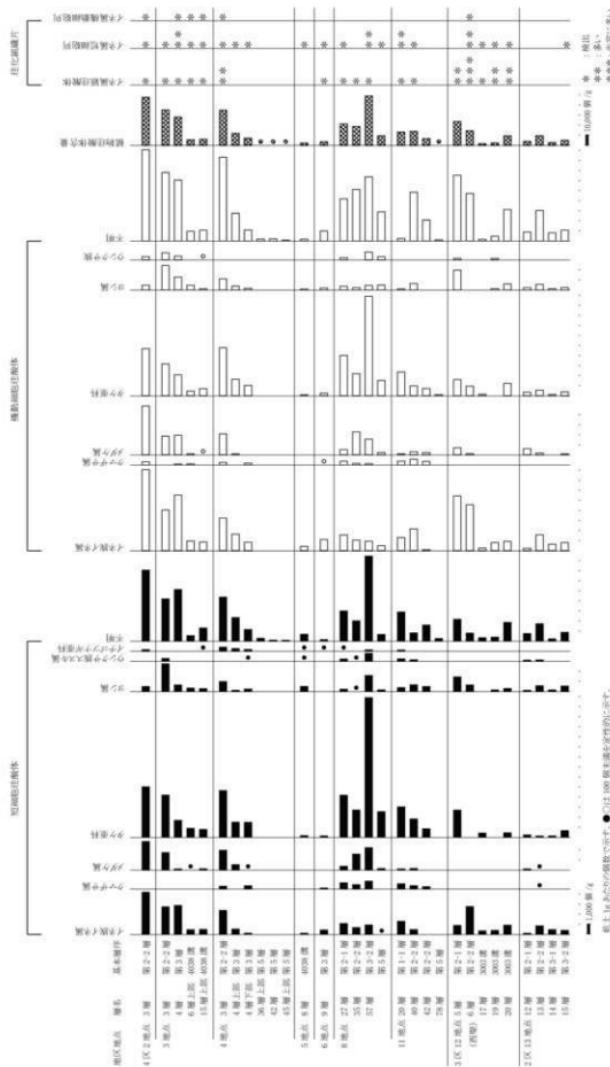
中世鎌倉期（第2-2層）の層準では、4区2地点で4900個/g、3地点で1900個/g、4地点で2100個/g、8地点で2300個/g、3区12地点で4600個/g、2区13地点で1600個/gを示す。このように中世鎌倉期の層準では1600個/g～4900個/gと相対的に含量密度が高くなり、特に3区～4区では2000個/g以上の含量密度を示すようになる。

表 66 植物珪酸体含量

分類群	41C																	
	1段目: 地点、2段目: 地点、3段目: レンジ削除率、4段目: 基本属性		41C		41C		41C		41C		41C		41C					
	2地点	3地点	3地点	4地点	6地点	15地点上	3地点	4地点上	4地点下	30地点上	42地点	45地点上	5地点	6地点	8地点			
第2-1層	第2-2層	第3層	第2-2層	第3層	第4層	第6層	第15層上	第2-2層	第3層	第4層上	第42層	第45層上	第5層	第6層	第8層			
第2-3層	第3層	第4層	第6層	第15層上	第2-2層	第3層	第4層上	第42層	第45層上	第5層	第6層	第8層	第9層	第27層	第35層			
第3層	第4層	第6層	第15層上	第2-2層	第3層	第4層上	第42層	第45層上	第5層	第6層	第8層	第9層	第27層	第35層	第3-1層	第2-2層		
イソク葉表面細胞壁珪酸体																		
イソク族(イソ属)	4,200	2,800	2,900	500	500	2,400	600	100	-	-	-	100	500	1,100	700			
クサザサ属						300	-	300	-	-	-	-	100	600	400			
ダケ属	2,900	1,700	100	<100	100	2,000	600	<100	-	-	-	-	400	1,600				
タケ属	5,100	4,200	1,700	900	800	4,700	1,200	1,500	-	-	-	200	200	4,200	2,800			
ヨシ属	500	2,800	700	400	300	1,000	100	300	-	-	-	300	-	200	<100			
ウツクサ族(ススキ属)	-	300	-	-	-	-	-	-	<100	-	-	-	<100	-	200	<100		
イゴノリナガネ科	200	-	-	-	<100	400	300	200	-	-	-	<100	<100	<100	-			
不明	7,100	4,200	5,200	600	1,300	4,400	2,400	1,200	300	100	100	700	200	3,000	2,000			
イモ科葉身隔壁動植物珪酸体																		
イモ族(イモ属)	8,100	4,100	5,500	1,000	900	3,200	1,700	900	-	-	-	400	1,100	1,600	1,100			
クサザサ属	300	-	100	100	-	300	-	200	-	-	-	-	<100	400	200			
ダケ属	4,900	1,900	2,000	100	<100	2,100	100	-	-	-	-	-	600	2,300				
タケ属	4,700	3,200	2,100	500	700	4,800	1,200	1,100	-	-	-	100	300	4,100	2,200			
ヨシ属	500	2,500	1,200	500	100	1,100	400	300	-	-	-	100	200	400	300			
ウンカサ族	300	700	400	-	<100	-	-	-	-	-	-	-	-	200	-			
不明	9,100	6,000	6,100	1,000	1,100	8,400	2,800	1,100	200	200	100	200	1,000	4,200	5,100			
合計																		
イモ科葉面粗面隔壁動植物珪酸体	19,900	16,000	10,600	2,400	3,200	15,200	5,400	3,700	300	100	100	1,700	1,800	9,900	7,700			
イモ科葉面粗面隔壁動植物珪酸体 植物珪酸体合計	28,900	19,200	17,600	3,200	3,000	20,000	6,700	3,400	200	100	100	900	2,700	11,400	11,200			
珪化組織片						35,200	28,200	5,600	6,200	35,200	12,100	7,100	500	300	2,600	3,700	21,300	16,900
イモ属隔壁動植物珪酸体	*	*	*	*	*	*	*	*	-	-	-	-	-	*	*	*	*	*
イモ属粗面隔壁動植物珪酸体	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
イモ属隔壁動植物珪酸体	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
合計																		
イモ科葉表面隔壁動植物珪酸体																		
イモ族(イモ属)	1,000	<100	1,300	500	-	-	900	2,600	400	400	900	100	300	300	300	300	300	400
クサザサ属	800	-	500	300	200	-	-	-	-	-	-	-	<100	-	-	-	-	-
ダケ属	2,200	200	100	200	-	-	-	-	-	-	-	100	<100	-	-	-	-	-
タケ属	13,900	2,600	3,000	1,800	900	-	2,700	-	500	-	500	300	300	100	200	700	-	-
ヨシ属	1,600	-	280	400	700	500	-	1,800	700	-	200	300	100	600	200	600	600	600
ウツクサ族(ススキ属)	600	-	300	200	-	-	-	-	-	-	-	100	100	-	-	-	-	-
イゴノリナガネ科	200	-	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明	8,500	700	2,900	800	1,600	300	2,200	800	400	400	1,500	800	1,800	300	900	900	900	900
イモ科葉身隔壁動植物珪酸体																		
イモ族(イモ属)	1,000	500	1,300	2,200	100	-	5,500	4,600	300	800	900	300	1,600	700	800			
クサザサ属	200	-	400	600	400	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ダケ属	1,600	300	100	300	200	-	700	200	-	-	-	600	200	-	100	-	-	-
タケ属	9,500	1,500	2,400	1,800	700	100	1,600	1,000	200	-	-	1,200	400	600	200	400	-	-
ヨシ属	500	500	100	700	-	-	2,000	-	-	200	600	300	600	200	300	200	-	-
ウツクサ族(ススキ属)	600	300	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イゴノリナガネ科	200	-	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明	8,500	700	2,900	800	1,600	300	2,200	800	400	400	1,500	800	1,800	300	900	900	900	900
合計																		
イモ科葉面粗面隔壁動植物珪酸体																		
イモ族(イモ属)	29,000	3,700	8,800	4,500	3,200	300	7,300	4,300	1,200	1,000	3,600	1,600	3,800	1,100	2,500			
イモ科葉面粗面隔壁動植物珪酸体 植物珪酸体合計	49,300	9,800	13,400	14,200	6,800	600	23,900	21,800	1,800	2,200	9,600	4,100	9,700	2,900	5,300			
珪化組織片																		
イモ属隔壁動植物珪酸体	*	-	*	*	*	-	-	* *	***	*	**	* *	-	-	-	-	-	-
イモ属粗面隔壁動植物珪酸体	** *	*	** *	*	*	-	-	- * *	*	*	*	*	*	-	-	-	*	*
イモ属隔壁動植物珪酸体	-	-	-	-	-	-	-	-	*	-	-	-	-	-	-	-	-	-
合計																		

数値は含浸浓度(個/g)を示し、100位で丸めた値として示す(000単位にすると、100:1100個/gと読みます)。

珪化組織片の症状は一が未検出、*が検出、**が多く検出、***が非常に多く検出を示す。



第300図 植物珪酸体含量の層位分布

中世室町期（第2-1層）の層準では、4区8地点で600個/g、3区12地点で5500個/g、2区13地点で300個/gを示し、近世以降（第1-1a層）の層準では4区11地点で1300個/gを示す。このように中世室町期の層準では、2区～4区のいずれも含量密度が著しく低下し、1000個/g以下となる。近世以降の層準では4区で1300個/gを示している。

既往の埋没水田跡の土壤では、イネ属機動細胞珪酸体の含量密度が5,000個/gを示す場合が多く、稲作の指標となっている（杉山、2000）。ただし、水田遺構が確認されていても3,000個/gの場合（古環境研究所、2009）や、イネ属珪酸体がほとんど検出されない事例（パリノ・サーヴェイ、2002）もある。また、同一層準の水田耕作土における植物珪酸体の空間的な産状が地点によって大きく異なる事例もある（辻本ほか、2003；辻本・辻、2002など）。さらに、外山（2002）はイネ属の含量密度が水田の微地形及びそれを構成する堆積物の粒度組成や一筆単位の水田面積の違いと関連することを指摘している。一方、水田耕作土を覆う自然堆積層や隣接する遺構埋土からイネ属珪酸体が大量に検出される事例もある（辻ほか、2004）。このように、イネ属由来の植物珪酸体の産状は様々であり、辻（2000）が指摘しているように植物化石群集の形成過程（タフォノミー：堆積物中の取り込まれ方や分解作用など）を踏まえることが大切で、遺跡形成過程の脈絡と対比させて検討する必要がある（辻本ほか、2007）。ここでは、そのような視点から各時期の産状について検討する。

古代：4区5地点の4038溝充填堆積物の分析層準は、水の流れが減衰し、弱い流れのある湿地のような堆積環境で形成された上部層準である。イネ属を含む植物珪酸体群集は、溝沿いより流入したものが主体と判断される。したがって、当該期の4038溝周囲に栽培植物のイネ属が生育していた可能性があるものの、人為的に投棄された稻わらや稻がらに由来する可能性もある。また、4区北東部の山地斜面下部で古墳時代の遺構が確認されていること、4038溝充填堆積物は古墳時代の堆積物を侵食していることから、古い地層から再堆積した植物珪酸体の可能性もある。

一方、3区3003溝充填堆積物と2区3-1層・3-2層の分析層準は、周囲から流入した氾濫堆積物などを母材とする土壤生成層準に相当する。したがって、植物珪酸体群集は氾濫堆積時に集水域より運搬堆積した植物珪酸体のほか、土壤生成が進行する時期に蓄積した植物珪酸体が混在していることになる。各層の土壤生成期間は不明であるが、層相を見る限り、長期にわたると考えにくく、比較的の短期間の可能性がある。そうだとすると、イネ属植物珪酸体含量密度が800個/g前後程度と少なかつたものの、調査地点においてイネ属が生育し、栽培が行われていた可能性は充分考えられる。特に3区3003流路地点では畦畔遺構が確認されており、同調的な結果と見なせる。

9世紀～12世紀：4区第3層は谷斜面中～下部にかけて分布する堆積物で、先述したように間欠的な土砂流出や人為的營力が及ぶ層準を挟む、湿地の堆積環境で形成されたと推定される。分析層準は擾乱が顕著な層準に相当する。このことから、植物珪酸体群集は流出土砂とともに運搬堆積したものと人為的攪拌や生物擾乱が進行する時期に取り込まれたものに由来すると判断される。栽培種のイネ属の含量密度は、地点によって差異が生じているものの、古代の層準より総じて高い密度を示している。また、密度差異については、上記したように同一水田面であっても水田一筆単位や地形勾配によってイネ属の含量密度に差異が生じる。以上のことを総合的に捉えると、第3層形成期には第3層分布域において稲作が行われるようになった時期が存在する可能性が高い。また、4地点の層位的産状及び堆積物の擾乱が上位層準で顕著であることから、第3層上部形成期ほどその可能性が高いといえる。

中世鎌倉期（第22層形成期）：黒色を呈する腐植質土壌からなる。由来の異なる堆積物の偽蹠・微小ブロックが混じるなど、人為的に攪拌された堆積物と推定される。したがって、本層の植物珪酸体群集は調査地点で生育していたイネ科植物に由来するものが多く含まれていると推定される。イネ属の含量密度は第3層に比較して明らかに増加しており、第2-2層形成期には調査区の広い範囲において稲作が行われていたことが推定される。3区・2区の氾濫堆積物を母材とする腐植質土壌層についても同様の状況が想定される。

中世室町期の第2-1層は、4区・3区・2区のいずれの地区でも土壤生成が進行する時期を挟在し、人為的營力が及んだ層相をなす。このことから、第2-1層の植物珪酸体群集も土壤生成が進行する時期に取り込まれた植物珪酸体が含まれていることになる。イネ属含量密度は、3区で高密度を示すが、2区及び4区では低密度であり、各調査区で土地利用状況が異なっていた可能性がある。この点は発掘調査成果を踏まえ、再評価する必要がある。

近世以降：4区第1-la層は人為的營力により形成された灰色～暗灰色砂質泥～泥質砂の偽蹠・微小ブロックからなり、人為的に攪拌されている状況が確認される。したがって、植物珪酸体群集は異地性の堆積物に由来する可能性もあり、栽培種のイネ属の評価についても調査地点での稲作の可能性のほか、整地のために耕作土が利用されている可能性の双方が考えられる。

以上、植物珪酸体群集の産状からみた調査区の土地利用状況について述べたが、栽培種のイネ属以外の種類の産状において、3区・4区では第3層以降の層準では、高燥な開けた場所に生育するメダケ属を含むタケアキ科やスキ属を含むウシクサ族、大型の抽水植物であるヨシ属などの含量密度も高くなる。このような層位の産状の変化は、調査区周辺の植生の変化を反映していると見られ、第3層形成期以降の低地にはヨシ属が生育し、山地斜面などにスキやササ類が生育する開けた領域が拡大したことを見ていると考えられる。先述の花粉化石群集の結果とも同調的である。

(7) 大型植物遺体

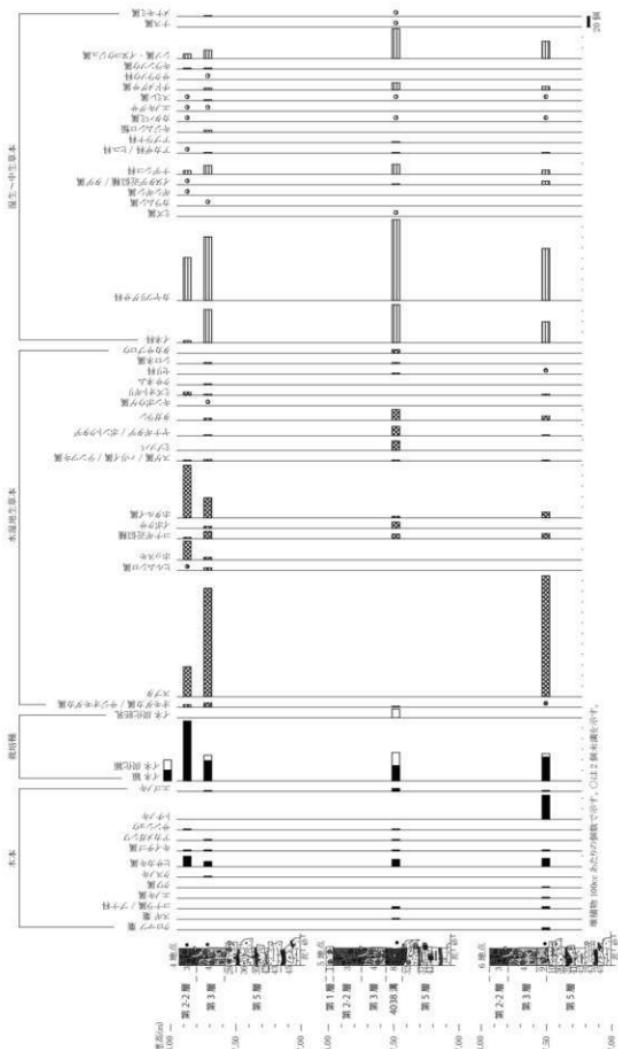
結果を表67、第301図に示す。4地点の3層（第2層）・4層（第3層）、5地点の4038溝8層、6地点9層（第3層下部）の大型植物化石群集は、いずれも圧倒的に水湿地生草本主体の組成である。产出種類のうち、栽培種は、各試料からイネの類が計269個（うち44個が炭化）、5地点8層（4038溝上部）から炭化した胚乳が17個の合計286個が確認される。また栽培種の可能性を含むシソ属（イヌコウジ属）の果実が各試料で見られ、その合計は133個である。

栽培種とその可能性を持つ分類群以外を見ると、草本類ではオモダカ属、サジオモダカ属、オモダカ科、スプタ、ヒルムシロ属、ホッスモ、ミズアオイ近似種、コナギ近似種、イボクサ、アゼスゲ類、スゲ属、ハリイ属、テンツキ属、ホタルイ属、カヤツリグサ科、ミズ属、カラムシ属、ギシギシ属、ミゾソバ、ヤナギタデ近似種、ポンクトクタデ近似種、タガラシ、ミズオトギリ、クサネム、セリ科、キランソウ属、シロネ属、タカサゴロウなどの水湿地生植物が大半を占める。また、木本類では河畔や伐採地、崩壊地、林縁などの明るく開けた場所に生育する樹種などが確認される。

以上の4地点の第22層（3層）・第3層（4層）、6地点第3層下部（9層）、5地点4038溝（8層）の堆積環境と大型植物化石群集の種類構成から、各層形成期の調査地点は水生植物が繁茂する湿潤な湿地のような堆積場であったことが推定される。

7世紀後葉頃～9世紀の4038溝の分析層準である5地点8層は、層相から流れの緩やかな湿地のような堆積環境で形成されたと推定される。大型植物化石群集は局地性が強いと判断される。大型植

表 67 痘害遺体同定結果



第301図 大型植物化石群集の層位分布

物化石群集を見ると、草本主体の組成を示す。各種類の産状を見ると、水生植物のスバタ属、湿生～中生植物のイネ科、カヤツリグサ科、シソ属・イヌコウジュ属、栽培種のイネの穎（炭化したものを持む）の産出が目立つ。このほか、水生植物では、オモダカ属・サジオモダカ属、コナギ近似種、ホタルイ属、スゲ属の仲間、ヤナギタデーポントクタデ、タガラシ、ミズオトギリなどの中型から小型の抽水植物が産出する。これらの多くの種類は水田雑草の種類である。また、湿生～中生植物ではカタバミ属などの人里植物も確認される。以上のことから、4038溝沿いには水湿地生の草本類が生育する湿地のような場所であったが、その周囲にはカタバミ属などが生育する比較的高燥な場所も存在したことから、栽培種のイネの穎及び炭化したイネの胚乳が特徴的に産出した。これらは、何らかの要因で火熱を受けて炭化したものが、人為的に投棄されたもの可能性が強い。当時の栽培種としてイネ属が存在し、利用されていたことは確かである。このほか栽培種を含むシソ属（イヌコウジュ属）の果実も見られ、栽培種であればシソの利用も考えられる。

一方木本類では、高木となる種類として、針葉樹のスギ、落葉広葉樹のブナ科、低木から亜高木であるヒサカキ属、谷沿いなどに分布する落葉小高木のエゴノキ属などが確認される。このうちエゴノキは河畔林要素の落葉広葉樹であり、谷沿いの丘陵斜面に生育していたと考えられる。河畔林要素の落葉広葉樹であり、谷沿いの丘陵斜面に生育していたと考えられる。また、常緑低木類のヒサカキ属は常緑広葉樹林（照葉樹林）の林床に生育する要素でもあり、当時の谷沿いの植生が暖温帶性の植生であったことが推定される。

9世紀～12世紀にかけて形成された第3層の大型植物化石群集は、草本主体の組成を示し、木本類が減少傾向を示す。4038溝充填後の調査区一帯はそれまで存在した建物跡などが多くなり、土地利用が大きく変化したことが発掘調査から確認されている。木本の種類構成が単調となることは、発掘調査結果とも同調的で、調査区周辺の森林植生が衰退していることを示している可能性がある。また、草本類の組成は4038溝充填堆積物と同様であるが、ミゾソバ属やヤナギタデーポントクタデ、タガラシ、ミズオトギリなどの中型から小型の抽水植物が多少減少している。本層からも栽培種のイネの穎が産出する。第3層が人為的に攪拌された堆積物であること、植物珪酸体において栽培種のイネ属が産出することを踏まえると、谷内の稲作に伴うものと推定される。

一方木本類では、第3層下部では高木となる種類として、針葉樹のクロマツ、落葉広葉樹のトチノキ、谷沿いの水分条件の良い場所に多い落葉高木のエノキ属、低木から亜高木であるヒサカキ属、谷沿いなどに分布する落葉小高木のエゴノキ属などが確認されるが、上部では高木となる種類が減少している。下部層準で産出するトチノキは河畔林要素の落葉高木で、アカ抜きすれば種子内部の子葉が食用可能な有用植物である。今回産出したトチノキの種子はほとんどが破片であったことから、トチノキの種子の利用も想定される。

中世鎌倉期の第2・2層からは、イネの穎が非常に多産する。本層は人為的攪拌の痕跡が確認されることから、当時の栽培されていたものに由来する可能性がある。また、木本由来の植物化石の産出数・種類数がさらに減少する。草本類は依然として湿地性植物が多いが、イネ科などの湿生～中生草本が少なくなる傾向がある。谷沿いにはエゴノキや、ヒサカキ属などが生育していたものの、本時期には最も林相が単調になった可能性があり、その背景として耕作地の拡大等の人間活動が活発になったことが想定される。

5. 調査区の古環境変遷

ここでは、上述してきた各分析結果を複合的に捉え、調査区とその周辺の環境変遷及び土地利用状況について述べる。

・4区第5層形成期（縄文時代晚期から弥生時代中期）

放射性炭素年代測定結果から、縄文時代晚期～弥生時代前期から弥生時代中期と推定される。当時の枝谷内には、間欠的な土砂流出がある、静穏期には緩やかな流れのある湿地のような堆積場であったと推定される。静穏な堆積期には植生が成立しており、谷奥部では埋没樹の存在から林分が形成されていたことが窺える。また、谷内では泥炭質堆積物が堆積し続けることから、この期間を通じて、谷内の地下水位が上昇傾向にあったことが示唆される。なお、埋没樹の樹種はスギであり、高原（1998）が指摘している日本海側のスギの分布拡大を考える上で貴重な成果である。

これら第5層の谷充填堆積物中には、その周縁部において山地斜面側より崩積した山地を構成する花崗岩の風化堆積物を挟む。発掘調査により断面が作成された北側斜面の断面では、崩積土中に丸木が取り込まれており、比較的規模の大きな斜面崩壊が起こった可能性がある。年代的には、縄文時代晚期から弥生時代のある時期と推定される。古代以降の人为的營力（攪拌や切土）によって上部層準が消失しているものの、残存する上部は土壤生成作用が及んでおり、崩積土形成後に植生が再生している状況が示唆される。また、第5層最上部には、その再堆積物と見られる塊状をなす淘汰不良の土石流堆積物が谷内のはば全域に堆積している。年代的には弥生時代中期以降、古墳時代までの間の時期と推定される。このような縄文時代晚期以降の崩積土の形成及びその後の土石流の発生、土砂流出は、枝谷から2区などが位置する本谷にかけての地形や水文条件を変化させただけでなく、土地利用などの人間活動においても変化をもたらした可能性がある。発掘調査では、谷北側の斜面下部において古墳時代の遺構が検出されており、古代以降には崩積土の分布域を中心に遺構が展開することからも示唆される。

崩積土の形成以前の調査区の植生は、谷底低地には谷奥部を中心に針葉樹のスギ属が分布し、部分的にイネ科やカヤツリグサ科、サナエタデ節-ウナギツカミ節などの草本類が生育する場所も存在した。また、谷沿いの山地斜面などにはカラスザンショウ属・ウルシ属、ニレ属-ケヤキ属、クマシデ属-アサガ属、サワグルミ属などの高-低木となる落葉広葉樹が生育し、山地斜面の安定した場所にカシ類などの常緑広葉樹が分布していたものと推定される。このような谷内の植生は土砂崩れとその後の土石流によって、著しく擾乱され消失したと見られる。なお、発掘調査では弥生時代中期頃の石斧が出土しており、弥生時代の植生干渉が崩積との関連性も想定される。この点については、今後の情報の蓄積をもって再評価したい課題である。

・第4層形成期～4区4038溝充填堆積物形成期

第5層形成直後の植生のない裸地化した地表面では、降水や湧水などによる集約した水の流れが生じ、谷線部分を洗掘してリル地形を形成したと見られる。4038溝はこのリル地形が側・下刻し、発達したものと推定される。この溝の発達により、その溝岸部から山地斜面にかけての水文条件も変化し、比較的乾燥化が進行したものと推定される。また、4038溝の側壁部分は人为的に攪拌されており、その際、生じた偽礫が充填堆積物中に混じるなど、自然地形を配水などの施設として利用していた可能性がある。

溝充填堆積物の堆積状況をみると、侵食と堆積を繰り返しながら埋積が進行している状況が確認さ

れる。出土遺物から7世紀頃から9～10世紀にかけて埋没している。当該期の土砂流出は3区・2区が位置する本流の谷底低地の地形条件にも影響を与えたことが推定される。また、溝充填堆積物より下位層準の変形構造から、溝埋積期から第3層形成期までの間の時期に地震イベントが発生していることが推定される。なお、この時期に該当する地震動に伴う変形構造は、東桂見遺跡や高住平田遺跡でも確認されている。

また、2地点では崩積土を人為的に掘削して溝を構築している状況が確認される。溝充填堆積物からは多数の土器片などの遺物が出土し、植物珪酸体分析により栽培種のイネ属珪酸体も産出している。さらに花粉分析結果では、山地斜面から谷底低地の植生が第5層形成期と異なり、二次林や草地など植生攪乱がおよんだ植生を示唆する花粉群が確認されている。このように4038溝の充填期には調査区における人間活動が活発になり、自然環境の改変が進行した時期といえる。

一方、3区では縄文時代晚期から古代までの間の層準において3003流路が形成されている。この流路と4038溝との層位関係については充分検討できていないが、同時期に形成されている可能性があり、そうだとすると湖山池の湖水準の低下が想定される。

・第3層形成期

4区第3層は、枝谷斜面下部を中心にシート状に堆積している地層で、肉眼及び土壤薄片による微細構造の観察結果などから、間欠的な土砂流出のある、地下水位の高い湿地のような環境で形成されたことが推定される。土砂流出後の静穏期の谷内は水湿地生の草本植生に覆われていたことが推定される。ただし、下位の第4層・第5層との層界付近では人為的に攪拌された構造が確認されており、栽培種のイネ属の植物珪酸体や大型植物化石も特徴的に産出するようになる。土壤薄片観察では作製した層準は地震動によって著しく変形しており、明瞭な人為的攪拌構造を確認することができなかつたものの、上記のことを踏まえると、枝谷内は放棄されたような状態ではなく、稻作地としての土地利用が行われていた、あるいは耕作が行われた時期を挟在することが推定され、中世期の土地利用の変化が示唆される。

・第2層形成期

鎌倉時代と推定される第2-2層は黒色を呈する腐植質土壤からなり、由来の異なる堆積物の偽礫・微小ブロックが混じる、人為的に攪拌された堆積物からなる。薄片観察では地下水位の高い状況下で形成されたこと、現在の水田耕作土と類似する特徴も確認されている。また、植物珪酸体分析では、栽培種のイネ属植物珪酸体の多産傾向が確認されており、本流側の3区・2区でも同様の産状が確認される。このことから、第2-2層形成期には4区～2区の広い範囲にわたって稻作が行われるようになったことが推定される。花粉化石で産出するミズアオイ属、アカウキクサ属などの水湿地生草本・シダ類は、古くは水田雑草としても一般的であったことから、当時も水田雑草として生育していた可能性がある。また、花粉化石群集ではソバ属の花粉化石も確認されており、周辺でソバ属の栽培やその利用が推定される。一方、本時期には周辺森林植生は古代の時期よりもさらに人為的攪乱の影響を強く受けていることになり、林分が衰退し、マツ二次林が分布を拡げた可能性が高い。

ところで、4区第3層～第2層形成期は、層相変化から、地下水位の高い状態が継続していたことが推定される。星見（2009）による湖山池の古地理図では、中世は弥生よりも湖水位が上昇しており（「2.5m面」の中世頃の埋積により湖の閉塞化が要因か？）、今回の結果は同調的といえる。また、調査地域の空中写真判読では、良田の集落前面には明瞭な段差があり、その前面の地形面が干拓地で

ないとしたら、その面は湖岸段丘面に相当する可能性があり、そうだとすると中世以降のある段階の湖水位の再低下などによって、湖岸段丘が形成されたことが想定される。このような地形発達史については、現段階で充分な検討ができておらず、今後の調査課題としたい。

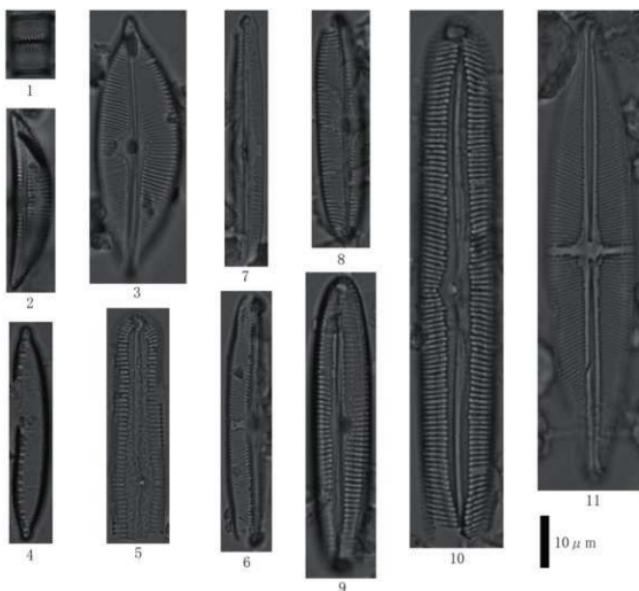
室町時代頃にかけて形成された第2-1層は、4区～2区のいずれの地区も人為的に攪拌された堆積物からなる。各調査区における栽培種のイネ属植物珪酸体の産状は、調査区ごとで大きく異なる。3区ではイネ属の含量密度が比較的高く、堆積環境を踏まえると、稲作が行われていた可能性がある。一方が、2区・4区ではイネ属の含量密度が相対的に低く、3区とは異なる土地利用状況や履歴をたどっている可能性がある。この点は発掘調査成果を踏まえ、再評価する必要がある。

引用文献

- 有村玄洋・鬼輪 豊. 1971. 有明海北部及び西部沿岸地域の埴質水田土壤の二・三の物理的性質と土壤微細形態学的観察. 九州農業試験場報告. 16. 63-183.
- 安 昭炫・辻 誠一郎. 2010. 花粉分析. 鳥取県埋蔵文化財センター調査報告31 鳥取県鳥取市青谷町 青谷上寺地遺跡10 第10次発掘調査報告書. 鳥取県埋蔵文化財センター. 116-120.
- 安藤一男. 1990. 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理. 42 (1990). 73～88. aNN. Tohoku Geogr. Assoc.
- Cholnoky, B. J. 1968. Die Okologie der Diatomeneen in Binnen-Gewässern. Lehre.
- Desikachari, T. V. 1987. Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation. Madras. Printed at TT. Maps & Publications Private Limited. 328. G. S. T. Road, Chromepet, Madras-600044. 1-13. Plates : 401-621.
- Horst Lange-Bertalot, 2000. ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA : Annotated diatom micrographs. Witkowski,A.,Horst Lange-Bertalot, Dittmer Metzeltin: Diatom Flora of Marine Coasts Volume 1. 219 pts. 4504 figs. 925 pgs.
- Hustedt, F. 1930. Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. In Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz. 7. Leipzig. Part 1. 920p.
- Hustedt, F. 1937-1938. Systematische und ökologische Untersuchungen mit den Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. I ~ III . Arch. Hydrobiol. Suppl. 15. 131-809p, 1-155p. 274-349p.
- Hustedt, F. 1959. Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. In Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz. 7. Leipzig. Part 2. 845p.
- Hustedt, F. 1961-1966. Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. In Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz. 7. Leipzig. Part 3. 816p.
- 伊藤良水・堀内誠示. 1989. 古環境解析からみた陸生珪藻の検討 一陸生珪藻の細分一. 日本珪藻学会第10回大会講演要旨集. 17.
- 伊藤良水・堀内誠示. 1991. 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 日本珪藻学誌. 6. 23-44.
- 株式会社古環境研究所. 2009. 古環境調査土壤分析. 「鳥取県埋蔵文化財センター調査報告27 鳥取県鳥取市青谷町 青谷上寺地遺跡10 第9次発掘調査報告書」. 鳥取県埋蔵文化財センター. 149-174.
- 石川茂雄. 1994. 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会. 328p.

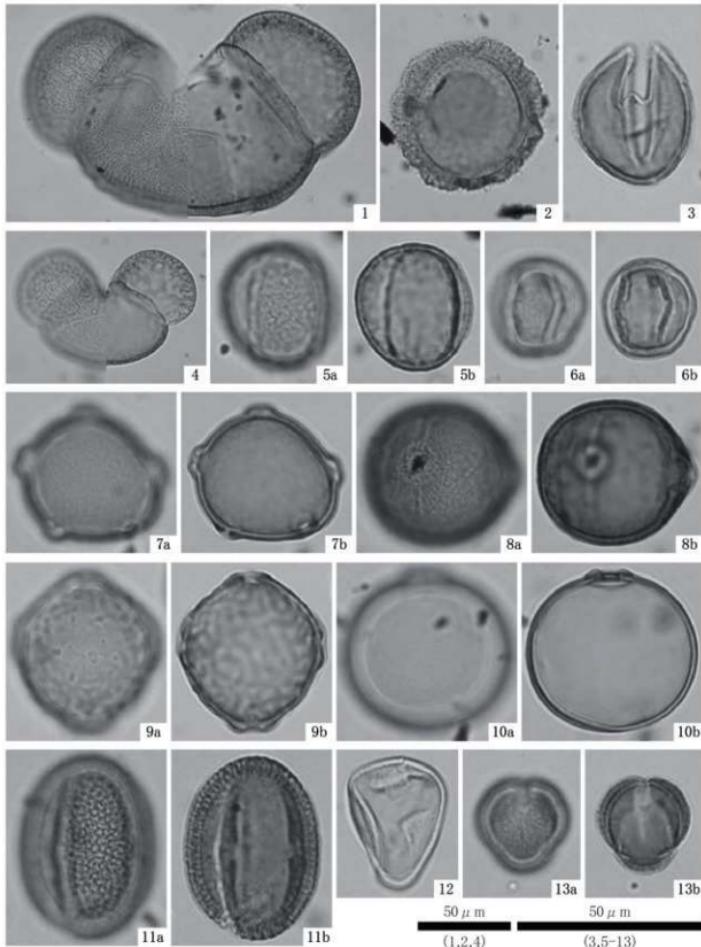
第Ⅷ章 自然科学分析

- 近藤鉢三, 2010. プラント・オ・パール図譜. 北海道大学出版会, 387p.
- 小杉正人, 1986. 陸生珪藻による古環境の解析とその意義—わが国への導入とその展望一. 植生史研究, 1, 9-44.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1985. Naviculaceae. *Bibliotheca Diatomologica*, vol. 9, p. 250. Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1986. Bacillariophyceae. *Süsswasser flora von Mitteleuropa*, 2 (1): 876p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1988. Bacillariophyceae. *Süsswasser flora von Mitteleuropa*, 2 (2): 596p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1990. Bacillariophyceae. *Süsswasser flora von Mitteleuropa* 2 (3): 576p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1991. Bacillariophyceae. *Süsswasser flora von Mitteleuropa* 2 (4): 437p.
- 久馬一剛・八木久義証監修, 1989. 土壌薄片記載ハンドブック. 博友社, 176p.
- Matsuda, J-I. 2000. Seismic deformation structures of the post-2300 a BP muddy sediments in Kawachi lowland plain, Osaka, Japan. *Sedimentary Geology*, 135, 99-116.
- 中村 純, 1980. 日本産花粉の標識 I II (図版). 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12, 13集, 91p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000. 日本植物種子図鑑. 東北大学出版会, 642p.
- 西本豊弘 (編), 2006. 弥生時代の新年代・新弥生時代のはじまり第1巻. 雄山閣, 143p.
- 西本豊弘 (編), 2007. 繩文時代から弥生時代へ・新弥生時代のはじまり第2巻. 雄山閣, 185p.
- パリノ・サー・ヴェイ, 2002. 横手湯川・横手湯田遺跡の自然科学分析. 「横手湯川端遺跡・横手湯田遺跡北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」第11集 第1分冊 (本文編)」. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団, 133-155.
- パリノ・サー・ヴェイ株式会社, 2012. 高住平田遺跡の古環境変遷. 高住平田遺跡I. 一般国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書VI. 鳥取県教育委員会, 149-168.
- 星見清晴, 2009. 湖山池—その生き立ち. 鳥取地学会誌, 13, 23-36.
- 齋藤万之助, 1971. 水田土壤の凝聚性. 土木試験所報告, 56, 1-49.
- 鳥倉巳三郎, 1973. 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集, 60p.
- 杉山真二, 2000. 植物珪酸体 (プラント・オ・パール). 池 誠一郎 (編著) 考古学と自然科学3 考古学と植物学. 同成社, 189-213.
- 高原 光, 1998. スギ林の変遷. 安田 喜憲・三好教夫 (編著). 図説 日本列島植生史. 朝倉書店, 207-223.
- 外山秀一, 2002. 池島・福万寺遺跡の立地と環境. 「池島・福万寺遺跡2(福万寺I期地区) 一級河川恩知川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書一分析・考察編」. (財)大阪府文化財センター, 411-429.
- 辻誠一郎, 2000. 考古学と自然科学3 考古学と植物学. 同成社, 247p.
- 辻 康男・辻本裕也・田中義文・馬場健司・松元美由紀, 2004. 付章 前田遺跡の自然科学分析. 「前田遺跡(第20地点)発掘調査概要報告書—弥生前期水田跡の構造と水利動態—」. 芦屋市教育委員会, 1-36.
- 辻本裕也・辻 康男・伊藤良永・堀内誠三・田中義文・高橋 敦・松元美由紀・馬場健司, 2007. 第4節 池島・福万寺遺跡の古環境変遷2. 「池島・福万寺遺跡3 恩知川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書 (池島I期地区) 一本文・考察編」. (財)大阪府文化財センター, 397-473.
- 辻本裕也・辻 康男, 2002. 池島・福万寺遺跡の古環境復元. 「池島・福万寺遺跡2(福万寺I期地区) 一級河川恩知川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書一分析・考察編」. (財)大阪府文化財センター, 361-410.
- 辻本裕也・辻 康男・田中義文・馬場健司, 2003. 自然科学分析の成果. 「勝部遺跡 大阪国際空港周辺緑地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」. (財)大阪府文化財調査研究センター, 151-192.



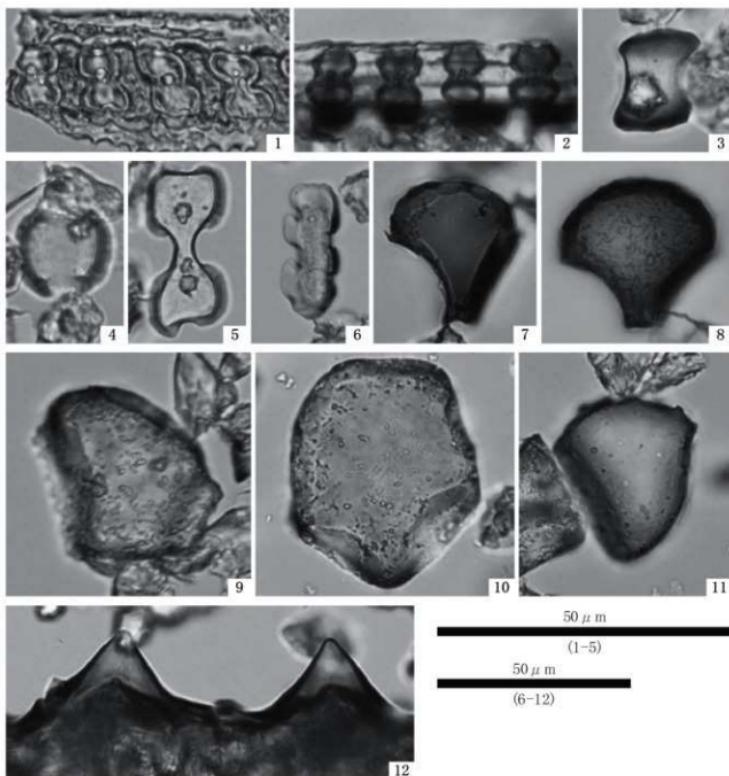
- 1 . *Aulacoseira ambigua* (Grun.) Simonsen (5地点;8層)
2 . *Amphora ovalis* var. *affinis* (Kuetz.) Van Heurck (6地点;9層)
3 . *Cymbella heteroplectura* var. *minor* Cleve (6地点;9層)
4 . *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (5地点;8層)
5 . *Pinnularia acrosphaera* W.Smith (6地点;9層)
6 . *Pinnularia divergens* W.Smith (6地点;9層)
7 . *Pinnularia gibba* Ehrenberg (5地点;8層)
8 . *Pinnularia microstauron* (Ehr.) Cleve (5地点;8層)
9 . *Pinnularia subrugosa* Krammer (5地点;8層)
10 . *Pinnularia viridiformis* Krammer (6地点;9層)
11 . *Stauroneis phoenicenteron* (Nitz.) Ehrenberg (5地点;8層)

写真 10 硅藻化石



- | | | |
|-----------------------|----------------------|-----------------------|
| 1. モミ属(4地点;3層) | 2. ツガ属(4地点;3層) | 3. スギ属(4地点;3層) |
| 4. マツ属(4地点;3層) | 5. コナラ属コナラ亜属(4地点;3層) | 6. コナラ属アカガシ亜属(4地点;3層) |
| 7. クマシデ属—アサダ属(4地点;3層) | 8. ブナ属(4地点;3層) | 9. ニレ属—ケヤキ属(4地点;3層) |
| 10. イネ科(4地点;3層) | 11. ノバ属(4地点;3層) | 12. カヤツリグサ科(4地点;3層) |
| 13. ヨモギ属(4地点;3層) | | |

写真 11 花粉化石



1. イネ属短細胞列(3地点;15層上部)
 2. イネ属短細胞列(12地点;6層)
 3. メダケ属短細胞珪酸体(3地点;3層)
 4. ヨシ属短細胞珪酸体(3地点;3層)
 5. ススキ属短細胞珪酸体(8地点;27層)
 6. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(4地点;4層)
 7. イネ属機動細胞珪酸体(3地点;15層上部)
 8. イネ属機動細胞珪酸体(8地点;27層)
 9. クマザサ属機動細胞珪酸体(8地点;57層)
 10. ヨシ属機動細胞珪酸体(3地点;3層)
 11. ウクサ族機動細胞珪酸体(3地点;3層)
 12. イネ属穎柱矽酸体(2地点;3層)

写真 12 植物珪酸体



(9) (3,8,2,4,17,18,24,25,29)(5-7,10-16,19-23,26-28,30-35) (I)

1. グローブ 葉(横断面)38地点5個
2. スギ 葉(5地点5個)
3. ニホノ属 種子(8地点5個)
4. ニホノ属 種子(8地点5個)
5. クワ属 果実(5地点5個)
6. ヒカツキ属 種子(4地点5個)
7. オイデガ属 果実(5地点5個)
8. ドクバ属 種子(6地点5個)
9. ドクバ属 種子(6地点5個)
10. オモダラ属 果実(4地点5個)
11. サジオモダラ属 果実(4地点5個)
12. オモダラ属 果実(6地点5個)
13. ベルムシロ属 果実(4地点5個)
14. ハコヅチ属 種子(5地点5個)
15. イボウサ属 種子(5地点5個)
16. イモ科 葉(3地点5個)
17. イモ科 葉(3地点5個)
18. カヤツリグサ科(3地点5個) 果実(4地点5個)
19. カヤツリグサ科(3地点5個) 果実(4地点5個)
20. カヤツリグサ科(3地点5個) 果実(5地点5個)
21. カヤツリグサ科(2地点5個) 果実(5地点5個)
22. カルトナ属 果実(4地点5個)
23. カヤツリグサ科 小型花被片型 果実(4地点5個)
24. ヒンバ属 果実(5地点5個)
25. ポルタクダ属 果实(5地点5個)
26. ナナシ科 種子(5地点5個)
27. クサム属 果実(5地点5個)
28. クスム属 果实(4地点5個)
29. クサム属 果实(5地点5個)
30. クサム属 果实(5地点5個)
31. クサム属 果实(5地点5個)
32. クサム属 果实(5地点5個)
33. クサム属 果实(5地点5個)
34. クサム属 果实(5地点5個)
35. メモジ属 果实(5地点5個)

写真 13 大型植物遺体

第2節 良田平田遺跡出土柱材の樹種同定、放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

良田平田遺跡では、古代の建物跡が確認されている。今回の分析調査では、発掘調査により検出された古代の建物跡の柱材についてウイグルマッチングによる年代測定を実施する。

1. 試料

試料は、掘立柱建物1を構成する柱穴のうち、3147ピット、3149ピット、3151ピットの3基から出土した柱材3点（No.2248、2250、2252）、掘立柱建物10を構成する3187ピットから出土した柱材1点（No.2424）の合計4点である。いずれも芯持丸木あるいは芯持材であり、表面に面取等の加工の痕跡がある。また、いずれの試料にも樹皮の残存は認められない。

試料のうち、No.2424には92本、No.2250には120本の年輪が確認された。No.2252とNo.2248は、現地での年輪観察では年輪が細かくて正確な計測ができないため、輪切りにして表面を研磨した後、实体顕微鏡で年輪を計測した。その結果、No.2252には125本、No.2248には122本の年輪が確認された。年代測定試料は、各試料から3点、合計12点を採取した。No.2248は、外から1.5年、56-60年、115-120年、No.2250は外から1.5年、61-65年、115-120年、No.2252は、外から1.5年、56-60年、121-125年、No.2424は外から1.5年、41-45年、86-90年の各3点合計12点である。樹種同定試料は、各試料の外側や上部の破損部から木片を採取して試料とした。

2. 分析方法

（1）放射性炭素年代測定

土壤など後代の付着物を、メス・ピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA: Acid Alkali Acid）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500°C（30分）850°C（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用して、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650°Cで10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-II）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いてδ13Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma, 68%）に相当する年代である。

暦年較正ならびに数学的モデルにおけるウイグルマッチングの検証については、OxCal v4.2.3 (Bronk Ramsey, 2013) を用いて行う。暦年較正曲線は IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013) を用いる。

(2) 樹種同定

剃刀を用いて、木片から木口（横断面）・柵目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本及び独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）や Richter 他（2006）を参考にする。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

同位体効果を考慮した結果を表68に示す。これまでの研究成果から、過去の ^{14}C 濃度は一定ではなく、常に変化していたと考えられている。このため、 ^{14}C の濃度から得られた放射年代を実年代に変換するための較正曲線が考案された。現在最新のものは IntCal13 (Reimer et al 2013) である。大気や海水の物質循環の違いにより、北半球大気、南半球大気、海域の3つの較正曲線が用意されているが、今回は北半球用を用いる。

1 試料で暦年較正を行う場合は、得られた結果を較正曲線に投影し、分析試料と較正曲線双方の確率分布を考慮して、濃度（確率）の高い部分を読み取って較正年代を決める（表2に OxCal v4.2.3 を用いた結果を載せている）。

一方、較正曲線は、過去の ^{14}C 濃度変動により細かな揺れ（ウイグル）が生じる。このため、年輪が多く含まれる材幹試料について、相対的な年代幅を年輪によって確かめながら分割した複数試料を分析すると、較正曲線の細かな揺れが分析結果に現れる可能性を秘めている。したがって、それぞれの分析結果を年輪から見た相対的な実年代差に合わせ、既知の較正曲線に沿って並べることで、材幹試料からみた較正曲線をつくることができる。これを既知の較正曲線（IntCal13）と比較し、最も

表68 放射性炭素年代測定及び樹種同定結果

遺構名	段上No.	樹種・木取り ・樹齢	年輪数	試料番号	採取年輪の位置	処理法	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$	年代値	年代値 (較正用)	codeNo.
獨立柱建物1 3147ピット	2248	柱材 芯持丸木 スギ	122本	14872-12	外か5115-120	AAA	-24.66±0.20	1,509±20	1,503±18	IAAA-130664
				14872-11	外か5156-60	AAA	-23.27±0.26	1,469±20	1,464±18	IAAA-130665
獨立柱建物1 3149ピット	2250	柱材 芯持材 スギ	120本	14872-6	外か5115-120	AAA	-25.84±0.28	1,299±20	1,289±17	IAAA-130666
				14872-5	外か5161-65	AAA	-24.05±0.26	1,270±20	1,269±18	IAAA-130668
獨立柱建物1 3151ピット	2252	柱材 芯持丸木 スギ	125本	14872-9	外か5121-125	AAA	-26.67±0.23	1,330±20	1,334±19	IAAA-130670
				14872-8	外か5156-60	AAA	-25.19±0.26	1,299±20	1,287±18	IAAA-130671
獨立柱建物10 3187ピット	2424	柱材 芯持丸木 スギ	92本	14872-3	外か5186-90	AAA	-24.01±0.23	1,370±20	1,367±19	IAAA-130673
				14872-2	外か5411-45	AAA	-21.13±0.24	1,300±20	1,298±19	IAAA-130674
				14872-1	外か51-5	AAA	-20.96±0.23	1,350±20	1,354±18	IAAA-130675

*AAA処理箇所-アルカリ-酸処理

*年代値は、同位体補正を行った値

*較正用年代値は1桁目を丸めてない値

表 69 ウイグルマッチングによる解析結果

遺構名	取上No.	25種・木取り ・樹種	試料番号	年輪の位置	較正年代(±σ)	ウイグルマッチング (±σ)	信頼度*
掘立柱建物1 3147ピット	2248	柱材 芯持丸木 スギ	14872-12	外か-515-120	calAD 536 - calAD 611	calAD 666 - calAD 551	698 95.5
			14872-11	外か-56-60	calAD 566 - calAD 641	calAD 611 - calAD 611	583 124.8
			14872-10	外か-1-5	calAD 670 - calAD 768	calAD 666 - calAD 666	75.5 98
掘立柱建物1 3149ピット	2250	柱材 芯持材 スギ	14872-6	外か-515-120	calAD 669 - calAD 769	calAD 675 - calAD 715	830 106.8
			14872-5	外か-61-65	calAD 681 - calAD 771	calAD 730 - calAD 770	790 97
			14872-4	外か-1-5	calAD 683 - calAD 863	calAD 796 - calAD 830	830 14.6
掘立柱建物1 3151ピット	2252	柱材 芯持丸木 スギ	14872-9	外か-121-125	calAD 650 - calAD 763	calAD 647 - calAD 695	830 65.5
			14872-8	外か-56-60	calAD 670 - calAD 769	calAD 712 - calAD 760	790 79.7
			14872-7	外か-1-5	calAD 693 - calAD 876	calAD 767 - calAD 815	87.7
掘立柱建物 10 3187ピット	2424	柱材 芯持丸木 スギ	14872-3	外か-86-90	calAD 641 - calAD 676	calAD 656 - calAD 676	761 3.1
			14872-2	外か-41-45	calAD 665 - calAD 768	calAD 701 - calAD 721	74.6
			14872-1	外か-1-5	calAD 647 - calAD 680	calAD 741 - calAD 761	0.5

*ウイグルマッチングモデルにおける値の信頼性を示す数値

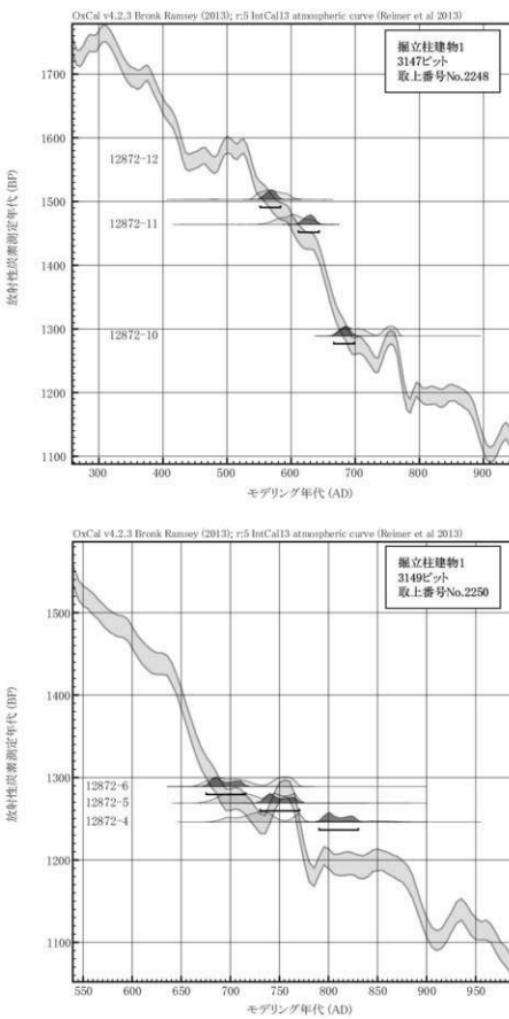
適当と思われるモデリングを行って年代を決める。これがウイグルマッチング法である。ウイグルマッチング法は、互いの較正曲線の揃れを比較できる点、年輪によって実時代差がわかる複数の結果を統計的に扱って、既知の較正曲線と比較できる点で優れている。言い換えれば、通常の分析が、較正曲線と分析値について点で一致する場所を探しているのに対し、ウイグルマッチング法では、ある程度の時代幅をもった面として比較するため、測定値の妥当性を判断する材料が多くなり、信頼性が増す。OxCal v4.2.3 のマニュアルによれば、ウイグルマッチングによるモデリングで信頼性の高い結果が得られた樹皮付きの試料は、得られた年代値の 5 年後に伐採されたことを示すとされる。

OxCal v4.2.3 を用いてモデリングを行ったウイグルマッチングの結果を表2と図1、2に示す。これによると、残存している最外年輪の時代は、以下のようになる。

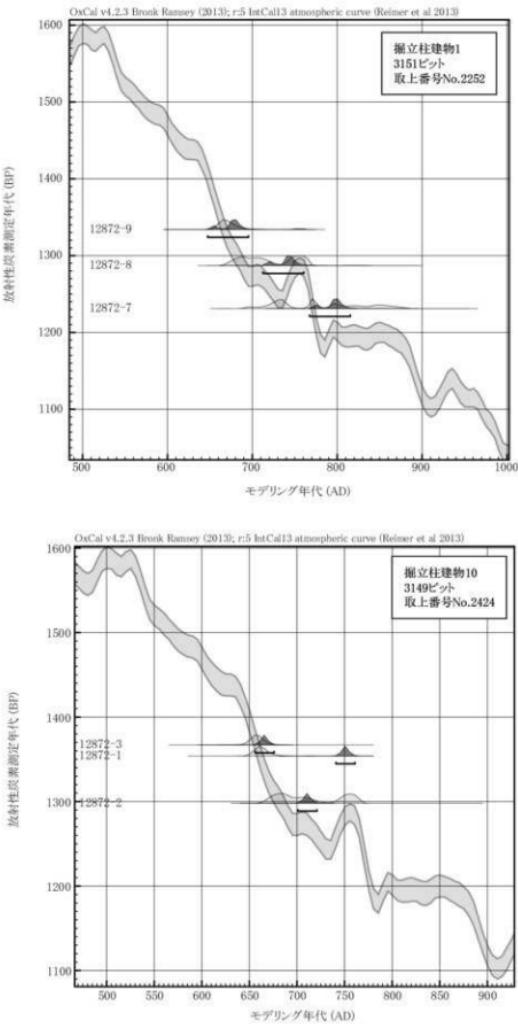
掘立柱建物 1	3147 ピット 取上 No.2248	cal AD 666-698
	3149 ピット 取上 No.2250	cal AD 790-830
	3151 ピット 取上 No.2252	cal AD 767-815
掘立柱建物 10	3187 ピット 取上 No.2424	cal AD 741-761

この結果を踏まえると、掘立柱建物 1 の 3147 ピット No.2248 の柱材が 7 世紀中・後葉、3149 ピット No.2250 と 3151 ピット No.2252 の柱材が 8 世紀後半～9 世紀前半、掘立柱建物 10 の柱材が 8 世紀中葉となる。掘立柱建物 1 の柱材 3 本のうち、3147 ピット 取上 No.2248 1 本の値が他の 2 本の柱材よりも古い年代を示したが、今回の柱材はいずれも表面に樹皮が残っておらず、面取等の整形も認められるなど、加工により失われた年輪が存在する。そのため、伐採年代と分析により得られた年代値に若干の違いが生じている可能性もある。

また、第 302 図に示すように、掘立柱建物 1 の 3149 ピット取上 No.2250 (14872-4) と、掘立柱建物 10 の 3187 ピット取上 No.2424 (14872-1) は年輪数から見た相対的な時代差と測定値との間に開きがある。このため、掘立柱建物 10 の 3187 ピット取上 No.2424 と掘立柱建物 1 の 3149 ピット No.2250 は、他の柱材に比べ、年代値の信頼が落ちる。これは、分析を行ったのが 1 試料につき 3 点



第302図 ウイグルマッチングによる年代値(1)



第303図 ウイグルマッチングによる年代値 (2)

であるため、1試料でも外れる試料があると、統計的に信頼度が急に落ちる事が原因であり、より分析の間隔を詰めて行うことにより、統計学的な信頼度が上がり、回避できると考えらえる。

(2) 樹種同定

樹種同定結果を表68に示す。柱材は、全て針葉樹のスギに同定された。解剖学的特徴等を記す。

- ・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晚材部への移行はやや急で、晚材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-15細胞高（写真14）。

4. 考察

今回調査を行った掘立柱建物1の3本と掘立柱建物10の1本の柱材は、いずれも芯持丸木あるいは芯持材で表面に面取等の整形が認められる。樹種は、いずれもスギに同定された。スギの木材は、木理が直通で割裂性・耐水性が比較的高く、加工は容易な材質を有し、大径木になることから、大型で直通な木材を得やすい。このような材質を考慮して、スギが選択的に利用されていた可能性がある。

各柱材の残存年輪数を見ると、掘立柱建物1の3本は120年～125年、一方、掘立柱建物10の1本は92年であった。また、柱の直径は掘立柱建物1が総じて太く、掘立柱建物10でやや細い。いずれの柱材も表面に樹皮が残っておらず、面取等の加工整形が行われているため伐採年代を特定できないものの、生育開始年代（最外輪年代値から年輪数を引いた年代）を見ると、掘立柱建物1の3147ピットが^acal AD 544-576、3149ピットが^acal AD 670-710、3151ピットが^acal AD 642-690、掘立柱建物10の3187ピットが^acal AD 649-669と、掘立柱建物1の3147ピット以外は概ね同時期に成長開始した木材からなり、掘立柱建物1の3147ピットの木材がこれらより100年程度古い時期に成長開始した木材からなることが窺える。

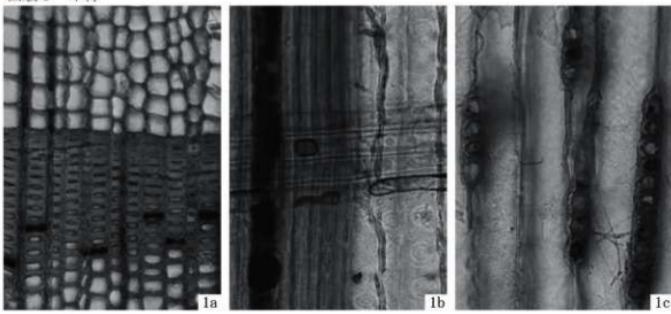
以上の柱材の形状、残存年輪、年代値から、掘立柱建物1の柱材のうち、3147ピットの柱材の素性が異なっている可能性が考えられる。例えば掘立柱建物1を構築する際に古い時期に利用されていた柱材を転用しているとすれば、今回の結果になるものと思われる。今後、発掘調査時の遺物の出土状況や各掘立柱建物の埋没過程などの情報を踏まえた複合的評価が課題として認識される。

引用文献

- Bronk Ramsey, C., van der Plicht, J., & Weninger, B. 2001. 'Wiggle matching' radiocarbon dates. Radiocarbon, 43 (2A), 381-389.
- Bronk Ramsey, C., Lee, S. 2013. Recent and planned developments of the program OxCal. Radiocarbon, 55, (3-4), 720-730.
- Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hafidason, H., Hajdas, L., Hatte, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., & van der Plicht, J. 2013. IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55 (4), 1869-1887.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz L. and Gasson P.E. (編). 2006. 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東 隆夫・藤井 賢之・佐野 雄三・安部 久・内海 泰弘. (日本語版監修). 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz L. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

島地 謙・伊東 隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176p.

図版1 木材



1. スギ(掘立柱建物1;3147ビット;取上Na2248)
a : 木口, b : 横目, c : 板目

写真 14 木材顕微鏡写真

第3節 良田平田遺跡出土自然木の樹種同定

小林克也（バレオ・ラボ）

1. はじめに

湖山池の南岸部から南北方向に延びる丘陵に挟まれた谷筋に立地する良田平田遺跡で、基本層序の第2層下面から出土した自然木について、樹種同定を行った。なお、一部の試料についてはウイグルマッチング法による放射性炭素年代測定も行われている（第VII章第4節参照）。

2. 試料と方法

試料は、第2層下面から出土した自然木3点である。試料No.1は、ウイグルマッチングによる放射性炭素年代測定の結果、縄文時代晩期中葉の年代を示した。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行った。

樹種同定では、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクローラーで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡及び写真撮影を行った。

3. 結果

同定の結果、自然木はいずれもスギであった。同定結果を表70に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、写真15に光学顕微鏡写真を示す。

- (1) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don スギ科 写真15 1a-1c (No.1)、2a-2c (No.2)、3a-3c (No.3)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は主に晩材部に分布する。放射組織は単列で、高さ1～18列となる。分野壁孔は大型のスギ型で、1分野に普通2個見られる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

4. 審査

3点の自然木はいずれもスギであった。スギの天然分布は、前述のとおり日本海側に多い（伊東ほか、2011）。良田平田遺跡からは距離があるが、鳥取市に所在する青谷上寺地遺跡で行われた花粉分析の結果によれば、縄文時代早期～古代頃までは周辺にスギが多く生育していたと推測されている（渡

表70 良田平田遺跡出土木材の樹種同定

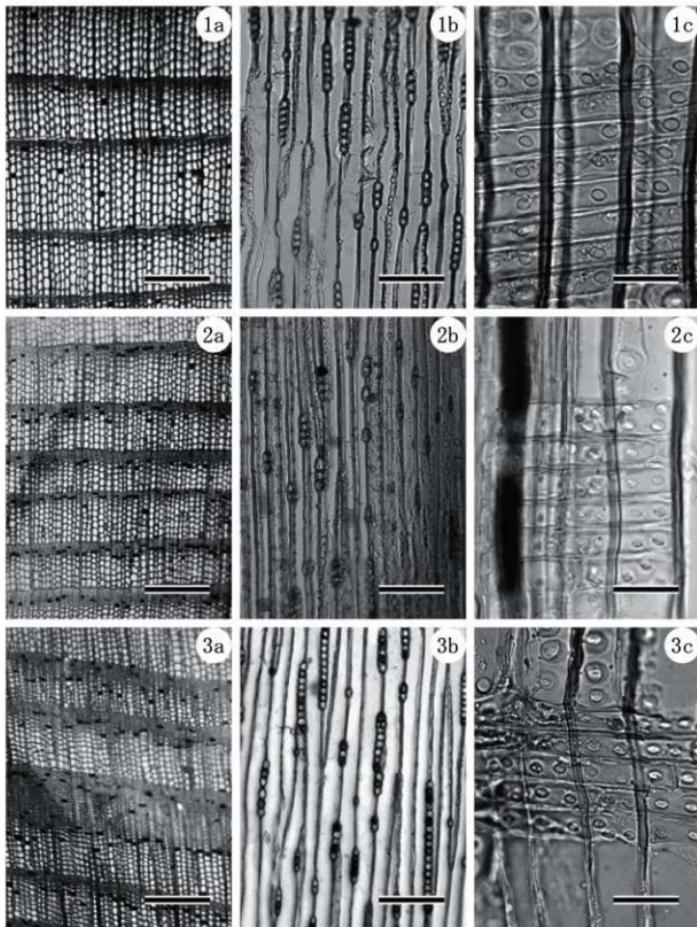
試料No.	地区名	試料名	出土層位	器種	樹種	木取り	備考	年代測定番号
1	T23-7g-2D-6c	サンプル①	第2層下面	自然木	スギ	芯持丸木	加工痕あり	PLD-22737 ～22739
2	T23-7g-2D-8b	サンプル②		自然木	スギ	芯持丸木		
3	T23-7g-2D-7c	サンプル③		自然木	スギ	芯持丸木		

辺、2006)。今回の良田平田遺跡においても、縄文時代晩期中葉にはスギが生育していた可能性がある。また、試料No.1のスギには一部加工痕か認められているが、古代の造成時に地中に遺存していた邪魔な部分を切断等した痕跡の可能性がある。

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂 (2011) 日本有用樹木誌、238p、青海社。

渡辺正巳 (2006) 考古学と自然科学—化石から昔の景色が見えてくる—、鳥取県教育委員会事務局妻木晩田遺跡事務所編「倭人の生きた環境 山陰弥生時代の人と自然環境」: 29-34、鳥取県教育委員会。



1a-1c, スギ (No. 1)、2a-2c, スギ (No. 2)、3a-3c, スギ (No. 3)

a:横断面(スケール=500 μm)、b:接線断面(スケール=200 μm)、c:放射断面(スケール=50 μm)

写真 15 良田平田遺跡出土自然木の光学顕微鏡写真

第4節 良田平田遺跡出土自然木の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・小林克也・竹原弘展・中村賢太郎

1. はじめに

鳥取県鳥取市良田に所在する良田平田遺跡の発掘調査で検出された根株について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料について樹種同定も行われている（第Ⅶ章第3節参照）。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表71のとおりである。

試料は、3区北東で検出された根株である（サンプル①）。根株の樹種はスギである。根株には最終形成年輪が認められた。また、加工痕が見られた。

根株の年輪を計数した後、外側から1～5年目（PLD-22737）、86～90年目（PLD-22738）、176～180年目（PLD-22739）の3ヶ所から¹⁴C ウィグルマッチング用試料を採取した。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 15SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C 年代、暦年代を算出し、3ヶ所の¹⁴C 年代を用いてウィグルマッチングを行った。

3. 結果

表72に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C 年代、ウィグルマッチング結果を、第304図にウィグルマッチング結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C 年代 (yrBP) の算出には、¹⁴C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した¹⁴C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、

表71 ウィグルマッチング測定試料及び処理

測定番号	遺跡・試料データ	採取データ	前処理
PLD-22737	地区:3区 種別:根株(加工痕あり) 遺物No.サンプル① 種類:生材(スギ) 試料の性状:最終形成年輪 状態:wet	採取位置:1-5 y (最終形成年輪)	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)
PLD-22738		採取位置:86-90 y	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)
PLD-22739		採取位置:176-180 y	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)

測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお、曆年較正、ウィグルマッチング法の詳細は以下のとおりである。

[曆年較正]

曆年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動及び半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の曆年較正には OxCal4.1 (較正曲線データ : IntCal09) を使用した。なお、 1σ 曆年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の曆年代範囲であり、同様に 2σ 曆年代範囲は 95.4% 信頼限界の曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

[ウィグルマッチング法]

ウィグルマッチング法とは、複数の試料を測定し、それぞれの試料間の年代差の情報を用いて試料の年代パターンと較正曲線のパターンが最も一致する年代値を算出することによって、高精度で年代値を求める方法である。測定では、得られた年輪数が確認できる木材について、1 年毎或いは数年分をまとめた年輪を数点用意し、それぞれ年代測定を行う。個々の測定値から曆年較正を行い、得られた確率分布を最外試料と当該試料の中心値の差だけずらしてすべてを掛け合わせることにより最外試料の確率分布を算出し、年代範囲を求める。なお、得られた最外試料の年代範囲は、まとめた試料の中心の年代を表している。そのため試料となった木材の最終形成年輪の年代を得るために、最外試料の中心よりも外側にある年輪数を考慮する必要がある。

4. 考察

根株の 3ヶ所から採取した試料 (PLD-22737 ~ 22739) の ^{14}C 年代を用いてウィグルマッチング法により最外試料の曆年代を求めた結果、 2σ 曆年代範囲 (確率 95.4%) で 674-634 cal BC (95.4%) であった。この年代は、紀元前 7 世紀で、藤尾 (2009) や小林 (2009) によれば、概ね繩文時代晩期末～弥生時代前期初頭に相当する。

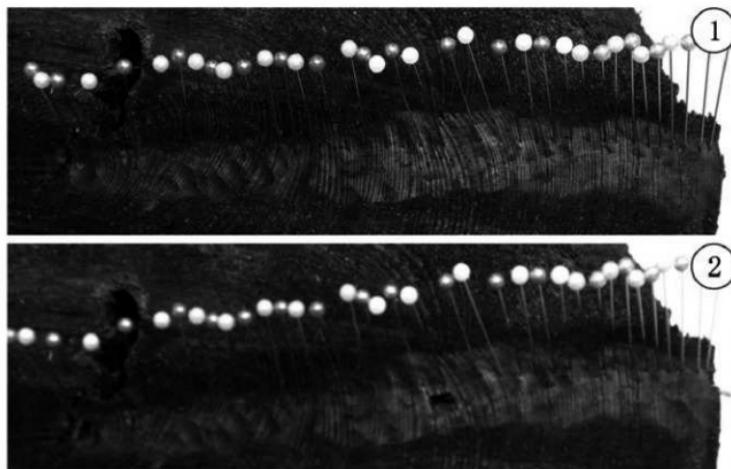
参考文献

- Bronk Ramsey, C., van der Plicht, J. and Weninger, B. (2001) 'Wiggle matching' radiocarbon dates. Radiocarbon, 43 (2A), 381-389.
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337-360.
- 藤尾慎一郎 (2009) 弥生時代の実年代. 西本豊弘編「新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代」: 954. 雄山閣.
- 小林謙一 (2009) 近畿地方以東の地域への扩散. 西本豊弘編「新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代」: 55-82. 雄山閣.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20. 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111–1150.

表 72 放射性炭素年代測定、曆年較正、ウイグルマッティングの結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を曆年代に較正した年代範囲	
				1σ 曆年代範囲	2σ 曆年代範囲
PLD-22737	-26.51 \pm 0.22	2488 \pm 21	2490 \pm 20	756BC (11.1%) 733BC 690BC (2.5%) 685BC 669BC (3.3%) 662BC 650BC (51.4%) 545BC	766BC (95.4%) 521BC
PLD-22738	-24.33 \pm 0.22	2487 \pm 20	2485 \pm 20	756BC (11.4%) 732BC 691BC (2.7%) 685BC 669BC (3.5%) 661BC 651BC (22.0%) 607BC 601BC (28.6%) 545BC	766BC (95.4%) 521BC
PLD-22739	-25.41 \pm 0.21	2698 \pm 21	2700 \pm 20	893BC (18.0%) 876BC 846BC (50.2%) 813BC	897BC (95.4%) 810BC
最外試料年代				668BC (68.2%) 644BC	674BC (95.4%) 634BC

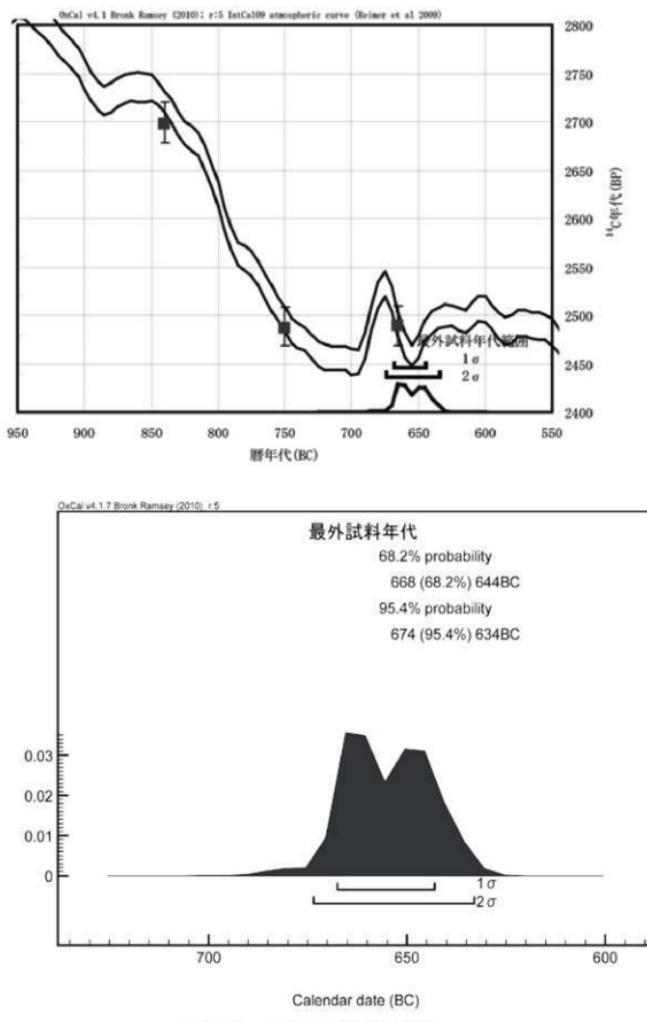


年代測定を行った試料 (No. 1とNo. 2のピンは5年輪間隔)

1. サンプル①年輪計測結果 (スギ; PLD-22737～PLD-22739)

2. サンプル①測定試料の採取位置 (スギ; PLD-22737～PLD-22739)

写真 16 年代測定を行った試料



第304図 ウイグルマッチング結果

第5節 良田平田遺跡出土鉄滓の分析調査

日鉄住金テクノロジー（株）

八幡事業所・TACセンター 大澤正己・鈴木瑞穂

1. いきさつ

良田平田遺跡は鳥取県鳥取市良田地内に所在する。弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。奈良時代～平安時代の掘立柱建物跡や水路などの遺構とともに、木簡や転用硯、漆容器、鉄滓などが出土している。鉄滓の出土量は多くはないが、地域周辺の鉄～鉄器生産の様相を検討する目的から、調査を実施する運びとなった。

2. 調査方法

2-1. 供試材

表73に示す。出土鉄滓4点の調査を行った。

2-2. 調査項目

(1) 肉眼観察

遺物の外観上の観察所見を記載した。

(2) 顕微鏡組織

滓中に晶出する鉱物及び鉄部の調査を目的として、光学顕微鏡を用い観察を実施した。観察面は供試材を切り出した後、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000及びダイヤモンド粒子の3μmと1μmで順を追って研磨している。なお金属組織の調査では、3%ナイトル（硝酸アルコール液）を腐食（Etching）に用いた。

(3) ピッカース断面硬度

鉄滓中の鉱物と、金属鉄の組織同定を目的として、ピッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用し、荷重は50または100gfで測定した。

(4) 化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C）、硫黄（S）：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化硅素（SiO₂）、酸化アルミニウム（Al₂O₃）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化カリウム（K₂O）、酸化ナトリウム（Na₂O）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（TiO₂）、酸化クロム（Cr₂O₃）、五酸化磷（P₂O₅）、バナジウム（V）、銅（Cu）、二酸化ジルコニウム（ZrO₂）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

3. 調査結果

YOH-1：流出溝滓

(1) 内眼観察：製鉄炉の操業中に排出された、製鍊滓（流出溝滓）側面端部の小破片である（85.1 g）。滓の地の色調は黒灰色であるが、表面は広い範囲で白色を呈する。また、上面は流动状で、細かい皺状の凹凸が見られる。下面にはごく小形の木炭痕が薄く残る。側面は1面を除く3面が破面で、気孔は少なく緻密である。着磁性はごく弱い。

(2) 顕微鏡組織：写真17①～③に示す。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル（Ulvöspinel : 2FeO·TiO₂）が素地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。砂鉄製鍊滓の晶癖である。また、滓中の微細な明白部は金属鉄である。3% ナイタルで腐食したところ、③右下の金属粒では亜共析組織（C < 0.77%）が確認された。

(3) ピッカース断面硬度：写真17②の淡茶褐色多角形結晶の硬度を測定した。硬度値は600Hv、669Hvであった。ウルボスピネルと推定される（注1）。

(4) 化学組成分析：表74に示す。全鉄分（Total Fe）31.89%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.25%、酸化第1鉄（FeO）34.48%、酸化第2鉄（Fe₂O₃）6.92%の割合であった。造滓成分（SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O）43.83%と高値で、塩基性成分（CaO+MgO）も6.98%と高め傾向を示す。また製鉄原料の砂鉄起源の二酸化チタン（TiO₂）は12.84%と高値である。バナジウム（V）は0.18%、酸化マンガン（MnO）0.62%、二酸化ジルコニウム（ZrO₂）が0.35%であった。銅（Cu）は<0.01%と低値である。

当鉄滓はチタン（TiO₂）含有率が高く、塩基性成分（CaO+MgO）も高め傾向を示す。この結果から、火山岩起源の高チタン砂鉄を原料とする製鍊滓と推定される。

YOH-2：椀形鍛冶滓

(1) 内眼観察：やや偏平な形状の椀形鍛冶滓である（152.0g）。側面2面は破面。やや着磁性が強く重量感のある滓である。地の色調は灰褐色で、表面はやや風化気味である。上面は比較的平坦で、ごく小形の木炭痕が薄く点在する。また側面と下面に1個所ずつ木炭の噛み込みも見られる。下面は浅い椀形で中小の気孔が多数散在する。

(2) 顕微鏡組織：写真17④～⑥に示す。白色樹枝状結晶ウスタイト（Wustite : FeO）、淡灰色柱状結晶ファヤライト（Fayalite : 2FeO·SiO₂）が素地のガラス質滓中に晶出する。鍛鍊鍛冶滓の晶癖である。

(3) ピッカース断面硬度：写真17⑥の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は325Hv、429Hvであった。風化の影響か、ウスタイトの文献硬度値450～500Hvと比較すると軟質である。しかし結晶の色調と形態、後述の化学組成等からウスタイトと推測される。

(4) 化学組成分析：表74に示す。全鉄分（Total Fe）43.35%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.04%、酸化第1鉄（FeO）36.63%、酸化第2鉄（Fe₂O₃）21.21%の割合であった。造滓成分（SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O）30.34%で、このうち塩基性成分（CaO+MgO）は1.88%と低めであった。製鉄原料の砂鉄起源の二酸化チタン（TiO₂）も0.93%と低値である。バナジウム（V）0.02%、酸化マンガン（MnO）0.14%、二酸化ジルコニウム（ZrO₂）0.01%といずれも低値であった。また銅（Cu）は0.02%であった。

当鉄滓は鉄酸化物（FeO）と炉材粘土の溶融物（SiO₂主成分）主体の鉄滓である。製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分（TiO₂、V、MnO）は低減傾向が著しく、鍛鍊鍛冶滓に分類される。

YOH-3：流出溝滓

- (1) 肉眼観察：製鉄炉の操業中に排出された、製鍊滓（流出溝滓）側面端部の小破片である（52.0 g）。滓の地の色調は黒灰色で、表面はやや風化している。上面は流动状で皺状の凹凸が見られる。下面には部分的に灰褐色の被熱粘土が付着している。破面の気孔はごく僅かで、非常に緻密な滓である。
- (2) 顕微鏡組織：写真 18 ①～③に示す。滓中には淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。砂鉄製鍊滓の晶癖である。また滓中のごく微細な明白色粒は金属鉄である。3% ナイタルで腐食したところ、②中央の金属粒では亜共析組織 ($C < 0.77\%$) が確認された。
- (3) ピッカース断面硬度：写真 18 ③の淡茶褐色多角形結晶の硬度を測定した。硬度値は 713Hv、737Hv であった。ウルボスピネル ($\text{Ulvöspinel} : 2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$) としては若干高値傾向にあり、アルミニナ (Al_2O_3) など、他の元素を微量固溶している（注2）可能性が考えられる。
- (4) 化学組成分析：表 74 に示す。全鉄分 (Total Fe) 37.56% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.18%、酸化第1鉄 (FeO) 44.68%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 3.79% の割合であった。造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) 36.69% と高く、塩基性成分 (CaO + MgO) も 4.93% である。製鉄原料の砂鉄起源の二酸化チタン (TiO₂) は 12.01% と高値であった。またバナジウム (V) は 0.22%、酸化マンガン (MnO) 0.50%、二酸化ジルコニウム (ZrO₂) が 0.29% であった。銅 (Cu) は < 0.01% と低値である。

当鉄滓は流出溝滓 (YOS-1) とよく似た鉱物・化学組成であった。

YOH-4：炉内滓

- (1) 肉眼観察：ごく小形の鉄滓破片と推測される。滓の地の色調は暗灰色で、表面は若干風化している。また表面細かい木炭痕や気孔などによる凹凸があり、一部木炭の喰み込みも見られる。着磁性は比較的強い。
- (2) 顕微鏡組織：写真 18 ④～⑥に示す。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。ウスタイトの晶出はなく、通常砂鉄製鍊滓に見られる晶癖である。
- (3) ピッカース断面硬度：写真 18 ⑥の淡茶褐色多角形結晶の硬度を測定した。硬度値は 737HV、867Hv であった。ウルボスピネル ($\text{Ulvöspinel} : 2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$) としては若干高値傾向にあり、アルミニナ (Al_2O_3) など、他の元素を微量固溶している可能性が考えられる。また、淡灰色柱状結晶の硬度値は 620Hv であった。ファヤライトの文献硬度値 600 ～ 700Hv の範囲内であり、ファヤライトに同定される。
- (4) 化学組成分析：表 74 に示す。全鉄分 (Total Fe) 46.26% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.66%、酸化第1鉄 (FeO) 36.77%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 25.19% の割合であった。造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) 17.72% と低めで、塩基性成分 (CaO + MgO) も 2.09% と低値であった。製鉄原料の砂鉄起源の二酸化チタン (TiO₂) は 8.06% と高めで、バナジウム (V) は 0.33%、酸化マンガン (MnO) 0.39%、二酸化ジルコニウム (ZrO₂) 0.08% であった。銅 (Cu) は < 0.01% と低値である。

当鉄滓は流出溝滓 (YOS-1, 3) と比較すると、ややチタン (TiO₂) 含有率は低めである。

ただし島根県下の出土製鍊滓とはほぼ同等のチタン含有率を示しており（第 305 図（注3））、砂鉄製鍊滓（炉内滓）の小破片の可能性が高いと考えられる。

4. まとめ

良田平田遺跡から出土した鉄滓 4 点を分析調査した結果、以下の点が明らかとなった。

4-1. 製鉄関連遺物

3 区 3162 溝から出土した 9 世紀後半～10 世紀初め頃の流出溝滓（YOS-1, 3）は、火山岩起源の高チタン砂鉄を原料とする製鍊滓と推定される。2 点ともよく似た鉱物・化学組成で、チタン（TiO₂）含有率は 12% とやや高めであった。同じ製鉄遺跡から鍛冶原料（製鍊鉄塊系遺物）に混じって搬入された可能性がある。

また、4 区第 4-2 層から出土した 7 世紀末～8 世紀前半の鉄滓（YOS-4）は、当初外観から鍛冶滓の可能性が高いと考えられた。しかし、顕微鏡観察の結果、砂鉄製鍊滓で最もよく見られるウルボスピニル（Ulvöspinel : 2FeO·TiO₂）、ファヤライト（Fayalite : 2FeO·SiO₂）組成で、ウスタイト（Wustite : FeO）が見られないこと。チタン（TiO₂）含有率も鳥取県下の出土製鍊滓とはほぼ同等であることから、砂鉄製鍊滓と推定される。鍛冶原料（製鍊鉄塊系遺物）に固着した製鍊滓（炉内滓）の小破片の可能性が高い。

これらの製鉄関連遺物は、周辺地域で砂鉄製鍊によって生産された鉄（製鍊鉄塊系遺物）が、鍛冶原料として遺跡内で搬入されていたことを示すものといえる。現在までのところ、鳥取県下では古代の製鉄遺跡の調査報告例が極めて限られているため、地域の鉄生産～鉄素材の流通実態の解明に向け調査例の蓄積が望まれる。

4-2. 鍛冶関連遺物

3 区 3006 溝から出土した 8～9 世紀代の楕形鍛冶滓（YOS-2）は鍛鍊鍛冶滓に分類される。鉄素材を熱間で鍛打して鉄器を作製していたことを示す遺物である。また、鍛鍊鍛冶滓としてはチタン含有率がやや高め（TiO₂ : 0.93%）、始発原料は砂鉄と推定される。

注

(1) 日刊工業新聞社「焼結鉱組織写真及び識別法」1968

ウスタイトは 450～500 Hv、マグネタイトは 500～600 Hv、ファヤライトは 600～700 Hv の範囲が提示されている。ウルボスピニルの硬度値範囲の明記はないが、マグネタイトにチタン（Ti）を固溶するので、600 Hv 以上であればウルボスピニルと同定している。それにアルミニウム（Al）が加わり、ウルボスピニルとヘルシナイトを端成分とする固溶体となると更に硬度値は上昇する。このため 700 Hv を超える値では、ウルボスピニルとヘルシナイトの固溶体の可能性が考えられる。

(2) 黒田吉益・源説兼位『偏光顕微鏡と造岩鉱物』[第2版] 共立出版株式会社 1983 第5章

(3) 鉱物各論 D. 尖晶石類・スピニル類 (Spinel Group) の記載に加筆

尖晶石類の化学組成の一般式は XY₂O₄ と表記できる。X は 2 値の金属イオン、Y は 3 値の金属イオンである。その組合せでいろいろの種類のものがある。(略)

(4) 第 305 図は以下の発掘調査報告書に掲載された砂鉄、鉄滓の化学分析値を元に作成した。

①『八幡 8・9 遺跡』(財) 鳥取県教育文化財団 2004

②『中道西山東山遺跡』(財) 鳥取県教育文化財団 2005

③『博労町道路』米子市教育文化事業団 2011

④『下市桑地ノ峯東通第2遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター 2013

表73 供試材の歴史と調査項目

符号	遺物名	調査区	出土位置	遺物No.	遺物名稱	指定年代	計測値		測定項目		備考
							大きさ(mm)	重量(g)	マクロ 組織	微細 組織	
I-Oh-1	良田平田	3区2D-6c 3区2D-8d 3区2D-5c 4区2D-7a	3162溝 3000溝 3162溝 3162溝	M09 M12 M13 M28	洗出層 堆積層 洗出層 炉内層	9~後半 8~9c 9~後半 7c~8c前	39.4×29 55.70×23 39.51×20 19.21×21	85 152 52 63	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○
I-Oh-2											
I-Oh-3											
I-Oh-4											

表74 供試材の化学組成

符号	調査区	出土位置	遺物名稱	指定年代	全鉄分		全金属鉄(%)		二酸化チタン		二酸化マanganese		二酸化イリジウム		二酸化ニッケル		鉄質	二酸化		T.O.	
					Total (FeO) Fe	Metallic (FeO) Fe	1級 (FeO) Fe	2級 (FeO) Fe	1級 (FeO) Fe	2級 (FeO) Fe	(Co,P) (Co,P)	(Co,P) (Co,P)	TiO ₂ (Co,P) (Co,P)	TiO ₂ (Co,P) (Co,P)	(V) (Co)	(V) (Co)	NiO (Co,P) (Co,P)	NiO (Co,P) (Co,P)	(Cr) (Co,P) (Co,P)	(Cr) (Co,P) (Co,P)	SiO ₂ (Co,P) (Co,P)
I-Oh-1	3区2D-6c 3区2D-8d 3区2D-5c 4区2D-7a	埋土- 3162溝 3000溝 3162溝	洗出層 堆積層 洗出層 炉内層	9~後半 8~9c 9~後半 7c~8c前	31.89 0.25 43.35 0.18	34.48 6.92 44.68 44.68	26.73 7.52 37.95 37.95	4.30 2.65 2.75 2.75	2.14 0.46 0.87 1.01	0.46 0.62 0.44 0.42	7.94 0.27 1.91 1.81	0.91 0.91 0.91 0.81	0.93 0.93 0.93 0.93	0.07 0.07 0.02 0.01	0.30 0.30 0.14 0.11	0.18 0.18 0.06 0.11	-0.01 -0.01 0.35 0.22	0.35 0.35 0.35 0.29	43.5 43.5 37.4 37.4	43.5 43.5 37.4 37.4	
I-Oh-2																					
I-Oh-3																					
I-Oh-4																					

表75 出土遺物の調査結果のまとめ

符号	調査区	出土位置	遺物名稱	指定年代	新規鉱物組成		化學組成(%)		所見
					Total FeO Fe	地質成 分	TiO ₂ V	MnO Cu	
I-Oh-1	3区2D-6c 3区2D-8d 3区2D-5c 4区2D-7a	埋土- 3162溝 3000溝 3162溝	洗出層 堆積層 洗出層 炉内層	9~後半 8~9c 9~後半 7c~8c前	31.69 43.35 37.56 46.26	6.92 21.21 3.70 25.19	12.84 1.88 0.93 2.01	0.18 0.02 0.14 0.22	43.83 30.34 30.34 36.69
I-Oh-2									
I-Oh-3									
I-Oh-4									

(1) spinel (2) Fe₂O₃ · TiO₂ · 3H₂O), W (Wustite (FeO)), F (Fayalite (2FeO · SiO₂)), H (Hemimite (FeO · Al₂O₃))

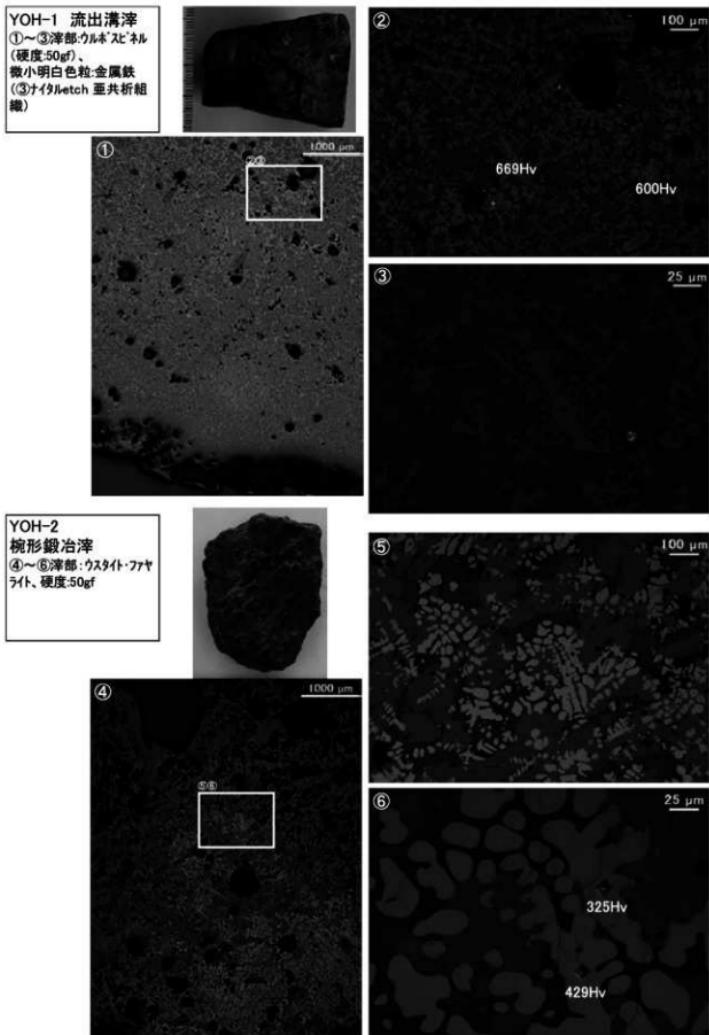


写真 17 流出溝滓・楔形鍛冶滓の顕微鏡組織

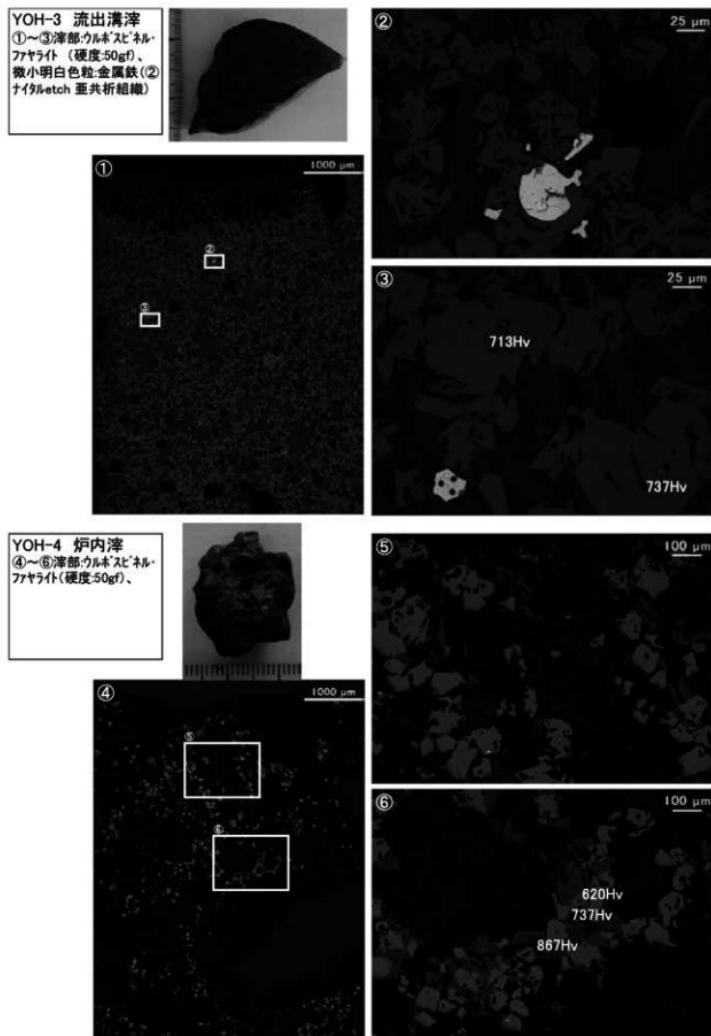
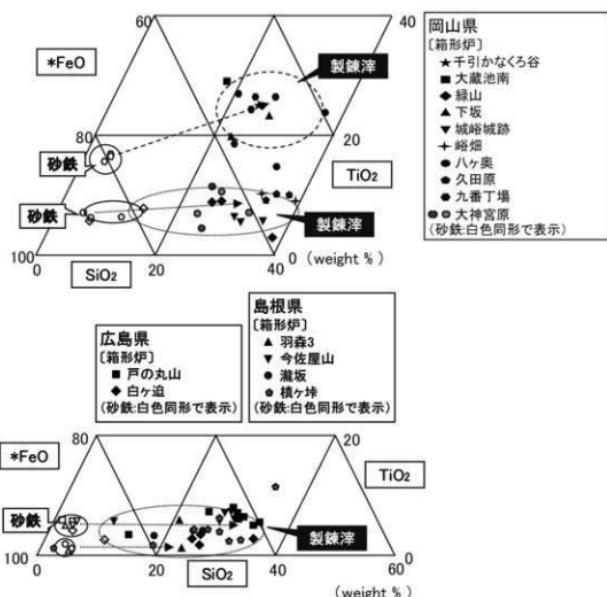
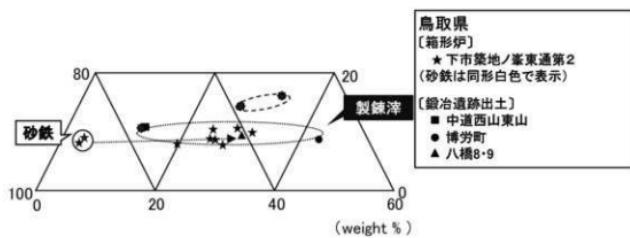


写真 18 流出溝滓・炉内滓の顕微鏡組織



(参考)中国地方(岡山・広島・島根県)の製鉄遺跡出土砂鉄・製鍊滓の化学組成

第305図 鳥取県下の製鉄遺跡出土砂鉄・製鍊滓の化学組成